

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

横巻	310
団書	
系号	
内閣府	137

秘

世界に於ける日本

情報宣傳研究資料

第十三輯

内閣情報部

内閣情報部
資料室



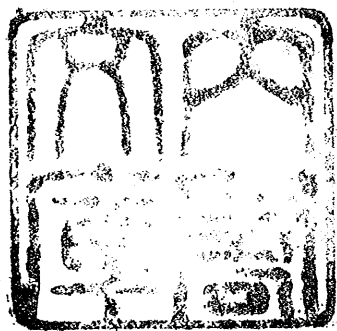
アントン・チシユカ

世界に於ける日本

—千八百五十四年以來の日本の發展—

一九三六年

内閣文庫
八九四九六号 冊
和書



本書はアントン・ジシカ (Anton Zischka) 著「世界に於ける日本」
(Japan in der Welt, Die Japanische Expansion seit 1854. Leipzig
1936) の翻譯で、昭和十二年十月、我が國では輸入禁止處分にな
つてゐるものである。

310
137

本書の内容については、甚しく見當違ひの點、不穩當の點が多々あり、皇室に關しては殊にそ
の感を深くするが、外國人によつて如何に日本並びに東洋が曲解されてゐるかをありのまゝに
示すため、敢へて原文に忠實な表現をとつておいた。この點を特にお含みの上情報宣傳に關す
る資料として御利用願ひたい。

昭和十五年二月十日

内閣情報部

著者の御願ひ

この書はドイツに於て著者が一年半の間に著した第三番目の著書である。惟ふに一冊の書物の中に含まれる仕事・材料・資本等は、現代の如き宿命的苦難時代に於ては、何等かの必然的要求に應じて現はれず、又何等か實際上の業績を呈示しないやうな書物のために浪費される事は許されないものである。

ところで一年半の中に大部の本を三冊も書くといふ事は不可能である。そこで著者は諸君に御願ひするのであるが、この書も既出の書と同様に、數ヶ月にして出来たものではなく、十一年の間屢々苦心を重ねた仕事によるものである事を考慮していただきたい。今日經濟問題を扱ふにあつて謬見に陥らないためには、唯一ヶ國の見地、或は唯一大陸の見地から觀察してはならないと思ふ。著者は土地・状況・事件等を自ら觀察し、根本を調査し、あらゆる重要な文化國語で書かれた文献的資料を研究して、以てこの著述の材料を得るために何回も世界一周の旅行をやつた。千九百二十三年以來中斷して、千九百三十三年第一の書物を初めた。十年間沈黙を守つて居つたのは、全材料を同時に開展し、概観——全貌を得んがために他ならない。「棉」、「エチオピア」、「日本」それから更に色々の意圖を持つた多くの書物も同様に本來は唯一冊の本に過ぎない。棉に就いて語る者は日本——現代の最大綿織物工場主——を研究しなければならぬ。又日本の大敵イギリス及び兩國の利害相反する交叉點を研究しなければならぬ。

(1)

その交叉點の一つはエチオピアである。その國の隣國や敵國に関する知識を全く持たないで、滯在中の國や、旅行して來たばかりの國の事を書くのが普通行はれるところであるが、著者はこれと全然異なる方法を選び、豫定の計畫に従つて一般の關心に値すると思はれる總ての事柄に関する材料を蒐集し、その全貌が完成してあらゆる觀點から觀察され、十年の研究、熟考、經驗——屢々つらい經驗——が恐らく實際世に貢獻するところがあるだらうといふ希望を與へてくれる迄は一度も筆を下さなかつたのである。この方法が一年半の間に續けて三冊の書物を出した事を説明してくれる。これらの書物はよい書物かも知れぬ。或はよくないかも知れない。併し誠實を以て書かれたものである事は、確信を以て斷言する事が出来る。三冊の何れをも貫いて居る根本思想は次の通りである。

即ち、關稅障壁が如何に高くならうと、憎惡が如何に大きくならうとも、世界は相連絡する大きな管組織である。

アントン・チシュカ

(2)

序 文

近年世界にさす日本のかげを見ない週は一週もなく、一日もなかつた。

千九百三十四年十一月二十日、日本最初の回々教寺院の基が神戸に置かれ、日本が回々教を武器庫に入れ、新回々教主の有望な候補と見られて居るイヅン・サウドに交渉委員を派遣し、中央アジアに於ける目的のために久しい間佛教を用ひた様に、回々教の思潮を公然と利用するに至つてから、日本がイランやイラク、アフガニスタンや近東地方等で堅固な地歩を得たといふ兆を見ない日は一日もなかつた。日本は伊エ紛争に際して傍觀者以上の事をやり、對トルコ交渉に依つて、黒海に於て間接に勢力を扶植する事が出来た。又、バルチック沿岸諸國に對する關心を公言し、親善協定にも類する條約を南アフリカとオーストラリアに對して締結した。

千九百三十三年以來日本は綿布工業に於て、殆んど二世紀も該工業の第一人者であつたイギリスを凌駕して第一位となり、千九百三十四年には輸出を四十九パーセント増大し、千九百三十五年の前半期の輸出を、前年同期より更に十七パーセント増加する事が出た。

既に永い間人の口にのぼつた「黃禍」が益々近づいて來た事を今や誰も否定する事は出来なくなつた。我々白人は「米本位」と「肉本位」の鬭争、黄色人工業と白人工業との公然たる鬭争の眞只中に立つて

(3)

居る事を最早否めなくなつた。

「極東のプロシヤ」に對する非難の聲は益々高く上げられて來た。日本論は益々鬭争的に、益々激昂的態度を以て書かれる様になつた。

全世界に向つて固く門戸を閉ぢた貧弱な封建國家日本は、丁度八十年で世界的國家になつた。日本は久しく信用されて居なかつたが、今や恐日の感情は日に日に高まり、今迄にない強力な同盟が結成されようとした。ロシアは國際場裡に現はれ、ボルシェビズムの恐怖物語は速かに揉み濟された。フランスはソヴェト、イギリス、アメリカと結んだ。そしてかうした總ての事柄のために根本的な問題が忘れられた。

どうして日本はかくも迅速に強大となつたのか？ どうして日本はかくも易々と強力な白人の地位の間に割込む事が出来るのか？ 何故に日本は何の苦もなく白人商品を世界市場から驅逐する事が出来るのか？——これが根本問題である。

著者は此の書の材料を求めたため十年間あらゆる原料戦線に赴き、太平洋の隅々まで訪ね、又あらゆる大政治家の告白を聴いたのであるが、この書は日本人を決して超人として、或は死滅せしむべき悪魔として描いてはゐないであらう。この書の試みんとするところは、日本がソヴェト人やルーズベルトより遙か以前に計畫に即して育て上げられた國であつた事、日本の嘘の様な興隆は秩序——管理經濟の

(4)

お蔭であるといふ事に對する論證を集める事にあるのである。アメリカの砲聲一發、日本が開港を餘儀なくされてから、何物も偶然に委せず、自由主義と「放任」を信せず、一路豫定の道を邁進した日本の姿を描かうとするのである。

ヨーロッパの工業に依り、イギリスが音頭をとつてアジアを開發した事は十九世紀の歴史的大事件であつた。アジア市場の喪失、日本の發展は、やがて疑ひもなく二十世紀に於ける最も重要な經濟政策的事件と見做されるであらう。大西洋經濟時代は大平洋經濟時代に依つて正に消滅せられ様として居る。

この種の發展は恐らく進行を妨げられないであらうが、それは我々に教へるところがあるものである。日本の息をもつがぬ發展は、自由經濟競争、「放任主義」を選ぶべきか、計畫經濟を選ぶべきかといふ大問題に對する經驗を基礎とした最初の實際的經驗的解答である。

著者はこの大問題に近づくかうとし、それ以上には行くまいとした。ロシアでは未だ進行中であり、アメリカでは殆んど緒についたかつかない様な状態にあり、更にドイツでは今正に復活したばかりのものが、日本ではその八十年の發展の中に學ばれるのである。

これを學ぶのに時機を得るならば、恐らく白色人種の生活問題を決する事になるであらう。

(5)

目次

著者のお願ひ	一
序文	三
第一部 日本々國	一
第一章 歴史の概観	一
第二章 日本の寡頭政治	三
第三章 日本の勞働者	五七
第四章 農民の状態	八三
第五章 陸軍	六
第六章 日本の海軍	三六
第七章 大敵—合衆國	一四五

(1)

第二部 南方への渴望……………一六

第八章 臺灣……………一六

第九章 舊獨領南洋諸島に於ける日本の行政……………一六

第十章 日本とフィリッピン……………一七

第十一章 シンガポール「東洋の十字街」……………二〇

第十二章 蘭領印度瞥見……………二三

第十三章 オーストラリア……………二五

第三部 日本の北方發展……………二五

第十四章 朝鮮「日本の心臓を脅かす懐劍」……………二五

第十五章 滿洲の「平和的」占領……………二七

第十六章 軍事的占領から媒介に依る發展へ……………三〇

第十七章 對露戰……………三二

第四部 世界の日本……………三七

第十八章 超機械化……………三七

第十九章 日本の同盟と歐洲の同盟……………四〇

世界に於ける日本

第一部 日本々國

第一章 歴史的概観

アイヌより明治まで—紀元前六〇〇年より紀元一八六八年まで

日本—それは四つの大きな主島より成り、弓状のカムチャツカと臺灣、即ち氷の北部と熱帶的な南部とを結び、四千の小島の雲に圍まれ、緯度にして二十五度を蔽ひ、長さ三千軒に及んで居る。

日本—それは太平洋の底深く、六千米乃至八千米に根ざす火山脈の峰である。日本の風景は、到る所最近凝固した熔岩塊の怪奇な姿を呈して居る。日本の山嶽は峨々たるもので、縦走河は無く、あらゆる水流は急湍をなして、地球の周圍以上の略々四萬五千軒に及ぶ海岸に落下し、土地を蜂の巢の様に細分して居る。例へばその主島たる本州は千九百軒あるが、而もなほ小なる觀があり、幾許の耕地も残らぬ程分割されて居る。日本の僅か五分の一以下が生産的なのである。併し氣候には恵まれて居る。日本の山の

隅々まで、稻の耕作地や、野菜畑、色彩映える石楠、緑に輝く黍等で蔽はれて居る。氣候は非常に溫和である。それは世界の大文明の氣候である。日本の雨は夏のモンスーンが持つて来る。それは六ヶ月、南と南東から吹く風であつて、南アジア及び東アジアの全經濟生活はこれに依存し、若しこれが遅れたら、降雨量が少なかつたりすれば、それは東洋人にとつて、とりも直さず不作と飢饉を意味するのである。北方から吹いて来る冬のモンスーンは、日本の船を大昔から大洋洲の島々や支那、セイロン島、西部太平洋等に進航させて居る。日本の氣候は「モンスーン洲」の氣候である。モンスーンの不穩的氣流は日本をキツチリとアジアに連結させ、かの巨大なる自然的統一——その何億と云ふ人間は分裂的な多様なヨーロッパに對立して居るのであるが——の一部分として居る。

約六千年以前に、此の日本の島々にはアイヌが生活して居た。アイヌは一種の原始人種であつて、或る人類學者は之を白色人種とし、又他の人類學者は、インドのトードグ(Dravid)や濠洲の原始住民と同種であると主張して居る。此のアイヌは絶えず蒙古人又はマレー人の移住者に對して、身を守らなければならなかつた。そして遂にツングース族、朝鮮人、インドネシア群島から來た侵入者が多數を占むるに至つた結果、この原始住民は姿を消し、新しい民族が生れ幾つかの言語が出來た。例へば、その一つはそれ迄支那語で日本國(日出づる國)と稱せられた島々が「日本」と言はれ、紀元六百七十年頃には既に「大日本」それから少し後に至つては「大神國」(偉大にして崇高なる帝國)と云はれる様になつたのはその例である。

(2)

ヨーロッパが歴史に明らかになる迄は、やはり六千年の歳月を要しはしたが、日本民族の構成はその地理的位置より更に重要である。大洋洲的同種圏は、日本に於て蒙古人種圏と交叉して居る。日本人はインドネシアの植民地民族に類似した南方民族であるが、その血液には非常に多くの蒙古人の力を含んで居る。今日の日本人の大部分は、明らかに蒙古人のタイプを示して居り、成吉思汗を生んだ人種に屬して居る。成吉思汗——それは世界史の生んだ独自の事件であるが——彼は無から一軍國を創造し、唯その貧弱な國土に頼つて、世界の偉大な富を瓦解せしめたのだ。蒙古は今日忘れられ、又重要視されては居ないが、成吉思汗を躍進せしめた力は今なほ日本に生きて居るのである。どの國語の中にも、日本語の中にある程、この征服者の傳記を多く見ることは出來ない。大蒙古國にはアジアの凡ゆる民族が相並んで住み、凡ゆる宗教の存在が許され、又蒙古はアジアの凡ゆる文化、回々教の世界の華麗も、支那の豪華も識り、しかもどの文化からも、その粗野な戰爭民族の氣風に適した物ばかりを採り入れた——かう云ふ事を日本は知つて居る。日本は、ヨーロッパとアジアの永遠の鬭争の中で成吉思汗の進攻が最もめざましかつた事を知つて居る。又日本は、千二百七十四年及び千二百八十一年に大舉して日本を侵略しようとした蒙古人は、日本に統一を與へ内部の鬭争を解消せしめ、日本から實際始めて一つの國民を作つたのだと云ふ事も知つて居る。

(3)

たしかに公式の日本歴史は、蒙古人の侵入から既に千九百年も前に始まつて居るのである。即ち日本史が公式に始まつたのは紀元前六百六十年二月十一日である。この日こそ、傳ふる所に依ると日の女神たる天照大神の一子孫神武天皇が、初代の皇帝として今日の日本の基礎を建て、今日の支配者たる王朝を創立したところの日である。しかし紀元三百年に至る迄、日本の歴史は單に皇帝名簿ばかりで出来上つて居る。五世紀に至つて初めて支那の文字法が傳來し、日本は初めて支那の年代記作者に依つて語られるところとなつた。

この最初の史的文書には、日出づる國の住民の事を「倭」即ち矮奴と稱し、支那の歴史家は次の様に書いて居る。

「此の倭は牛も持つて居なければ、一般に動物と云ふものを知らない。衣服は唯一枚の物から出来て居り、彼等はその階級に應じてその顔を色々の符號で文身して居る。彼等は弓矢や、石又は鐵の穂先のある槍を持つて居るが、履物を履いて居ない。強い飲料を愛好し、一夫多妻であるが、概して危害を加へる様な事はなく、いづれも長命である。」

支那の文字と共に、支那文化も亦日本に侵入して來た。紀元五百五十二年、孔子の教と共に支那の佛教もやつて來た。恰もこれと時を同じくして英國に於ては、大陸から侵入したアングロ族及びサクソン族がケルト族をウェールズの森林と山嶽に追ひやるのであるが、日本では大和民族と熊襲民族とが、決

定的にアイヌを征服してしまふ。英國に於てキリスト教が流布し、一種の統一を成就して居る間に、日本では佛教が上からの革命になる。支那の範に倣つて、皇帝は全帝國の所有者と宣せられ、それ迄世襲であつた諸官職は、大臣や中央權の責任者たる官吏によつてとつて代はられるのである。

この中央權は勿論理論論的のもので、有力な封建君主がこれを戦ひ取り、互ひに宮廷内の勢力争ひをする。九世紀には公卿貴族が非常に有力になつて、皇帝は辛じてその影の如き存在を保つに過ぎず、十世紀と十一世紀の全體を通じて、様々な有力門閥間に闘争が續くのである。成吉思汗の孫忽必烈は、ローマ、アレキサンドリア、ナポレオンの諸帝國を合はせた以上の帝國を支配して居たが、彼は日本に使者を遣つて服従を強ひる。この時、この島國は四分五裂の有様で、互ひに獨立した地方の集りであつた。併し外部からのこの壓迫は、この國を熔接する事になる。内部の確執は忘れられ、武士は廷臣を驅逐する。皇帝から「征夷大將軍」と云ふ稱號を受けた軍事執政官は、偉大な大將として外夷を防ぎ、その防衛を組織立てる。千二百六十八年には蒙古の使者は殺され、千二百七十四年には四萬の蒙古及び朝鮮軍が、數千の船に乗つて復讐に來る。併し暴風雨が敵の上陸を不可能にする。忽必烈は新たに兵を送らなければならぬ。そして千二百八十一年、二十萬の蒙古人が日本に來寇する。併し又も神々はこの島國に幸して、暴風雨は再び敵艦隊を撃滅する。溺死を免れた蒙古人は日本人に斬殺される。

この様にその祖先によつて不思議に國難を免れて以來、日本人は選ばれたる民族、征服せられざる國

民だと云ふ確固たる信念を持つ様になつた。日本は十三世紀の末以來統一され、強力な者が次々に政權を握る様になる。日本の皇帝等がその宮殿深く贅居生活を營んでゐる間に、將軍は朝鮮に膺懲遠征の軍を企て、南方發展を志し、印度に船を遣り、マレー群島近海に足場を作る。かくて日本は好戦國となるのである。二百七十六人の封建領主、即ち大名の所有地に於ては、一種の軍人相續的階級即ち武士階級が培はれ、此の武士の生活規範たる武士道が益々明らかに支配的な道德觀になつて来る。この支配階級の法典は、英雄主義と無限の忍耐を要求するばかりでなく、弱者に對する同情と庇護、社會的正義に關する事件のための犠牲をも要求する。武士と大名を養はなければならぬ農民と町人とは、全く權利を認められない。併しヨーロッパとは反對に、支配者達は彼等の手中にある權力を殆んど濫用しない。

將軍は我々ヨーロッパ人には非常に近代的に見える方法とは反對の方法で彼等を利用し、細かくは耕作をも規定する。人口が急激に増加して、飢饉の恐威が起れば、出生は苛酷な法律に依つて統制される。かゝる總ての事に就いて、當時ヨーロッパは何も知らないし、日本はヨーロッパに就いて全然知らない。將軍の船舶は、モンスーンに吹かれるまゝに航海するだけである。それ等の船舶は印度に到る。一人の日本人が、暫くの間シャムの支配者だつた事がある。さて一方たゞ、ベネチヤ人マルコポーロが、蒙古の大汗の宮廷に到り、其處で又日本に就いての話を聴く。そして彼の旅行記の中で、この島國を「ジバング」と名づけ、日本人を「教養のある美しい異教徒」と書いて居る。マルコポーロに依れば、

(6)

日本は素晴しく富んで居て、その皇帝の宮殿は純金で出来、眞珠は捨てる程澤山に發見されると云ふ。

これ等の報知は、勿論凡ゆるヨーロッパの探險家の空想に火をつける事になる。日本が既に産兒制限に依つて漸く飢饉から免れて居る間に、數千隻のカラヅエル(Caravels)船が日本の富を得んがために出發する。コロンブスはマルコポーロの報告に刺戟されて航海を企て、サン・サルバドルに上陸すると忽ち日本の土地を踏んだと信じる。併し、この島國は千五百四十三年に、ポルドガル人メンデッ・ピントーに依つて發見される。彼の船は日本南部の一角で坐礁するが、彼は他の難船者の様に殺害されない。それは彼が銃を持つて居て、日本の漁師達に鳥をうつことを教へ込むからである。

ピントーに依つて、日本と西洋との通商關係が初まる。彼に續いてマカオの商人、更にオランダ人、英國人、スペイン人等がやつて来る。彼等は皆同じ信仰と、金に對する同じ慾望を持つて居る。彼等はお互ひに憎み合ひ、お互ひに相手の醜い話を日本人に聴かせる。商人達につゞいて千五百四十九年渡來した宣教師達も亦、格別相互に愛情を持つて居ない。そしてヨーロッパ人等のこの嫉視、不和、虚言が日本を救ふのである。日本は驚嘆から素早く身をかはして、深い猜忌に陥る。日本人は千六百一年から千六百四十七年の間に、五千萬オンスの金(當時日本では金の價値は銀の三倍に過ぎなかつた)が海外に持ち出される事も、外國人が五十年の中に一億五千萬疋の日本銅を採掘してもこれを看過して居る。併しそれから家康

(7)

が將軍となり、徳川時代即ち一族の時代(彼はその子孫が代々將軍職を繼承すべき事を暗宗して居る)が始まると外國人の光輝は忽ちにして褪せる。家康はつとに彼のヨーロッパの仲間に対して、隣人愛と神の前には一切の人間が平等なる事を説くキリスト教が、純封建的な制度にもたらずべき危険を識つて居た。彼は牧師の後には兵が来るべき事を知り、斷乎宣教師を追ひ、キリスト教を禁じ、容赦なくこの新しい教へを驅逐する。徳川政府の下に日本は全世界からすつかり閉ざされてしまふ。日本人は海外に渡る事を許されない。違反者は死刑だ。千六百十五年以來遠洋航海用の造船は嚴禁され、難船者があれば立ちどころに殺されてしまふ。

併し將軍は唯一つの覗き孔を開かせようとする。外國人は最早この國へ入る事は出來ないが、日本はこの白色の野蠻人から眼を離したくないのである。かくてオランダ人は長崎灣の小島に止る事を許され、彼等は其處で千六百四年以來商業上の足場を持つ事になる。彼等はバイブルに唾する事や、十字架を踏む事を強ひられ、嚴重に監視される。併し彼等は更に日本へヨーロッパの最新發明を持ち來り、將軍政府に大世界の趨勢を説く事になる。

オランダ人は賢明である。彼等は何等の宣傳を弄せず、單に商業に従事する。それにも拘はらず彼等は日本の革命を惹起させる。既に千五百九十八年、ゼーバルド・フォンツェールトの船の一雙が、進路を誤つて日本へ漂着した時、アムステルダム人の船長は大名に向つてヨーロッパの事情を説き、彼等の興

味を刺戟した。それから千七百年頃、ヨーロッパに就いて或る大著作が現はれるや、オランダ人はそれを日本語に譯する。かくて好奇心をそゝられた武士は、オランダ語を學ぶ事を許され、やがて彼等は書物を讀んで、彼等の國以外に世界は如何に大きいか、ヨーロッパには如何に有力な國王があるかと云ふ事を識るのである。又、今や愈々頻繁に日本の近海に出沒する船の畫を見、これ等の船はかの「蠻人艦隊」のほんの一小部分に過ぎない事を識る。更に又一雙の白人難破船は更に何十何百と云ふ船を持つて來るであらうと云ふ事も識るやうになる。彼等は又大砲と爆薬を識り、且恐れる。何故ならば日本は今や外國人を理解し、初めて己が弱點を考へる様になつたからである。

かくて加へて、鎖國のために日本の困窮は益々大きくなる。商工業は農業の犠牲になつて居た。將軍は二十年の中に、日本の米の收穫を二倍にして居たが、それにも拘はらず食料は充分でなかつた。將軍は全收穫の四分の一をとり、それを臣下に分配した。臣下は又それを彼等の武士達に分けてやつた。かくて飢餓はこの國に猛威を振ひ、今や反抗か餓死あるのみとなつた。將軍は叛亂を怖れて、諸大名の家族を強制的に首都に住まはせた。彼等の家族を人質として己が近くにおかんとしたのである。御殿生活は華美を極めた。大名や武士は彼等の乏しい収入全部を武器や華美な服装につき込まなければならなかつた。かうして彼等がその時を恥辱的な儀式で費し、正當な主君である皇帝が忘れられてその城内深く隱遁的生活をして居る間に、外國人達は益々横暴になつて來た。難船者殺害の故を以て英人は鹿兒島を、

佛人は下關を砲撃した。ロシア、フランス、イギリス等の戦艦が、日本の港灣に来る事が益々頻繁になつた。日本は八方から包圍され威嚇されて居る事を感じた。併し將軍は依然として海外渡航を禁じ、戦意もなく、外國船の撃滅も命せず、「野蠻人」の武器を識る事、又それを外人に對して使用する事を妨げたのである。

日本は革命の前に立ち、數多くの百姓一揆は既に革命の序幕を切つた。そして此處に決定的な打撃が來た。即ちアメリカはそのヨーロッパの競争者を凌ぐために、最初の白人の力として、日本の固く閉ざれた門戸を破り、その大砲を以て、開港を迫つたのである。その同じ港から今日は日本の商品が間斷なく世界市場に氾濫して行くのだ。既に大突発の雨を妬んで、四分五裂の騒然たる日本へやつて來たのがペルリ提督である。千八百五十三年の或る霧の深い七月の朝、沿岸監視の役人は、一艦隊が浦賀灣へ入港するのを見た。それは二隻の乗船と、約百人の乗組員を擁する二隻の戦艦に過ぎなかつたが、霧が立ちこめて居たから、これ等の黒船は物騒な印象を興へた。日本人は百雙もやつて來たと思つた。そしてこの恐ろしい知らせが遂に將軍に達した時は、既に話は何百萬の外人が來たと云ふ様になつて居た。蒙古人來寇の時と同じように、神社佛閣へ祈禱が行はれた。將軍は急遽重臣家臣を招集し、慣例を破つてその忠言を求めた。これ等の外國艦隊と一戦すべきか、交易すべきか。評議は敵と交渉する事に一決、直ちに談判係の者が敵艦に赴く事になつた。併しながら二百五十年來

國家の船舶、遠洋航海の船舶は一雙も建造されて居なかつたから、日本武士の高官達は水の洩れる臭い漁船に乗つて、アメリカの艦隊へ到着した。胃を着、豪勢に彫鏤した甲を被り、象牙の鞘に入つた劍をたばさみ、鐵をはめ込んだ棍棒を携へて、彼等は提督マースィュー・カルブレイス・ペルリの前に出たのである。ペルリは公式には唯水路學の勉強のために日本の近海を訪れたのであるが、彼の艦船にはアメリカの最良最新の大砲が備はつて居た。敬意を表するのだと稱して、アメリカ人は舷側砲を打たせたので武士達は最早躊躇する事なく、ペルリに上陸を許可し、又、國書を江戸へ送る事、オランダ人の媒介なく將軍と交易する事を許した。このアメリカ人の遠征隊員の一人なるウイリヤム・ウエルス博士は、千八百五十三年七月十四日の日記を次の様に得々として記する事が出來た。

「日本の歴史に於て紀念すべき日だ。何故ならば今日こそ、遂に鍵を錠前に押し込んで戸をこぎ明け、るのに成功したのだから。日本の孤立が破れる第一歩が印せられたのだ……」

ペルリは、國書に就いて熟議すべき時を將軍に與へるために、よき外交官として日本の海から退去した。この國書には、アメリカ政府から、開港、領事裁判權、通商條約、難船者の身柄保證等が要求されて居た。一方フランス人、英國人、ロシア人等の要求はこれより譲歩的でなかつた。日本は熱病にかられた様にその城砦を修理し、廷臣達は皇帝を將軍に對して使喚し、將軍は絶望して「野蠻人」の手から救はれる道を求め、人々はあらゆる社寺に祈り、多くの武士は彼等の無力を恥じて自害した。かゝる中

にも、獲物をねらふアメリカの軍艦は迫つて来た。

ロシアの司令長官ブチアンチンがやつて来る。「アメリカ人を監視し、ロシアとも通商條約を結ぶため」である。フランスの艦船「コンスタンチン」は、上陸を拒まれたと云ふ理由で日本の二要塞を砲撃し、之を破壊する。

續いてオランダ船、英國船も来る。アメリカ人はその上艦隊を増加して、二千名の乗員を持つた船十隻を持つて来る。これ等の「野蠻人」艦隊は、皆「射撃練習」をやる。下關灣には絶えず砲音が轟き、火薬の煙雲は日本人の眼から涙を流させる。日本人は完全な隠れ場所から、この「洋鬼」をデット見て居るのである。日本の神官の祈り求めた海嘯は起らず、ヨーロッパ艦隊は蒙古人の船の様には藻屑とならない。かくて遂に、日本人は唯彼等の武器を以て野蠻人を打つべき事、大砲に對して棍棒では螻蛄に斧であると云ふ事をさとする。ペルリが千八百五十四年の初め再び江戸に来ると、將軍は既にアメリカの希望を容れるつもりで彼等を横濱に招じる。

ヨーロッパの列強との競争に勝つて、ペルリは得々として恰も曲馬場へ入るが如く日本に入國する。半裸體の巨大な二人の黒人が、アメリカ國旗を押し立て、鳴物入りの行進をやる。樂隊はヤンキー・ドゥードル (Yankee Doodle) をチャン／＼やる。提督は禮裝の士官等に取圍まれ、抜刀した水兵に護衛されて居る。それから水夫達が數々の贈物を捧げてやつて来る。シヤンパン、石鹼、香水、ピストル、銃、

劍等。何故ならば、日本人は他國人と云へば「野蠻人」と思ふからである。

かゝる總ての事が悪い印象を與へたのに拘らず、千八百五十四年二月十三日米通商條約及び親善條約が締結される。すつたもんだの揚句、皇帝にも署名させるに至つてから、千八百五十八年七月アメリカ初代の駐日總領事タウンゼント・ハリスは次の様に宣言する事が出来たのである。

「余は今日、此の國が見る最初の領事館旗を揚げさせた。深刻なる熟慮であり、重大なる歸結である。疑ひもなく一新紀元の始まりである。『真に日本の福利のためか』—それは問題だ。」

アメリカに次いで間もなく、イギリス、ロシア、フランス、オランダ等も亦日本と無理矢理に條約を結んだ。イギリスの一使者も同時に此の國に就いて職務上の熟慮をめぐらし、次の如くロンドンに書き送るに止めて居る。

「日本は島の砂煙である。それは一見するに、東方へ水平線まで擴つて居る。住民は奇妙な未開な人間である。……」

ロシア及びフランスの領事の見解は殆んどこれよりはうがつてはゐない。外國人は交易を強奪し、大金を儲ける。上陸するや互に奸策を廻らす。日本人を理解せず—非常に少い例外を除いて—彼等を理解しようと努めもしない。日本人は英國や、アメリカや、フランスの色々な贈物に二度と手を觸れない。皇帝は見ようともしない。かくてこれ等の「貴重品」は三十年後に、或る古びた住む人もない宮殿

の中に錆び朽ち塵にまみれて発見されるのである。一方既に千八百五十五年、日本人は外國語の學習のために學校を創設し、國立翻譯局を作り、外國人の眞の贈物——工學知識、機械、學問的經驗及び商人としての經驗等——に手をつける。外國船の日本へ來る事がその數を増せば増す程、嚴しい法の犯される事も又益々多きを加へ、日本人が、イギリス、アメリカ、オランダ等の汽船に身を隠して、外國の風俗習慣、學問を識るために、祕かに祖國を去る者が益々多くなる。そしてこれ等の青年が歸國すると、誰でも將軍政府の大敵となる。彼等の眼から見れば、將軍政府のみが日本に加へられた不面目辱の責任者であり、日本の近代的發展を妨げるものなのである。革命は不可避になる。將軍は最早狐疑すべき時ではない、斷乎たる處置をとるべきであると覺つたが時既に遅く、ヨーロッパに公式の留學生を派遣したのも後の祭となる。彼等が歸國すると、攘夷派の孝明帝は千八百六十七年薨じ、大名達は「執權」即ち將軍の權力を褫奪してしまふ。孝明帝の後繼者睦仁は、明治天皇と稱して新時代の日本の建設者となり、七百年の永い眠りから皇帝の權力を奪ひ還すのである。明治帝は父祖の權威を再建し、その中央政府によつて將軍政府に代らせる。

近代日本の歴史が始まる。

世界的帝國の誕生

日本に皇政復古が訪れた千八百六十八年一月四日には、この島國の新らしい專制君主は十五歳と二ヶ月であつた。彼は支那古典文學者の精神の下に教育され、唯、劍を以て戰ふ事はかりを學んだのであつた。彼は丁度ヨーロッパの中世の世界に適當する世界に生活した。日本の興隆の悲劇と、偉大さをすっかり理解するためには、日本は絶體的な封建國家であつた事を思ひ起さねばならない。まあざつと例へて見ればこのほんとうに年少な日本の皇帝は、十字軍時代のヨーロッパの精神界に住んで居たのだ。それは恰も、十三世紀又は十四世紀の甲冑に身を固めた騎士を、ピスマルクの書齋に連れて來て、正に一觸即發の獨佛戰爭に就いて、今や決心を促さうとする觀がある。

千八百六十八、九年に於ける日本の新時代が初まつた時、ヨーロッパに於ては電氣が盛に使用される様になり、リヴィングストンはタンガンイカ湖に進出し、リスターは工業化學の大發展の準備をして居た。一方、日本は全く依然として、発見された當時の姿、即ちスペイン人やポルトガル人が宣教した時代そのまゝだつた。反撥の赴く所混沌と無限の闘争を生み、流血の慘事に至ると思はれた。併し日本では職を追はれた將軍一家のところに足らぬ反亂があつたに過ぎず、この島國の驚天動地の革命は、外國には殆んど省みられずにすんだ。ヨーロッパに於ては、激烈な闘争——それは多くの場合、新時代、政治的變革の事件に先立つのが常であるが——が國民の精力を消耗させ、様々の人物、様々な見解の激しい、争闘が、今迄踏んで來た歩みをはつきり續ける事を妨げるのが普通であるが、日本では總ての事が全く

圓滑に、摩擦なく、全く計畫通りに行はれる様に思はれた。

ヨーロッパ人は何人も當時これを驚嘆しなかつた。そのくせ徹底的な行動が出来るのはアメリカ、ヨーロッパだけだと信じ、又一方、アジア、否全東洋は自由放埒、女々しい宿命論の大陸であり、偶發事を何の目標もなく解決する永遠に紛糾のやまない大陸であると云ふ確固たる信念が根ざして居たのである。歐米人にとつては日本人は東洋人であり、彼等の國は正に「奇異な未開人の住む島」に過ぎなかつた。櫻花の美、寺院の莊麗が見出され、藝者が詩に詠はれ、更に五十年後には日本の皇帝を「天皇」と云ふ代りに、「モカド」と云つた。それは「神の如き者」を意味し、唯一の正當なものなのである。日本は主としてオベラから識られ、執拗に「Japan」と呼ばれた。その實「Nippon」と云ふのが正しいのである。「Japan」と云ふのは單に聽覺の過失によつて命名されたのに過ぎない。

日本が新事物を迅速に理解した事は、既に今日屢々驚異の眼を以て見られ、日本人は特にアジアの民族間から取り上げられて「極東のブロンシャ人」と名付けられて居る。そしてそのために成吉思汗が、例へば既に千二百七七年に一種の企畫委員會を制定した事は忘れられて居る。それは「Just East」即ち「常設の參謀本部」で、詳細な人口調査を計畫し、蒙古人の全財産を詳細に記載し、牧地の正當な分割をしなければならず、中央に於て家畜の種類の改良にも力を盡した。そののみか更に又、移住や戦争の事まで計畫したのである。又、成吉思汗が鐵板に彼の後繼者のための法律と侵略計畫を刻み、かくして早くも

彼の死後六十年にして、彼の一人の孫に世界未曾有の大國を統治させるに至つた事は忘れられて居る。シーザーの後に血腥い内亂が續き、アレキサンダーの死後直ちにその國家は瓦解し、ナポレオンは血塗れの戰敗國フランスを離れたが、遊牧者成吉思汗は、二代を通じて地中海から太平洋に至るまで、その威を振つた計畫を遺したのである。彼は支那の錚々たる學者を己が宮廷に招致し、又戰役毎に、捕虜が新知識を持つて来るかどうか調べさせた。彼は「矢使」(譯者註、飛脚の如く迅速なる嚮使ならん)の制度を作りアジアの凡ゆる出來事を報告せしめた。彼の「常設參謀本部」は十三世紀に「八年計畫」を非常に詳細に作つたので、成吉思汗の二十五萬の大軍は、蒙古からアルメニア迄六千軒の道を一絲亂れず進軍する事が出来、強敵を敗り、山嶽沙漠をよぎり、而もその勢を毫も損しなかつたのである。これに比べればナポレオンのロシア遠征軍はどうだ。僅か三千軒餘の遠征は、ナポレオンをして六十萬の兵と、彼の帝位と彼の帝國とを失はしめたのである。

日本のやり方には例がないとしても、その計畫にそつた仕事は一種の管理經濟の最初の例である。千八百六十八年から九年に至る迄に、フランスでは第二帝國が崩解し、スペインでは革命家がイサベラ二世を國外に放逐し、ルーマニアとセルビアに於ては憲法が制定され、グラッドストーンがイギリスの首相となり、法王會議がローマ法王の無罪を宣告し、かくてヨーロッパに於ても遠い日本に於ても、總てが流動の状態にあつた時、明治帝が最初の「企畫委員會」(Planning Commission)を招集した事はあくまで

独自の意義のある事である。千八百六十九年、全封建領主の代表が京都に集つた。彼等は「Chōshū」徴募されたるもの」と呼ばれた。それは彼等の知識と奉仕が今や國民のために没收徴發されたと云ふ意味である。彼等は公的道義の再建と向上に就いて協議し、世界包括の計畫や小國家の組織に就いて色々と談合した。彼等は全然最初から多くの請願を容れ、凡ゆる意見を聴く義務を持つて居た。皇政復古を仕遂げた目先のきく一部の大名と武士は、太政官として又樞密顧問官としてこの國の内政をとり、一般妥當的な本位貨「圓」を規定し、その外國貨幣に對する價值を確定し、それ迄唯一の租税であつた米の代りに金錢の租税を採用し、中央政府の諸大官を地方長官に任じ、領主權の廢棄を準備し、大名の權力を剝奪したが、一方十六歳の明治天皇は彼等を通じて人民、就中「町人」即ち商人階級の言に耳を傾けた。此の時程、町人等が發言權を持つた事は嘗てなかつた。彼等は一種の權力を持つて居た。何故ならば大部分の武士や大名は、彼等に武器や衣服の借金があつたし、大華族の米の収入は、いつも既に何年か先の分まで町人に抵當として入れられて居た。例へば最大の領主でさへ、その年收の二十四倍も借金をして居る様な有様だつたからである。併し町人達は彼等の債務者が通りかれば、土下座をしなければならず、日本の政治に對してはほんの僅かの勢力も及ぼす事は出来なかつた。大名達は彼等の負債が、餘りに大きくなると、將軍の指令に依つて簡單に負債割引令を一般に發令させてしまふのだつた。日本の商人は多くの都市を建設し、大阪を擴大し、將軍のお膝元江戸に於ては大商店を發展させた。

併し彼等の公的存在を認める者は誰もありさうもなく、彼等は已むを得ざる厄介物と見做されて居た。かう云ふ彼等の言葉に耳を傾げ様とは、どの領主も夢想だにしなかつただらう。今や彼等は、彼等の時が來た事を知つた。彼等の計畫と請願書は役所に山積し、皇帝と施政者等は彼等から始めて色々と經濟的必要事項に就いて耳を傾けた。日本の商人は禁制をくゞつて外國の商人との關係を維持し、抜け道を通つてはフランス人、ロシア人、イギリス人等と商賈をやつた。彼等は日本人の中で誰よりも「白人の世界」を知つて居た。

皇帝は速やかにそれを利用したのである。即ち京都に徵集した人々の中から人物を拔擢する事に着手し、彼の眞の企畫委員會たる「元老院」の人員を銓衡し初めるや、商人の大成功者を三人この中に採用した。そして彼等の助力によつて、千八百七十年日本最初の外債百萬磅を借り入れる事に成功した。ロンドンの銀行家達はこの金を僅か九ヶ年契約で貸し、四分が普通なのに九分の利を要求した。彼等は此の九百七十五萬圓をまるで乞食にやる投げ銭の様に興へたのである。○(英國ロンドンの舊市外で、ロンドンの中心一帯)は日本に就いて何等知る所がなかつたし、又當時知らうとしなかつた。彼等はその端金で世界帝國の礎石を築いてやり、正に六十三年の後には、何世紀にわたつて世界市場を支配して居る英國の紡績工業を第二位に墜し、又それが早くも其の年に二十億五千萬圓の商品となつて、不況に喘ぐ工業國に流れ込まうとは夢にも思はなかつた。イギリスは千八百七十年果しもない協議の結果日本に百萬磅をほ

んとに高利で與へたが、千八百七十三年には更に二百五十萬磅を貸した。これに依つて皇帝はその改革の技術的な外廓を作り得たのである。皇帝は徵集委員の遣した無數の計畫を吟味し、その首都を江戸に遷して東京と呼ぶ様になつた。一方日本最初の電信線が架設され、千八百七十二年には東京横濱間の鐵道が開通した。千八百七十年制定の日本の郵便制度は、千八百七十一年には世界交通と結びつき、皇帝は到る所の海岸に燈臺を建設せしめた。又スコットランド人ブロックに依つて、日本最初の新聞が發行された。併し何よりも重大な事は、何と云つても「元老院」の制定である。即ち、元老院は千八百七十五年公的に活動を開始したのである。元老院は今や眞の企劃委員會となり、元老院議員は深遠な經驗家で、優秀な日本人であつた。彼等の多くは富豪であり文化人だつたから、全く他から拘束も受けず、他に左右されない。彼等の誰もが不可侵の者と見做され、非常に高大な權威を持つて居た。現在生存して居る彼等の唯一人である元老西園寺公は、今日に於ては殆んど聖者と見做されて居る。

元老院は日本憲法を作成し、留學生を外國に送つた。彼等はその手にたぐり寄せられる凡ゆる絲を選擇し無數の提議、考案を備ひ分けた。恰も成吉思汗の「常設參謀本部」が降服した民族の凡ゆる文化から、蒙古人に必要なものを探し求めた様に、元老院はイギリス、アメリカの憲法や、ドイツ、フランスの學問から、日本に必要なものを探し集めたのである。

千八百八十九年、初めて帝國議會が招集され「元老院」は正式に廢された。元老院は國會にその責任を

委託したのである。かくて元老院議員は「元老」(古參の政治家)と云ふ稱號を持ち、何物にも束縛を受けず、今や全國事の審判者となつた。法律上は最早企畫委員會は存在しなくなつたが、皇帝は元老に下問してからでなければ、何事も計畫しなかつた。今日に於ても、此の近代日本の建設者の最後の一人に下問した後、初めて大事をなすのである。元老は不可侵にして、一種の後光、殆んど神の如き榮光に輝き、帝位の影の下に生活して居たのだ。彼等は行くべき道を示し、日本はこれに従つたのである。

第二章 日本の寡頭政治

十九世紀に於ける日本の企畫經濟

若し我々が「元老院」時代、即ち日本の企畫委員會の時代に、世界は「放任主義」即ちコルベール時代に初めて現はれたこの形式、これに依れば商工業は國家の干渉を受けない時に最も繁榮するといふことを固く信じて居た事を思ひ起すならば、又若し世界の殆んど到る所、當時凡ゆる工業國に於て、自由主義が無制限に支配して居た事、近代ブルジョアジーの個人主義的國家觀、個人主義的經濟論、個人主義的世界觀のみが一世を風靡して居た事を明らかにするならば、日本が八十年を一足飛びにして、白人世界に於ける戦争の多い痛ましい迷妄時代を飛躍した事が、實に驚くべき事と思はれる。かう考へる

と我々は——日本民族自身もさうだが——日本民族は神に依つて選ばれた民族ではないかと思ひたくなつて來るのである。

日本が千八百五十七年對外條約を締結して居る時「ドイツ國民經濟學者會議」が創設せられる。これはドイツ自由貿易派の中心である。千八百六十年、貿易政策に於ける自由主義實現の先例として英佛間にコブデン條約が締結される。日本の皇帝がその企畫委員を選任して居る時、千八百六十九年北ドイツ聯邦に對する産業條令が發せられる。産業の自由主義が實現されるのである。日本がその周囲の世界と接觸を初める時代はどの國家も個人の自由、安全、財産——殊に實業家の——を保護する事に専心する時代である。國家は「夜警」になつたと當時いはれたが、又宜なる哉である。「力の自由なる遊戯」——これは高度の資本主義に導くものだが——これは侵すべからざる法則である。

併し日本がこの様な事に關與せず、何事も偶然事や、一部の者だけを幸福にするこの「力の自由なる遊戯」に委せなかつたといふ事は、決して驚くに足りない。それは、明治天皇の叡智を以てしても、元老の慧眼を以てしても説明され得ない。日本は計畫通り事を行はざるを得なかつたのであり、國家が指揮をしなければならなかつたのである。何故ならば個人的な主動と云ふものが全くなかつたし、日本は封建國家から一足飛びに産業國になつたからである。

西歐諸國が砲に依つて日本の開港を強制した當時、この島には二千六百萬の人口があつた。この數は

これより百年前の人口と殆んど同一で、日本はその人口の最高度に達して居たのである。日本はその瘠地で最早米作をし得なかつたし、國民を養ふ事が出来なかつた。一體日本は殆んど原料といふ物を持つて居ない。規準的な輸入の支拂の方に、農産物も原料も向ける事が出来なかつた。一方「外夷」防禦のため、その武器即ち高價な銃砲、船舶、機械等が必要とし、又強力な國民、軍隊を必要とした。これ等のものを調達するためには唯一つの道があるのみであつて、農業國から工業國への急激な轉換を必要としたのだ。日本が眼を周圍に向けた時に、先づその眼に映じたのは古典的な典型——英國にすぎなかつた。英國——その國民は日本國民と同様に小さい島に押し合ひし居たのである。英國——それは日本と同様に強力な民族を養ふのに充分な餘地を持つて居ない。日本は知つた、覇を唱へ得る道は一のみ、英國の如くその島國と云ふ遠境を世界貿易に利用する事、英國の如く強大な工業を樹立する事、生きるために「加工工業」に依つて、金錢を國內に流れこませる事、それである。

それ故既に明治初年に於て、日本の政綱は二語の中に包含されてゐた。曰く「産業立國」である。ヨーロッパではドイツでもイギリスでもフランスでも、到る所で急激な人口増加は工業化の下地となつた。ヨーロッパでは、否アメリカに於てさへ、總ては一步一步作られ、除々に發見され、試験され、實用に供せられた。資本家階級は除々に形成され、資本は除々に集中された。八十年前のヨーロッパは互ひに全然獨立した無數の企業家、銀行家、商人、發明家、思想家、政治家の作品であつた。各々は自分のた

めに——自分のためにばかり——働いた。生産手段は密閉された工場内で作り上げられ、自由競争の最高法則は全く必然的に、全然聯絡のない、全然無計畫な労働を齎した。個人主義華やかなりし時代であった。併し多くの發明家が同時に同一の問題に手を着けたものだから、到る所に進歩があつた。併しこの進歩は幾多の失敗、莫大な資本の蕩盡、何等利する所なき力の浪費を経て、不幸にもブレーキをかけられたのである。

ヨーロッパ諸國は餘りに多くの専門家、發明家、資本家を持つてゐたために、無計畫に活動したが、日本は當然計畫的に活動し、その勢力を極度に集中しなければならなかつた。何故ならば、日本は一體専門家と云ふものを持たなかつたし、ヨーロッパに於ける意味の企業家や資本家を知らなかつたからである。皇帝の他に高々二百七十六人の領主即ち大名が、その収入を機械と交換する事が出来たのに過ぎなかつた。そのために勿論大名に扶養されて居た武士と農民——併し實際は彼等が大名を扶養しなければならなかつたのだが——とは餓死せんばかりになつた。何故ならば、實際大名にしても有り餘る金は持つて居なかつたから、實に日本には國內で食べられる以上には米を産しなかつたのである。

唯、その家老と近親關係を持つ藩主は全く特別な利を得、高々三四の者に過ぎないが、場合によつては一寸した資本を調達する事が出来た。次の様な事も彼等の事業であつた。日本最初の工場——五千鐘の木綿紡績工場——は千八百六十二年薩摩侯に依つて創設され、日本最初の生絲紡績工場は同七十年前

橋の領主に依つて創設された。又最初の鑄鐵業は華族の三井のものであつた。而もこの三井ばかりが商人としての經驗を持ち、全國の士族の間で商賈をやつた唯一人の者であつた。三井は近江の大名の裔で佐々木家の出、三百年も商人をやリ、一種の銀行さへ創立して居た。併しこの三井も全日本人と同様二百五十年も祖國を離れる事が出来なかつた。だから薩摩侯、前橋侯の様に資本は持つて居ても、専門的な智識に缺けて居た。

歐米には前世紀の半ばに約九萬の銀行家が居たが、日本には高々三人の資本家があつたばかりだし、ヨーロッパには無数の技師が居たのに、日本には一人の専門家も居なかつた。又ヨーロッパには工業學校が四千もあつたのに、日本にはたつた一つの工業的教育施設があつたのに過ぎない。

大いに門戸を開放し、直ちに海外渡航の禁を解き、出来るだけ多くの日本人を白人の學校に學ばせて、ヨーロッパの智識を吸収させる様に心掛ける事——之が今や時代精神の中に見受けられる様であつた。併し日本は海外渡航の禁を解かなかつた。日本は今や自由に出入する白人の缺點を鋭敏な眼で觀察し、露、英、米、佛等の外人が、日本を研究し、日本を築き上げ、共同して日本の状態を利用しようとするよりも、寧ろ相互に害ひ合ひ、瞞着し合ふ事に精神を費して居る事を知つた。又、日本に住む領事、商人、旅客等が、その祖國の人々に日本に就いて誤つた一方的な報道をし、日本に對する諸外國の價值評價が全然當を缺いて居る事を感知した。そしてこの外國の誤謬に陥るまい、多くの矛盾した輕

薄な報道に迷はされまいとした。それ故に政府が渡航許可と旅費とを與へた者は、原則として出來るだけの保證を提出し、清廉賢明で、先入見のなさうに見える者に限られた。日本は色々の問題を解決しなければならなかつた。國家は無数の緊急な問題に對する解答を必要として居たが、その間に一方皇帝は、誰にも解明して貰へない無数の事柄に逢着した。かくて皇帝は千八百七十年及び同七十一年、留學生を海外に派遣し、彼等に特別な任務を與へた。ヨーロッパでは外國の研究、例へば發見されたばかりの日本の研究が、殆んど全く個人的な動機に委せられ、數千數萬のヨーロッパ人が全く何等の關聯もなく旅行し、全く偶然に經驗を集め、勿論之を先づ私的企業の利益のために利用したが、日本は節約の理由からだけでも他國の研究を集中しなければならなかつたのである。今日でもヨーロッパ諸國は日本を見るのに、殆んど大旅行の出來る金持旅客の眼を通して觀察するばかりに限られて居るが、日本は専門家や觀察力の優れた者、又は優秀な智識と公正さのために萬人の中から選ばれた人々を通してヨーロッパを識つて居る。又この旅行及び學費は國家に依つて保證された(現在でも大部分さうである)。従つて留學生の學んだところから一番利益を得るのは、先づ國家であるのは當然である。

ヨーロッパの産業が、各國相互の嫉視のために既に久しい間、恰も堡壘を環らした様に國內に限られて居た間に、日本の産業は建設の方法と建設者の養成のみに依つて國際的になつて來た。あらゆる國の發見を利用したといふ意味で國際的になつたのである。日本はヨーロッパより一世紀半遅れて産業國とな

り、かくてヨーロッパの陥つた誤謬を避けることが出來、高價な實驗をする必要がなかつたためばかりでなく、最新式のものゝ直ちに手に入れる事が出來たために、貧弱な小漁農國から、かくも迅速に世界列強に参加する事が出來たのである。日本が大をなしたのは、何物をも偶然に委せず、止むを得ずその産業を計畫的に建設した最初の國になつたからである。資本、指導者、専門家等に不足して居たから、國家は自ら經營を主宰してゆかなければならなかつた。

留學生が歸國し、最初の國家的専門家達が役に立つ様になると、國家が彼等の計畫を實行に移さなければならなかつたのは勿論の事で、充分な資金を持つて居たのは、實に國家ばかりだつたのである。千八百七十年のヨーロッパでは、銀行家、實業家、企業家、資本家ばかりがインシャティンを取つて居たから、彼等は當然國家を左右し、新産業國を樹立したのであるが、全くそれと同様に日本では勿論國家が總てを監督し組織して行つた。思ふ存分に智識を使へたのは久しい間國家だけだつた。國家は唯一人で重荷を背負つたものである。

勿論この事は日本人の心情、偉大な家族的感情に依つて、非常に輕減されはした。

ヨーロッパでは政治家が一寸でも經營に干渉しようとするれば、當時直ちに激昂、工場閉鎖、負債拒否等を以て應じられたが、日本の皇帝はこの經營を絶體に統御する事が出來た。それは一つには皇帝が今日でも數ヶ年前と同様に神と見做され、皇居は將軍の治世に於てさへ攻撃を受けた事がない位だからで

あるが、就中太古から絶えず繰返された天災地變が、國民に個々人は無である事と、あらゆる民族の協力に依つてのみ自然の暴力を制し得る事を明らかにしたからである。主な被害者たる大名のひどい反對も受けずに日本はその經營を指導する事が出来た。又、銀行界、實業界の反對も顧慮する必要はなかつた。日本は殆んどどんな原料でも自由に手に入れるといふわけにはいかないが、ひどい生活に慣れ自己本位でない労働者を持つて居る。ヨーロッパと日本とを二つの一定量の米に喩へれば、ヨーロッパ人は銘々その米の一粒だと云ふ意識を持つて居る。そしてこの一粒一粒が集つて一定量の米になるのである。ところが日本では誰でも自分が米だと思つて居る。では一體バラ／＼の米粒といふものはどんな意味を持つものであらう？

ヨーロッパでも國民經濟學者や専門家が新しい道を指示し、政府もこの新しい提案に適した法律を作つた。併し積極消極の抵抗は肝心の時が来ると、どんな小さな既得権をも放棄し初めた。

日本は弧立か、工業化か、二者その一を選ばなければならなかつたが、一度選んだ道を斷乎として邁進して行つた。日本人は「米」の事ばかりを考へて、殆んど「粒」の事は考へなかつた。この事は少しも諷刺ではなく、それがなくては日本の集中化の効果が理解し得ない確證である。それは又證明の出来な解釋ではない。封建制度の撤廢が日本の統一と工業化の最も重大な條件だつたから、大名は千八百七十一年八月、その傳統的な權利を犠牲にし廣大な領地を放棄した。

「臣等一同は、皇室が國家を唯一にして秩序ある一つの總體とすべき法律を作らせ給はん事を願ひ、謹んで臣等の全財産を捧げ奉るものである……………」

この様に大名達は 明治天皇に上書して居る。それ故に、領主であり有産階級である者の眞に獨自の自己放棄は、競争を無くし個人主義の發達を輕微なものにした。而もこれ等總ての事の外に、更にもう一つの極めて重要な要素が附け加つた。ヨーロッパでは、何百年も續いた戦争のために、各國は巨額の負債に悩み、フランス、ドイツ、イギリス、ロシア等の政府は、新たに借金を得るために全力を注がなければならなかつた。ヨーロッパの半ばはフツガイやウエーゼル(大ブルジョア貴族の名)、更に後にはロートシルド(フランクフルトの銀行の名)の奴隷であつた。支配階級は無限に金を使つたが、それは日本の様に生産的な産業の建設と云つた様なものゝためではなくて、利子の返済と彼等の貴重な支配機構の維持保存のためであつた。

日本はその工業化に到達する瞬間までは、全然封建國家であつた。外國との交渉がなかつたから外債といふものが全然なく、又國內の負債もなかつた。それどころか實際に金がなかつたのである。奴隷たる農民がその勞働に依つて、日本の政府、二百七十六人の大名、將軍、皇帝を共々扶養して居たのだ。商人が何百年もかゝつて貯へたものは國內に残つて居た。商人のみが金を蓄積して居た。それを今や自ら進んで國家に供給したのである。日本最初の國內負債三億圓の公債は、千八百七十二年の日附を持つて

居る。ヨーロッパが何百年も古い利息に喰ひ盡されて居る間に、日本はさういふ負擔なくして出發し得たのである。

日本は金銀の探鑛を餘り多くはやらずに新らしい投資に對する資本を迅速に容易に獲得し初めた。國家は英米からは多くの技師、又ドイツからは二人の鑛山技師を招いて、その鑛山に近代的な設備を施した。同時に石炭が探掘され、日本の近代的な鑛生産の基礎が置かれた。それは今日日本の資源の中で唯一の意義あるものである。この銅生産は千九百二十三年まではまづ世界産額の第三位を占めて居たが、其の後ベルギー領コンゴ、カナダ、ペルー等に大銅山が発見され、千九百二十八年には世界産額の三・九パーセントを出すに過ぎなかつた。現在ある日本内地の約三百五十の鑛山は、嘗ては總て國家が建設したもので、千八百八十八年までは國家のみが近代的な方法で地下の寶を採掘したのである。

かくて鑛山の収入に依つて、世界市場を席巻して居る現代日本の織物及び紡績業が出来上つた。或る非常に興味ある文書の中で、元老院は次の如く表明して居る。

「日本は英國に範をとらなければならぬ。食料品工業も建築材料工業も建設する事が出来ないから、大量生産品としては唯織物が問題になるばかりである。」

その上紡績業は、昔から日本の唯一の重要産業部門であつた。かくて千八百七十二年には四千人收

容の絹織工業女學校が開設され、千八百七十四年には水力運轉の模範紡績工場が出来、スイス人の専門家が雇はれて、絹屑の利用法を發見するに至つた。

日本は最初の對英外債に依つて、既に千八百七十年ランカシャに於て、各二千鎊を有する二臺の近代式木綿紡績機を購入し、一人のドイツ人の専門家が招聘された。このドイツ人は、この機械を監督する役であつたが、出来ればこれを改良もしなければならなかつた。これと殆んど同時に、皇帝は國立セメント工場二つ及びアメリカの機械をとりつけた國立ガラス工場一つの設備を備へしめ、ガス及び電氣事業、織物業、罐詰工場等を創設せしめた。

日本の最初の鐵道は國家に依つて建設された。千九百五年に至る迄、日本の交通界に於ける個人資本は——たとへ幾分なりと何等かの形によつても——何の役目もしなかつた。日本の航海事業は、國家が、外國の古船舶を買つて初められ、それから浦賀の國立ドックに於ける造船に依つて繼續された。

千八百八十四年に至る迄、日本には必要な研究をさせ、機械を購入し、生産に必要な凡ゆる物資を分配するのに、唯一つの機關、唯一つの勢力があつただけである。それは國家であつた。「元老院」は千八百七十五年國家の必需品、國家がやれる事、資源等を綿密に研究したが、その綿密な事は現代のソツイエトの「企畫委員會」がロシアの財政問題を研究し、「ニューデール」のお歴々が今日、アメリカの經濟生活を整調しようとして居るのと同様な細心さであつた。

ロシアとは全然違ひ、又アメリカの企畫經濟家やイタリーの多くの經濟學者と異つて、日本の國家は決して純粹に自己的から發した企業家ではなかつた。それは寧ろドイツの今日の經濟管理を思はせるものがあり、先づ政府が率先者であり、指導者であり、目標を指示する者であつた。國家の専門家が後進を仕上げ、益々増設された學校が次代の技師、統率者を養成するに及んで、國家は計畫的に産業企畫の直接指導から退いた。日本には今日でも十三萬六千人の國家的勞働者を擁する工場が存續して居るが、千八百八十四年以後二十年の中に、國營事業は除々に個人企業に移されたのである。特に國家行政の錯雜を避けるために、千八百八十四年には織物紡績業は個人の手に移され、千八百八十八年には國營鑛山は國家と云ふ母體から乳ばなれさせられた。日本は意識的に國家資本主義から個人資本主義に移行したのであるが、それは日本の指導的人物が、個人資本主義を「利益組織」と稱するのは不當で、寧ろ「利益並びに損失組織」である事を認めただからである。

日本の經濟生活が、一握の官吏に依つて指導されるには餘りに複雑化し、國家は單獨ではその重荷に堪へ得なくなり、總ての必要な投資をするのに充分な資金に窮する様になると、國家獨占は資本主義的個人の獨占になつた。個人經濟は豐年の利益を我物にし得た代りに、巧みな立法と監督とに依つて、その豫備金の最後の一錢に到る迄、損失を負担すべく強ひられたのである。かうして企業慾が起された。既に日本の自然的條件に依つても無理な生長は殆んど不可能にさせられて居たから、方向轉換をやつて組

織的に外國資本、特に英國資本が入られた。かくて、危機の避け難い缺損の重荷は、國家——從つて總ての納稅者——へ課せられずに、その大部分は又外國の企業家の肩にかゝつたわけである。中央の管理は、生産監督、企畫組織、販賣組織及び殊に重要生産手段の總てを高々三財閥の手に集中する事に依つて維持された。かくて危険は分割され、日本の經濟的基礎は世界的に擴張された。

國家獨占より三井三菱の個人獨占まで

日本の國營企業が、特に千八百九十五年頃益々個人名義に書き換えられたのは、一つには經濟政策の一つの重大な理論的轉換ではあつたが、實際には、本來總てが舊套を脱しなかつたのである。日本の資本家の數は殆んど開港當時以上になつては居なかつた。國立工場は、單に國家にばかり、利益を齎し、個人には少しも恩恵がなかつた。日本にも専門家が出來はしたが、金錢と商業に對する輕蔑の念は、日本の人生觀に深く根ざして居て、今日でも依然として全く貧しい將校、僧、農夫、勞働者等は、寡頭政治家よりも重んぜられて居る。封建國家の撤廢と共に、或る種の資本主義的原則は採用され、日本人は勞働の報酬としての俸給に慣れ、利益といふ概念を得るに至つた。千八百七十一年以來大阪で一種の貨幣が造られ、千八百七十二年以来プロシヤに範をとつた紙幣が出來、又米で支拂をする代りに銅貨で、延金で支拂ふ代りに爲替で支拂ふ様になつたとはいひながら、依然として貧困は非常に嚴肅なものと思

做され、苦力の労働や、労働者、工業家の労働は、一種の義務、國民が履行しなければならぬ奉仕の使命と見做されたのである。千八百七十二年發布された銀行法に依つて、この大衆による金銭蔑視に何等の變化も來さなかつた。日本人にとつて、企業は依然として「路傍の人」であつた。それ故に國家がその工場の直接的指導から手を引いてから、國家と共に同時に産業的活動をして居た前記の諸財閥に依つて、此等の工場管理が續行されたのは自明な事である。かうして二十年の蝕を経てから、三井、薩摩、三菱、大倉等が、再び日本の經濟生活に現はれ、國家の獨占は必然的に、これ等の大財閥獨占に移つて行つた。彼等ばかりが資本と經驗と技術的智識を持つて居たのである。今や國立工場の五人乃至十人の總支配人の代りに、十二の個人商會が出來た。更に四つを増し、現在ではその上三商會が加つて居る。これ等の商會社は、凡ゆる大工場、銀行、殆んど總ての交通機關を制御し、物價制定の能力と、組合及び輸出聯合に對する大勢力に依つて、無数の小工場と、所謂「自由」商業を其の監督下に置いて居るのである。三井と三菱は現在「國家内の國家」に成つてしまつて居る。日本の國民經濟の理論的基礎は、千八百八十四年以來變化し、日本の工業は、最早政府のものではなく、個人のものになつた。併しこの變化は、少しも實際的效果を有しなかつた。即ち、三井の日本に於ける經濟は、明治天皇の日本のそれと全く同じ工合に管理集中されて居たのである。

今日歐米の實業家は、日本のめざましい商業的躍進が、銀行家、外交官、商人、工業家の總ての人々

(34)

の共同作業に依つて準備された信すべからざる精密さ、珍らしい打撃力、巧妙な宣傳等に驚異の眼を見はつて居るが、日本の世界市場進出は、「管理」に依つて異常な成果を收めたのであると云ふ事を知れば、この驚異もその根據を失つてしまふ。この日本の産業化の、嘘の様な急速な發展は、次の様な事業の論理的歸結に過ぎない。それは日本の産業化が、政府及び後に至つては個人的中央權に依つて、精細に作成された計畫に依つて目論まれ、ヨーロッパの様に、互ひにいがみ合ひ、争ひ合ふ多くの利益に依つて計畫されたものでなかつたと云ふ事——この事實の結果に過ぎないのである。

銀行と大臣、工場と鑛山、政黨と新聞等が完全に一致して働いた。それは恰も一人の人間の心臓と筋肉、頭腦と胃が相關聯して働く底のもので、彼等は唯一つの有機體を形成したのである。國家に依つて作られ、國家に指導された彼等は先づ國家に仕へた。今日では彼等は總て二つの、高々三つの財閥に屬し、これ等の財閥の頭首達、二人乃至三人の者がこの國の主要産業を管理し、指導して居るのである。

三井男爵、岩崎男爵三菱コンツェルンの頭首、それから恐らくは住友、この三人である。

日本の行動は明白で論理的である。それは唯一の頭首から生れて來るもので、ヨーロッパに於ける様に、自分等の利益を殆んど顧みないどころか、お互ひに絶えず争ひ合つて居る無数の指導者輩が居ないからである。

日本は不毛な、貧弱な、地震の多い一島嶼にひしめき合ふ農民、漁民の國民から、半世紀のうちに世

(35)

界の恐るべき工業國に成つた。それは自然と歴史的過去とが、日本を驅つて計畫經濟に赴かしめたからである。日本の人口は、千八百五十四年の二千六百萬から、千九百三十五年の六千九百萬に増加するに至り、更に三千萬を征服し、一帝國を建設する事が出来たが、それは合衆國と同程度の人口を有して居る。それは運命が日本を計畫と熟慮に強ひたからで、これに反してこの同じ運命と云ふ奴がヨーロッパを、混沌と浪費と空轉の中にしつかりと擱んで離さなかつたのだ。

餘り喜ばしくもないかといふ事實を否定しても意味がない。日本はその種族の獨創性に依つて、大をなしたのではなく、日本にのみ開けて居た道をまっしぐらに幕進したに過ぎない。ヨーロッパは死んで居ない。白色人種は夙にその力の最終點にあると云ふのではないのだ。併し、この力に思ひを致すべき時ではなからうか。

伸長發展の腦髓、三井と三菱

日本の實業録、株主名簿、主要納税者名簿等を一覽すると、次の如き姓名に繰返し出會ふ。日本陸軍御用商人大倉、神戸の大實業家岡崎、大阪の銀行家にして大實業家住友等々……。併し彼等は三井に比較すれば、殆んど物の數ではない。三井は千九百三十五年に、その私有財産は約十五億マークであつた。總資本四十五億マークの二百二十四に上る各種重要企業が、この三井の直接の管理下に置かれ、又三井

はその銀行や子會社に依つて、間接に無數の他の事業を支配して居る。千九百三十三年に於ける日本の總輸入の中、棉の八十五パーセント、穀物總額の四十パーセント、又日本炭の五十七パーセント、輸出入機械類の四十パーセントが、この三井の手を経て居るのである。

日本の風説に依ると、あらゆる企業と三井の莫大な財産とは、唯一つの根源を有すると云ふ。それは地中深く埋もれた金の財寶で、十六世紀の善魔(人間に好意を有し人間を助けると云ふ)が、三井家の創始者に發見させたものである。この事が一つの夢物語以上に荒唐なものであるとしても、初代の三井は、その善魔との關係は兎も角、異常に發達した商業神經を持つて居た。現在の日本を支配する者のこの祖先は、日本に現金販賣を實施し、それ迄慣習的に行はれて居た年拂ひを廢止した最初の人であり、又それ迄原料が單に全部そのままで賣られて居たのを、任意な量に従つて供給した最初の人であつた。彼は遂に千六百六十年、一種の爲替支拂を發見し、京都、大阪、江戸等の彼の種々の會社に對して、手形を發行した。かくて金輸送のために、軍護衛の巨費を節し、小さな地方的商業から、全日本を包括する商業を起し、「三井銀行」の礎石を置いた。この銀行は既に將軍に金を貸し、千八百七十一年には日本皇帝の命を受けて紙幣を作り、政府紙幣を發行して居る。それ故に三井の踏出しは丁度、フツゲル(アウグスブルグの貴族にして大實業家)や、ロートシルド(フランクフルトに於けるマイヤー・アンゼムに依つて創設された銀行)のそれと同じである。ところでこのアウグスブルグの一族は何處にその名を止めて居るであらう? 今日此のロ

トシルドを三井——この世界獨自の門閥——に比べたらどうだろうか？ この三井にとつては、榮枯盛衰は世の慣ひてふ法則は通用しない様に見える。

歐米の大富豪の子孫は彼等の能力を富豪的情熱に費すもので、例へばフッゲル家の最後の子孫は、その精力を高々馬上球戯に費し、パリイ人のロートシルドは、唯彼の私有劇場にばかり心を惹かれて居たが、これに反して三井八郎兵衛の三百年後、彼の子孫は益々權力を得、益々威を振ふに至つた。彼等は日本の最大の食料品事業、鑛山業、有力新聞を有し、日本國民の大部分に衣服を調達し、家屋を建築し、生命保険をやり、その航路線に依つて日本と世界とを結びつけ、世界的貿易に依つて、日本の發展のために道を拓いてやるのである。

三井は傳統に縛られて居るが、全く現代に生きて居る。私は千九百三十年、現當主三井八郎兵衛男爵に紹介されたが、彼は小柄な顔の小さい男で、其の秀でた眉は彼の容貌に不斷の緊張の表情を與へて居た。私が彼に會つた時、丁度東京市の一割丸の内にある三井コンツェルンの新事務所は、神道のあらゆる禮式に従つて祓ひ清められ、三井の支配人や監査役達は、祭壇に清められたサカキの木をおいて居た。昔風の高價な衣を着た僧が、魚、油、パン等を祖先に供へた。銅鑼の鈍い音、………一方かういふ傳統的な古めかしい儀式に入臺の急行エレベーターが、モーニングコートを着た客を續々運んで來た。後には寫真班のフラッシュの音、神道の神官と、トキー寫真機、新聞寫真班等々………。何故な

らば、日本では三井のやる事なら何でも、其處ばかりでなく、重要視されるからである。

三井はその新屋を、何千年と云ふ歴史を持つた日本の禮式に従つて祓ひ清めさせた。ところでこの建物といふのは、アメリカの優秀な建築技師の設計になるもので、全然アメリカの大銀行建築の様式で建てさせたものである。そしてその事業の本部たるこの建築に三千万圓、即ち當時の六千万マーク以上を支出したのだつた。魚の生贄を供へて開店する様な古風な事をやつたかと思ふと、同時にその屋敷内には砲彈にもビクともしない鋼鐵網を張りめぐらせ、土臺は耐震にし、總てを耐火建築にさせたのである。

而もこの三井の建築は、いはゞ全日本の象徴である。即ち傳統と近代的技術の緊密な織物なのだ。國家に對する責任感であり、同時に凡ゆる計畫の極めて現實的な、躊躇せぬ實現である。鋼鐵とガラスのこの日本の建築物の中に、否、かくの如く一見アメリカナイズされた總ての日本人の心の中に、神々の庇護に對する絶體の信頼と、この神々の手に依つて、日本の世界的優勢を成就せんとする確固たる意志——それは指導的ヨーロッパ人の懷疑論とは全然異なる世界觀であるが——かうした世界觀が日本人の心の中に生きて居るのである。而も信仰と神祕主義とは、三井や又その競争者達をして彼等の國を完全に支配するために、最も近代的な手段を用ふる事を未だ嘗て妨げなかつたのである。

國家がその事業を新らしく管理する事を止め、それをトラストの手に渡した時此處に統一は破られて、

日本の政治にたづさはり、軍を指揮し、諸税を取りきめた人々は、最早直接には日本の生産手段を管理しなくなつた。經濟的發展と軍事的發展、貿易政策と一般政策とが、最早以前の様に完全に連結されて同一の計畫を實現する様な事がなくなりはいないかといふ危険が近づいて居た。國家はなほ大きな權力を維持する様に努め、投資に對する法則規定、輸出計畫、技術的研究、日本の個人經濟に對して統一的な目標を置く事等のために國家的施設を設けたりした。併しこの個人經濟は、自らこれ等の法律發布に對して勢力を得んとするに到つた。三井及び三菱はその自己の利益のためからしても、強大な國家を望んだのであるが、又彼等の側からは、對外政策、軍の問題、勞働者立法等に對しても權力を得ようとした。彼等は國家と經濟との新しい融合を望んだ。國家が公然と産業を指揮しようとしなくなると、實業家が——少くとも密かに——國家を操縦せんとしたのである。

世界のあらゆる所で、殆んど總ての資本家が抱くこの望みは、日本では何處よりも容易に實現されたのであつた。何故ならば日本は民主主義國家ではないからである。國民の大部分は政治に對して殆んど關心を持たず、國會の陰謀などは少しも解らないのである。

千八百八十年頃、血氣盛りの若者がヨーロッパの旅から歸つて、日本へ立憲君主國の思想を持つて來たが、國民は彼等の思想に全然夢中にならなかつた。唯、日本の指導的政治家、就中日本の寡頭政治家のみがその可能性を見たのである。彼等は、國會はお歴々よりも、皇室よりも操縦し易い事、又國會は

國に對して、よい宣傳手段ともなる事を認め、千八百八十九年明治帝の聽許を得るや、彼等はこの國會を創設した。そして次の様に取りはからつた(それ以來何の變化もない)。即ち、皇帝は陸海軍の最高指揮官にして最高司法審判者であり、皇帝のみが大臣の任免権を有し、あらゆる立法に對して非認權を有する事、これである。日本では、國會が重要な意義を持つた事はなく、先づ今日では最早殆んど意義を持つて居ない。併し依然として有效な宣傳手段である。國會の決議、即ち國民の決議は一將軍の命令よりも、個々の大官の決心よりもよい印象を與へるものである。日本でも亦國會は豫算案を議決するから、議員と云ふ迂路を通つた方が公然たる要求によるよりも、國家は一層うまく左右されるのである。議會に於て、多數を占めて居れば、個人の欲望を國民の希望なりとして主張し得たし、政府内に反對者があれば、彼等に強い道徳的壓迫を加へる事が出来たのである。

ところで日本の企業家連中にとつて、この國會内の多數を確保する事は、勿論易々たるものであつた。日本の大衆は政治にまるで無關心で、農夫、小産業に従事する者、勞働者、商人等は、選舉の際、買収に依つてのみ投票をするといふ程だから、この事が容易に行はれるのは道理である。この事實は、今日、日本の到る所に於て、「院外團」(選舉代理人團)と云ふものゝ助けを借りて行はれて居る。この「院外團」はあらゆる都市を威嚇し、官吏に賄賂し、又これを脅迫する等、何でも出来ない事はない。一票に對して、貧しい田舎では一回か二回、都會では八回乃至十回が支拂はれるから、選舉戦は仲々金がかか、

るもので、代議士に成るには少くとも五萬圓要る。然るに、日本の四百四十六人の代議士は、高々三千年の歳費である。それはつまり彼等は借金して東京に到着するが、その代り何でも出来ない事はないと云ふ事になる。政黨は唯その選ばれた代表者に依つてのみ政權を得るのだから、代議士と同様やはり他に依存して居るものである。日本の保守的な政黨「政友會」は、その必要な資金を三井に仰いで居る。その豪壯な建物は、三井銀行のクレヂットで建てられたものだし、その「院外團」は三井の貸銀表に載つて居る。自由黨である「民政黨」は、完全に三菱の掌中にある。併し各々の關係に於て、萬全の策をとるために、三井は自由黨に時に數百萬金を與へるし、三菱は同様に保守黨のために相當巨額の金を使つて居る。そして日本の寡頭政治家はその政治的友人どもが、叛旗を翻がへす様な事があれば、これを芽生えの中に抑壓してしまふ事が出来る様に、既に早くから國民の教育に對してまで、其の勢力を確保して居た。彼等は政治家は勿論、今日では大學教授の大部分、日本のラヂオ、全新聞をも支配して居るのである。

(42)

近代日本の大學、ラヂオ、新聞

日本に於ても、アメリカと同様、大學は大實業家や銀行家の寄附に依つて經營されて居る。三井は、福澤の創立にかゝる慶應大學の「バトロン」であり、三菱は、世界的に有名になつた早稻田大學に金を

出して居る。其の上これ等の企業家連中は、無数の専門學校を建て、その勢力を確保して居る。學校と云ふ餘り金のかゝらぬ家庭を作つてやる事に依つて、彼等は日本の學生を左右して居るのである。そしてこの家庭へは所謂「心掛けのよい」何等反資本主義的宣傳をやらぬ學生に限つて入學を許可されるのである。彼等は、日本の學生に、制服を着させる制度を實施したが、これに依つて學生は容易に識別され監督される。又、女子には實際に大學教育から閉め出しを食はす事が出来たが、かうすると彼等の勞働方法にとつて危険な近代の婦人運動は、その萌芽の中に摘みとられるのである。東京にある十四の大學に通ふ四萬人の學生の中、千九百三十四年には僅か十三人の女子が居たばかりであるが、その中、帝國大學にはたつた四人しか居なかつた。

日本のラヂオは、抑々最初から千九百二十五年から三井と三菱に支配されて居る。それは既に彼等のみが、此の經營のための適當な建築會社と、適當な資本を持つて居ると云ふ理由に基づくものであるし、又日本の民衆は、局を維持する事が出来る寄附金を支拂ふには餘りにも貧しいからである(日本のラヂオ聴取料は、千九百三十五年に一月三十五フエニヒである)。千九百三十五年六月一日以來放送を開始して居る長崎の短波長放送局は、特に日本語と英語のニュースをアメリカ、支那、ヨーロッパ等に向けて送つて居るが、これは萬國電話會社に屬して居る。この萬國電話會社には、日本の國家と、三菱と、アメリカの關係者が、殆んど同じ割合で關與して居るのである。目下開局して居る日本の他の二十五の放送局の中、

(43)

十二局は三井系の会社に依つて維持されて居る。それにも拘らず、約二百萬の聴取者が關心を持つて居るそのプログラムの一つは、全く國民に英雄的生活狀態を要求して居る今日の日本の國家の特徴を持つて居る。

娛樂は殆んど日曜の夜に限つて放送される。音樂では、古代日本の俗謡調、例へば長唄、清元、浪花節、常盤津等が同じ位の割合で提供され、他の半分は近代アメリカの流行歌、ヨーロッパの古典交響樂等である。スポーツの割合は非常に大きく、日に三回放送される各種のラヂオ體操の時間には、全國民が相當の老人まで参加する。それは一部分學校の運動場で、又は神社の境内で行はれる。千九百三十四年には、此の講習を受けた者が六千萬人以上もあつたと言はれて居る。

プログラムの三分の一は、國民の國家政治的、國民的、社會的教育に捧げられて居る。

日本の新聞は、二様の方法で三井と三菱に管理されて居る。即ち、それが政黨新聞から成る地方では買収された政治家により、大都會では直接の會社創立によつて管理されて居るのである。それ故に、日本第一の新聞、千八百七十年創刊の世界的新聞「大阪毎日」と、「東京日々」(資本金二千萬圓)及び、商業新聞の「中外商業新聞」は三井に屬し、その大きな商賣敵である「大阪朝日」と「東京朝日」(資本金六百萬圓)とは、多數株によつて三菱派に屬して居る。兩新聞共に、「雜誌王」野間清治の事業に關與して居る。この野間清治の仕事は、四萬九千人の社員と勞働者を使用する出版屋で、合計一千萬の讀者を持つ

て居る九雜誌を發行して居る。更にこれ等の讀者大衆に、特殊の百貨店で藥や強壯劑を賣りつけて居る。

日本の新聞はアメリカの新聞よりもよりアメリカ的に仕上げられて、最も近代的な技術的方法で活動して居る。私有飛行機、格納庫、到達困難な地域のための傳書鳩(それは新聞社そのものの中に飼養されて居る)、近代的な電送寫眞装置等々……………これ等の新聞は莫大な發行部數(大阪毎日一日百二十萬部、大阪朝日は百三十萬部、東京朝日は九十萬部、東京日々は七十五萬部、讀賣は五十五萬部印刷部)を持つて居るから、政治的勢力は

かりでなく、非常な利益をあげる經濟的勢力を現はして居る。そして日本の新聞記者の初給は月五十圓、三年後の平均給が百圓で、編輯長としてさへ月二百四十圓以上は決してとれないし、又新聞記者の組合組織は嚴禁されて居り、新聞社の社員は殆んど紡績工以上の自由は持つて居ないから、日本の千二百二十四にのぼる日刊新聞には、企業家連中の氣に入らない様な事は一言も印刷されないものである。

新聞を退屈なものにしない様に、又ロシアやイタリーの新聞の様に純政黨新聞としないために、評判といふ事に大きな價值が置かれ、夫婦間のいざこざとかさう云つた全くの私事が、種にされる事は他の何處にも見られない程である。併し日本の新聞の政治的經濟的傾向は完全に統制された、國家資本主義的のものである。

それ故に三井と三菱とは、殆んどこの上もなく集中された勢力を持つて居り、日本の政治家も經濟も

支配し、日本の商略も國民教育も牛耳つて居るのである。

モルガン、ロックフェラー、否恐らくはフォードでさへ、日本の寡頭政治家より富んで居るかも知れない。彼等も亦、實に何十年も新聞を持ち、大學を持つて居る。特にハーディングの下にあつては、アメリカの外務省はスタンダード石油の外國局と言つても大差はない。併しアメリカのかういふ勢力家は特に専門化して居て、彼等はその國の石油を獨占して居たり、或はメロンの様に世界アルミニウムの九十パーセントを持つて居たりするが、彼等のトラストは、三井、三菱のトラストの様に、あらゆる生活必需品の獨占供給者ではなく、又食料品販賣者、重工業家、船舶業者、銀行家等を同時に兼ねて居るのではない。そして殊に彼等は全力をあげて互ひに殺し合はうとし、双物三味にこそ及ばないが互ひに争ひ合つて居るが、これに反して日本の寡頭政治家達は共同して働いて居る。フォードは總ての銀行家を心から憎み、千九百三十四年デトロイトの銀行が破産するや、彼がその憎惡を實行に移す事を知つて居る事を實證したのである。モルガンはロックフェラーの不倶戴天の敵で、世界をも動かす様な株式戦争がこの兩家の間に行はれた。石油業者の多くは彼等自身の銀行を創立した(ロックフェラーの養子はチェイーズ銀行の頭取である)。この様にドル富豪の多くの精力は競争演習に費される。三井と住友、大倉と三菱にしても、相互に愛し過ぎると云ふ事はないが、彼等は相互に敵視し合ふより協同する方が得策な事を以前から知つて居たのである。誰も彼もスタンダード・オイルとロイヤルダッチ・シェルとの間に行はれた血

の出る様な戦を知つて居るし、新聞の讀者は誰でもカナダとベルギーの銅王の争、ポリビヤとマレーの錫王の争の跡を何處迄も辿つて見る事が出来るが、どんな勤勉な經濟通も、日本の寡頭政治が造つた巨大な構築内の急激な變化を發見する事はむづかしいであらう。

歐米の勢力家は必ず「穀粒」(前出の如く「穀粒」を個人「米」を全體としての象徴の意味を持たせてある事に注意すべきである)の事はかり考へ、「米」の事に考へ及ばなかつたが、三井と三菱とは苦力の様に、先づ「米」を考へ、然る後に「穀粒」の事を考へる。彼等としても決して聖者ではなく、金を愛する事モルガンに劣るものではない。併し彼等は歐米の勢力家よりも實際的なのである。日本の寡頭政治家は國家に打ち勝たうとしないで、國家を自分達の大切な同盟者とするのである。千九百三十四年に於ける日本の鋼鐵トラストの創立は、この独自の協同作業に對する模範的な例である。

既に千八百四十九年三井は原始的な鑛鐵工場を持ち、千八百八十八年には鋼鐵を生産して居るが、其の設備は工業的施設と稱される様なものではなく、三井でも御多分に漏れず技術的智識は仲々意のままにならなかつたのである。同家は他の部門と同様に鋼鐵工業に於ても、イニシアティブをとらなければならなかつた。そこで千九百一年、九州の八幡に模範鑛鐵工場を開設した。この八幡附近には日本最良の炭層があるのである。工場はドイツ人とイギリス人の指導の下に非常に良好に發達し、日露戦争中に生産は二倍となつた。そしてこの八幡製鐵所は千九百十二年には、既に十三萬噸の鑛鐵(全國産額の三分の

二〇と、十五萬八千噸の鋼鐵(全國産額の九十五パーセント)を生産した。又この工場は一方に於て、専門家をも供給し、八幡から鋼鐵ばかりでなく、經驗を積んだ技師が出たのである。彼等は三井の設備を近代化し、國家から日本の最も重要な鐵礦脈を引き繼いだ三菱のために工場を建設した。ところで世界戦争は前代未聞の利益を約束したので、三井や三菱より小身の者も、日本に多くの鋼鐵工場を建てた。千九百十八年には、鑛工場は八十、壓延工場は四十を下らなかつたが、勿論これ等の企業は、除々に現はれて來た値下りにあつて持ちこたへられず、遂に消滅するか、或は二大トラストに併合されるかしてしまつた。

三井と三菱とは、成る程莫大な資本を意のままにする事はする、併し日本の全重工業を集中する事は彼等の力にも及ばなかつた。そこで千九百三十年から同三十一年に至るまで止むを得ず政府のクレヂットを受けるはめになり、又トラスト構成をあくまで遂行するために、政府に頼らなければならなかつた。

當時は民政黨内閣の天下で、三菱社長岩崎男爵の女婿原男爵が外務大臣をして居た。言葉を変へて言へば、年産十萬噸に及ぶ「三菱鐵鋼會社」及び同社の朝鮮鑛山の所有主たる三菱の黄金時代だつたと云ふわけである。どんな外國でも、「日本鋼鐵工場」「輪西鐵會社」「釜石鑛山會社」等これ等は皆三井所有の状態は餘り羨ましがられる程のものではなかつた。民政黨の政治家が天下をとつて居たからあらゆる切札は三菱の手中におかれて居た。かういふ場合アメリカやヨーロッパでは、政權を握つて

居る者と親しい間柄でなければ、恐らくクレヂットを得るといふ事はないであらう。併し日本では考へ方が違つて居た。曰く「協同作業」である。三菱は三井を滅ぼさうなどとは絶體にしなかつた。それどころか、この二者は國家と結合したのである。そして先づ試験的に、然る後千九百三十四年二月一日に至つて、資本金三億六千八百五十萬圓の「日本製鐵」が創立された。即ち八幡の國立鋼鐵工場と三井及び三菱の事業とは、唯一の力強い機構に總括されたわけである。今日この島國の全重工業は、二人の人間の支配下にある。即ち三井男爵と、岩崎男爵。この競争し合ふ二大トラストの頭首は、國家と仲善く協同作業をやつて居る。さもなければ國家は今日到るところで、これ等勢力家の永久の敵と見做されるのである。この全く獨特な状態を理解するために、一つの對照を用ひなければならぬ。他でもない、ロッキンフェラーとデスターディングとは、一つの油業トラストのよく理解し合つた支配人であるといふ事、そして、このトラストには、アメリカの國家も約三十パーセントばかり關係してゐる事を思ひ合せざるを得ない。

三井と三菱は日本の人々に好感を持たれて居るわけではなく、過激な士官や若い革命家達には憎まれて居る。丁度、メロン、ロッキンフェラー、デスターディング、モルガン等がヨーロッパの社會主義者の憎惡の的となつて居る様なものである。それにも拘らず、彼等は他の「世界の主」とは違ふやり方で活動して居る。彼等とても亦利益配當の事を考へないではないが、それと同時に國家の事を考へて居る。彼等

は、日本が完全に大をなす時でなければ、彼等も亦大をなす事は出来ないといふ事を知つて居る。特に三井は何百年このかた、その利益を日本の利益と結合する事を知つて居たのである。この三井の一員が現はれる所には必ず日本の殖民地が生れ、日本の軍隊が嘗てやりとげた以上の迅速さで、而もより確實に國土が占領されてしまふ。三井は臺灣に植民し、その砂糖生産に依つて日本第一流の領地とした。彼等は歴倒的な執拗さと火の様な熱情を以て、ロシアと支那の勢力に打ち勝つた。そのわけは彼等が全日本人と同様愛國者であるばかりでなく、獲得した土地も、新しい販路の可能性を約束したからである。何故日本の寡頭政治家が、この様な國家の支援者であるかといふ事は、ヨーロッパ諸國には殆んど無關心である。日本の競争者達にとつて、白人人種の企業家達は殆んど例外なく非國民的、反國家的な人間で、全く金の機械であると云ふ事は決定的なのだ。然るに、日本の企業家達は日本の發展の先驅であり、日本の建設に最も適した手先なのである。

この點については、日本人の高尙な道徳のせいでもなし、白人の惡魔的な氣質のせいでもないといふ事は勿論明らかである。歐米の大部分のトラストはまさしく原料トラストで、アメリカの油業王達は、いち早く儲けようとして濫掘をやり、國家の官吏に贈賄して、彼等の最後の豫備油まで奪ひとつた(ハーディングの下に於けるティポットダム事件)。彼等はあらゆる合理化に反對した。何故ならば彼等は目先の利益配當だけに關心を持つて、彼等の國の將來などといふ事は毫も考へなかつたからである。歐米には石炭石

油、鐵、ゴム等を何かの掛引で賣るといふ民族的な特性があるが、これに反して日本ではどんな良心のない寡頭政治家でも、大事な寶物を國外に持ち出す様な事はよくし得ないのである。日本のトラストは原料トラストではなく又日本の工業は主として製造工業である。三井は日本の勞働力を搾取するが既に國內市場を作るために出来るだけ迅速に生活水準を高めて居る。彼等は國內に金を運びこむ。富裕なメキシコ、これに劣らず豊かなルーマニア、又他の十二ばかりの原料國が、利己的な、貧慾な、唯次の總會だけしか考へて居ない企業家達に搾取されて、日一日と貧乏にされて行くが、これに反して三井と三菱は國家のために力を貯へて行く。

歐米に於て政治家の役目が富豪から買はれるのは、主として富豪達が國家に不利で國民に有害な仕事を蔽ひ隠さなければならぬといふ理由によるのであるが、三井と三菱は官僚的機構の中に兎角發達し勝ちならぬ勢力の使用を妨害するためばかりに、政黨を利用するのである。又歐米では、疑獄事件は大抵、輿論の壓迫、嫉妬に驅られた競争者や反對派の政治家等の暴露によつて明るみへ出されるが、日本では特に大企業家達が一種の經濟道徳の清淨性を監視して居る。彼等はあらゆる重要産業、政府のあらゆる重要な地位、殆んど總ての金をも支配して居るから、勢力維持のために國家の財産をこそ泥的に盗んだり、租税のインチャキなどはやりはしない。近年に於ける日本最大の諸不正事件が、三井の新聞によつて摘發され、又就中、岩崎男の女婿弊原大臣に依り、即ち三菱關係によつて除かれたといふ事は、

何と言つても注目すべき事である。

日本の寡頭政治家達は、確かに教科書的な公明さからではなく、全く組織的な根據から、即ち世界的威信を得るために、嘗てその非道を疑はれた日本の商業道徳是正に意を用ひたのであつて、三井と三菱が産業の合一と輸出ギルドに依つて、世界のどんな競争者も持つて居ない様な打力を日本の世界貿易に與へる様に努めたのは、確かに愛國心の發露ばかりではなく、經濟生活の集中化が最も彼等自身に利益を齎すといふ理由がその主なものである。そして彼等がこの危険な打力を作り上げたといふ事は何といつても決定的なものである。

世界戦争に依つて、莫大な資本が日本に流れ込み、到る所にインチキ會社が出来上つた時、三井は速かに危険をさとつた。日本にとつては分裂の危険、三井にとつて全能を失ふといふ危険であつた。そこで彼等は一轉して、支那の太古のギルドに據り法律を作らせ、それに依つて製造と輸出を嚴重に規定し監督した。今や日本の企業家達は、ギルドと産業合一、即ち彼等の國の經濟生活の絶體的な制御に依つて、彼等の莫大な資本でも彼等の政黨でも永久に到達し得られない所のものに達する事が出来たのである。

(52)

企業家合同と輸出ギルド

千九百二十五年に發布され、千九百三十一年改正された日本の組合法は、同種の商品を輸出する産業部門、又は異種の商品でも同じ外國市場に輸出するあらゆる産業部門に通用する。千九百三十五年末には、四千四百人の輸出商を包括する約五十の組合を數へる事が出来た。これ等の組合の任務の範圍は、先づ原料の試験、生産過程及び生産方法の試験にまで及んで居る。かくて不正なダンピングはその際防げられるといふのである。兎に角、出来るだけ輸出市場獲得に役立つ値段をきめようといふのが目的である。他面に於て、組合は共同施設の代表者で、共同社會が原料、半製品の共同的購入、クレヂットの許可、機械の貸與、組合員の協議等に對する關係の様なるものである。輸出商品の検査と監督及び取引の仲介も亦、組合の仕事に屬する。輸出商品の質的試験及びこの品質の向上といふ事こそ、特に重要視され監督されるから、日本商品の實際改良されて行く質は、この獨特の監督の結果と見做す事が出来る。一部の組合は、海外に支局を設けたり、或は日本商品の大小展覽會をやる注文取りの派出員を使ふ様な事まで、既にやる様になつた。この派出員等は、現場で外國人の要求を調べ、又彼等の委託組合に輸入國の如何なる商品が日本品との交易に最も適するかと云ふ事を指示する事が出来るのである。

組合は國立の貿易局と密接な關係を保ちながら活動する中央統轄本部を持つたために、合一されて一種の保護協會になつた。又國家は、千九百三十年發令の輸出補償法令に依つて組合を保護して居る。政府はこの發令に依つて、一定取引に對する銀行側の輸出爲替手形割引の損害に對して、七十パーセント迄

(53)

保證を與へる事を許されて居るのである。更に組合の特権として、實業録登記の料金の支拂及び所得税、法人税等の支拂を免せられて居る。のみならず組合のやる工業には、輸出商品製造に要する原料の輸入税が賠償される。組合はこの點に於ても亦、國家に對して仲介的な信頼される地位にあるのである。従つてこの日本の組合では、一見少しもトラスト政策的痕跡の見えない、一見純粹な公益的の制度と云ふ事が眼目になつて居るのであらうか。

さて先づこの組合の管理は日本の經驗を積んだ専門家に委せられ、全く自然に直接或は間接に、再び日本最古の經濟企業、即ち三井三菱と結びついて居るのである。併しこの事よりも、組合はその總ての組合員に改良案を出し、新市場を呈示し、新機械を紹介するが、全くどの組合員もこの助言を實現するだけの資本を持つて居ないといふ事の方が更に重要である。

ところで一例をとつて見よう。日本の最も集中化されてない産業部門は漁業である。それは日本の最も重要な産業部門の一つでもある。といふのは、日本の近海では、世界の海洋から採れる魚の三分の一が漁獲されるからであつて、日本の貯藏食料の大部分は魚である。それ故にこの産業部門に携はつて居る組合、日本食料品工業組合は最も重要な組合の一つで、千人以上の組合員を持つて居る。又、科學的研究所、水路局、生物學者、無電放送所等を維持して居る。この無電放送所は、よい漁場を報知し、暴風警報を發し、港々の相場を發信して、漁船に好都合のはとばを報知する。組合は病院船を有し、又カ

リフオルニヤ沿岸のマグロ漁場(それは殆んど例外なく、日本の漁業者を利用し盡される)や、日本内海の産卵場などを研究する。何千といふ總ての組合員は規則的に報告を得る。併し實際にこの組合を充分に利用出来るのは唯一人の組合員に限られて居る。それは三菱會社であり、その「昭和班」はロシア近海及び太平洋に於ける漁業権を持つて居る。又その一會社である「日魯漁業」は、北海道と樺太に於て漁獲し、その「三菱造船株式會社」は日本の全漁船の八十九パーセントを建造して居る。又日本の漁業家は殆んど誰もこの三菱に負債を持つて居り、魚類を大量に貯藏出来るために必要な冷却施設を持つて居るのは「三菱倉庫株式會社」だけである。更にその「三菱商事會社」はアメリカとフランスとに對して、貯藏魚類の供給契約を持ち、その「三菱電機株式會社」は、先づ日本の殆んど總ての貯藏食料品工場の機械を製造して居るのである。

組合が何か技術的な改良を指示すれば、九百九十九の組合員は、資本や國家の保護を求めて奔走しなければならぬ。そして金を手に入れれば、三菱か三井で機械を買ひ、それからその生産品を、三井か三菱の倉庫に入れてもらひ、更に輸送してもらふにも三井三菱の手を借りるのである。三菱自身は三井と同様、その銀行、工場、船舶、倉庫、商事會社を持つて居る。その生産品は他の組合員と同時にスタートしてもより早く標的を射ざるを得ない。又どうしても組合員の生産品より一層よい品物になるのである。

「日本食料品工業組合」は、時にその組合員の生産物を専門委員会に提出する。この専門委員会は、工場長から成つて居るばかりでなく、私人、ホテル所有者、料理人、陸海軍將校等をも包括して居る。かういふ人達の好意に依つて、絶體多數の支持を受けた各試験は、その會社記號に「推賞」といふ組合品質マークを附け加へる事が出来る。この魅力あるレッテルは、輸出のための否殊に國內販賣のための素晴しい廣告を意味し、大抵陸軍の莫大な註文と國家の保護を伴ふものである。

三井と三菱はその資本金、卓越した經驗、生産手段の集中化等に依つて、大抵の場合組合の品質マークを附けて居る。又歐米に於ては大トラストはどうしても宣傳に莫大な費用を費さなければならぬし、其の獨自の方法で、彼等の商品が他の小會社のものより良いといふ事を、一般大衆に確信させなければならぬが、日本では小會社は必然的に排除され、組合は三井と三菱の廣告をやつて居るのである。小企業にとつては品質の向上、労働過程の促進は忽ち宿命的になり、その資本缺乏は破滅の原因になる。一方トラストは組合の試験——結局總ての者から金を出させる試験——を利用する事以外には、何等なすべき事がないのである。

實際、この日本の組合が、大きな共同利益を持つて居る事は争はれない。それは三井や三菱をして、彼等の月桂樹の上に休らふ事を不可能にし、この強大なトラストを驅つて不斷の進歩に導き、加之公衆に劣等な商品がわたるのを防いだ。それは何よりもまして、三井と三菱を日本の發展の指導者とし、「經濟クラブ」を日本の國民經濟の眞の中樞たらしめる。一方この組合は日本の貿易を世界の最も恐るべき貿易にし、日本を計畫經濟の最も有能な闘士にしたのである。

第三章 日本 の 労働者

人口過剰、労働條件、労働組織

以上の事に依つて我々は、此處に日本の發展の腦髓と、その指導的人物及び機構を見るのである。そこで今や、日本の手である貧民に就いて述べんとするのであるが、彼等はその労働があらゆる世界市場に氾濫する日本商品を供給する人々であり、彼等の困窮はヨーロッパの労働者を同様な運命に導く事が出来るのである。

千九百三十五年、日本に於て此の「頭腦」は此の「手」の上に絶體的に支配權を握るに至つた。労働者に君臨する寡頭政治の専制、産業王の權力は嘗てない程不可侵に見えた。そしてこの「頭腦」の權力、財政權力の集中は、論理的に日本の歴史的背景や日本の環境及び日本の土地から生れたものであるが、この「貧窮者」の無力、日本の労働大衆の無力も、我々には非常によく判る様に思はれる。否、殆んど止むを得ないものに思はれる。日本の人口過剰は、食料供給者が——その食料がたとひ一匊の米からなる

にしても——自分の思ふまゝに要求を持ち出す事が出来る程、高度に達して居るのである。

日本内地は獨逸よりも五分の一小さい(日本三八二〇〇平方軒、獨逸四七二〇〇軒)。そして今日日本の人口は獨逸の六千四百萬人に對して六千九百萬である。併しこの數字は驚くべき現實を表現しては居ない。といふのは、日本の可耕地はこの三八二、〇〇〇平方軒のたつた十七パーセントに過ぎないからで、殘る所は沼や森林、湖、山、砂地等なのである。それ故に實際に於ては、日本の利用するに足る各一平方軒には、千人以上の人間が生活して居る事になる。これに反して、これと同じ面積の内に獨逸では二百人、フランスでは僅かに百八人、英國では二百二十六人、ベルギー(この國では寸土も殆んど耕作されない所はない)では三百九十四人の人間が住んで居るのに過ぎない。日本は地球上最も人口稠密な國なのである。日本の工業化を決心した人々の意志が、かくの如き結果を齎したのである。即ち日本の「貧窮者」は倍加したが、それはかの「頭腦」が彼等を必要としたからである。

植民計畫

日本の出産は十五世紀から十九世紀の半ばに至るまで、特に極度の鎖國時代たる徳川時代に於ては、絶えず制御を受けて居た。國家の資源をよく知つた將軍は、人口の數字を最高二千百萬までと確定した。彼等は若し飢餓暴動、又は大量の移住にはつき物の紛糾を妨げようとするれば、この數字を越える様な事

はあつてはならないといふ事を知つて居たのである。日本では三百年間も産兒制限が認容されたばかりでなく、法律に依つて、餘りに子供の多い家は重罰に處するといふ事が強制的に行はれた。本庄榮治郎は次の様な報告をして居る。

「當時日本國民は、田舎にせよ都會にせよ、子を殺す事と雜草を刈る事とに何の區別もつけなかつた。九州では五人の子供の中二人は殺されなければならなかつたし、土佐地方では、一男二女が一家族で養はるべき最大小兒數と見られて居た。日向國では生きる權利を持つて居たのは長男ばかりで、他の者は生れると直ちに殺されるか、生れる前に始末されるかしたのである。」

封建時代を通じて、日本のどんな都會にも専門家が居たばかりでなく、病院さへあつた。その仕事の種類や方法を書いた大きな看板は何等の疑ひも起さなかつた。又怪しげな効能請合の無数の毒藥が、到る所に賣り出されて居た。僧侶のもつたいぶつた祈禱や、神がかつた極り文句が妊娠を防ぐといはれた。そして實際子供が生れれば、「末男」とか或は單に「結尾」等と名付けられた。既に墮胎と云ふ意味の日本の言葉「ヒガエリ」「マビク」は個人的な意味ばかりでなく、「あらゆる者のための解放」「總體の利益のための行爲」といふ一般的な意味の方で、「解放する」「瘡をさせる」と同意義であるが、これ等の言葉から考へると、この産兒制限の原因に何等の疑問も抱く事が出来ないのである。

將軍が天災に依る人口喪失を、出産法令の變更や墮胎禁止などによつて、埋め合はせようと試みた事

は數回に及んだが、かゝる努力(例へば千六百四十五年及び千七百六十七年に於けるが如きは、國民の習慣と矛盾したものだ)から、無効に歸したのである。開港後ヨーロッパの教義が入つて來て初めて、この傳統的な考へ方が漸次改められて來た。日本の留學生が外國から歸つて來て、外國人に對抗するために、何よりも先づ人口増加を計らなければならぬ事、強國はみんな人口の多い事などを明らかにし、こゝに初めて千八百七十年産兒制限のための如何なる試みも嚴罰に處すると云ふ峻嚴な法令が發せられたのである。日本の人民は次第にこの新しい法規に慣れて行つた。明治政府の最初の十年間は、人口増加は僅かに五パーセントであつたが、つゞいて十パーセントになり、千九百二十年には十二パーセントの増加率を示して居る。

ところで日に進みつつある工業化は「貧窮者」を必要とした。日本は斷乎としてあらゆる方面に於てその教師を凌駕しようとしたが、この戦のためには兵を要した。三百年間の産兒制限の結果は拭ひ去らなければならなかつたのである。日本人はそれを根氣よく、徹底的に、冷静に熟考してやつた。日本は外國との接觸を避けようとしたが、ペルリや英露佛等の艦隊の砲撃は、この政策を放棄するの止むなきに至らしめた。そこで他の解決を求めなければならなかつたのである。日本は植民地になる事を欲しなれば、日本をその眠りから目醒しめた「夷敵」と同じ位強くなり、列強に伍する事が出来る程向上する様に努めなければならなかつた。鎖國時代の日本にとつて、産兒制限が是非必要であつた様に、

明治時代の日本は出産増加を必要としたのである。日本が自然の必然性に從つて、計畫的に行動する事の出來たのは、先進國の誰もなし得なかつた事であるが、この事實は數字が證明して居る。

日本最初の詳細な國勢調査は、千七百三十一年に行はれ、其の結果人口は二千七百五十四萬九千人と云ふ事が明らかになつた。それから五十年後に於てもなほ二千五百八萬六千人に過ぎず、千八百二十八年には二千七百二十萬一千人を、千八百四十六年には二千六百二十萬八千人の人口を算して居る。それ故に將軍がとつた方策は百十五年を通じて、人口の數字を略々同じ高さに維持して居たと云ふ事になる。

さてペルリの來朝があり、つゞいて産業革命と明治帝の有効な宣傳があつて、千八百七十二年になると人口は既に三千三百一十一萬人となり、千八百九十二年には四千八百八萬九千人、千九百十三年には五千三百三十六萬二千人、千九百三十年には六千四百四十五萬五人となつて居る。千七百三十一年から千八百四十六年に至る迄は殆んど平均した人口數であり、それにつゞく百年で約三百パーセントに増加したといふ事になる。何故ならば、其の筋の評価に依れば、千九百三十五年に於ける日本内地の人口を六千七百八十萬と見做し、千九百六十五年には一億八千九百萬になると豫言して居る位である。

それ故にかの「頭惱」は、實際驚くばかり迅速に「貧窮者」を作つた。天災や、又日本が千九百二十五年以來切り抜けなければならなかつた恐ろしい恐慌でさへ、出産數を左右する事は出来なかつた。かうし

て日本の人口は他のあらゆる國々とは反對に、年々増加して行つた。千九百十五年産業利得の最も多かつた時に、人口千人に對して三一・六人の出生があり、不況が深刻化して東京の街路で餓死する者が現はれ、失業者の数が二百七十八萬人にも昇つた千九百二十九年にも、千人につき三十三人の出生があつたのである。

それ故に之は全く「力の自由な運動」といふ命題を適切に反駁する事實であり、或は寧ろ百十五年間將軍の先見的政策に基づいて作られた人口の均衡に對する反證とも見られる。次にこれと同じ様に先見の明ある工業日本の創造者の政策が、更に恐るべき人口増加を齎した。

若し今日のファシスト達の教義を考へ、又自國內では寧ろさうな民族は自働的に侵略軍に参加せざるを得ないといふ彼等の命題や、或は人口過剰な空腹な國は飽滿した持てる國とは全く違つた方法で戦ふであらうといふ彼等の命題を考へれば、以上の様な處置は實に先見の明あるものといふべきである。

不十分なる移住

日本の産業王達が廉價な労働者即ち迅速な人口増加を望み、日本の將軍連が多くの兵を、即ち多くの子供を欲したと云ふ事は怪しむに足りない。ランカシヤに綿工場が出来てヨーロッパが工業化し、新市場

の保護と獲得のために大軍を必要とする様になつてからは、ヨーロッパでも到る所で、「子供の無い事」に反對する宣傳が行はれ、大家族は租税軽減の特典を得たり、賞を貰つたりしたのである。

この増加する人口の壓迫と、支配階級には或る點では望ましいこの不安とは、ヨーロッパの到る所で人口増加で困惑して居る者達をして、防衛手段をとらせるに到つた。即ち彼等をして労働運動や大衆移住するの舉に出でしめたのである。かくて千八百二十年より千九百二十一年に至る間に、三千四百萬人のヨーロッパ人がアメリカに渡り、千九百〇一年から千九百十年に至る間に、平均一年に八十八萬人のヨーロッパ人が彼等の故郷を去つた。ストライキや労働者の不隠行爲は、ヨーロッパでは既に十九世紀の初め以來、日常茶飯事になつてしまつて居る。

若しも日本が實際に世界といふ體系に關聯して居るならば、日本に於てもヨーロッパに起つた様に、同じ原因が同じ結果を示したといふ事は、まことに有り得べき事である。併し日本の開港は一方的な門戸開放であつた。白人はいはゞ戸を押し破り、無理やりに入門したのである。それなのに白人達は、そも／＼初めから黄色人種の移住者を拒んで居る。日本はその大衆にとつて、恰も舊幕時代の様に依然として蟻の這ひ出る隙間もない獄屋なのであつた。

日本に於ける人口増加の脅威は、普佛戦争當時既に相當感じられて居た。千八百六十九年、最初の移住者が日本を去り初めた。即ちハワイの農場へ行つた労働者百五十三名である。併し彼等は間もなく再

び歸つて來た。といふのは、彼等がそこに見出したものは敵意ばかりであつて、其處に順應する事が出來なかつたからである。政府は當時個々の動因では何にもならない事をさとして、一時移住旅券の下附を許可しなかつた事がある。千八百八十五年政府は率先してハワイ移住を計畫し、かくて千八百九十四年以來、この島には實に三萬人以上の日本人が生活する事になつた。合衆國はこれがため非常に不安を感じて、千八百九十八年ハワイを併合し、移民法令に依つて日本労働者の流入を防いだ。

そこで日本人は、ハワイの代りにこんどはカリフォルニアに移住を試みた。彼の地に於けるその数は迅速に増加し、遂に千九百〇七年、ルーズヴェルトは日本と條約を結ぶ事に成功し、この條約によつて日本労働者の移住は殆んど完全に阻害された。

かくて新しい移住の試みがフィリッピン、メキシコ、ブラジル、カナダ等に向つて行はれ、北アメリカへの新たな突進が續いたのである。併し何處へ行つてもこれに應へるものは同様な拘束であつた。千九百十年日本の全移民會社は、一つのコンツェルン即ち「海外興業會社」に結合され、日本人の移住は異常な合理化を遂げたのであるが、それは依然として大したものではなかつた。即ち集中化によつて達し得た總ての事が、新しく出來た致命的な防衛法によつて應へられただけであつた。といふのは千九百二十年合衆國に於ける日本人の土地所有が禁止され、千九百二十四年には黄色人種に屬する者に對して、絶體的な移住禁止が發令されたからである。千九百二十八年カナダはその港を閉鎖し、フィ

リッピンでは、其處に生活する十五萬の日本人を追放すべき手段さへ講せられた。千九百二十三年以來、日本の豫算案は、移民促進のために相當な金額を計上し、千九百二十九年には「拓務省」が創設され、更に又大規模な宣傳に努めたのにも拘らず、日本人の移住は人口過剰の問題を殆んど解決する事は出來なかつた。千九百三十年に於ける日本人の海外生活者は六十四萬人であつた。そして、これと年を同じくして、日本の人口増加は八十四萬人に達したのである。だから海外居住の日本人總數は六十年も血の出る様な努力を重ねた後でも、依然として一年間の過剰出産よりも四分の一少いといふわけになる。日本を取り圍んだ城壁は鐵壁の様に見え、日本の孤立は封建時代のそれと殆んど變らない様に思はれたのである。蓋し現在日本内地だけでも六千五百萬の人口があるが、これに對して扶養し得る人口は二千百萬である。

出産數をあらゆる法律上の手段や宣傳方法で無理やりに向上させ、堤防を切つた川の様に人口を氾濫増加させた當時、日本人は果してこれ等すべての事に考へ及んだであらうか？

日本人の移住を拒んだ諸國の人々は、嘗てこの島國を、壓力の益々加はつて行く蒸氣々鏝に比較した事があるだらうか。何といつても不可避な爆發の際は、背後に保壘を築いてかういふ氣鏝をどんなに用心して見守つて居る人にでも、高く投げられた氣鏝の金屬板は背中へあたる事があるといふ事に考へ及んだであらうか？

これに對する答がどうであつても、今日日本に於ては、飢餓が報償を求め、餘地の不足が工業的發展を止むなくして居る事は、動かすべからざる事實である。若し日本がその移民を世界に送る事が出来なければ、その代りに商品の世界に送らなければならないといふ事は飽く迄事實である。又日本の労働者が、彼等の國に縛りつけられた者で、全く生産手段の所有者に依存して居るといふ事も、嚴然たる事實である。

日本の全労働者の中で、組合組織を持つて居る者は、僅かに七パーセントに過ぎず、實際労働者の代議士が皆無であるのも決して偶然ではない。日本の労働者は、社會的な事によつてよりよい報酬を獲得する見込はない。又彼等はどんな豫備品も自由にする事が出来ない。假令彼等が革命に成功しても、それから後生命を保つべき何等の力も持ち合はして居ない。ロシアのプロレタリアートは、資本主義世界に對抗して生きて行く事が出来たが、それはロシアが自給自足の國であり、それ自身の土地から生ずる物で生活し得るからである。アメリカに革命が勃發したとしてもやはり自給し得るであらう。孤立して居るドイツでさへ恐らくそれは可能であらう。ところが日本は外國の市場と、同時に又外國の原料を必要とする。日本は世界市場と不可分に結びついて居るのだ。日本は島國であつて、丁度英國の様に貿易と世界的交通がなければ餓死せざるを得ないであらう。

そしてこの事實のために日本の發展の一つ／＼が、我々ヨーロッパ人にとつて非常に重大な意義を持つ

様になる。この事がかくも悲壯に、日本の運命を我々自身の運命に結びつけたのである。この事が、日本の労働者の状態を、ドイツ、イギリス、アメリカ等の總ての労働者、商人、工業家にとつて非常に重大ならしめたのである。日本人の移住は、實際上人口稀薄なオーストラリア、南洋、又恐らくはカリフォルニア、ハワイ、フィリピン、インドネシア等に限られて居る。併し日本の工業品輸出は我々總ての者に關係があるのである。

日本の外交官にして政治家、資本家代表たる渡邊は、千九百三十五年六月ジュネーブに於ける萬國労働會議の席上で、次の様な陳述をして居る。

「日本には典型的に日本の生活様式といふものがあるから、社會的ダンプング云々といふ非難は當らない。何故ならば、日本の労働者は、ヨーロッパの労働者の様な生活を欲しないからである。若し或る國が他の天體にあつて、地理的見地からみても經濟的見地から見ても孤立して居るならば、その國の人々が日本の低賃金を辯護するのは當然である」と。

ところで日本の労働者は、ヨーロッパやアメリカの機械を使用し、技術的見地から見ると、ドイツやフランスの工場と少しも違はない工場内で働いて居る。彼等は輸出貿易のために働いて居る。此の輸出貿易は、ヨーロッパの場合と全く同様な方法で、銀行コンツェルンに依つて資本の供給を受けて居るが、但しこれは、ヨーロッパで嘗て試みられた何物よりも、何百倍も有效な中央機關の管理下にあるのであ

る。日本の労働者の欲求とヨーロッパの労働者の欲求とが異なるものであるにしても、我々は日本の労働賃金とヨーロッパの労働者のそれとを比較して見なければならぬ。何故ならば、日本の商品は、今日あらゆる世界市場に見出されるからである。

我々ヨーロッパ人の眼に映じたこれ迄の日本は花咲く櫻の國、美しい將校のために命を捨てる愛すべき藝術の國、大規模な社寺の國、海の國、奇怪な靈妙な國に過ぎなかつた。今日我々ヨーロッパ人は、この極端な考へから他の極端な考へに陥らない様に注意しなければならぬ。全日本を餘りにも機械化された工場であると見做したり、かの短軀黄色の工業家(三才)をフォード以上の者と考へたりしない様に氣をつけなければならぬ。我々は誣告する事なく、又日本の肩を持つ事なく、明らかに觀察する様にしなければならぬ。我々は對照をとつて見なければならぬが、其れ以上の事はしてはならない。どんなに日本の抗議を受けても、正にこの對照をとる事はやらなければならぬ。

日本の賃金

千九百三十二年に於ける日本の工業労働者の平均日給は一圓八十錢で、この中の一部分は商品券(購買券)で支拂はれた。税金と保険金を差引けば、日本の労働者の得る十時間の刷しい労働の代償は、平均八十五ブフェンニヒである。

千九百三十二年より同三十五年に至る間、この日本の労働者の平均賃金は、圓價下落に原因する物價騰貴にも拘らず、更に五・八パーセント低下して居る。生産は二十七パーセント減じ、仕事数は三十八パーセント少くなつて居る。一般に「手間賃仕事」が行はれ、殊に日本の最も重要な産業たる紡績工業に於てさうである。又加之、生産力増進、品質改良のために無数の方法が用ひられるといふ原因で、賃金はかりでなく労働状態一般が悪くなつて行く。産業熱を煽るために、明治時代に起つた「國家のため」といふ叫び聲が、聲高く叫ばれて居る事は蓋し空前である。現在は日本のどの工場へ行つても、政府と資本家聯盟の御用辯士は、機會ある毎に盛な輸出こそ國家の理想を實現せしめ得るものであるといふ事を、絶えず労働者に吹き込んで居る。そしてこの能率増進の叫びが、聲高く叫ばれれば叫ばれる程、世界戦争以後始まつた政體改革の試みや後章で取扱はるべき社會立法等の事等は餘り騒がれなくなり、日本の工業施設が完全になればなる程、又諸機械が近代的になればなる程、失業は益々急速に増大して来る。自働的になつた日本の機械が、容易に利用されればされる程、益々婦人の労働が用ひられる様になる。日本の木綿紡績業や絹織物工業には、殆んど全く少女ばかりが働いて居るが彼等の殆んど絶體多數の者は、その親が結んだ契約に基づいて其處で働いて居る。少くも三年、時には六年位までの年期契約で、これに依つて、親達はその豫定賃金の一部分を、四百圓とか八百圓とか前借するのである。この方法の名稱はともかく、かう云ふ金はかういふ方法によつて、實際子供を賣物にするのを教へるようなものである。

これ等の日本の労働婦人の生活はどうであらう。

私は大阪郊外津守の敷平方軒にわたる「大日本紡績會社」の建物を訪れた事がある。この會社は全國に百三十の工場を持ち、その労働者は二十一萬人に及んで居る。空中に曝された大廣間の高屋には各々七百の機械があり、三十二人の婦人労働者が働いて居る。その機械は英國から輸入されたものでもなく、オルグムの有名なプラット兄弟商會のものでもない。日本の三菱の工場で、日本人豊田の特許に従つて組立てられるものである。この豊田と云ふ人は又自動織機を作つて居るが、その性能はアメリカやヨーロッパの機械のそれを遙に凌駕するものである。

二列に分け並べられた八百の糸巻を監視するのに、十四歳の少女が一人居れば充分である。余の通譯は彼等の一人と話さうとしたが、駄目だった。何故ならば、目まぐるしい速度で廻轉して居るこの無數の糸巻から、一秒たりとも眼が離されなかつたからである。併し午後四時になると、休憩のための交代があつて、此の少女労働者は、ブン／＼音を立て、居る蒸し暑い廣間から出て行つた。彼女は其處に九時間働いて居たのだ。かうして漸く彼女と話す機会を得たが、其の話すところに依れば、彼女が此の工場へ來た時彼女の父親は六百圓の前借をし、其の金は右から左へ納税に使はれてしまつたといふ。彼女自身は日給六十錢を貰つて居る。彼女の姉は七百圓の前借で吉原の遊廓に「貸し與へられ」、その上借金をして居る。併し彼女は勿論彼女の同僚も亦、工場で寝なければならぬのである。

(70)

この寢室と云ふのは、紡績工場の中庭にあつて、外部の世界から嚴重に絶縁されて居る。そしてこの建物は日本では殆んど何處でも同様な外觀をして居る。地震が多いから二階建の木造長屋で、これが大工場ではいくつかの部屋に區分され、その一つ／＼は三百人の女工を入れる。大阪其の他の大都市の規定に依ると、女工一人につき一疊半印ち約一・四〇米乃至三・五〇米の場所を與ふべしといふ事になつて居る。この「部屋」の設備——床の上の疊、小さい押入等——だが、押入の中には日本の習慣で就寢の際敷かれ晝間はしまはれる蒲團、それから仕事着、といふよりは寧ろ労働制服等がしまつてある。といふのは日本の工場では何處でも、使用人は軍隊式になつて居るからで、職工長には特別な制服、帽子、肩章があるし、特殊な熟練や技能によつて優待を受けて居る者には又特別な徽章がある。

日本の工場の大小殆んど總ての寢室は非常に清潔である。何故ならば、女工達はその工場労働の他に、日に二回床を拭き掃除する義務を持たされて居るからである。若し東京の怖ろしい貧民窟、例へば本所區、深川區等の一區割を見たならば、日本の工業家が舌をすつぱくして言ふところの「工場の寢室に於ける職工(男工も女工も)の生活は、自由民の生活より遙にいく」と言ふ言葉を成る程と思ふのである。併し我々は、我々に次の様な考へ方を述べる人の言葉も亦信用する。

「工場の労働者の住居は、人道主義の見地から造られて居るばかりでなく、特に労働者を絶えず監督するため、外界及びその新思想との交渉を不可能にするため、新らしい政治的社會的思想に對して、

(71)

打ち勝ち難い障害を設けるため——以上のような理由のためにも、造られて居るのである。」

多年日本の労働状態を研究したドロシーオーチャード(Dorothy Orchard)は次の様に書いて居る。

「寢室の制度は、資本家にとつて莫大な利益であつて、資本家はその使用人を絶體に掌中に握つて居て仕事の際の遅滞、過失を防ぐ事が出来る。これはヨーロッパの企業家の能くしないところで、日本の資本家は、その機械を晝夜働かせる事に依つて、その資本を倍加する事が出来る。使用人の休み時間も彼等の労働と同様厳密に監督される。日本に於ける最近のストライキには、どれもこれも自由を與へよ、食事を改良せよ、といふ聲が益々盛になつて居る。そのくせ食事は工場外の食物よりも良い事がよくあるのであるが、云々。」

日本の産業王達が、その労働者軍を作ると、彼等は同時に、あらゆる外國の影響を防ぐ様に努めた。それは丁度十七世紀の將軍が、その農民や奴隸を白人の宣教師から「守護」した時のやり方と同じである。

失 業

日本のストライキ統計は次の様な事を證明して居る。即ち、今日日本の全女工の九十一パーセントが生活して居る寢室の組織と、又賃金を一ヶ月にたゞ一回支拂つて労働者を前借や負債で縛つておくと

いふ日本の全資本家の五十五パーセントの慣習(この数は千九百二十八年に於ける政府の統計により證明されたは、全然労働者の肯んじるところではないといふのであるが、かうした労働者の歎聲が今日でも如何に省みられないかを知るためには、日本に一日だけ生活してみれば充分である。日本の労働者達は、彼等の環境を變へるには物質的可能性に缺けて居る。日本にはバンより胃の方が多い。労働より貧窮の方が多のだ。飢餓のおぼけは三井三菱の天下にも危険だが、日本のレーニンや日本のムツソリーニにとつても同様危険な事は危険であらう。

日本で新聞を買つて見ると、二人の日本人が共同で此の仕事をやつて居る。一人が大聲で呼び賣りをやり、一人が新聞を疊むのだ。

タクシーに乗つて見る。二人相乗だ。一人がハンドルの後に坐り、一人が助手になつてドアを明け客から賃金を貰ふ。

日本の汽車で旅行する。四人の車掌が切符を一枚々々検査する。この四人は共同で給料を貰ふ。その給料たるやヨーロッパの二人の車掌よりも遙に少い。今日日本の職場は、廣範圍に行き亘つて、最大限度の人間に分割されて居るが、それでも益々仕事は無くなつて行く。日本の都市は村になり、村は再び町になる。一軒の家さへ建てられない様な一片の土地、一平方米の土地でさへ、野菜畑として利用されない所はない。ところでこの家を建てるのにも外國を必要とする。年々輸入される煉瓦、材木、釘其の

他の建築材料は一億圓以上である。年々歳々、日本の食料不足を補ふために、殆んど三億圓と云ふ金が外國へ支拂はねばならない。三井三菱共の他の日本の大富豪の全財産を没收したとしてさへ、非資本主義的な日本でもこれだけの金額を支出しなければならないだらう。原料の不足は高々二三ヶ月どうにか繰合はせがつく位なものであらう。日本は人間が多過ぎて餘地が餘りに少く、食料が充分でないのだ。而もこれ等のすべての事は、機械化が初つて以來更に悪化して居る。今や労働まで充分にあるといへなくなつて來た。總ての者にとつて、極く僅少な賃金さへ無いのである。

世界戦争の間に獲得された莫大な利得に依つて、工場の完全な新式設備が出來、戦時景氣の終結と共に、全日本の労働者の二十パーセント以上が失業したが、これと同時に日本の失業問題が初まる。機械とトラスト化とが仕事を續行したが、間もなく千九百二十三年九月一日の大震災が起つた。何千といふ工場を烏有に歸し、横濱を殆んど完全に、東京を大部分壊滅せしめ、十四萬五千人の生命を奪つたあの震災だ。死を逃れた労働者には住む家も無く、職も無かつた。公報によれば、東京の壊滅後、労働者千人に付き三十六人の失業者があつたといふ。而もこの九萬七千人の失業者の多くの者は、一部復興した工場にさへ使つてもらへなかつた。何故ならば、充分な豫備資金を持ち、又充分な信用取引をする事に依つて、その事業を迅速に復興し、設備を備へる事が出來たのはトラスト、大會社、即ち三井、三菱、住友の様なものばかりだつたからである。そして勿論、この設備は最新の機械から成つて居た。工場は

非常に近代化したから、何千何百と云ふ労働者は、他日再び雇はれる見込を失はざるを得なかつたのである。

日本ではあらゆる危険、否恐るべき天災でさへ幾らかの人々の地位を強固にし、労働者それ自身の既に絶望的な状態を弱めるに役立つた。人口過剰と、技術的進歩に原因する失業——國家はこの益々悪化する状態に對して全く無力の觀があつた。經濟的に最悪の年の一つに數へられる千九百三十一年には、失業救済の労働のために僅か百五十萬圓が可決されたが、千九百三十五年の豫算案には、抑々失業救済のための何物も見出されない。金のかゝらない職業紹介が、依然として失業者のために國家が考慮した唯一の手段なのである。この職業紹介といふ方法に申込まれた紹介數は、千九百三十年に正規労働者百十六萬八千百十四人、臨時雇六百十七萬四千九百七十人といふ數であつた。前者の方でうまく職を得た者は二十八パーセントあるかなしであり、前者に比して日本では數の多い臨時雇の方は、八十パーセント片付いただけであつた。それ故に、千九百二十九年に於ける日本の失業者は二百七十九萬以上に上り、翌年には百五十萬人居たわけになる。而して公報によれば、千九百三十二年の八大都市に於ける失業者は、五十三萬六千三百七十七人で、千九百三十四年には四十七萬五千人であるから、千九百三十五年には、全國では總計少くとも二百萬人の労働者が、職にあふれて居たと思はなければならな

我々は日本の到る所に於て、職業紹介所の前に、朝の六時から前かゞみな姿勢で、破れた薄い青色の上衣のポケットに深く手をつつこみ、黙々として待つて居る人々の長い列を見る事が出来る。彼等の態度の品位や、彼等のみすばらしい衣服のさつぱりして居る事は我々を驚かす。この様にして待つて居る者にはインテリも多く居て、一日中腕を以て勞働し、夜は頭腦を働かせる學生も數多いのである。これ等の人々は、さすが儘にされる辛抱強い家畜の群を思はせるものがある。誰一人煙草を吸ふ者がない。七時に戸が開くと、彼等は整然と列を作つて、窓口に到り、彼等の身分證明書を提示し、これに對して何等かの職業を周旋して貰ふ。道路工事、道路清掃其の他である。彼等は一日一圓三十五錢乃至一圓六十錢貰ふが、隔日に仕事にありつく権利があるばかりである。而も誰も彼もこの紹介所へ入る事を許されて居るわけではない。即ち勞働手帳を持つて居る者だけが考慮されるのであつて、東京でこの證明書を持つて居る勞働者はやつと一萬八千人位のものである。そのくせ東京では、既に千九百三十年に其の筋の數字によれば六萬一千二十四人の失業者があつたのである。

而らばこの日本のあふれる者は、どうして生活して居るのだらうか。

古代の道徳律、古代日本の慣習によれば、困つて居る親戚の世話をする事は家族の義務となつて居る。工場や家屋の近代化及び全生活のアメリカ化と共に、古い道徳觀も亦除々に失はれて行つたが、それにも拘らず極端な相互扶助は、なほ殆んど日本の到る所に於て、あたり前の事になつて居る。唯、何物も

持つて居なければ勿論分けてやる事は出来ない。日本の農夫の困窮は失業者のそれに劣らず筆紙に盡せぬものがある。かくて偶然の解決が残つて居るばかりである。東京では貧民の大部分は、深川區、本所區へ逃げこんで居る。其處には恐るべき巢窟があるが、それは首都に於ける最も貧しい住居である。併し文字通りのほんたうのみじめさは、個々の家の中には發見されず、所謂「長屋」へ行つて見なければわからない。これは路次に造られた掘立小屋で、數本の竹といくらかの屑材料がこの一種の避難所を作つて居る。それが無数の小室に分れて居て、その各室は幅一米、長さ二米ばかりであり、かう云ふ小さな部屋に、何所でも全家族が雨露を凌いで居るのである。かう云ふ所で失業者はその親戚の者などと生活して居る。この親戚の者といふ男は、例の「按摩」の一人かも知れない。「按摩」といふのは盲目でマッサージをやる者だが、古い日本の遺物であり、夜もすがら竹の笛を鳴らして歩いて居るのである。又此處で失業者は、よく例の「夜流し」と一緒に住んで居る事がある。「夜流し」といふのは、塵埃の中から何か役に立つ物を漁つて歩くあの怪物の一人である。失業者は又、東京に無数に居る「流しの瀬戸物つくり」と一緒に居る者もある。失業者達は毎日々々此處から何か生活の糧を求めて出掛けて行く。若し東京其の他の日本の多くの都市の廣さ、例へば東京はベルリンの二倍半の廣さであると云ふ事(二四四平方軒對八八三平方軒)を知り、多くの工場は貧民窟から數時間の距離にあると云ふ事などを知れば、彼等の出かせぎが何を意味するか理解出来るのである。彼等は市内電車に乗るための金を持つては居ない。飯の残りさへ持つて

居ると限らない。米はその朝二枚の切符を買ふために、金貨に低當にしてしまつたかも知れないのである。而も米の残りを持つて居たにしても、夜になれば借の二倍にして返さなければならぬ。つまり日に十割の利子を拂はなければならぬのである。

想像も及ばない悲惨な状態！失職者のこの大群が、工場の寢室に住み、日に十時間から十二時間働く事を許されたら、幸福だとするの不思議ではないであらう。世界何處も同じであるが日本の労働者の生活も、この無数の失職者の惨状に影響される。この過剰な人間の群にかたく加へて、毎年八十萬の日本人が増えて来るのだ。而も年々、新発見と新機械とは、無数の手を不用なものとする。

飢餓こそ、日本の全労働問題、日本の内外政策を左右する論據である。大衆の無智と無關心とに結合された飢餓！己が頭腦、己が指導者といふものを持たず、單に盲目的な機械にすぎない何百萬の人間の胃の腑の中に暴れ狂つて居る飢餓！

社會立法、ストライキ、組合

日本が低賃金を用ひて居るのは、世界市場に於て其の目的を貫徹せんとし、日貨排斥のための關稅や購買力の少いのを物ともせず、顧客にその工業生産品を賣るためであるのは疑ひもない事である。一方食料及び原料の不足を補ふために、日本の生産品の大部分が一九三五年に於ても、日本産の約八〇パーセント、ヨ

ロッパよりの輸入の約三十八乃至四十七パーセントが國內で費される事も亦明らかである。それ故に國內市場は大きな役割を演じて居る。若し高賃金にすれば、國內購買力も増すであらうから、國家が銀行保證や輸出奨励によつて、輸出の増大を計るのみならず、有力な労働立法によつて、日本の生活基準を、ひいては國內販路の擴張をもやつてやれば、日本の一般の利益にとつていゝだらうと思はれる。

併しこの事に對しては政府とトラストとの緊密な結合が反對である。といふよりは寧ろ日本の發展政策、人口過剰と困窮を最上の戦争宣傳と見做す軍部の冷静な熟慮が反對し、經濟的攻勢はあらゆる空襲や進攻よりも破壊的であるといふ事を知つて居る對外政治家の、冷静な熟慮が反對する。又、最も賃金の少い、最もひどく搾取される日本の労働力は婦人であるといふ事實がこれを肯じない。何百年といふ永い間の支那の影響は、日本人の考へ方の中に婦人蔑視といふ事を深く植へつけてしまつて居るから、新思想を採り入れた新しい時代になつてさへ、なほ其の點には殆んど變化を見る事が出来ない。婦人のために法律を作る？婦人のために工業の競争能力を弱める？日本人にとつて婦人はそんな値打はないのである。日本人は文化人であるが、それでもなほ彼等は婦人を下女の様考へて居る。夫婦揃つて外出する事は非常に稀である。身分の高い人々の夫人でさへ、夫と共に公共の場所に出る權利を殆んど持つて居ない。街路に見る夫婦者は、妻は夫より二三歩後から歩いて居る。婦人の解放は、殆んど洋服を着る事、海水着を着る事、流行品をつける事等に限られて居る。どんな近代的女でも、夫の送

り迎へには敷居に膝をついてお辭儀をするのである。日露戦争の時、或ひは千九百三十一年の滿洲事變の時でさへ、日本の兵隊はその軍服に、女の着物の一片を縫ひつけて居た。それは敵弾の「清浄な」金属は女の身體に觸れた「不浄」な布切に當らない様に避けて通ると云ふ確固たる信念によるのである。日本の大工業に於ける全労働者の六十五パーセントは婦人と少女であるが、支拂賃金の三十一パーセントがこれ等の女子労働力に向けられるに過ぎず、男子労働者は遙にいい状態である。政治に與るものは男子だけで、女子は選舉權を持つて居ないから、その要求は少しも聽かれない。

日本の労働者の状態が、日本の婦人のそれよりは良いとしても、前述の賃金の章が證明して居る様に、彼等は格別結構な身の上ではない。世界戦争當時、専門労働者がひつぱりだこで使はれ、組合は一種の權力を得たが、その時は遂に二三の労働法が用意され、千九百二十三年から同二十九年に至る間に發令された。千九百三十年に内閣總理大臣濱口が提出した修正案は、議會で全然初めから討議されず否決されてしまつた。それ故に今日日本の最も重要な労働保護法は、次の様なものに過ぎない。

「十二歳以下の小兒は産業的作業に従事せしむべからず」

この法律が遵守されて居るかどうか、國家は勿論知つては居ない。何故ならば日本の「中央工場監督」では、千九百三十五年に十九人、「地方經營監督」では百三十七人の役人を使つて居たに過ぎない程だからである。加之、日本の労働法は、十人以上の使役人を有する經營のみに適用され、多くの子供は家内

工業に使はれて居るから、この法令は名のみになつてしまつて居る。

更に千九百二十九年以來、婦人及び十六歳以下の少年の夜業が禁じられて居る。この年齢の女工は一ヶ月に二日の休業を要求出來、その労働時間は一日十二時間以上になる事は許されない。これ等の規定は全部男工には適用されない。

日本の労働者の保險義務に就いての法律は、何といつても唯一の實際に重要な法律である。この法律は千九百二十九年に發令されたものであるが、保險金の十パーセントは國家が支拂ひ、労働者と資本家は各々四十五パーセント宛支拂ふといふ事が豫め考査されて居る。

日本には組合はあるが、漸く存在を許されて居るのに過ぎなくて、法律上承認されては居ないし、報償や賃金の談判交渉をする事は許されて居ない。千九百三十五年には四百五十萬の工業労働者の中、三十六萬五千人の組合員を有する七百十二の組合があつた。既にその數が多い事により、又その力、想像の及ばない位分裂して居る事によつて、この組合は効果のないものである。のみならず日本の全組合の四分の三は、古くから保守的な組合に屬して居る。即ち五大組合がそれで、日本では幾分意義のある唯一の組合であるが、非常に帝國主義的色調を帯びて居るものである。例へば「労働總同盟」は、對ロシア、對アメリカ戦争を公然と要求して居る。これ等の組合には一人として眞面目に高賃金の代辯をする者はないのである。といふのは高賃金は輸出に悪影響を及ぼしはしないだらうか、世界市場に於ける日

本の優位をおびやかしたくないか、といふのが組合の腹だからである。

千九百三十四年三月、大阪に於ける職工組合會議の席上で、日本の労働者聯合の書記長は次の様に説明した。

「日本の労働者の賃金は、イギリス、フランス、ドイツのそれより低い。併し日用品の物價を比較すれば日本の労働階級の生活状態は、決して低賃金のために悪くはない、といふ結論に達するのである。

日本の労働者は、一般に考へられて居るよりも、遙によくその生活を享樂して居る。云々。」

それ故に、若しもヨーロッパの労働者が日本の同志の生活基準を同じレベルに引き上げようとする事に依つて、自分等の生活基準、賃金、社會的權利を保護しようと欲するならば、日本の政黨、組合、労働者同盟等はこれと提携して進む事は困難であらう。

「日本の労働者の状態は耐え難いものではない。日本のプロレタリアートは簡單に立上り、革命が日本商品を世界市場から遠ざけるであらう」などと、ヨーロッパの樂觀論者は繰返し論及して居る。

併しこの意見は事實によつて裏付けられはしない。日本に革命が勃發する様な事があつても、それは労働大衆からは起らず、軍隊と農民から起るであらう。そして高々日本の發展方法を變へる位なもので發展そのものは決して中止される事はないであらう。

第四章 農民の狀態

農業の行き詰りと日本の發展方法に及ぼす影響

千九百三十年の最近の統計によると、日本の全世帯の四十九パーセントは農業で生活して居る。資本家と労働者は、恰も正に日本の發展の最大推進力であるかの如き觀があるが、この發展に驚くべき衝擊力を與へて居るのは、實は農民及び彼等の慘状なのである。假令三井三菱が、或は政府と労働者が、經濟的優位で足れりとして居ても、三千萬の日本農民は日本を驅つて領土獲得に赴かせるのである。

工業化が始つて以來、又産兒制限が撤廢されて人口が急テンポで増加して以來といふものは、日本には人間と生産能力との間の激烈な競争が行はれた。日本の工場数は昔てどの國にも例を見なかつた様な速さで増加して行つたが、一方人口は更に迅速に増加したのである。日本の輸出額は幾上りに上り、それと共に、原料輸入と食料飢饉も増大した。開港以來日本の人口は三倍になつたが、耕作地は事實上依然として同じ廣さであつた。日本の土地で食料を生産するのは、依然としてその十七パーセントに過ぎず、全部でバイエルンより小さい耕地は、依然として獨逸よりも多くの國民を養はなければならないのである。

日本はヨーロッパの大部分が未だ原始林から成つて居た時代に、早くも充分に耕作されて居たのであるが、その労働方法は、こゝ千年位殆んど變化する事が出来なかつた。日本の收穫の六十パーセントは米である。その耕地は丘陵地に多くて、非常に狭小だから機械の利用などは問題にならない。だから日本の農民は新しい耕地を得られないばかりでなく、オーストラリア、アメリカ、アルゼンチン、ハンガリー等の農民より、ずっと金のかゝる働き方をして居る。これ等の國の農民は、誰でも無限に廣い耕地を持ち、時には何千と云ふ草刈人、打穀人、畜群等の働きをする機械や處女地を持つて居る事がある。

工業化が始つてから、日本の農民は必然的に、都會人のために野菜、草花、果物等の外は何も作らない園藝家になつてしまつた。農民の大群は過剰になり没落するか死ぬか又は移住せざるを得なかつた。併し彼等は移住する事は出来なかつたし、さうかといつて早急に死にもしなかつた。事實はそれと全く反對であつた。何故ならば、年々都市では三十萬人の出生があるが、これに對して田舎では五十萬人も生れるからである。土地が不足する、従つて土地を手に入れなければならない。シベリアやオーストラリアの事を考へざるを得なくなる。何故ならば、世界の如何なる製造工業も、五十年の間に四千萬の人口増加を養ふ様な状態にはならないからである。

假令日本の製造工業の様に、最新式の方法、最新式の機械、考へ得られる範圍の最も安い労働力を驅使する事が出来るにしても、日本の工業は自然の富の上に置かれて居るものではなく、國民は唯外國か

ら買入れた原料を轉化させて、外國に賣る製品が生み出す利得に依つてのみ養はれるといふ事實は、如何なる集中化によつても、又如何に驚歎すべき計畫によつても變へられないのである。日本の工業が何百萬と云ふ新生兒を、短時日の間にどうにか捌く事が出来るとしても、なほ昔から工業化されない大衆が残つて居る。工業に對してかくも安價な労働軍を供給して居る過剰人口は、同時に又工業の不倶戴天の敵でもある。この過剰人口と、日本の農民の想像も及ばない慘狀とが、軍事政策となり武力侵略ともなるのである。併し戦争と世界貿易とは兩立しない。

日本は工業化によつて經濟的伸張を強ひられ、三井による發展の途を辿るに到つた。三井は露骨な敵意を示さず、最低限度の力と最低限度の高價な武装——世界的貿易——に依つて前進する事が出来るのである。

第一は農民の窮乏、第二は農業の生産方法は工業的生産方法ほど近代化出来ないといふ事實、第三は餘りに農民が多く、又工場で餘地を見出し得ない人間が餘りに多いといふ悲劇的な事情——これ等の事によつて、日本は武力的發展と軍事上の伸長を止むなくせられ、市場の獲得ばかりでなく土地征略にもみちびかれて行つた。

この一見解き難い葛藤——都會と田舎、軍部と寡頭政治家、農民と商人との間の葛藤——日本の眞の悲劇は正にこの間に横つて居る。此處からこの島國をおびやかす恐ろしい危險が現はれ、日本が内部で

分裂する事によつて、初めてヨーロッパは恐るべき黄色人種との競争から救はれるのである。併し、農民大衆の力は、大抵の場合見くびられ、殆んど總ての工業國は、この力に一瞥をも與へなかつた。日本の農民は日本では眼中に置かれず、ヨーロッパでは評價を誤られた。ヨーロッパの人々はよく農民の示威運動などが出て居る週刊畫報の繪や統計によつて、日本の農業の窮状を知つて居る。併しその窮状をよくドイツの農業の窮状と比較し、日本の農民をルーマニアやポーランドの農民と同じ様に思つて話す。併し日本の窮状はこれ等の比ではない、それは今日日本ばかりでなく、間接には全世界にとつても非常に危険な程度にまで達して居る。

日本でもヨーロッパの場合と同様、一見しただけでは勿論それと氣がつかない。殊に大都會から遠く離れて見なければわからないし、又南部日本ばかりを見てはわからない。骸骨の様に瘠せた農民に出會ふのは殆んど北部だけである。そしてそんな所でも外國人は笑顔を示されるばかりである。日本の田畑には、ドイツの平均の住宅よりも小さいのがよくある。又、田へ水を引き入れるために舊式の踏輪を踏み廻して居る男を到る所で見かける。さうかと思ふと、腰まで水につかつて働いて居る男もある。又何處へ行つても未だ古代支那のやり方で、人糞人尿が肥料に使はれて居るのでそれがブーン／＼鼻を突く。都會の街路で手押車に出會ふが、この車に積まれて居る木の桶の中に糞尿肥料が集められて田舎に供給される。空地の不足が目に着く。又一年に二回三回の收穫を無理に得ようとしなければならぬ無理の

(86)

努力が目立つて居る。

併し多くの者はこの收穫、かくも丹念に手入れをした小作耕地の利得は、その耕地を働いて手に入れる人々のものだといふ考へ方をして居る。何處へ行つても桑がある。だから生絲製造は豫算増加に貢獻する。併し日本では耕地も蠶もそれを守る者に屬して居ない。トラストやその銀行の所有でない物、又は未拂ひの抵當權に依つてトラストやその銀行に屬して居ないものは、益々取立困難な税金によつて國家の所有となつて居るのである。

封建國家より資本主義國家へ

千八百七十三年、日本の封建貴族がその土地所有の權利を斷念し、それ迄農民が強制的な重税に惱みながらも營んで來た耕地を皇帝に返上した時、皇帝はその土地を實際耕作した者へ贈つた。唯皇帝の財產たる耕作されない山や大森林共有牧場等は、國家の所有として残つたのである。かくて日本全土の五〇・一パーセントが突然農民の土地になつた。恰も八世紀初頭の時代、即ち奈良時代の黄金時代が復活したやうな概があつた。奈良時代には、日本全土は皇帝に屬して居たが、皇帝はこれを週期的に絶えず總ての農民に分ち與へて居たのである。

明治初期には、廣大な地所の所有もなく、農民はその耕作した土地を自分の物にして居たが彼等の喜

(87)

びも東の間であつた。新時代は彼等を大名から解放したが、同時にそれ迄の「米經濟」の代りに「金錢經濟」を齎した。日本の農民はそれ迄何世紀の間、その道具や、又は米以外の必需品を大名から與へられて、其の代りに收穫の半分を納めて居たが、今や道具はおろか收穫物以外に必要な物は何でも買はなければならなくなつた。買ふのである、交換するのではない。加之千八百七十六年以來、農民は米の代りに金で納税しなければならなくなつたから、農民はその收穫物を金に變へなくてはならなくなつた。而も農民は一文のものとでも無かつたから、未だ實らない中に作物を賣る始末だつたし、又どういふものにもせよ、取引の經驗といふものがなかつたから、都會の商人のいひ値通りにならざるを得なかつた。又信用制度といふものがなかつたから、農民は高利貸の手に落ちて行つた。既に二十年の後には、彼等は千八百七十二年に得たところの物を再び失つてしまつて居た。日本の五百萬の農民の半分は、千九百年には既に彼等の土地を賣らなければならなくなつた。彼等は小作人として生活した。残りの半分の農民も非常な借金をして居たから、前者と同様土地を持つて居るといふのは名ばかりであつた。今日日本の農民が、年々地主に支拂ふ小作料は三億七千五百萬金弗にのぼつて居る（ロシアのこの十倍の農民が、帝政時代に年々その地主に拂つた小作料は僅かに二億五十萬金弗で、而も之だけで既に世界最大の革命を惹起させるに足りたのである）。それ故に日本の農民は年々約十五億マクを其の土地のために支拂ふ事になる。而もこの小作料の支拂ひ後に、なほ残るものは納税のために消えて無くなる。何故ならば、日本の農民は商人や工業家の二倍の租税を

拂ふからである。日本の農民は日本人の中で一番重い負荷を背負つて居るのである。

日本が工業化された時、日本の指導的政治家は、日本の農民の大部分の者に、死刑の宣告が下されたのも同様である事を、よく／＼知つて居た。又彼等は非合理的な方法で日本の瘠地を耕すよりも、印度米やカナダの穀類を輸入して、これに對して工業生産品で支拂ふ方が安上りである事を認めた。國民全體を日本の農民によつて養ふ事は、不可能であるといふ事を認めたのも彼等だつた。然らば何がために農民を法律で保護する必要がある？ 眞綿で首を締める様な事をするより、いつそ手つとり早く殺してしまつた方がましではないか？（彼等の考へはかうなのであつた。ところで日本の指導者は決して個々の者の事を考へない。常に國民のみを考へる。一粒一粒を考へないで米全體を考へる。そこで國家が工業を保護する事になると、この保護に要する金を農民に負擔させたわけである。日本の農民は千九百二十七年の改正までは、企業家の三倍乃至七倍の納税を負擔し、今日では二倍である。それにも拘らず、狭小な耕地が生産するものは、裸の生活にも殆んど足りないのだ（五百萬の農民世帯の中、五十アール以下の土地を所有する者三、五パーセント、一ヘクタール以下は百五十萬世帯で、僅かに四千世帯が五十ヘクタール以上の土地を持つて居る）。これに反して、例へば日本の紡績業者は平均利得千九百十六年には五十二パーセント、千九百十九年には百十七パーセントと報告して居るし、船舶業者は千九百十六年に六十一パーセント、千九百十九年に百三パーセントの利得があり、千九百二十八年に於てさへ日本の保險會社は平均一割三分五厘の配當をして居

る。
日本の農民は機械といふ神の生贄になつた。今や彼等は大名や武士に仕へるかはりに、工業化に奉仕する奴隷となつた。その摩天樓、航空母艦、急行列車、ラヂオ、トーカー等を持つて居るにも拘らず、否正にこれ等の技術的驚異を持つに至つたからこそ、日本はその人口の半ばにも及ぶ者の状態を變へる事が出来なかつたのである。

瀧澤待世は十八世紀及び十九世紀の状態に就いて次の様に書いて居る。

「日本の農民は豊年でさへ充分な食物が無かつた。日本の農民はその耕作して得た米を、殆んど食べる事が無い。何故ならば税金として直ちに取去られた残りは、若しどうにかかうにか足りれば、馬鈴薯や又は安い穀類と交換しなければならぬからである。ところで不作の年の農民の惨状は言語に絶し、飢餓のために死ぬ者は數へ切れなかつた。

農民は地主に免税を乞ふが、聽かれたためしが無かつた。そこで千七百六十四年に、彼等は結束して倉庫を奪略した。日本の歴史的记录には、この様な農民暴動の例が五十も書かれて居る。」

彼は更につゞけて、十九世紀の最初の十年間には百四十萬の日本人が餓死した、と言つて居る。
百七十年後(千七百六十四年)の農民暴動より約百七十年後の意、余が千九百三十二年に日本の北部地方を訪れた時、前橋の近く淺間山の山腹に、樹皮のはげた大森林が見られたが、それは白骨の様に死んだ樹木であ

つた。そして支那の飢饉地方の様に、この「裸形」は恐るべき原因を持つて居た。人が樹の皮を食べたのだ。

封建時代に、嘗て或る大名がその農民に「汝等米が充分になれば、草や樹の皮を食ふがいい。」といつた事があるが、かうして日本の農民は再び樹皮を食ふ。米價がガタ落ちに下落して、千九百三十三年には千九百二十九年の値の四十六パーセントしか値しなくなつてからといふものは、農民が一日の食ひ分を貯へておく「オハチ」(圓い鉢)は、樹皮、挽き碎いた樹の根、草、又たゞの様な朝鮮米で満される事が多くなつた。本當の米は農民が作つて、政府がこれを買占めて、景氣のいゝ時に外國へ賣り出すのだが、其の米は農民が税金と小作料を拂つて、それでもなほ餘りあるといふ程にはとれないのである。だから樹の皮を食べる外に何があらう？ 實に日本の農民は飢饉に慣れて居る。併しそれにも限りがある。即ち日本の最上の生糸顧客たるアメリカの經濟危機が生糸の下落(千九百三十五年は千九百二十九年の八割二分安)を導き、これ迄日本の農民の大部分を、完全な飢餓から救つて居た養蠶でさへ一文にもならなくなつた時、遂にこの飢餓の限界は近づいたのである。

千九百十四年から千九百二十九年に到る間、日本の絹製品の輸出は四十五パーセント増大し、日本の全輸出の三十五パーセントにのぼつた。ニューヨークの女で純絹以外の靴下をはいて居る者はなくなり

日本の農民はホッと息をついて、つらい借金を拂つた。それから起つたのがアメリカの經濟巨大建築の崩壊である。大恐慌が訪れて、アメリカの女達でさへ金が無くて、その身體に純絹の贅を許す事が出来なくなつた。價格は暴落し、千九百二十五年には三百四十五マークした日本生糸一相は、千九百三十二年には八十マークでさへ賣れなくなつた。

日本はこれを感じて方針を變へた。世界の人々が、金がなくて純絹を身に着けられなかつたから、人絹で間に合はせなければならなかつた。そこで日本は人絹の製造を初めた。日本は他國がしない中に、己れの純絹製造に止めを刺してしまつたが、それは少くとも一般景氣に同化するためであるし、何とかして窮境を打破するためであつた。かくて全力を擧げて人絹工場を創設し、國家の補助の下に生産力は擴充された。千九百十八年に於ける日本の人絹生産高は十萬ポンドであつたが、千九百三十二年には六千四百萬ポンド、千九百三十三年には八千九百萬ポンドになつた。かうして日本は千九百二十七年世界の人絹製造に於て新しい地盤を得たが、千九百三十二年には既に第四位に、千九百三十三年には第二位に位し、千九百三十五年の初めには合衆國を凌駕し、今日では第一位を占めるに至つた。例へば最近八年間に於ける人絹生産の増額はフランスでは三倍半であるが日本では四十六倍になつて居る。人絹が天然産を殆んど完全に驅逐し、大量生産が面倒な長たらしい自然絹製造にとつて代つたのである。日本が自然絹製造を犠牲にして人絹工場設立に邁進したのは、如何なる國も及ばない的確な考へがあつた

(92)

からのことで、又その冷靜な熟慮、恐ろしく實際的な行動は何人も及ばないところである。今日大阪及び東京に於ける三井三菱の大規模な施設は大量の人絹を輸出して國內に金を流れ込ませて居る。千九百十八年は八百萬圓、千九百三十三年は既に七千八百萬圓。併し日本の人絹工場に働いて居る男女は、約二十萬人に過ぎず、彼等の賃金に依つて高々十二萬家族が生活して居るに過ぎない。これに對して養蠶に依つて生活する家族はどうかと云ふと、千九百三十年には百五十萬あつて、それが又五百萬人の農民を補助として是非必要だつたのである。

政府の保證に依つて、多くの人絹工場が設立された時、古い税制が續けられ、日本は既に千八百七十年に踏まれた道を、組織的に辿り續けて行つたに過ぎなかつた。ところで日本は餘りにも的確に行動する事が出来、數字や、大きな將來に就いて考へ過ぎる位よく考へをめぐらすが、人間の困窮といふ事に就いては餘りにも考へが足りない感がないでもない。だから三井が何百萬といふ新しい利得を記帳して居る間に日本の農民は益々没落して行き、現在ではその限界に達した。今や何百年この方飢饉に苦しんで來た日本の農民でさへ、安んじて居られなくなつた。千七百六十四年に暴動が起つた様に、農民の示威運動は益々頻繁になる。日本でも「沈黙の飢饉」といふ事はないのである。三千萬といふ数は少くない。そして日本の農民は、國家から救済を要求する事、救助を強要する事以外に何をしたらいいだらうか？日本の農民は古來貧窮であつて、何等の貯へもなかつたし、掛け買も出来なかつた。この國の隅から

(93)

隅まで、農家は皆同じ様に壁はとび藁屋根は雨洩りして居る。ぶち壊れた少しばかりの木舞の外は中には何も無い。壁には藁と廣い圓錐形の菅笠が懸つて居る。農民はこの菅笠を被つて、雨天の日には田畑で働くのである。家の隅には小さな祭壇がある。この様な家に金を貸す者は誰も無い。最早保険さへ掛けられないのである。或る大保険會社の社長が私にいつた事がある。

「契約なんか結ぶ事は出来ませんよ。火災保険なんてもう到底出来ないことです。困窮地では火事が矢鱈ですからね。放火が流行つて警察も我々同業者も手が出ません。自分達の昔からの家にですね、持ち物の中で一番神聖なもの家に放火するより他にどうしようもないのですから、氣の毒な人達です。彼等には保険料が手に入るか、監獄行きかだとチャンと胸算用があるんです。つまりどつちへころんでも食ひつばぐれがないつてわけです。」

我々は今日これを對岸の火災視しては居られない。日本の農民の言語に絶する窮状は、やゝもすれば遙に大きな火災を吹き起すかも知れないし、世界大火災にならないとも限らない。何故ならば、日本の陸軍兵士の四分の三は農民からなつて居るし、全海兵は哀れむべき漁民から成り、殆んど總ての將校は農家出だからである。そしてこれこそ日本の農業問題に世界的意義を與へるものである。農民と兵とのこの結合により、飢餓に頻する米作りと、武士精神の薰陶を受けた軍隊とこの血縁關係によつて、この初めて日本の發展のあらゆる危険が生れるのである。武士は貧しかつた。今日の日本將校も貧しい。

少尉から大尉まで一ヶ月百十圓乃至二百二十圓、即ち七十八マーク乃至百五十六マークの給料である。彼等は皆妻子を持つて居る。彼等が出た家庭は貧しかつたし、彼等が作る家庭も亦同じく貧しい。この若い將校達はその周囲を見廻して如何に工業化のお蔭で莫大な財産が出来るかといふ事を知り、機械化時代の害ばかりを見る。さうして心から考へる。彼等は東京の大トラストの大理事宮殿を眺め、その際彼等の両親や他の三千萬の飢餓に頻する農民の憐れむべき朽屋を考へて、憤懣の情を覺える。將校の規範となつて居る武士の道徳律「戦士の道」たる「武士道」は、社會正義のための戦を要求する。だから農村の軍人は國家主義者で皇帝の忠臣であるが、それと同時に、農民と同様反資本主義者になつて居る。それは一兵卒ばかりでなく、大將に至る迄さうである。先づ最も有名な例を引けば荒木、山縣、畑、小磯といつたところである。日本の軍人階級は、他の多くの國と違つて満ち足りた市民階級出ではなく、將校たる事は日本では決して貴族的な遊戯ではない。日本の大將達には、その青年時代を小つげな耕地で過した者が多い。この極く小さな耕地の収益によつて、漸く飢餓を免れて居たのである。彼等自身何だかわけの判らない工業化といふものゝために、都會人に對するより大きな重荷を彼等に背負はせた組織——彼等の悲惨な生活を少しも軽くしてくれなかつた組織——彼等はいふ組織の奴隷だつたのである。これ等の總ての農村出の軍人達は、唯一つの燃える様な希望を持つて居る。即ち新しい土地、新しい生活の可能性を獲得する事——これである。併しそれは、經濟的伸展などといふのろくささ、

餘り自立たない方法によるのではなく、武士氣質に依つて、即ち公然たる戦争で、手に武器を持つてやるものである。

第五章 陸 軍

革命思想の抱懷者としての日本軍人

千八百六十八年、十五歳の明治帝が、日本の古來の統治者としての全權を再び取戻した時、彼をその執事(將軍)から解放した大名や皇士を側近くおいた事は勿論で、かうして皇帝の顧問は日本の錚々たる軍人として残る事になつた。

長じて独自の考へを得る様になると、天皇は非軍人をも朝議に列せしめ、元老院は商人の言にさへ耳を傾けた。そして國家産業から個人企業が生れると、商人や企業家の勢力は非常に擴大して、軍人は我慢出来ない程になつた。軍部は初め富豪連に餘り信用を置いて居なかつたが、かうなるといち早く彼等を憎み初めた。そしてこれ等の富豪連が、その代議士に依つて執政上勢力を振ふに至つた時、非軍人の權力に對する將校達の公然たる反抗が初まつた。それは將軍と大銀行家の悲劇的な決闘であつて、日本の今日の運命はかゝつて其の成行如何にあるのである。

日本の軍部は朝鮮攻略の戦、臺灣攻略の戦、千八百九十四年の日清戦争、千九百四年の日露戦争等で古い傳統に忠實に従つて堂々と英雄らしく戦つて勝利を得たのであるが、その大勝利につゞく平和條約締結の齎すところは、極く僅かなものに過ぎなかつた。戦慄すべき修羅場を馳驅し、幾多の流血を眼のあたり見、戦争に伴ふ超人的な努力をしなければならなかつた將校は、外交上の困難を少しも理解しなかつた。そして萬國會議が日本の威信失墜と占領地域の放棄を以て終つた時、裏切られ見捨てられた様に感じたのであつた。かうして非軍人社會に對する憤激は益々大きくなつた。世界の何れの國に於ても本職の軍人は非軍人を好いて居ない。そして彼等が非軍人等の議會政治に對して、ポイコットをやる事は實際よくある事である。併し彼等は隠然たる反抗をしなければならず、公然と議會や大臣に反抗する事の出来るのは、暴動を敢てする時に限られて居る。

ところが日本ではこれと趣を異にして居る。日本の軍部は千八百九十九年、明治天皇が制定された憲法に依つて、ヨーロッパ諸國の軍部とは違ふ方法で、政府と結合して居る。日本の軍部は相交代する政府の「器具」ではなく、いはゞ親族會議の有力なメンバーである。彼等が隸屬するのは皇帝だけであつて、日本の憲法第十一條は、和戦を決定する権利を皇帝にのみ與へて居る。この點は諸外國の場合と反對である。而も議會の協議も必要とせず、各大臣の意に反する場合でも構はないのである。千八百九十七年の制定によれば、陸海軍大臣たり得る者は現役の將校に限られて居る。日本の參謀本部は、あらゆる軍事問題に

於て、例へば支那出兵の如く、面倒な國際的紛糾を惹起するに違ひない時でさへも、全く外務省とは無關係に独自の行動をとる事が出来る。軍部は政府に對して、何等の責任も持つて居ない。軍部が議會や大臣を必要とするのは、唯一つの事つまり豫算案のためなのである。明治帝の勅諭は今日でも五十年前と同じく日本の將校團の中に生きて居る。今日に於ても半世紀前と變らず、日本の軍人にとつて、唯一の權威は神即ち帝なのである。當時天皇は次の様に書かれて居る。

「夫兵馬の大權は朕が統ふる所なれば其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬべきものにあらす……朕は汝等軍人の大元帥なるをされば朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるべき……若軍人たるものにして禮儀を紊り上を敬はず下を惠ますして一致の和諧を失ひたらんには管に軍隊の蠱毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるへし……由なき勇を好みて猛威を振ひたらば果は世人も忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ……」
かういふ勅諭があるにも拘はらず、實際暴力行爲は無いとはいへない。軍司令官と産業指導者との相異、「武士道」と企業心との相異は餘りにも大き過ぎて居る。

今日の日本の將校達は國民を單純無我にし、皇室と國家への完全なる歸服に導かうとして大童になつて居る。陸軍は昔の武士氣質を原則として生きて居るのである。國家の名譽、軍人としての名譽のために、其の生命を犠牲に供しなければならぬならば、日本の將校はたゞの一秒でも躊躇する者は一人も

あるまい。千九百三十二年、私の東京に滞在中、霧のために誤つて宮城の上空を飛んだといふ理由で、自殺をした若い飛行家があつた。彼は天皇を見下したかも知れない（これは赦すべからざる罪だ）。それから間もなく四人の將校が切腹をやつたが、それは軍のために要求されたクレジットが満場一致で可決されなかつた結果であつた。彼等はかゝる恥辱に堪へる事が出来ないで、自刃したのである。これと時を同じくして、二つの劇場と五つ六つの映畫館に於て、「上海肉弾三勇士」の犠牲物語の映畫が上映された。この支那の都市（上海）包圍の苦戦の最中、三人の日本人が大きな爆弾を引きつづつて敵陣に侵入し、正確に突撃路を開くためばかりに、己が肉體も共に爆死せしめたのである。千九百三十四年三月一日、東京の青松寺附近で除幕式が行はれた大記念碑は、今日この三勇士の行爲を思ひ起させて居る。

軍は常に自己犠牲の覺悟を持つて居て、その行爲が目的を有するものか否かを顧慮する様な事は殆んどない。だから軍がこれと同じ事を、他の階級から即ち政治家から、特に資本家から要求するのは極めて自然の事である。日本の將校達は、戦争のあらゆる損害や苦しみをよく知つて居る。そして又、この戦争こそ、三井、三菱に莫大な富を齎したものである事も知つて居る。經濟的發展の方法は、領土的發展のそれと、必然的に全然異なるものでなければならぬ。彼等はこの様には考へて居ない。彼等は、國際市場に於ける經濟戦とは、同時に犠牲を要求する戦争であると必らず思はうとして居る。併し其の時犠牲に供せられる者は、農民に限られてはならない。其の時は資本家も亦、軍の高官達が前線に行く様に

自ら苦を共にしなければならぬ。——彼等はこの様に考へて居る。ロシアは例外としても、歐米諸國では何處の軍部も富や財産の番人であるが、日本では國家の社會化の推進力となる力強い集團であつて、彼等は三井、三菱の牛耳つて居る國民經濟を、私利私慾をたくまぬ人々の下に國粹的な國家經濟に變へようと努力して居る。日本の將校達は、奈良時代の様な國家社會主義を夢想して居る。この時代は、皇帝が絶體的な支配者として君臨して居た時代で、皇帝の下には智能忠誠共に太鼓判をおされた數人の軍指揮官及び大臣があつて、皇帝を輔佐して居たのである。又この時代には、貴族も商人も金錢も無く、勞働は義務であつて、國家は慈愛深い父親の様に、その大家族の一人一人の面倒を見たのである。若い將校、否殆んど全軍がこの様な幸福な時代の復活を夢みて居る。彼等の計畫の包括するところのものは土地の國有、工業及び銀行の國家經營、工場的全利得に勞働者が關與する事、國費による子弟の教育、社會保險と養老年金等である。千九百十九年これ等の思想は「日本の國家的再編成の計畫」(北一輝著)の中になつてしまつた。その精神は國家共產主義的であるが、領土的發展といふ事が問題になる場合にのみ軍國主義的となつて居る。この本の中に次の様な事が書かれて居る。

「國家がその國を守るために、戰爭をするのは正當である。その土地所有が過度に大き過ぎたり、又は非人道的な方法で支配されて居る國家があるならば、吾人はこれを攻撃する権利がある。例へば、オ

ーストリアはイギリスから、東シベリアはロシアから離脱せしめられるのが當然である。被壓迫國民を解放するために、國家が戰爭をするのは正當である。例へば、インドをイギリスの拘束から、支那を諸外國の壓迫の手から解放するのは當然である。」

軍は兵卒から大將に至る迄、この言葉と計畫を信じて居る。そして農民の窮狀が行き詰り漸進的機械化、震災、世界的不況が、生産手段を益々數人の富豪の手に、即ち三井や三菱の手に集中せしめるに至り、中小商工業者が殆んど農民に劣らず困窮する様になつてからは、この革命的計畫を實施しようといふ願ひは灼熱して、日本の軍部と非軍人階級の権力的對立は殆んど地下に埋れた内亂の口火ともなりさうであつた。この時以來、日本の大臣、否必然的に同じ歩調をとつて居る陸海軍大臣でさへ腹背に敵を迎へなければならなくなつて居る。即ち兎角やり過ぎる外交政策の責任を一層その身に引き受け、加之、この餘りにも革命的な將校等の盲目的狂信を防がなければならぬのである。日本の政府首脳部も、若い尉官達と同じ事を望んで居る。即ち、日本の海外勢力の増進、國家に於ける古代日本の傳統の復活がその望むところである。若手連中には陸軍省や統監部でさへ餘りにチレつたく、餘りに無力である様に思はれるのである。日本の將校達は、彼等の上官の政策の中に方法の相違を見ないで不信義を見る。殊に勞働者の新らしい犠牲を必要ならしめ、農民の状態を一層悪化させた例の經濟攻勢が初まつて以來、非軍人勢力と寡頭政治に對する軍の公然たる反逆が爆發する。そして政治的暗殺が續發する。

千九百三十一年十月、經濟俱樂部に於ける集會の際、長い逡巡と慎重な熟慮の後に、圓價切下と世界市場に大攻勢を始めるべき經濟的戰闘計畫とが決議された。莫大な取引利得の考へは、この決議に與つて力のあつた主要なものではないとはいへないかも知れない。併し圓價を先づ四十パーセント、次に五十パーセント、六十パーセント、最後には六十五パーセントと引き下げる事によつて、日本商品に優位の地位を得させようといふ必然性が、何といつても實際決定的な原因になつたのであつて、圓價の大幅切下は、將校達が何をいはうとも、祖國の幸福のために決議されたのである。

三井銀行の頭取であり、この集會の會長であつた團琢磨男爵は當時個人的な處置をとり、當時の大藏大臣で三井家と密接な關係のあつた井上藏相は國家的な處置を講じた。國家的な方策と個人的な方策との間に、何週間も過ぎた事は斷じて明白である。又三井、三菱が彼等の自由になる資本金の大部分を延金として合衆國に現送し、金輸出禁止の結果起るべき圓相場暴落によつて、四十パーセントの利を得て日本に逆輸入し、かくて荒木大將が主張する様に、七億圓以上の利益を獲得する——かう云ふ事にこの時差を利用したのも明々白々たる事實である。「祖國から盗み取つた七億圓！」かう將校達は説明した。これに對して銀行家は「祖國のために外國で手に入れた七億圓だ！」と答へた。併し彼等のいふ事を信する者はなかつた。今や壺は溢れた。團琢磨と井上藏相は殺害された。團は千九百三十二年二月に、井上は同年三月に暗殺されたのである。千九百三十二年の聖靈降臨祭の日曜日、將校の六隊は總理大臣犬養

毅郎に侵入し、この「呪はれたる平和主義者」を殺害してから、三井、三菱の銀行、電氣工場に爆彈を投じて、東京の市中をトラックで疾走した。これと時を同じくして、民間側の刺客は外務大臣幣原男爵を襲ひ、その亂暴な滅多射ちに依つて五十人の官吏と十二人の通行人を負傷させた。暗殺者の身分を確かめた結果、彼等は「血盟團」(嘗て滿洲國スバイ局長で、後僧侶となつた井上日昭の創立にかゝる、險然たる勢力を有する秘密結社)に屬して居たばかりでなく、同時に「大日本生産黨」(日本の發展のための黨)にも屬して居た事が明らかになつた。彼等は皆、軍と密接な關係のある家族の出で、殺害に用ひた兇器は將校達から借りられたものであつた。藏相を襲つた犯人は次の様に言つて居た。

「政治、否國家全體迄も、寡頭政治により、金力によつて買収されて居る。徹底的な掃蕩をやるには唯一つの手段があるばかりだ。それは指導的頭目達を片付けてしまふ事だ。この犯罪は我々自身にさへ嫌惡を催させるに充分だ。併し我々は敢てそれを犯さなければならぬ。祖國のために！」と。

犯人の殆んど全部が唯形式的に判決を下され、一部の者は執行猶豫を受け、國民的英雄になつた。而も彼等の行爲はほんの端緒に過ぎなかつたのである。井上事件の主任辯護人天野辰夫は、その被辯護人を洗ひ清めてしまふや否や、自ら暴動を組織する事に着手した。彼は或る百貨店主を訪れて十萬圓を要求した。彼はその暗殺計畫を説明し、自分がこれをやれば重要株の暴落が起るだらう、だからこの下落投機によつて、寄附金なんかとり返してお釣りが来る位だと言つた。そこで百貨店主は彼に六萬圓與へ

た。一味の者が此の金を手に入れると、全内閣を殺害するために、武器を持つて居る同志を探し、横須賀の海軍飛行場検査官山口三郎大尉に白羽の矢を立てた。この將校は彼等に約束して、爆撃機を盗み出し、東京の警視廳、總理大臣官邸を爆撃して、全大臣を木葉みちんにしてやらうといった。併しこの計畫は忽ち洩れてしまった。千九百三十五年九月、五十四人の謀叛人は大審院の被告席に着席した。そして千九百三十二年の流血事件後の場合と同じく總ての同情が彼等に移り、再び新聞と輿論は寡頭政治家達への一般的反感を反映したのである。今や資本家のお歴々は益々以てその上衣の下に防弾チョッキを着なければならなくなり、「經濟俱樂部」のメンバーの半數以上は、その妻子と別れなければならなくなった。何故ならば、彼等が餘りに嚴重に警護されて居れば、その妻子達が側杖を食ふかも知れないからである。

そこで日本の寡頭政治家達は若い將校達の狂信を静めるために、軍に贈物をした。二年半の中に、陸軍省が寄附金として個人から受け取つた金額は千八百萬圓以上に上つた。千九百三十四年三月、三井系の「日本生命保險會社」だけでも百萬圓投げ出して居る。かういふ個人の慈善好きのお蔭で、千九百三十四年の後半に、飛行機百六十五臺、砲四十一門、機關銃三百四十七基、鐵甲三萬一千が購入され、千九百三十五年、トラストは海軍將校四百九十人分の給料を寄附した。併しかういふ事は皆、將校達を宥めるどころか、却つて彼等を益々怒らしてしまつた。血を金で補はうといふのか……。

ブルジョアが一般人民に塗炭の苦しみをさせておいて、圓價切下げで博した巨利に對する激昂は、遂に荒木大將をして實權を握らせる事になつた。即ち苦勞人荒木は陸軍大臣になり、一時日本の眞の支配者となつたのである。荒木大將は赤貧の庶民階級から出て、古代の神即ち帝の政體及び國家的社會化復活の熱烈な闘士として、滿洲征略と滿洲國建設の立役者になつた。陸海軍の人々の話によると、彼は平氣で「虎」に乗つたといふ。彼は秩序を保つた。今日でも總ての在支日本軍指揮官、「關東軍の外交官」も土肥原中佐も彼の股肱である。ところで支那征略は、見通し出来る時日に要する費用以上のものを必要とする事が間もなく判り、軍は貧窮の日本から、益々多くの金を搾り取る事が出来た。併し一息入れなければならなかつた。そして荒木は退いた。千九百三十四年二月林が彼の代りになつた。林は新しい日露戦争が要求されると述べられて居る書物に序文を書き、又「現代人名鑑」の中に書かれて居る事はほんとうだ、實際自分の唯一の道樂は「刀の蒐集だ」といふ様な事を口にして居るが、彼は又陸軍省の役人、日本駐在の將軍連、トラストと近かしい關係の政治家たちを友達に持つて居る。そこで三井は又チャンスをつかんだと思つた。併し地下の争闘は以前にも増して深刻になつて行つた。若し將校達によく考へを練つて作り上げた戦争計畫を呈示せず、又トラストに公然と反抗しなければ、自分の權勢を失ひ、公然たる暴動が起るかも知れないといふ事を彼はいち早く見てとつた。そこで彼は「經濟總助

員計畫」を作らせ、千九百三十四年十一月及び千九百三十五年二月二十五日（奉天戦争の第三十週年記念のため）に陸軍省発行の二小冊子の中で、「日本の全軍需工業及び一般に總ての重要工業は、軍の監督下に置かるべし。日本の大財産は租税によつて事實上差押へらるべし。トラストは窮乏農村維持に強制さるべし」と述べて居る。

この小冊子の最初の結果として日本の公債が急激に暴落したが、これこそ三井の返答であつた。第二の結果——豫期されて居た結果——は感激の怒濤であつた。それは將校達の間ばかりでなく、一般に全日本國民の間に於ける感動の波であつた。二十萬部の初版のうち、全日本の學校、兵營、將校クラブ、豫備兵クラブ等に頒布され、全日本の官吏、政治家に讀まれたので、この二小冊子は大きなセンセーションを起した。この小冊子の第一巻に、次の様な意味の事が述べられて居る。

「國際間の紛議は、外交談判に依つて避けられると思つて居る者が、まだ日本には澤山居る。かういふ樂觀主義者は、眞の世界状態に就いて何も知つて居ない。我々は斷乎として彼等に對抗しなければならぬ。日本の優れた防禦力のみが、ロシアの滿洲事變に對する干渉を妨げる事が出来、我が強力艦隊があつたからこそ、スティムソンの威嚇的言辭は龍頭蛇尾に終り、アメリカは平和を維持したのであるといふ事を彼等に思ひ起させなければならぬ。

(106)

ところで受働的な防禦だけでは充分ではない。我々の力は他國の戦争慾を必らずしも制御出来るとは限らない。我々は戦争の避く可からざる事實を熟知しなければならない。近代戦は今や決して昔の様な單純なものではないのである。軍の方ばかりでは最早近代戦に勝つ事は出来ない。敵を倒すためにはその全生活力を破壊しなければならない。従つて吾々は、軍事上の戦争と共に、思想上、經濟上、政治上の戦争に對しても、用意するところがなければならない。

列國は既にこの點を認識してその用意を整へ、將來戦の勝敗は一に繋つて各國の國防のための組織能力にありといふべく、將來戦の勝敗は結局全然組織能力の問題であるとして居る。今や經濟戦は酣であるといふ事を非認する事は出来ない。我々の敵は、不法な關稅障壁を設け、不法な配分をしたのである。ところで今や精神的戦争も酣であつて、良品廉價の供給は世界大衆の福利のためである。日本は比較的低い生活標準を持つて居る。従つて生産といふ點に於ては、イギリスやオランダに比べると好條件に恵まれて居る。イギリスやオランダは、その寡頭政治家達に利得を確保してやらうとすれば、その植民地の民を曠着して、不當な高價を支拂はせなければならない。併しこれは疑ひもなく、道德のわかり切つた原則に反するものである。皇國の利害は世界需要者大衆のそれと等しい。それ故に疑ひもなく、實力に於ても道德に於ても、その勝利は日本に歸するであらう。若し將來我々の經濟上の敵が、その不誠實な競争を斷念しなければ、日本は軍事的手段に訴へるの止むなきに至るであらう。そ

(107)

れが假令何百年も昔からの竊盜を除き、平等權を復活させるといふ理由の外、何等の理由からでなくとも又止むを得ない。若しこれが近い將來に於て、現實にならざるを得ないとすれば、勿論完全に一致した協力、即ち經濟力、兵力、精神力の摩擦のない結合が作られなければならない。千九百十四年から千九百十八年に至る間、イギリスとフランスの宣傳が、ドイツのそれよりもよく統制されて居たといふ事實、世界戦争に於てドイツが帝國主義的侵略國と見做され、聯合國側が容易に同盟國を發見したといふ事實、畢竟ドイツの敗因はかうした事實にあつたのである。この血の經驗を我々は役立たせ、その上、これに劣らず苦しい我々の經驗を附加しなければならぬ。我々にはかの滿洲事變の際、我が國の宣傳が拙劣であつたために我が國の目的は誤解され、遂に國際聯盟退を餘儀なくされた苦い經驗がある。それ故に國家は、全力を擧げてあらゆる宣傳機關、新聞、映畫、ラヂオ、展覽會、書物、講演等に依る思想戰を實際戰と同列に置き、これ等機關をよく統制し、平時より展開されて居る思想戰對策に遺憾なからしめる様になければならぬ。

千九百三十五、六年は日本にとつて危険な年である。我々は強力艦隊を要求した。如何に犠牲が大きからうと、たとひ國際的犠牲を拂つても、これは是非造られなければならないのである。併し同時に我々は全く強力な經濟と不屈な精神とを持たなければならない。三つのものが親密に融合して初めて日本は勝利を得るであらう」と。

この融合の具體的な個々のものが續いて現はれた。即ち多くの法律案がそれである。日本はもとより、世界何處へ行つても、内閣がその計畫をかくも公然と承認した事は未だ嘗てなかつた。日本の戰爭準備、日本の避け難い發展の道が、この林の小冊子の中で述べられて居る程明瞭に示された事は未だ嘗てなかつた。

實に荒木前陸相も千九百三十二年八月「偕行社記事」といふ雜誌の中に次の様に書いて居る。

「白色人種はアジアの國民から奴隸を作つた。日本は彼等の厚顏を厭認する事は出来ないし、又默認すべきではない。……………我が國は國家的理想を七洋を越えて運び行き、たとひ武力を要しても、それを五大陸に廣め様と決心した。我々は神々の子孫である。我々は世界を支配しなければならぬ。……………」

日本代表を國際聯盟から引き上げさせた松岡洋右、アメリカカ仕込みで、日本に於ける西洋通に數へられ、ヨーロッパに武力を以て挑戦しようとする近代的國家主義者の代辯者と見做されて居る松岡、實にこの松岡も亦、彼が「大和民族の使命」と稱するところのものを繰返し述べて居る。彼はいふ。

「日本の使命は、人類が惡魔になるのを防ぎ、人類の滅亡、自滅を守り、人類を光に浴せしめる點にある。神は日本に、世界を近代物質文明の隘路から救ひ出すべき使命を下し給ふた。……………」併しかういふ言葉はさまり文句であつた。一方陸軍省發行の小冊子は、具體的な國有提案、明確な輪

廓を持つた計畫を含んで居た。そこに要求されて居たものは實現されなければならない。それは現在實現されなければならないのであつて、遠い將來の事をいつて居るのではない。

それは實現されたかも知れなかつた。併し林は餘りに大トラストの網に捲き込まれて居たし、餘りに先見の明がありすぎた。又餘りに賢すぎて無理を押し通す事が出来なかつた。彼はその小冊子で宣傳を行はうとし、將校達の間に人望を得ようとしたのであつた。彼の計畫の實現といふ事については何も考へて居なかつた。彼がその實現を、假令ほんの一分間考へたとしても、日本は非常の場合のしきたりに従つて元老を念頭に置いたのである。元老——この「最古の政治家」の最後の者、日本を今日あらしめた指導者の最後の者、偉大な 明治天皇の顧問となほ今日まで餘生を保つて居る西園寺公爵の事を考へたのである。千九百三十五年の初め、バンニックが日本の經濟界の重鎮を襲はうとした時、當時八十六歳であつた公爵の別荘は、再び來客ひきまきらない有様になつた。公は天皇の最高顧問として、依然として日本の政治の總ての絲を操つて居る陰然たる黒幕的存在であつて、その年齢、その過去、宮廷に於けるその特殊な地位によつて侵すべからざる者なのである。公は黙々たる身振りと、有名なその簡潔な言葉で將校對資本家の鬭争に干渉し、再び軍事的發展意圖と經濟的發展意圖の葛藤のむづかしい仲裁役を買つた。かくて公は最初の最も重大な行爲として、すつかり隠居して有名な菊いぢりをやつて居た八十二歳の高橋子爵を引張り出し、子爵としては七回目の藏相、十三回目の閣員たらしめ、その經

験と自他共に許されて居る權威とに依つて、日本を恐るべき危険から救ひ出させようとするに至つたのである。

軍部と寡頭政治家の仲裁者としての

「最古參の政治家」

日本の陸軍省がセンセイショナルな小冊子を公開してから、千九百三十五年の初頭、隠居したと思はれた西園寺と高橋が再び登場して積極的に日本の政治に干渉した時、日本の發展の第一期は終つたかと思はれ、又根本的な變革が来るのではないかといふ感じもした。この二人の老人がかうした危険な瞬間に、殆んど何の拘束を受ける事なく制御出来たといふ事は、一つの象徴であるといふよりも、寧ろこの事は如何に内訌があつても、日本は首尾一貫その政策を捨て、居ないといふ事の明らかな證明になつたのである。何故ならば、この二老政客こそ、否この二人だけが近代日本の全歴史を目的あたり能動的に體驗した者だからである。彼等が生れた當時は、日本は純粹の封建國家であつた。彼等の青年時代にペルリが來て、日本の港が開かれたのである。この二人は明治帝が、海外に派遣した最初の人々の中に入つて居り、二人共その後指導的政治家として、日本の近代國家への變革に與つたのである。後、高橋は官位を辭じて衆議院議員になつた。二人は又幾度か總理大臣になり、陸海軍と協力したが、常に將校達

の熱情のブレーキとなつて、いつも全力を以て軍事的冒險を阻止して來た。千九百三十五年の初め天皇が彼等を再び最高の地位に置いたのは主として彼等のかうした地位によるのである。かくて彼等は再び不撓の力と思慮を以て、妥協の道を得ようとして努力した。西園寺公はその隱遁的な、神祕な、受動的な方法で、懷疑家にして賢者として。高橋はその鋭敏な、才氣のある、攻勢的な戦法で、公開の前景で、堂々たる而も魅力のある、いつもにこやかな樂天家として。この樂天家は、その肥つた腹が幸福の佛神に似て居るところから、「達磨」と渾名をつけられてゐた。

西園寺公は昔の公卿の出である。この公卿といふのは、王位篡奪者の將軍が、この國の主權を握つて居た間に、何百年もの永い間京都に流謫されて、勢力を失墜して居た皇室と運命を共にし、又この皇室自身と血縁關係のある一族である。彼は十九歳の大將として、王政復古と徳川幕府覆滅の主動力となつた一小軍隊を指揮したが、後この重要な國家政治的役割から、バリーの法律書生の役割に變つて其處で懸命な勉學を續け、洋行前と同様な熱情を享樂し、或は劇を書き、殆んど全くバリーの文學者になつたのであるが、この變化こそ彼の全後半生にとつて特色をなすものである。彼は常に日本の政治的勢力の一つを占め、最近の十年間は、やゝもすれば最大の勢力でさへあつた。又一方に於てはそのフランス書、支那及び日本の古典、美的理想、純人間的快樂等を決して等閑にする事がなかつた。公は日本公使として、最初ツインに、つゞいてブリュッセル、ベルリンに滞在した後、一時或る政黨の總裁にな

つたこともあり、大コンツェルンの一つである住友の創立者たる彼の兄弟を通して、經濟界と密接な關係も持つて居たが、遂に政治的經濟的利害戦を越えて、超黨派的な「最古參の政治家」に登り切つたのである。革新日本の傳統の守護者として、これといふ官職を持たないでも屢々總理大臣を任免し、その宮廷に於ける顧問的役割によつて、政治的進路を決定する事が出來た「元老」——彼は久しい間この「元老」の唯一の最後の者なのである。

國家、政府、陸海軍の大官で新たに任官した者は、今日その任に就く前に三つの訪問をしなければならぬ。即ち、第一に皇帝に拜謁する、第二にこの國の最も神聖な神社とされて居る皇太神宮と明治神宮へ參拜し、それから西園寺公に挨拶に行く事になつて居るのである。

平民階級出の高橋是清は、早くから北米に於て、近代世界を而もその最惡の方面から學んで來た。何故ならば、彼は詐欺師の手に落ちたからで、今日日本の噂によると、彼は暫くの間アメリカの「奴隸業」の犠牲になつて居たといふが、これは確からしい。彼は實際三年間、オークランドやカリフォルニアの農園で働いて居たが、その全「給料」たるや五十ドルであつた。西園寺公はその海外知識に於て常にフランス式であり、常にバリー文學の色彩を持つて居たが、高橋はアングロサクソンの強い影響を受け入れて、ロンドンで多くの女達を得た。日本の特許制度を作つてから、彼は銀行の頭取となり、遂に大藏大臣、日本銀行總裁等日本の經濟關係の最も重要な代表になつた。西園寺公は生きた日本の傳統

となり、高橋は實に經濟政策及び内政の最も貴重な専門家になつたのである。

この二人の「偉大なる老人」は、國難を喰ひ止め、一は砲を以て、他は商品で世界を征略しようとする二つの黨派の均衡をたて直した。西園寺公の背後には官僚社會がその王位を取り巻き、高橋の背後には大經濟があつた。彼等は軍部の反對者としての作用はしなかつたが、均勢として殊に經濟的範圍内では、均勢としての作用はしてゐた。この經濟的な面では陸海軍費の大膨脹と、國債の大増加に従つて、軍部の無拘束な新らしい要求が一大危機を醸し出すかも知れなかつたのである。そこで彼等はブレーキをかけやうとした。三井、三菱のやり方と同じである。併し彼等が革命的な將校達を抑へておく事が出来たのは、僅か半年と一寸に過ぎなかつた。豫告された革新の實現が着手されなかつた時、林の小冊子に對する感激は黙々たる期待に變つて行つた。そして待つた揚句が不平の聲となり、その果は恐喝となつた。かくて既に千九百三十五年の夏には、益々聲高くなる批判の聲を静めるために、林は殆んど五千人の將校を轉任させ、先づ三百人ばかりを退官させなければならなくなつた。左遷組の一人相澤中佐はこれに服せず、千九百三十五年八月十一日東京の陸軍省に侵入して、林の股肱たる永田少將を射殺した。この事があつて間もなく、林は辭職しなければならなくなつた。彼は荒木派の一人に代はられたのである。かうして新たに支那進攻が豫言されたばかりでなく、日本の戰爭宣傳の火は再び燃え上つたのであつた。

勿論三井は死物狂ひで防禦策を講じた。千九百三十五年十二月初め保守黨一味は、大本教の幹部三十人と五百人以上の信者の逮捕を斷行した。大本教といふのは、出口といふ男を頭首とした結社で、朝鮮、日本、支那、滿洲等に百萬以上の信者を有し、若い將校達と同様に、議會廢止、土地分割、個人財産撤廢等を宣傳して居る宗派である。十二月末、トラストは齋藤子爵の樞密顧問官任命を斷行した。天皇の顧問が又一人出来たわけである。併し、かうした事はどれも實際的な効果を擧げる事が出来ず、東京でいくらブレーキをかけても、それは支那征略に拍車をかけるだけであつた。寡頭政治家の小さな勝利は、一つ／＼將校の新たな憤懣の種になり、政治家の平和宣言は益々兵に戰意を固めさせて行くばかりであつた。千九百三十六年二月に於ける衆議員議員選舉の結果、軍事的发展に對して反對的態度を保持し實際の上三菱トラストに屬して居る民政黨が、二百五人の當選者を以て依然として絶體多數を獲得し、加之十八人の社會黨員が當選した時、軍事的暴動は以前にもまして避け難い様に思はれた。そして暫くの間は蒙古侵略戦が全爆發力を吸収するかの様に見えた。關東軍は次第に其の滿洲國々境を擴大し、今や將に殆んど十五年間ロシア領と見做されて居た外蒙古の首府ウラガを奪略せんとするかの勢であつた。蒙古のスターリンたるゲンドン、ソヴィエト公使テール、ソヴィエト蒙古陸相デミッド等は赤々と夜空に輝くロシアの星の光を受ける様になつたばかりでなく、草原の真中に鐵筋コンクリートの役所を建てたり、急遽ロシアの爆撃機を取り寄せたりした。だから日本軍が外蒙古に侵入した時、彼等の相手にな

つたのは最早武装して居ない農民や牧羊者ではなく、俄然射撃上手な軍用飛行家が現はれたのである。前進は停止され、關東軍は増援軍を要求した。對露戦の空氣は今迄になく濃厚になつた。一步誤れば取り返しがつかない」と日本の外務大臣の代表者に言つた。「さうすればドンと一發、花火の様に……」併し一彈の發砲もなく、東京政府の談判はモスコウ政府を満足させ、關東軍はその蒙古征略の續行を禁じられた。

これは千九百三十六年二月二十六日の事だ。午前六時雪に蔽はれた東京の市街を、又もやトラックが疾走した。歩兵第一第三聯隊の將校兵士千四百人は、機關銃を携へて官廳街で分散し、その一隊は岡田總理大臣官邸に侵入した。(岡田首相は皺くちやな顔をした機嫌のいゝ小柄な老人、富貴をとつてもらふのが人並はずれて好きで、齒の治癒をしてもらつて居るところ、風呂に入つて居るところ、庭に居るところだのをよく撮影させた人である)

「海軍大將岡田啓介！」といふ聲が闇の中で響いた。「我々は貴様の命をもらひに來た。政治は清められなくてはならないんだ！」

一人の皺くちやな顔をした小柄な男が雪の中を走つて出て來た。機關銃が鳴つた。男は血の海の中に倒れた。一兵士が屍の上に笠をかけ、雪が直ちにそれを蔽つた。……………

これと時を同じくして、機關銃隊は高橋大藏大臣官邸を襲ひ、一人の將校がその重い日本刀を振りあげてこの老人を斬り倒した。彼の才能あつてこそ、常に日本の豫算案に均衡を與へ、シテイやウォール

街の彼の友人等はいつも金融をしてくれたのだが、この貴重な老人を斬殺したのだ。……………

高橋が殺害された時、一方内大臣齋藤實郎では、眠りを醒された夫人が機關銃の砲口を手でふさいで「私から先へ殺して下さい」と叫んだ。併し總ては無駄であつた。彈丸は彼女の手を射貫いて、その夫を篩にかけた様に粉々にした。齋藤實は嘗て總理大臣だつた事があり、贈賄事件で官を辭し「平和主義者」で通つて居た人である。

さて兵は更に進んで、渡邊陸軍教育總監を殺害し、侍従長鈴木に負傷させ、牧野伯爵が既に逃れた後のホテルを焼き拂つた。併し彼等がその勢力を最も恐れて居た人物で、この暴動の意義が岡田大將以上にむけられて居た人物、元老西園寺公は遂に發見されなかつた。明治天皇の顧問にして、唯一の殘存者たる公は、前以て注意を受けたので夜半その邸を後にし、馬車で静岡に送られて、其處で百名の特別警官に警護されて居たのであつた。

さて兎も角政府は片付けられてしまつた。世界最新の官廳の一つであり、特に襲撃不可能に出來上つて居る警視廳は、一砲も發せずして暴徒の手に落ち、日本の參謀本部(その部屋は全部防毒防彈裝置が出來て居り此處からは日本全國の兵營に直接の電話線がひかれて居る)も將校達の占據する所となつた。叛軍の指揮官安藤照造大尉と野中四郎大尉は外交官衙街と官廳街を占領した。占據八十一時間に及び彼等は部下を山王ホテルにやつて食料を運ばせたが、これに對して誰も手の下し様がなかつた。

何が日本に起つたのだらう？ それに就いて世界一般も東京市民もさっぱりわからなかつた。電話線は全部遮断され、この國は外界からすつかり遮閉された。それから陸軍省の放送機が活動し初め、事件に關するコンミュニケが公表された。それによつて暗殺の暴動軍は賞讃はされなかつたが、少くも辯護はされて居た。即ち彼等の動機は公式に尊敬されたのである。かうして暗殺の暴動軍は啄木の有名な歌を口吟みながら、外交官街の街路を悠々と進んで行つた。

働けど働けど

なほ我が生活樂にならざり

ちつと手を見る

それから東京灣に艦隊の煙が見られた。海軍當局は「陸軍の恥づべき内訌の決着」を望んだのである。そして遂に詔勅が下り、香椎將軍が東京戒嚴司令官に任せられ、暴徒は歸順を命ぜられた。地方から軍隊が召集され、野戦電話線が叛軍の本據までひかれ、この線によつて六十時間も談判が続けられたが、その内容は嚴秘に附された。併し遂に叛徒は歸順した。二人の指揮官は自殺し、青島中尉とその若い妻も同様に自殺した。彼等は「皇軍互ひに相撃つた」事を恥ぢたのである。

さて叛軍が政廳を放棄して居た間に、岡田は助かつて、彼に酷似して居る義弟が犠牲になつて、夜明の薄明にまぎれて、大將の身代りになつて射殺されたといふ事が判明した。併し岡田は最早總理大臣と

(118)

しては問題にならなかつた。叛軍は歸順したけれども、彼等には何等か「新しい進路」が約された様であつた。そして八方盡力の結果、前駐露大使の廣田外相(優れた策士である)が組閣の天命を受け、軍の急進分子は優位を獲得し、荒木の同志は軍事參議官になつた。かくてこの反亂は失敗に歸したが、それは一面に於て所期の目的を達したのである。支那、ロシア、アメリカ等の諸國は口を揃へて戦争を豫言し、外蒙古進攻は千九百三十六年の三月末再び初められた。そしてこれはソツヴェトに對する公然たる戦争になるであらうか？

日本は現在公然たる戦争をする事が出来るだらうか？ 日本の軍人はその國內の優位を維持して居れば、征略計畫を具體的に實現出来るであらうか？

日本人は誰でも「千九百三十六年は決着の年になるに違ひない」といつて居る。何故かときいても答はぐらかされる。併しアメリカとイギリスが、海軍力の平等に對する日本の不屈の要求に對して、最後の態度を決すべき年は、正にこの千九百三十六年である。

千九百三十六年には、日本の國際聯盟脱退が當然その効力を發するであらう。又日本の南洋委任統治支配及びこの前ドイツ植民地の返還に就いて、何等か話があるべきである。併し東京政府はこれ無難作に拒否して居る。千九百三十六年には、主として近代航空兵器の整備を目的とした支那の五ヶ年計畫が終り、シンガポールの巨大な要塞が完成される。

(119)

日本の陸海軍は、この外交的には解決し難く見える問題の解決のために、軍事上の論證に訴へる可能性を持つて居るであらうか？

世界戦争當時、各國はその人口の殆んど十七パーセントを前線に送つたといふ事實を引用して、佐藤大將は次の様に主張して居る。

「日本は一旦緩急ある場合、一千百九十萬人を動員し、その中三百八十萬人を前線に送る事が出来るであらう。」

千九百三十四年に於ける現役兵は、兵二十三萬五千人、將校一萬九千五百人であつた。——
外國大使館附陸軍武官達の一致した意見によると、日本の將兵の忍耐強い事は世界に比なく、又實によく教育されて居るといはれて居る。或る師團長が私にいつた事がある。

「日本の軍人が世界一である事は疑ひなしです。我々は今日好きな数だけ軍人を作る事が出来ます。實際今日では我々は北支の巨大な人間貯水池も、臺灣や朝鮮と同様に自由にする事が出来ます。併し我々はこの軍隊を、自國の原料で武装させる事は出来ません。我が國は軍國としては未だ自給自足の國ではなく、所謂セルフ・サポーティングといふわけには行きません。我々の大きな心配はこれです。我が國力を正しく評價するために、兵營や軍港を參觀する事は許されませんが、實驗室や工場から差支へありませんから、どうぞ………」

(120)

軍需工業

さて兵を率ゐる者は一人々々になつて多くの危懼を抱へて居る孤立したものではなく、日本はもう三十年このかた兵だけでは戦争に勝つ事が出来ないのを知つて居る。併し最近五ヶ年程、發明家の力に依つて原料の缺乏を軽減しようと懸命に試みた事は、今迄にその例を見ない。

化學に決定的な一進歩を與へる者の中、三十人に一人は必ず日本人が居る。ロックフェラー財團では最近この様に確立した。特別な業績のあつた若い化學者に對して、毎年日本の諸大學から二千も國家賞状が與へられる。この數字は充分印象的であるが、その説明によつて表彰の理由をきけば、この數字はもつとよく合點が行く。即ち、この數字は日本の軍事的打力が當該諸發見によつて強化され、日本の原料飢饉が緩和された時の結果なのである。日本が今日既に、どれだけの原料を合成的に製造する事が出来るかを知る事は不可能である。何故ならば、この島國程實驗室の戸が、固く閉ざされて居る所は何處にも無いからである。一方化學製品産出の統計も亦、明らかに次の様な言葉を洩して居る。

「國防が主要目的で、他の一切のものはすつと奥に隠れて居る。」

彈藥工場は硫酸がなくては活動出来ないものであるが、例へばこの硫酸にしても、日本は千九百二十年にはなほその九十八パーセントを輸入して居た。千九百二十九年に至つて、國內で一萬六千噸製造され

(121)

たが、それが千九百三十四年になると既に九萬九千噸になつた。曹達は人絹工業ばかりでなく、爆發物製造工業にも同様に缺く可からざるものであるが、これは千九百二十年には殆んど全部外國から輸入されて居た。千九百二十六年に至つても、日本の全需要六萬二千噸の中三萬六千噸は輸入に仰いでゐたのである。そして千九百三十三年には日本の曹達消費は一躍十二萬五千噸になつたが、約一萬四千噸は輸入された。千九百三十五年の初め、大阪の稻畑化學工場に於て、大々的な祝賀があつた。それは日本がその曹達の全需要を國內で應ずる事が出来る様になつたからである。又この年日本は、大部分の毒ガスの原料になる硫酸アンモニヤの「自給自足者」になつた。日本はその國産硫酸アンモニヤ四十六萬噸で、最早外國品を必要としなくなつたのみでなく、既に多量に輸出までした。未だ千九百十九年には、人造肥料として缺く事の出来ないこの産物を、十一萬六千噸もドイツから輸入して居たが、今日の日本は殆んど全アジアに於ける專賣權を握つて居る。次に、一ケ年間に於ける燐酸鹽の増産高は一萬四千噸から二萬一千噸、シアン酸生産の四倍増大等、かういふ表は何處迄續けられるかわからない。ところで總ての化學工業は平和工業であると同時に、正に戰時工業である。それでは純粹の軍需工業は如何にして發達するのであらうか。

千八百五十四年、日本の諸港はアメリカの威嚇的發砲のお蔭で開かれた。だから日本が「夷狄」の模倣をしようとした最初のものが、兵器製造であつた事は全く當然である。ヨーロッパの兵器の効能は、

日本人にとつて他の工業製品よりずつと早く證明されて居たので、先づこの「暴力道具」を自ら造つてみようとなつたのである。

日本へは既に十六世紀初頭に、ポルトガル人やオランダ人によつて原始的な銃が持つて來られ、日本人はこの奇妙な道具で鳥を射ち初めたりしたが、この「道具」を武器として用ひたり、これで遠方の敵を殺したりする様な事に關係する武士は一人も居なかつたであらう。華美な劍、一種の棍棒、鉞に似て居る「薙刃」は、依然として唯一の武士らしい公明正大なものと思はれる武器であつた。ところがペルリの干渉があつて、初めて日本人の考へ方が變つて來た。つまりヨーロッパ式に生きるには、又ヨーロッパ式に殺す事を覺えなければならぬといふ事になつたのである。既に合衆國との通商條約の中で、その一ヶ條は日本にアメリカの武器と軍艦を買ふ「權利」を與へて居る。

かくて千八百七十七年の暴動、即ち新しい日本に對する古い日本の最後の叛亂と共に、國家的軍需工業の勃興が初まつた。そして藥包を詰めるために婦人さへ雇はなければならなかつた。女工を使つたのは、イギリス又はドイツの特許に従つて仕事をして居る武器工場が最初であつた。それから三年たつたかない中に村田陸軍少佐が日本銃を作つたが、それはイギリスやフランスのものに少しも劣らずよく射てるものであつた。それから國立の大工場が出來て、それ以來殆んど總ての武器に「Made in Japan」といふ商標がついて東洋で賣られて居る。



この後に出来た武器工場も、日本最初のものと同様に、依然として將校の指導による国立企業であつた。千九百五年に至る迄、日本には個人經營の武器工場といふものはなかつたのである。

併し千九百五年に至つて、資本金千五百萬圓の「日本鋼鐵工場」(Japan Steel Works)が創設され、その日本代表者たる三菱によつて、イギリスのツイツカース・アームストロング株式會社が大量の株を引き受けた。日本のシュナイダー・クロイツオートたる三井は後れをとらじと同様に武器工場を建設した。日本の經濟新聞たる「工業日本」によれば、三井は今日日本の武器工業に、二億四千三百二十三萬圓の資本を投資して居る。之に對して三菱は約二億四千四百萬圓、他の約十二ばかりの個人資本家は四億七千二百四十萬圓ばかりである。

軍需工業の發展はヨーロッパ諸國に於ても、死と血から巨利を引き出す事が出来た時に始まつたのであるが、日本でも軍備の大擴張とこれに續く世界戦争が、軍需工業に途方もない利益を齎した時に、この國の軍需工業は完全に東洋一になつたのである。日本は千九百三十年支那に對してその全武器の三十六パーセントを供給した程であるが、この武器こそ、一年の後には自國の兵を殺す事になつた。丁度ツイツカースの砲が南阿戰爭に於て英人を殺し、フランスのルベル(フランス人ルベルの造つた小口徑の連發銃がモロッコ事變の時佛人を殺したのと同様である。

この軍需工業の充實と莫大な戦利とが、軍の革命思想への最も強い動機となり、それは又一方に於て

強大な武器工業を完成するのに役立つた。武器工業——それは我々の創設擴大し得る様なものでなく、一旦緩急の場合にはこれを收用出来るものであり、戦争を滞りなく行はせるために、如何なる場合でも銃砲彈藥の自給自足が出来るものである。日本には鐵・石炭は少いが滿洲の貯藏で充分であらう。亞鉛と銅は國內で産し、自給自足出来ない金屬や又附近にない金屬は、組織的に蓄藏して居る。千九百三十四年には小型銀貨はニッケル貨に代はり、ブラジルと軍需品用金屬で最も重要なものであるニッケル供給契約二つ(各々四萬噸)が結ばれた。砲及び装甲用鋼鐵は國産で間に合ふ。併しあの重要な飛行機はどうであらうか?

日本の國內で最初に造られた飛行機は寄附金で出来たもので、千九百二十一年に三井系の電氣器具工場「愛知」で造られた。つゞいて三菱は航空機株式會社「三菱飛行機工場」を創設し、今日日本に七つの飛行機工場がある。その全豫算は、千九百三十年に三百三十九萬九千四百八十六圓であつた。これに對する政府の補助金も亦同額に上つて居る。だから三井も三菱も、それ以上一文もその資本を賭けて居ない。千九百二十一年國家は航空機製造家の豫算の三分の一を負擔し、千九百二十八年には半額を負擔してから、千九百三十年には全額を引き受けたが、これに對して千九百三十四年には八百臺の軍用機と七千人の熟練將校及び所澤の理想的な學校を所有するに至つた。この學校は民間防空をも組織して居る。併し陸軍では二千機を要求し、海軍は飛行機六百臺と八つの新航空母艦を欲して居る。

日本は果してかうした總ての要求を満す事が出来るであらうか？

この點に問題の核心があり、この點で戦争か平和かが決定されるのである。日本の軍人は、三菱や三井の富を國家のものとし、工業を軍の監督下に置く事を欲して居る。恐らくこれは近い將來に成功するであらう。彼等は日本の國債（千八百七十年九百八十萬圓、千九百四年には八億八千九百萬圓になり、日露戦争の後には既に二十億八千萬圓になった）を棒引きにするであらうが、それは丁度諸外國が千九百三十年に六十二億千九百萬圓、千九百三十五年には九十六億千三百萬圓に達した國債を支拂はない様なものである。日本の陸軍は今日負債なしでは到底やつて行かれない。既に今日でも毎年新しいクレデットを必要とし、日本の軍事豫算は、租税の全収入を消費して居る。陸海軍以外の費用は、平時に於てさへクレデットで補填して行かなければならない。日本は千九百三十五年には、八億九千萬圓の負債をしなければならなかつた。こゝなわけだから若し戦時に於て、日本にクレデットを與へるものが無ければ如何なるであらう？

日本は既に千九百十三年に、その全豫算の三十三パーセントを國防に支出した。千九百三十四年にはそれが四十四パーセントになり、その中陸軍に四億五千七百萬圓、海軍に四億八千萬圓支出して居る。千九百三十五年の軍事豫算は更に九千萬圓の増加を示し、總豫算二十二億一千萬圓の中、陸軍は四億九千萬圓、海軍は五億三千萬圓である。一方千九百三十六年、七年の豫算案は總豫算の四十七パーセントまで國防力に用意され、十億五百九十萬圓に達した。その際陸海軍はその要求額より四億圓少く得たの

であるが、これは激しいいざいざの後に、高橋藏相がこの軍事豫算を削減する事が出来たためである。イギリスの「對外政策協會」(Foreign Policy Association)が千九百三十四年に公表した數字によると、千九百十三年に比して軍事豫算の支出増加は、イギリス四八・八パーセント、イタリア二六・四パーセント、アメリカ合衆國一九〇・九パーセント、フランス二五・八パーセントであるが、これに對して日本の軍事豫算は千九百十三年以來三八・八パーセント増大して居る。更に滿洲事變以後即ち千九百三十一年以來の場合だけでも、日本の國防費は倍になつて居るのである。

今日日本の商業は金を國內に吸収する。それ故に日本の軍備に間接に金を出して居るのは、印度や支那の大衆であり、アフリカやヨーロッパにある英佛の植民地の顧客である。併し若し日本が將來世界市場から縮出しを喰つて、その大生存闘争をやらなければならなくなつたならばどうであらう？ 日本は原料輸入に當つて、「來るべき危機」(日本では一般に千九百三十六年を以てさう呼んで居る)に際して、中立を保つてあらうと思はれる國々に限つて取引する様に計畫的に試みて居る。併しそれは全部が全部うまく行くとは限らない。そしてその買物に對し支拂ふためには自國の物を賣らなければならぬが、いざ戦争の場合は何處へ賣るといふのか。

この事は財産が心配で頭痛鉢巻の三井三菱を夜も眠れなくするが、何も三井三菱に限らず、千九百三十五年の記録的豫算案が成立した時、藤井藏相は文字通り憂慮の餘り死に至つたのである。彼の死後聞

ぐところに依ると、彼は二人の學生が申し出た輸血藤井某と石田某との若い血に依つて漸く持ちこたへて居たのださうで、豫算案が採決されると間もなくどつと床に就き、それから再び起てなかつたのである。

日本の財政エキスパート高橋は既に亡い。
それならば千九百三十六年二月の血の洗禮から身を脱した西園寺公に伺ひをたてようか。否、假令公に聽いてもどつちみち戦争である。武力戦に代る經濟戦だ。併し戦争は戦争である。何故ならば三井三菱も軍首脳部に劣らず伸展を餘儀なくされて居るからである。日本は國內で俄え、廣大な餘地を欲し居る。世界市場を席卷するか、武器を手にして戦ふか、これは今日大きな戰略的問題である。併しヨーロッパ各國にとつてはどちらでも結局同じである。日本の「來るべき危機」は日本自身にとつて生存闘争を意味するが、ヨーロッパ諸國にとつても同様に生存闘争の問題となるのである。

第六章 日本の海軍

「隱遁者的國民」から「海の覇者」へ

日本は伸びざるを得ないから伸びる——これは今日争ふ可からざる事の様に見えるが、さうするとどうしても、日本は島國である、といふ事が考へられて來る。若し強力な艦隊も持たず、又外國との近

代的な交通機關も持たなければ、日本の經濟的發展も領地的發展も不可能である。一體日本の身體はその頭腦、腕、甲冑と同様によく發達して居るであらうか？ 或る者には「血に餓えた虎」と名付けられ、或る者には「東洋平和の建設者」と呼ばれて居る此の民族は、自由に迅速に動く事が出来るであらうか？ 十七世紀から十九世紀の最後の三分の一に至る迄、日本には商船も軍艦もなかつたが、日本の地理的位置は、その民族を航海を業とする國民にした。千六百十五年に至る迄、日本の船は南方海洋を漂泊しアジアの南西海岸に近づき、印度にまで到達した。併しそれから間もなく、徳川幕府は港を閉鎖し、遠洋航海、外國貿易、造船等は禁じられ、これを犯す者は死刑に處せられた。かうして日本は二百四十年間「隱遁者的國家」になつたのである。だから新時代が始まつた時、日本は西洋の海國に比して、二百五十年も後れて居た。

明治天皇が即位後間もなく、強力艦隊の所有こそ工業化の最も重要な手段の一つであり、「夷狄」の羈絆を脱する緊要な方法であると述べられたのは尤もな事である。

新日本の建設者は、彼等がアメリカやイギリスの汽船會社に拂つた運賃は、輸入機械の値を原産地で買ふよりも百二十パーセントも高くする事があるのを早くも認め、外國船が全日本の沿海航行さへ掌握してしまつたと云ふ事實の中に伏在する危険を見てとつたのである。幕府の遠洋航海船建造禁止が堂々と廢止され、千八百六十九年に至つて一法令が發せられたが、これに依つて日本船の構造をヨーロッパ風

にせよと云ふ事が規定された。併し此のヨーロッパ式の模型を手に入れる事は容易ではなかつた。英米に派遣された官費留學生は再三再四開かないドアを發見するのであつた。併し遂にイギリスで或る立派な船舶設計圖を買ふ事が出来て、千八百七十年浦賀に創設された最初の国立造船所で建造されたが、此の設計圖に科學的誤謬のある事が判明した。出来上つた船がいざ進水となると、忽ち横倒しになつて十五人の死者を出したのである。此の設計圖は重量を非常に不規則に分割してあつたから、かういふ不幸を見たのであるが、かくて船舶再建の其の後の試みは總て失敗に歸してしまつた。

日本の當局者は憤懣を抑へて當分は造船を諦めた。そしてヨーロッパやアメリカの古船を買ひ、これを日本の原始的な設備で修繕した。専門的方法の缺陷を忍耐と企業心で補つたのである。それにも拘はらず千八百七十四年、日本が臺灣を占領し始めた時、日本軍を輸送し、此の戦争で富を獲得したのはやはりアメリカの汽船であつた。

これに對して交戦國たる支那の人々も、不思議にも日本人も同様に氣を悪くして、ワシントンへは北京と東京の兩方から抗議が來た。そして遂にアメリカ政府は中立を宣言し、同時にアメリカの船會社に軍事的輸送を引き受ける事に對して、禁止令を發せざるを得なかつた。そこで船舶貸賃料が一夜の中に途方もなくはね上つた。此の時嘗て土佐の藩士だつた岩崎彌太郎は實に素晴らしいチャンスを見つけたのである。彼はその主人の小船八隻を手に入れ、主人の名で外國の個人船を全部チャーターして、それに

日本の國旗を揚げさせて、軍隊を輸送し初めた。かうして岩崎は事實上の獨占權を握り、その利得は一千万圓以上に及んだ。かくて三菱家の幸福——この名前こそ岩崎がその新會社に與へたもので、文字の上からは「三つのダイヤモンド」を意味する——が作られたのである。

併し三菱の幸福は、此の千萬圓のために作られたのではなくて、實際は日本の政府が、岩崎と云ふ男は野武士の様なやり方をするが、特別な精力を持ち、異常な統率の才のある沈著な人間に違ひないと云ふ事を認めたからである。

だから政府は岩崎を拘留して戦時利得を取上げる様な事をしないで、千八百七十五年無代で國有船全部を譲渡し、新汽船建造のために年々二十五萬圓の補助金を供給した。そして日本の航海學校を建て、當時獨占的であつた外人の船手、船長を次第に驅逐しようといふ彼の考へに對して、年々更に一萬五千圓を與へた。

明治天皇とその側近者が、此の非常處置を決した當時、日本の國籍を持つた船は百四十九隻、總噸數四萬二千噸であつた。

そして滿五十年後、日本の商船は四百萬噸を越えた。即ち總噸數にして百倍に達したのである。岩崎は大富豪になつたが、それよりも日本を世界最大航海國の一つにしたのは、更に彼の功績である。

此のお伽話の様な發展は、近代的な造船所の建設の結果であつた。即ち千八百八十一年の「大阪鐵工

所」開設によるものであつた。岩崎はイギリスの重工業を關係させて、金、否主として専門家をウィカ
ースから手に入れる事を心得て居た。彼は國立造船所で起つた様な不愉快な経験を再びしない様に、建
造設計圖を盗ませたことがあつたが、そのために多くの者から非難された。併し兎に角、僅か一年の間
に日本の噸數を倍にし、嫉妬深い英國の船會社を動かして協力させる事に成功したのである。續いてキ
ューナード・ライン(Cunard Line)一八四〇年創立、リバプールにあり、英と北米間の航路)の支持の下に、千八百八十
五年「日本郵船會社」を建てる事が出来、その航路と三井や其の他二三の小企業家の航路とを一緒にし
て一會社を建てたが、此の會社は今日世界有数のもので、最新式の汽船百五十二隻、資本金一億六百萬
圓を持つて居る。そして地球上見捨てられた様な一隅にさへ支店を開いて居る。

外國船に依る沿岸航海は千九百十一年に禁止されたが、三菱は再び三井・大倉と協同して、そのために
「大阪商船會社」を設立した。此の會社は今日百四隻の汽船を有し、アフリカ・オーストラリア・ヨーロッ
パ等の航路を持つて居るし、また依然として内海航路の重點をなして居る。

此の平和的發展は、實に恐ろしく迅速に行はれたものであるが、日本の戦争は益々之に拍車をかける
事になつた。軍隊を支那に輸送する必要から、千八百九十四年の噸數十六萬九千噸が、同九十六年には
一躍三十六萬三千噸になつた。それから日露戦争によつて殆んど三十萬噸の増加を見、千九百五年には
九十三萬三千噸に達した。千九百七年フランスの銀行は巨利を見越して莫大なクレデットを與へたので

益々日本の船は次々と進水して行く事が出来た。世界戦争勃發の時、交戦國はその全部の船を擧げて軍
隊輸送に用ひたので、日本は實に殆んど總ての原料載貨を獨占する事になつた。日本の噸數は更に七十
六パーセント増加し、平和條約調印の際には三百萬噸以上に達した。日本の船會社の配當は信じられな
い様な多額にのぼり、五百二十萬圓の利益を以て千九百十四年度を終つた船會社は、千九百十八年には
九十七兆一千億圓の利益を記帳する事が出来たのである。戦時景氣によつて日本は十萬以上の労働者を
持つドック四十を有するに至り、平和克復後、年々の新建造七十五萬噸までも自由に出来る様になつた。
日本はその利得を以て、千九百十八年から同二十二年に至る間に、殆んど全部の商船を近代化する事が
出来、千噸以上の船九百、千噸以下の船二千四百を、數的に言つて世界最強のものにする事が出来たば
かりでなく、最も合理的に饜裝させる事が出来たのである。

併し戦後景氣が衰へて、世界運賃の急落と共に、又反動が來た事は勿論である。千九百二十三年の震
災の後、新造船は當然始まるべき建築材料輸送の目的に限られて、夜業で造られたのであつた。それら
の船も暫く航行を續けてから停止し、かくして就航停止の日本船は益々多くなつた。千九百二十五年か
ら二十八年にかけて、恐慌逼迫の形勢になり、千九百三十一年から三十二年には一大不況に臨むに至つ
たので、止むを得ず政府は干渉に乗り出す事に決した。併し此の干渉はヨーロッパ諸國でやつた様に、
船舶の取り潰しとか、新造船の制限とかによらないで、その反對であつた。即ち、千九百三十三年の「船

艦改良法」に依つて、國家は二十萬噸の新造船費中、その四分の一を負擔すべき義務を負つたのである。嘗て或る人がルーズベルトの經濟法に就いて、高橋老子爵に質問した所が子爵は「今日世界が必要として居るところのものは、より多くの勞働であつて勞働の制限ではない。」と答へたさうであるが、日本は此の原則に従つて行動したのである。古船の使ひ道は判らなかつたので、それは廢棄された。ところで減少した載貨を得るためには、競争者より、よく艦裝された船を持つ必要があつたから、少くとも十七ノットの速度を有する商船が造られ、又これ等の船には合理的に活動するディーゼルモーターが備へつけられ、總て積載施設は機械化される様になつた。

千九百三十四年、此の新らしい二十萬噸の九萬五千隻が出来上つて、その結果は既に次の様なものとなつて現はれた。即ち、千九百三十三年には太平洋上の海運では未だ第三位(英米に次ぎ、ノールウェー、ドイツに先立つて)であつた日本は、千九百三十五年の前半には第二位を占める事が出来た。そして第二位に居ても、やがて第一位は確實だ、と聲高に豫告したのである。そこで米國は日本と競争する事の止むを得ない事を知つた。合衆國は補助金支出に當つて、千九百三十二年迄は郵便條約の形式でのみ與へて居たが今や「船舶局」は直接のクレジットに同意を與へ、五十六隻の新建造費と他の十九隻の近代化に要する費用の六十パーセントを出したのである。又、アメリカ政府は千九百三十四年の初めアメリカの四大太平洋航路を強制的に合併せしめた。

併しそれにも拘はらず日本を例外として、太平洋航路の船舶業の状態は益々むづかしくなつて行く。日本人は宣傳に巧みで、技術的完備と、アメリカの旅行者に特に氣に入るあの魅惑的な櫻の花のロマンチズムを適當に織り交せて、その豪華汽船を満員にする。英佛米の商船は毎年僅かばかりの純益を示して居るのに、日本の總登錄噸四百二十萬は、千九百三十四年に、前年の一億九百萬圓に對して、一億二千萬圓も國に運び入れたのである。

日本の商船が、歐米にとつて今日どんなに危険な競争者であらうとも、又その正規航路の網が、如何に密にならうとも、更に又、日本の國旗を掲げてスエズ運河を通行する汽船の噸數が、千九百三十三年の三十四萬四千噸から千九百三十三年の百三十九萬四千噸に増加しても、これ等の商船はまだ日本の艦隊に比べれば恐ろしいものではない。開港以來、日本の商船の噸數は百倍になつたのに對して、軍艦は二十六倍になつたのに過ぎないが、それでも日本の軍艦は恐るべき妖怪である。それは合衆國ばかりでなく、英國をも益々大きな不安に引き入れ、既に太平洋の平和にとつて、否恐らくは世界の平和にとつてさへ、最大な危険物に成り切つて居るのである。

日本の艦隊

千八百六十八年、明治天皇が海外に派遣した學生の中に、一人の小さい弱々しい青年があつた。此の

青年は夢見る様な眼を持つて居て、特に目立つたところがなかつたが、此の青年こそ東郷である。東郷は海事技術のあらゆる部門を學ぶべき使命を受け、在英七年、千八百七十五年多くの卒業證書を持つて歸國した。

それから滿三十年後の千九百零五年五月二十七日の夜明け方、日本の一巡洋艦から丁度新らしく發明されたばかりの無線電信によつて、次の様な報道が送信された。

「敵艦隊二〇三の地點に見ゆ、東水道に向けて進路をとるもの如し……」

旗艦に届いた此の報知は、眼に涙をためた白髪の小柄な男に渡された。彼は午後二時頃、一列の檣頭旗を掲げさせた。

「皇國の興廢此の一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ。東郷」

ところで東郷はグリニッチ海軍學校で、ネルソンの傳統以上のものを學んで居た。此の彼の指揮の下に、近代の最大海戦が展開されたのである。此の海戦の戦術は、それより七年前に行はれたサンチャゴの戦ひの戦術より遙に優れたもので、その決定的な特徴は、スカゲラックの戦ひに於てさへ得られなかつたものである。東郷が戦ひとつた勝利こそ、多くの國民が夢想し、各時代を通じて期待されたところのものであつた。

旅順港の圍みを解き、大損害を受けた太平洋のロシア艦隊に援軍を送るために、ロシア帝國海軍の最後の艦隊は、シノウイ、ベトロウイチ、ロヂェストゥエンスキー提督の指揮の下に、バルチック海を發して居た。その一部は地中海經由の道をとつたが、大部分は希望峰を迂回しなければならなかつた。それはイギリスが日本の同盟國として、スエズ運河を閉鎖し、ロシアをして世界を半周するの餘儀なきに至らしたからであつた。併し兩分艦隊は結局安南沿岸で出會つた。

日本の司令長官東郷平八郎は、ロシアの提督が、勇敢にして非常に有爲賢明な對手である事を知つて居たが、同時に、ロヂェストゥエンスキー提督の艦隊が、充分な乗組員も彈薬も持つて居ないだらうと云ふ見込をつけて居た。又、敵の船底も炭庫も、日本迂回を到底ゆるさない状態であらうと信じて居た。ウラヂオストツクに着いて燃料を補給するために、ロシア艦隊は對島から僅か百二十二哩の水路、即ち日本海經由のコースをとらなければならなかつた。東郷は其處に待ち伏せて居たのである。

六料の距離で火蓋が切られ、兩艦隊の煙雲は相並んでたなびく二つの黒旗とも紛ふばかりであつた。四十五分経つか経たぬ中に、ロシア艦隊の第一線は戦列から除かれ、ロヂェストゥエンスキー提督は重傷を負つた。夜になると、ロシア艦隊は完全に解體の状態になつた。そして翌日の正午には、裝甲艦四、巡洋艦五、補助艦五の各艦は日本海の藻屑と消えた。其の他の四裝甲艦、二病院船は旗を卸して降服した。露軍の戦死及び溺死四千人、捕虜七千人にのぼつたが、これに對して日本は三隻の水雷艇を失ひ、死者百十六名、負傷者三百五十名を出したのに過ぎなかつた。

對島海峽に於ける此の海戦は、東太平洋の優位を決定し、日本を一躍世界列強に列せしめた。此の様な少い犠牲で、此の様な決定的な勝利を得たのは空前絶後だったのである。東郷提督は國民的英雄として佐世保へ歸つた。

それから再び三十年経過した。今やロシアには艦隊無く、日本は東洋の制海権を握り、やがて恐らくは全太平洋をその掌中に収めるであらう。アメリカはそれを妨げようとし、イギリスも亦反對する。併し彼等の艦隊の前にも、ロシア艦隊を襲つた様な禍が立ちふさがつて居ようとは知る人ぞ知るである。

東郷——此の國民神——は千九百三十四年に死んだが、彼の精神はその生前より更に強く生きて居る。そして彼が無から作り上げた艦隊は、彼が夢想した以上に強大なものになつた。千九百三十三年の晩秋老提督は百六十一隻の日本軍艦が、戦闘體形を作つて東京灣に入り、其處に投錨するのを眺めて居たが此の時艦隊は隊伍整然、蜿蜒三十六平方哩に及んだ。やがて信號は乗組員を後部甲板に集めた。すると深紅の地に金色の菊花を浮び出させた天皇旗の翻へる「比叡」は、裝甲艦の密集部隊の間を静々と動いて行つた。各艦上ではみんな不動の姿勢で捧げ銃をした。何故ならば、「比叡」の司令艦橋には、眼鏡をかけた小さい、併し神聖な姿が見られたからである。此の姿こそ神々の子、裕仁帝、日本の第二百二十四代の天皇であつて、かうして日本の第十六回觀艦式を行はれたのである。第一回の觀艦式が行はれたのは千八百九十年で、これに參加した軍艦は、殆んど例外なく外國で造られたものであり、その排水量は僅

かに三萬二千三百噸に過ぎなかつた。それが千九百三十三年には二十六倍に強化され、皆日本の造船所で建造されたものであつた。それにも拘はらず、東京の市街で將校からも、水兵からも、誰の口からも聽かれた言葉は、天皇にあんな艦隊を御覽に入れて長れ多い、日本の艦隊は英米との競争に立ち遅れたと云ふのであつて、彼等はさう思つて心から恥ぢて居たのである。

英國及びアメリカとの競争

世界戦争が終つた時、日本は富み且つ強大な國になつた。輸出超過は千九百十五年の一億七千六百萬圓から、千九百十七年の五億六千七百萬圓に増加し、外債は千九百十三年の二十億七千萬圓から、同十年の十八億圓に減じた。その對外資金は同期間に八億四千六百萬圓から、三十三億二千萬圓に増加した。日本は富み、且つ専門的な高度の整備を持つ様になつた。日本に割り當てられた賠償金は八億マールとなり、ドイツはこれに對して損害賠償の内金拂ひとして、機械その他日本の望むところのものを供給しなければならなかつた。そこで日本は好機逸すべからずとして、世界一の艦隊整備を目論んだ。そして千九百十四年以來、三萬六百萬噸乃至三萬三千八百噸の排水量を持つ新戦艦六、二萬七千五百噸の巡洋艦二、航空母艦一、水雷艇、潜航艇等を在役させた。日本が世界戦争の間、その艦隊を大擴張する事に着手したのは、英國艦隊は對獨戰に於て痛烈に痛手を負つて居るから、極東で何をしても大丈夫だと云ふ見

込みをつけて居たからである。かくて戦争準備が主張されたが、それは大戦の結果豫期通り英國が弱るのを待つて、事情によつてはフィリピンや蘭領印度、恐らくはオーストラリアの一部さへ占領し、結局日本をその自然的發展方向から、即ち南洋への出口をふさいで居る堤防を突切らうと云ふ事が考へられたからである。併し大戦の結果は日本の見込が見事にはづれて、英國艦隊は以前にもまして強力になつた。つまり日本が大戦中既に事成れりと考へて居たものは、ほんの序の口に過ぎないものであつた。そこで日本は更に活動して、英米に劣らぬ國力を持たなければならなかつた。否、これ等の競争者以上に強くなる必要があつた。かくて色々の設計圖が猛烈な勢で描かれ、艦隊建設の諸計畫が提示された。

さて世界戦争の利得及びベルサイユ平和條約による利得と共に、ウイムソンの民主主義の叫びと自由主義的平和主義の波が日本にも押し寄せて來た。千九百二十一年に至つて、初めて自由主義者の平民首相原敬とその政府は妥協の用意をした。ところでアメリカも亦日本と同様に戦争によつて巨利を博し、日本が計畫した事の一部は既に完成されて居た。合衆國は千九百十五年以來、三五・六種砲百四門、四〇・六種砲十六門を備へつけた基本艦(巨艦)十二、七千噸の巡洋艦六、驅逐艦百五十、潛航艇七十五を建造した。原首相には此のアメリカに追付き、これを凌駕する事は不可能に思はれた。かう云ふ様な事が長期に亘つては、日本の財政そのものがとても持ちこたへられなかつたのである。それにも拘はらず、千九百二十一年十一月から同二十二年二月六日迄開かれたワシントン海軍會議を

して、日本の成功に終らせる様にした總ての基礎が與へられて居た。此の會議は名義上ハーディング大統領によつて招集されたものである。何故ならば國際聯盟規約の第八條は軍備縮少を勸告して居るからである。併し此の會議が招集された實際の理由は、千九百二十一年、その力の絶頂に達した合衆國が、世界の到る所でイギリスの利害と衝突する様になり、あらゆる前線には原料戰が起つて、英米間の公然たる軋轢が今にも起りさうになつたからである。此の會議は海軍會議であつたばかりでなく、同時に(此の會議によつて)世界の石油資源が分割され、又新しい政治的情勢が作られる筈であつた。イギリスはアメリカの艦隊を恐れて居たが、それよりも凡ゆる物を買占めるアメリカの銀行家、工業家を一層恐れた。アメリカは敢て闘争を辭する氣はなかつたが、成るべく費用を惜しみたかつた。アメリカはイギリスと同様時を節したかつた。そして此の清算に際して、日本、フランス、イタリー等にも損害をかける事が出来れば一石二鳥になると思つたのである。かうして此のワシントンに於ける英米會議はアメリカが國際聯盟國ではないにも拘はらず、國際的事務「ジュネーブの精神」に基づいた會議と云ふスタンプを押される事になつたのである。

さて此の會議には日本人もフランス人やイタリー人と共に參加し、艦隊の平等について公然と、一般世界情勢については秘密に討議された。原は自らワシントンへ行かうとしたが、日本の軍國主義者に妨げられ、遂に千九百二十一年十一月四日非業の最後を遂げた。彼に代つた人々は仰々の初めから動搖し、

原の死に依つて完全に軌道外に押し出されてしまつた。そしてフォードがブラジルの農場に依つてイギリスのゴム専賣を破り初め、デイトーディングが再びスタンダード・オイルと商戦を開き、數週間に外務省の支持を得てパナマをして、アメリカ人に特權を與へた石油國コスタリカに對して戦端を開かせた事——かうした事情に就いては彼等は皆目知らない様に見えた。又、日本の代表はイギリス巡洋艦「ラムブリアン」がコスタリカ沿岸に投錨し、イギリス製機關銃を裝備したパナマ軍がコスタリカに侵入した事等は知らない様に思はれた。アメリカがその石油同様運河を心配して黙つて居る事が出來ず、調停者と艦隊を派遣し、パナマを戦争と運河地帯の擴張で威嚇したと云ふ事を、日本は少しも利用するところがなかつた。デイトーディングは負けた。コスタリカは遂にコト地方を占領し、その軍隊はアメリカ兵と手に手を組んで行進した。アメリカ政府はイギリスの抗議に對して、これ以上葛藤が擴大してもアメリカは何等恐れるところなしと回答したのである。

さて、英國代表がアメリカに到着すると、ハースト紙に全く不快な記事がのつた。イギリス大使館前にはデモンストレーションさへ行はれ、輿論には友愛の情が認められなかつた。併し日本人は此の空氣を利用する事を知らなかつた。彼等は確信がなかつたし、又、未だ今日の様な友好獲得の世界的組織を發達させて居なかつたのである。日本は英米の海軍通の緊密な協同作業を妨げて、フランスの英國に對する敵對的感情を利用する——かう云ふ事をやらなかつたばかりか、三・五・五の比率、即ち日本三、ア

メリカ五、イギリス五の比率を是認し、同盟國としてのイギリスをも失ふ様な破目になつた。千九百二年以來、日本と友好協定を締結して居たイギリスは、主としてアメリカ、オーストラリア、カナダ等の需めに應じてこれが廢棄を申し送つたのである。今日日本は、イギリスの自治領たるオーストラリアからは棉を輸入し、カナダからは穀物を輸入する事に依つて、此の二國に中立を保たせて居るが、當時は手を拵いて爲す事無く、九ヶ國條約の中、支那の「門戸開放」と云ふ原則が承認され、アメリカが支那への山東還附を日本に要求すると、日本の代表も亦直ちにこれを承認する様な有様だつた。

日本國民は最初啞然としてその代表の處置を了解するの一寸苦しんだが、間もなく彼等の代表は買収されたのだと云つて公然と非難し出した。憤激の嵐は國內に荒れて、十一人の海軍將校は「日本の屈辱を恥ぢて」自殺した。併し條約は調印されたのである。ワシントン軍縮協定は千九百三十六年十二月三十一日に至つて初めて満期になつた。或は「世界平和の第一歩」である云はれ、或は「外交的僞善の傑作」であると呼ばれた此の協定の結果、日本は僅か三十二萬噸の戦艦保有を許され、英米は五十三萬三千四百萬噸を得たが、アメリカは既に半ば出來上つて居たメリーランド型の大戦艦の作業を中止し、六六巡洋艦の建造命令を撤回するに至つたので、日本は二超弩級艦(各々四〇六噸砲十門備へつけの豫定で、既に半ば完成して日本の勝りになつて居たもの)の廢止を命じなければならなかつた。かくて盛なデモンストレーションがあつたにも拘はらず、此の戦艦は取毀はされた。その日は國民喪式の日になり、それは日

本の全大衆にアメリカに對する憎惡を植えたのであつた。イギリスはワシントンに於て、日本との同盟を廢棄した。併し同時に制海權をも失ひ、イギリスの次位にある二國より、常に強大な艦隊を持たなくてはならないと云ふ昔からの原則も捨てなければならなくなつた。イギリスは日本に好意を持たれなかつた。そして結局、日本と同様アメリカ人に抑壓されてしまつた。日本はイギリスを憎んだわけではなくむしろ理解した。何故ならばイギリスは日本の敵であつたが、自らも護らなければならぬ敵だつたからである。ではアメリカはどうだらう？ 日本の民衆の眼に映じた會議上の米國の態度は、自分の満足のために人を害ねて、決して必要にせまられてやつたのではないと云ふ事の證明に過ぎなかつた。アメリカ人は大陸を獨占しては居なかつたらうか？ 自國で植民するにはあり餘る土地を持つて居なかつたらうか？ 自國で必要とする以上の原料や食料を持つて居なかつたらうか？ アメリカの富は無盡藏ではないか？ そんな富裕國でありながら日本を包圍して孤立させ、ヨーロッパ諸國を負債の奴隷にしたのだ！ ワシントンに於ける日本の敗北はまるで樽の底を抜かれたのも同然だ。アメリカは確かに終始日本の敵だつたが、今や憎むべき敵になつた。日本はアメリカを憎んだ。恐れて居たから、それだけ憎み方も烈しかつた。

(144)

第七章 大敵—合衆國

對日鬭争に於けるアメリカの政治家、商人及び軍人

原料獲得のために殆んど總ての工業戦が行はれるといふ事は先づ疑ひのないところである。イギリスがスダンを占領したのは、この地方が最もよい棉の産地であるからで、回教徒が奴隷賣買をしたからではない。又南阿戰爭をしたのは、南アフリカの金やダイヤモンドを必要としたからである。これは疑ひない。又イタリアのエチオピア進攻に際しては、正義が問題ではなく、穀物、金、ナイル川の水、新生活の土地が問題であつた事も明らかである。それにも拘はらず、カルトウムの英國守備兵が回教徒に虐殺された事によつて、引き起された感情的作用がスダン戰爭にとつて重大であつた事は、ウイールヘルム帝のクリューゲル Krueger、南阿共和國大統領、一八八〇—一九〇〇年の對英抵抗の指揮者電報がブレン戦争にとつて重要な意義を持つて居た事と同様である。又、勝利と力の證明に對する純感情的憧憬と、ムッソリーニとイタリアの自我感情とは、アビシニア戰爭にとつて胃の問題の如く決定的であつたのである。戦争は原料と新しい植民地を求めて起る。併し戦争は感情的、人種的原因、民族的偏見から物發する。若し今日日本とアメリカとが、互ひに戦争の用意をして居る相手同士だとすれば、それは非常に現實的經

(145)

濟的原因によるものである。併しその上、八十年このかたの憎悪がつもりつもつて居るから——それは偶然に、否時としては止むを得ず——かゝる原因がなくても大事に至るかも知れない。日本とアメリカ、それは實に地理的概念ではない。國民ではない。血の衝突の場合にはそれは二國の小數の指導的人物である。精々二つの議會であり、二つの參謀本部である。秤量し計算する事の出来る腦を持つた人々、それと同時に同情もし憎悪もする心と神經を持つた人々、日本の運命を握る人々は、「白人種の危険」と云ふ先入觀を持ち、アメリカの指導的人物は「黃禍」と云ふ先入觀に捉はれて居る。この二つの危険が存在する。若しも智力ばかりが此の世界を支配するものとすれば、此の二つのものは幻影の様に消散するかも知れない。併し智力ばかりが支配して居るのではない。だから日本は日本をして開港を餘儀なくさせたのはアメリカの砲撃で、千八百五十四年の對米通商條約によつて、日本は初めて二等國の刻印を押された事、此の條約は免税によつて日本の自治を不完全なものにし、治外法權の制定、領事裁判權によつて日本を野蠻人と同列においた事——これ等の事を決して忘れては居ない。日本の支配者達もアメリカ、イギリスの支配者達と同じ人間であるから、アメリカの企業家がハワイに植民するために日本人の勞働を用ひ、何もないとを樂圖とし、此の島が生活の場所を提供する様になると日本人を放逐して、結局日本人の汗によつて開墾されたハワイを合併してしまつた事を決して忘れては居ない。千九百六年のアメリカの法律によつて、日本移民の子弟は特別な「黄色人種」學校に入る事を命ぜられて

(146)

居るが、日本人はこれを侮辱と思つて居る。日露戦争の結實を失はしめたのもアメリカの罪である。又、カリフォルニアの野菜栽培が、事實上日本人の專賣となり、日本人が土地の十二パーセントを所有するに至つてから、千九百二十年アメリカに於ける土地購入が禁止されて日本の移民の生存を奪つたのは、やはりアメリカの責である。ワシントン會議は日本にとつて精神的敗北を意味したが、他方に於て此の敗北は一種の經濟的勝利にも比肩される。何故ならば、大戰景氣が下火になつて四萬五千噸の大建造を中止する事によつて節約したものを有用に使ふ事が出来たからである。併し全アメリカが勝利の凱歌を高らかに歌ひ、新聞もラジオも市會の辯士も「今や我々は日本を叩きのめしたのだ！」と盛にまくし立て、居た時、果して日本は此の節約を喜んで居たのだろうか？ 若しアメリカに於て明白な比較をやり、米國艦隊の武装と日本艦隊の武装とを加へて説明するならば、合計してアメリカの大口徑砲は砲身直徑六十四米の砲と云ふ事が判明するであらうが、これに對して、日本のは三十二米の砲と云ふ事が判るであらう。口徑二十四米の砲しか割當てられて居ないフランスやイタリーは言はずもがなであらう。アメリカ人はまるで硝子球をいぢくつて、おやぢの地位を自慢する學童の様な仕ぐさをやつたのである。此の種の非常識は特に議會制度には避けられない。若し選挙され様と思ふならば斷定的な事を絶叫しなければならず、假令それがやがては必らず禍になつても、瞬間的効果を狙はなければならぬ。何故ならば、やがては恐らく反對黨の天下になる事は必至だからである。

(147)

日本の四十ノットに對して僅かに三十五ノットしか出せない。アメリカが日本の移民を禁止した三日後には、既に約千七百噸の快速水雷艇の建造が初められて居た（千九百二十八年には五十六隻が在役した）。これは各々速力四十二ノットで、六千哩の到達區域を持つて居たから、パナマ運河とアメリカ西海岸は脅威を感じた事になつたわけである。合衆國は今日に至る迄、此の武器に於ける明らかな劣勢を挽回する事が出来ない。アメリカは不安に驅られた。そして軍備工業熱に煽られて、「黄色世界」に對する憎惡の新しい波が押し寄せた。併しアメリカの大衆がその正義を確信して居た様に、日本の大衆も彼等の正當を信じて疑はなかつた。何故ならば日本人が蒙つて居る非常な壓迫を、嘗てどれ程のアメリカ人が感じた事があるであらう？ 東京や大阪の労働者街の嘘の様な慘狀、又はちつぽけな耕地から辛うじて必要なものを生み出させて居る日本の農民の絶望的な努力を、嘗てどれ程のアメリカ人が見た事があるであらう？ 鋼鐵王、石油王、軍需工場、貿易商會等の廣告で經營されて居るアメリカの諸新聞には、日本のかう云ふ窮狀に關する記事は見られず、日本の造船所や陣地の寫眞ばかりが載つて居た。アメリカ人の十萬人のうち一人でも、日本人をその本國で見た者はなかつたが、カリフォルニア、フロリダ、ニューメキシコ、アリゾナ等の諸州に於ては、日本人が苦力として上陸し素早く商人になり小百姓に成り、終に大地主になり了はせるのを見た事のあるアメリカ人は多勢居る。千九百年に合衆國に居た日本人は二萬四千人であつた事を全アメリカ人は知つて居る。それが二十年後には既に十二萬人になり、その中の九

十パーセントは太平洋沿岸に住んで居る。其處で彼等は非常な勢で發展し増加したから、アメリカ人は一億二千萬の自國民が、十二萬人の日本人のために大陸を追はれてしまつたのではないかと云ふ様な妄想にとりつかれる程であつた。かくて植民政策によつて氷炭相容れぬ敵となつた日本とアメリカは、一方その貿易競争によつて、互ひに益々兇惡な敵になつたのである。

既に十九世紀の末、日本が輸出を初めて以來、日本は多量の重要商品をアメリカへ賣つた。日本は既にアメリカ西部に於て益々成果を收め、既に大戦前には日本製品を船でカリフォルニア又はフロリダへ運ぶ方が、東部アメリカ工業地帯で買つたものを鐵道で運ぶより安上りであつた。千九百十年には、日本はヨーロッパから購入する製品の四分の一を——年約一億一千萬ドル——アメリカで得た金とヨーロッパ植民地へ賣つた品物の代價等で支拂つて居た。

それから世界戦争中、日本はアメリカと同様巨額の利益を得、競争がなかつたから兩國とも軍需品で負けず劣らずかせいだわけである。戦後の景氣がつゞいた間も萬事よかつた。そこで日本は大綿絲工業を持つて居たから、アメリカの棉を大量購入し、絹の輸出でこれを支拂つた。アメリカは富んで居たから、日本の絹産額の四分の三を記録的値段で買上げた。又臺灣の樟腦の殆んど全部を買ひ、これに對して石油と穀物とを供給した。

アメリカに日本の絹を買ふ程餘裕がなくなり、大恐慌が初まつてアメリカ向け輸出が益々不振になつ

て來ると、此處に色々の支障が起つて來た。何と云つても絹は奢侈品であるから、アメリカの購入は千九百二十六年から同三十二年の間に半分以上減じた。併し鋼鐵(日本は年々アメリカから約七十萬噸買つて居る)、穀物、石油等は奢侈品ではないから、單純にその輸入を止めてしまふわけに行かない。だから日本の對米貿易は片貿易になる一方であつた。日本は原料購入費の一部分でも支拂ふために、益々多くの工業製品をアメリカ市場に出さなければならなかつた。最早その絹を賣付けるわけに行かなかつたので、止むを得ずマツチ、自轉車、綿布、テニス靴(一足二十五セント)、罐詰、白熱電球などを賣出した。例へば千九百三十三年には日本の魚類罐詰七十萬箱がアメリカに入り、カリフォルニアの多くの漁者はそのために零落に類したので、止むを得ずアメリカ政府は千九百三十四年四月、日本をカリフォルニアのサンベドロ會議に招いた。併し此の會議はシムラ及びロンドンに於ける日英貿易會議の様に、何も得るところがなかつたばかりでなく、むしろそれ自身困難な局面を一層惡化させてしまつた。

合衆國には絹と樟腦はなかつたから、日本の兩産物は、「ダムピング」などと云ふ事もなく買はれたのであつた。ところが日本の魚類罐詰と既成品とは、はからずも憤懣の嵐を惹き起し、「黃禍」に對する新しい宣傳戰を開始させる事になつた。アメリカは國內市場がよい儲けをさせてくれ、大戦で餓え切つて居たヨーロッパ市場が大手を開いて待つてゐてくれてゐた間は、日本を少しも競争者と思はなかつたが、今や國內に失業者千三百万人を出すに及んで、千九百零六年には三千三百万の綿布を支那に賣つた

のに、千九百二十六年には大阪と云ふ競争のために、十八萬三千弗にすぎなくなつたなどと云ふ事が、ワシントンで思ひ起されるのであつた。今日アメリカの對支綿布輸出は、統計中に「各種輸出」の名稱の下に一括されて居る位微々たるものである。又アメリカの對ラテンアメリカ諸國輸出の數字は、千九百三十二年から翌三年に至る間に、二十三パーセントの減少を見せて居るのに、これに對して日本の數字は三十パーセント増加して居る。即ち千八百萬圓から四千七百萬圓に跳ね上つて居る事が判つたので、將來を懸念して居ると、果して千九百三十四年には、日本の對中米輸出は百七十パーセント増加した。同時に日本の對南米輸出は、前年に比べて百三十三パーセント増加し、對アジア諸國は四十二パーセント、對ヨーロッパは二十五パーセント、對アメリカは三十三パーセント、對オーストラリアは二十三パーセントの増加を見たのである。今日南米の諸市場に於ては、日本のビールがドイツビールに代り、日本の自動車はアメリカのそれに代つて居る。ところで合衆國は特に中米及び南米を、その獨占的な直轄地と見做し、英國人に對して苦戦をつけながら、次第に彼等の地位を奪つて行つたのであつて、金を貸し、軍隊を派遣し、革命を起させ、政治家を殺させたりした。その結果アルゼンチンからベネズエラに至るまで「ドル外交」を憎ましめるに至つたが、遂に恐ろしい精力で植民地國を造り上げた。すると日本人がやつて來て、此のアメリカ人憎惡を利用し、アメリカ資本の利子を儲けるわけになつた。日本は經濟的な重要地位を占めたばかりでなく、恐ろしい政治的地位までも手に入れた。既に千九百二十二年に、このヤンキーに對するメ

キシコの壯烈な闘士フランシスコ・マデロ大統領は、メキシコと日本の間の條約を結んだ。それによれば、アメリカの侵入を受けた場合、日本はメキシコに武器を供給すべき用意がある事になつて居たのである。千九百二十四年の夏、アメリカが日本の移民を閉め出したのに對して、メキシコは同年十月八日、廣くその國境を日本のために開放した。アメリカが今日恐れて居るのは、メキシコのソノラ地方にある日本人の棉農園、日本人が十二萬人居る日本人部落を持ち、千九百三十三年だけでも二萬三千人の日本人移民を入國させたブラジルの諸耕地、千九百三十三年四萬人の日本人を入れたブラグワイ——日本の統計によれば、既に千九百三十六年、棉七十萬梱を産出したと思はれる植民地——此のブラグワイにある日本人農園との競争、かう云ふ様なものばかりではない、アメリカが更に恐れて居るのは、日本人の成功の精神的影響である。これは實際當然な事である。

アメリカ航海委員長は次の様に言つて居る。

「我が國の情勢はあらゆる點に於て憂ふ可きものがある。文明世界に於ては孤立して居る。我が國は我が國自身を頼りとする事が出来るばかりである」と。

そして彼は大建艦計畫を提示した。合衆國は最早海軍力均衡の破壊に對してもこれを妨げず、軍備擴張を志し、その優勢な財力を持つて居た。既に千九百三十年の春、新しい海軍會議がロンドンに招集された。日本は戦艦の三・五・五の比率に對しても七・〇・一〇を要求したが容れられなかつた。併しその

代りに潜航艇と小巡洋艦の完全平等を得た。イギリスは軍備の資金なく、アメリカと協調する事が出来ず、日本人は千九百二十二年よりも恠巧になつて居た。今回も亦海軍將校の自殺騒ぎがあつたけれども、會議は少くとも日本の部分的勝利に終り、代表達は嚴重な警戒裡に東京へ歸る事が出来た。日本は潜航艇建造に邁進し、その海軍豫算は膨脹した。日本人は常に太平洋沿岸を「表日本」、對支那及びソグヰエト沿岸を「裏日本」と見做して居た。千九百三十一年、大陸に於ける紛糾は滿洲事變となり、日ソ間は著しく緊張したが、日米戦争はそれでも依然として主要問題たる事に變りはなかつた。既に日米戦争を論じた書物がよく買れて、大成功を得た事が證明して居る様に、これは海軍専門家ばかりでなく、全國民にとつても亦喫緊問題だつたのである。

「深淵に臨む日本とアメリカ」と云ふ某提督の著書中には、近い將來に於て日米の衝突は不可避である云ふ事が、四百頁に涉つて證明されて居るが、此の書物の發行部数は千九百三十四年に、七週間に十一萬八千部に達した。それから匿名著者の書(此の著者のために、第一艦隊司令長官末次大將が序文を書いて居る。)があるが、その内容はやはり對米戦争を主張し、四ヶ月の中に二百四十八版を重ねた。又、「アメリカ怖るゝに足らず」の著者で、批評家から「不滅の英雄史詩の作者」と稱されて居る池崎忠孝は、日本の海軍は數に於て劣つて居ても、迅速な攻撃と旺盛な闘争心によつて、勝利を得るに違ひない事を證明して居る。日本の陸軍省情報部員東福の書いた書物も、今日三十四萬部を賣り出して居るが、此の書の書名

にも、同様に「怖るゝに足らず！」と云ふ題名が選ばれて居る。「日本はアメリカを討たなくてはならないか？」と云ふ題目の下に、千九百三十四年に出了論文集で、陸軍諸權威の筆になる本があるが、此の本も、此の問題を無條件に肯定して居る。中島はその著「太平洋の大戦」で、未曾有の成功を収めた。と云ふのは、日本代表はワシントン會議の際六百萬ドルで買収されたと云ふ様な、人をして嘔然たらしめる幾つかの理論で、彼は尤もらしく見せかける事が出来たからである。

日本では唯行きずりの男も、みんな提督と同じ様に日米戦争を頭に入れて居た。そして日本は着々其の準備をして居た。

千九百三十三年の日本の海軍演習に課せられた問題は次の様なものであつた。

「カロリン島及びマーシャル島を占領した敵艦隊に對して、日本は如何にしてこれを防ぐか？」

演習は約一ヶ月繼續し、その費用は千百萬マークにのぼつた。日本の各艦はこれに参加し、殆んど總ての海軍要港は活動した。天皇自ら數日間防禦を指揮し、演習は終始防禦軍側の勝利であつた。

それから二三ヶ月後催されたアメリカ海軍演習で、合衆國海軍に課せられた課題は、敵艦隊に對してカリブ海及びバナー運河を防禦する事にあつた。敵は戰略上重要な四地點を占據し、理論上バナー運河を破壊した事になり、更に二十八時間を出ずして三要塞を落した。日本の海軍演習と同様に、アメリカのそれも觀艦式を以て幕を閉じた。ルーズベルト大統領と全閣僚出席の下に、合衆國初まつて以來の大觀艦

式がニューヨークの沖で催された。たゞアメリカ艦隊は霧のために三時間遅れて入港したが、盛大な事は實に盛大であつた。……實際、演習と戦争は同一ではない。又演習の結果に就いて公表したものは必ずしも本當でないかも知れない。若しアメリカ海軍當局が、バナー運河に新しい砲と新しい航空隊を必要とするならば、これまでの防禦では不十分であると云ふ事をまさしく演習によつて議會に證明するのである。又若し日本が新造艦費に事缺くならば、當局は現状では恐威を受けざるを得ない事をまさしく演習によつて國民に證明するのである。二國民の競争力に對する明白な批判は、戦前には先づ出来ないのであらう。戦争が初まつてからなら此の批判は出来るかも知れない。特に日本とアメリカの場合にはさうである。何故ならば、此の二國は特に艦船表を不明瞭にし、その艦隊の數字に假装を施す事を心得て居るからである。併し兎に角、日本の海軍兵學校は世界一嚴格なもので、例へば千九百三十三年、八千人の志願者の中、試験に合格したものは僅かに二百人に過ぎず、最近の十年間平均して受験生四十人に對して、入學者は僅かに一人であつたと云ふ事は何と云つても一考すべき事であらう。

良好な演習の成績、優秀な人的資源を持ちながら、日本の支配階級はアメリカを恐れ、建艦々々と躍起になつて居る。何故ならば、現在航空母艦と爆撃機とが各海軍の重要な要素になつて居るからである。ましてアメリカは世界航空の第一人者である。日本の提督達は言つて居る「敵の航空母艦が我が國に近づいて、その爆撃機を出發させるのを、我々はどんな事をしても妨げなければならない。六百萬の東京

市民の周囲には、關東平野の一千百萬の同胞がぎつしり取り囲んで居るのだ」と。

千九百三十五年の防空演習は、交通とか、市民の習慣とか、若しくは二三の個人の生命など全然顧みられずに、どの國でも見られない程の緊張裡に行はれたが、此の演習が證明した様に日本の防禦は未だ不充分である。千九百三十四年の演習ではロンドンが、千九百三十五年初めての演習ではパリが、理論上は爆撃のために粉碎された様に、此の時も理論上東京は敵機の襲撃を受けて破壊された事になったのである。

ワシントン會議後、疑ひもなくアメリカは定數外の「サラトガ」を航空母艦に改造したが、日本も亦二萬六千噸の巡洋艦「加賀」と「赤城」を航空母艦に改造した。併し此の二艦の中、一は僅か三十機、他は僅か五十機を搭載し得るに過ぎない。これに對して「サラトガ」は七十二機、今日世界最大の航空母艦であるアメリカの「レキシントン」は八十八機となつて居る。又日本の航空母艦は僅かに二十八ノットの速力を持ち、アメリカのそれは三十六ノットの速力を持つて居る。日本海軍は僅かに飛行機三百二十機しか持たないが、アメリカ海軍は九百八機を自由に出来る。更にアメリカでは千九百三十五年、「特殊機」百三十臺製造のために、七百五十萬ドルが用意され、陸上機も日本の約七百機に對して、アメリカには千五百六十機もある。日本の海軍専門家は次の様に言つて居る。「我々が一日待てば一日だけ勝利の見込は金持の米國側に有利に展開して行く。アメリカは我々を取り囲み、その大型飛行機で

我が沿岸に近付いて来る……」。アメリカがこの様に除々に迫つて来る事は、實際否定出来ない。それは日本が快速巡洋艦を造つた千九百二十四年には既に初まつて居たのである。當時アメリカの陸軍機三機が、ロウエル・スミスと、フリック・ネルソン指揮の下に、世界一周飛行のためにアラスカに飛んだ。これは三臺の爆撃機で、アラスカからアリューシャン群島、千島列島を傳つて東京に來り、更にヨーロッパに飛んだ。日本では盛大な歓迎をしたが、此の島國の誰一人として、其の當時類のない此の侵入の眞の目的を見破らない者はなかつた。つゞいてアメリカは、ホノルル、アラスカへ無着陸編隊飛行を行つた。それから間もなく、——全く突如として——千九百三十五年八月十七日、ウェイク島の空港が開かれたのである。

ウェイク島は千七百九十六年以來初めて、太平洋海圖に發見される。此の島は千八百九十九年以來忘れられた米領無人島で、三つの環狀珊瑚礁と、一つの危険な暗礁から成り、長さ四哩に過ぎず、巨木密生し、無数の蟹、喧しい塘鵝が住んで居る。併し泉一つ、港一つない。かうして太平洋の真中に忘れられ、住む人もなかつたが、遂に千九百三十五年五月アメリカ汽船「ノース・ハーヴン」が其處へ二千噸の建築材料と機械を卸し、海岸の瀉に上陸を決行し、かくてウェイク島は突如として、「汎アメリカ航空會社」の第三番目の、而も最も重要な基地となり、サンフランシスコ、廣東線第三の着陸地となつた。八月の末、最初の四發動機備付けの「汎アメリカ、クリップバー」機がウェイク島に到着し、サリヴァン大尉

が此の新根據地を檢閲した時、其處には既に到達區域一萬軒の放送局、一流の設備のある測候所、中央發電所等が出来て居た。此の發電所は、海水から飲用水を得るための電氣蒸溜機に送電し、使用人のバシガロー、旅客のためのホテル等で使用する冷却装置、冷蔵庫、電氣式料理等を經營して居る。又、完全な設備が出来て居る修理工場、入の豫備モーター、解體された飛行機二臺等があり、總てのものは金に糸目をつけず整備されて居た。そしてウェーク島に常住の八人の「汎アメリカ」の使用人は、全く偶然に例外なく、嘗て軍用飛行家だった者ばかりであつた。

日本は此の電氣式料理場などに關心を持たなかつた。唯次の事を確認したばかりである。即ち、該檢閲機は、ミッドウェー島出發後正味八時間八分でウェーク島に到着したと云ふ事、これである。アメリカの此の海底電線揚揚地點がかう云ふ名稱を持つて居るのは、殆んどアメリカとアジアの中央に位するからであつて、桑港から五千二百五十軒、東京から五千四百軒の所にあり、従つてウェーク島は東京から僅か三千軒の距離に過ぎず、日本の委任統治地の境界から僅かに二百五十軒、前ドイツ領マーシャル群島から僅かに三百軒に過ぎないのである。ウェーク島の竣工によつて、日本は今や三方から脅威を受ける事になつた。即ち、グロム、ハワイ及び米領マルクス島からである。ウェーク島は今日會社線の根據地即ち、桑港——廣東線の着陸地となつたが、明日は果して爆撃機の基地、東京への空路の一着陸地とならないとも限らない。

(160)

前アメリカ陸軍航空長官ウィリアム・ミッチェルは、千九百三十四年十月彼の言を印刷させ、一般に喝采を博したが、日本が對米戦を參考するのに、こんな言葉はもうすつと以前から問題として居なかつたのである。ミッチェルの言葉とは次の様なものである。

「日本は我々の最も危険な敵である。日本の首都と全重要工業中心地を壊滅させるためには、少くとも優秀な武装を施した新しい特殊機と飛行船五十臺を要する……」

又、武器賣買の調査にあつた合衆國聯邦議會の議員の前で、アメリカ海軍當局がした説明など、日本はこれを問題としなかつたのである。その説明によれば、

「アメリカの諸會社は——デュボンがやつた様に——日本へ武器、彈藥を供給するのが望ましい。何故ならば、かうすればアメリカ海軍は絶えず日本の武器の種類や量を熟知して居る事が出来るからで、若し日本がヨーロッパから買へばさうはいかないであらう。」

(161)

既に千九百三十四年四月三十日、荒木陸軍大將は「對米戦争は國民的義務になつた」と言ひ、それから間もなく高橋海軍大將も次の様に書いて居る。

「アメリカは我々を窒息させる。便々と待つて居ないで早くやれば、勝利は必らず我々のものである。併しさうするためには、敵が萬が一にも我が近海へ現はれる事がない様に、日本はその防禦線を擴張

しなければならぬ。」

日本は英國に對して、經濟的決戦とこれに伴ふかも知れぬ軍事的成行を考慮してゐるが、アメリカに對しても同様に海上の決戦を考へ、躍起になつてその準備をして居る。千九百三十四年五月九日、大角海軍大臣は、「日本は東洋の制海權を獲得すべく確固たる決心をした。」と公言したが、此の事あつて後同年十二月、日本政府はワシントン海軍條約廢棄を公式に通告し、英米兩國の意志に反しても、兩國との海軍平等を貫徹せんと欲する旨を聲明した。そして英米が協同してこれに答へ、アメリカの海軍が北太平洋で演習をやると、千九百三十五年七月二十日日本の遠洋訓練が初められた。それは嘗てない廣範圍なもので、「進路をカムチャツカにとり、アラスカを目ざす」プログラムを持つたものであつた。參加軍艦は百九十二隻、新飛行機二百臺で、六百二十七萬圓が準備された。天皇の從兄弟にあたる伏見大將宮が作戦を指揮された。此の演習の最中、日本では颱風のために九百萬弗の損害を受け、三百人の死者を出したが、演習の目的は達せられた。千九百三十五年十月の初め艦隊が歸國した時、全員の中六十人は甲板上で波にさらはれて行方不明になつて居た。併し理論的には、アメリカ艦隊でさへ千島沖の一戦で敗北した事になり、少くとも理論上では、再び日本海軍の優秀性が認められた。總ては日本人の誇りと満足に終つたが、唯一つ不足があつた。それは燃料の供給である。日本のペンデンと石油の缺乏は此の演習に依つて一段と明らかに現はれたのであつた。

(162)

近代の艦隊も航空機も、原油とペンデンが無ければ戦争は出来ない。日本自身僅かに七つの油源を持つて居るが、高々平時需要の七分の二を充すに過ぎないので、日本の海軍當局は夙に「此の石油の奴隸状態」から逃れようと努力して來た。日本の輸入商松方がソツイェトと契約して、ロシア石油を輸入して來り、日本ではペンデン一リットルにつき八錢しかなくなつた。此の値はアメリカの五分の一であり、今日フランスでも此の位する。既に千九百二十四年以來、英米の石油トラストの勢力は限られて居たが、千九百三十四年に至つて、更に石油專賣權が出來たのである。日本は輸入商人等に、彼等の費用で油脈を興し、常に四ヶ月間維持する事が出來る貯藏量が國內にある様に貯油しておいて貰ひたいと強請した。オランダ、イギリス、アメリカ等は色々外交方策を講じたが、海軍當局は頑として折れなかつた。のみならず現在では、石炭液化の方法を絶えず改良すべき新試験所を、ペンデン税で建てる事に成功して居る。ベルギウスの *Friedrich Bergius* 一八八四年生人造石油發明者の合成石油の發明が世に知れると、日本では欣喜雀躍した。今日では既に大人工造ペンデン工場が建てられて居る。かくて日本の海軍は依然として活動が出來、日一日と強力になつて行く。日本の武庫は艦船の部分品でいっぱいになつて居るが、それらは二三週間で組立てられて、新艦になると云ふ英米の非難が假令再吟味されて居なくても、日本は外交的術策によつて、その艦隊を海軍會議で決定された噸數以上に造り上げる事を知つて居る。此の事は何と云つても動かす可からざる事實である。千九百三十四年三月、ロシアとトルコの親交がひどく

(163)

日立つて來ると、日本は東京駐在トルコ大使館附陸軍武官フォード・ベイに對して、五億フランの借款と海軍契約の計畫を提示した。これに對してトルコ政府が關心を示すと、此處に日本艦隊のスタムブル訪問、松島海軍大將のケマル・アタチュルク訪問となつた。そしてトルコが一萬噸の巡洋艦二隻、潜航艇四隻、驅逐艦四隻を日本に注文した事を突然耳にした世界は驚愕したのである。新聞によつて知られて居ないところの事實は次の通りである。即ち、日本政府はこれ等のものをクレヂットで供給し「若し來るべき危機到來までに支拂手續がすまない場合は、萬一の事があれば日本自ら此の小艦隊を黒海で用ふべき」權利を保留したのである。

かうした總ての事を、日本の敵は拱手傍觀して居たわけではない。千九百三十四年十一月二十三日、ロンドンの海軍協定が始まるや、英米の代表者の間には何時間も秘密の協議が行はれ、週末休暇はサー・ジョーンシモンによつて細目整理に費された。そしてそれから十一月二十六日、日本側が平等問題の根本的討議の細目詳論に入らんとするや、彼等は英米の作つた越え難い障壁を發見した。英米側は唯専門的事項を討議しようとしたのである。會議は決裂した。日本は公式に千九百二十二年の海軍條約廢棄を通告し、これに對して米國は嚴密に吟味して造り上げた行動豫定を以て答へた。その第二項は次の通りである。

「合衆國は英國と、最も公正なる協力をせん事を欲するものであり、平等に對する日本の要求に對し

て、二國は共同の反對をなすものである」と。

次にハル國務長官はこれに附け加へて言つて居る。

「マクドナルドは、英國政府はアメリカとの親善關係及び協力に最も重きを置くものであると斷言したが、我々もアメリカ政府は心から同様な事を欲すると確言する事が出来る。」

これは決して外交的禮辭に終らなかつた。千九百三十四年十二月二十二日、ユナイテッド、プレス紙は、對日干渉については英米間に完全な一致がある、と云ふ事を判然と知らせたのである。そして遂に千九百三十五年の末、再び新海軍會議が招集せられるや、それは本來形式的のものに終るに過ぎなかつた。日本側は軍備の平等を要求したばかりでなく、東京の海軍専門家は、殊にその提案を次の様に造りあげた。即ち、各國の戦艦は單に沿岸防備に必要なだけあればいい、行動半徑の大きな艦船、例へば戰闘艦、航空母艦、重巡洋艦等はむしろ無くしてしまひたいと云ふのである。日本は支那及び一般に東洋では實際これで完全に自由行動をとつて來たのだし、英國直轄領の防禦をも不可能にしたのである。

併し日本の此の提案に對しては協調が成立たず、日本はそれより五年前國際聯盟を脱退した様に、千九百三十六年一月十六日、ロンドン海軍會議から脱退した。英・佛・米・伊諸國はそれでも更に討議を續行した。地中海の形勢が危険に見えただけでも、英伊の専門家は徐々に歩み寄り、やがてアビシニア問題が起つたのにも拘はらず、伊太利は英米の對日防禦陣にしつかりと這り込む様に見えた。イギリスは

ふと石油封鎖問題を忘れたが、イタリーの海軍代表もジブラルタル海峡中立に對する要求を忘れた。何故ならば、ジブラルタル中立要求の理由は、日本が軍備を固めれば、その敵國もこれに劣らずやるからである。さて、海軍協定廢棄通告に對するアメリカの返答は、アリューシャン群島のグッチ、ハトパーに於ける「北太平洋のシンガポール」建設であつた。此處はアメリカ、アジア間に位し、日本の海岸から二千哩の距離にあつて、此處に「一大橋頭堡」となる港を造らうと云ふのである。此の港はアメリカ艦隊の半數を收容するに足る位の大きさをも有し、ドック、タンク、水上飛行機格納庫等も備へて、實に容易ならぬ脅威となるべきものである。又アメリカの對日回答はハワイに於ける新要塞となつた。何故ならば、アメリカはフィリッピンを放棄しても「太平洋のジブラルタル」であるハワイは守らなければならないからである。

ダイヤモンド・ヘッド——アメリカのジブラルタル

ハワイ諸島は八つの島から成り、その最大なのがハワイ島である。全島火山の基底をなし、今日では四十以上の死火山を抱擁して居る。併しこれが白人世界にとつて危険なのは、その地質學的構造のためではない。ハワイは日本に對するアメリカの最も重要な要塞であり、世界に二つとない人種の混血釜である。千五百二十七年スペイン人が彼地に上陸した時、ハワイ島に住んで居た三十萬餘のポリネシヤ

人や、クック船長が千七百七十八年此の群島を再発見した時居た約二十萬の原住民の中、今日でもなほ一萬八千人が残つて居る。一方これに對して、日本人、支那人、ポルトガル人、フィリッピン人等が安い勞働力として、白人の企業家に連れて來られた。現在のハワイ住民三十五萬七千人の中、日本人十四萬五千人、フィリッピン人六萬四千人、支那人三萬人、白人四萬五千人で、其の他の三萬一千人はあらゆる人種の雜種と云ふ事になつて居る。

クックがハワイに上陸した時、其處には南洋の何處にも見られる様に、裸體の褐色の人間が幸福に、満足して生活して居た。彼等は白人達の意圖を感付いて居るらしかつた。何故ならば、クックが土人等の財貨に烈しく心を惹かれた時、彼等は彼を殺してしまつたからである。此の様に大きな危険を感じたので、千八百年頃土民の各小國家はカメハメハ王の下に結合した。併しそれにも拘はらず白人の宣教師が來て、蠻人に木綿の衣服を着せ、高貴な材木を賣り、王に助言を與へた。この宣教師の息子達が一種の白人貴族となり、日本人を使つて砂糖農園を開かせた。商人の子で混血兒のジョン・ドミニスは遂にハワイ土人の女王リッウオカラニと結婚する事に成功し、彼は「イオラニ宮殿」に入り、かくてハワイの獨立の外観を奪ふ總ての用意が出來た。そしてドミニスの死によつて、ハワイ共和國の大統領になつたのは、彼の子孫ではなくて今日殆んど總てのバインアップルの雜誌に見られる名前を持つた男であつた。合衆國が此の群島を公然と占領するまでは、最初アメリカ人サンフォード・バラード・ドルが大統

領として治めて居たが、「隷屬條約」に署名してからは、初代アメリカの總督になり、その居所は相變らずイオラニ宮殿にあつた。

さて豊かな植民地を獲得する此の種の方法は、他に例がないわけではない。ハワイがアメリカのものになつたのと殆んど同じやり方で、マダガスカルはフランスのものになつた。此處では女王を白人の憲兵と結婚させたのである。ハワイの砂糖農園も、バインアップル栽培も、日本人の勞働で植民した此の島の豊かな收益も重要ではない。重要なのはハワイの軍略上の位置だけである。アメリカと日本との間にはハワイ諸島の港以外に港がないと云ふ事が重要な點なのである。そして日本の十二隻ばかりの潜航艇と驅逐艦を例外として、燃料を補給したり、港に立寄つたりしないで、太平洋を往復横斷出来る軍艦は今日一つもないのである。さういふわけで此のハワイ群島はデブラルタルであり、太平洋の焦點と云ふ事が出来る。

シンガポールやデブラルタルは非常に秘められた事が多く、又外界から遮斷されて居るが、これに反して此のハワイでは如何に太平洋制覇の戦争準備がされたかが、非常に明らかに現はれて居る。アメリカは敵としてアメリカの地位の難攻不落な事を確信させるために、世界中のスパイの目に、大要塞、軍港、飛行場、潜航艇根據地等を故意にさらして置くのではないかと思はれる。我々は何の苦もなくパール・ハーバーも、主島オアフの軍港も見ることが出来る。其處にはいつも百八十臺の飛行機が出發待期をして居る。又工場施設があつて、短時日の中に、此の倍もの新飛行機を製造する事が出来る。潜航艇が列をなして並び、世界最大の乾ドックの長さ、三百五十米のコンクリート製水渠は同時に弩級艦一隻と巡洋艦一隻を收容する事が出来る。その放送局は世界中に放送出来、アメリカで最も重要な守備兵三萬人のために薬葺の廠舎がある。そしてこれ等の總てのものを見下して、休火山ダイヤモンド・ヘッドの黙々たる噴火口が屹立して居る。今や火口はコンクリートで固められ、其處に砲列が布かれて居る。そしてその中には十四萬の兵を容れるだけの餘地があり、其處からは水雷も海岸砲も發砲出来る。

若し日本が實際に南洋やオーストラリア侵略に出掛けたならば、これだけの要塞が何等かに役立つであらうか？

主島オアフと並んで、百九十哩離れて更にヒロ港があり、ホノルルから九十五哩のところにかウアイ島がある。若し日本側が迅速な行動をとれば、これ等の島々を艦隊根據地にする事が出来、しかもオアフの要塞から攻撃を受けずに出来る。其の上ハワイの住民三十五萬七千人の中十四萬五千人は日本人である。しつかりした組織にまとめられ、アメリカの諸學校と並んで、彼等の學校も煽動者も持つて居る日本人だ。

パール・ハーバー要港では、勿論かう云ふ事は話されて居ない。其處には豪勢な生活が見られる。海岸に打寄せる雄大な怒濤を越えて、飛行機はブン／＼と唸り、或ひは又果しない山を越えて飛んで行く。

其の山は十年前まではまだ禿山だったが、今や整然とバイナップルが植ゑられて居る。さうかと思ふと潜航艇が毎日射撃演習を行ひ、弩級艦は小型飛行船に煙幕を張らせてその艦姿を隠蔽して居る。

私がバール・ハーバーに一週間居た時、知合のアメリカ海軍潜水夫と、以前からの知人の高級仕官に出遭つたが、彼等は私を幾つかの射撃演習場に連れて行つた。

アメリカが現在ハワイで使用して居る水雷は、灰色の長い葉巻形十七呎水雷である。その後部の五呎には複雑な機械がいつばい詰つて居て、發射物と云ふよりも寧ろスウィス製の時計に似て居る。そして一筒につき、正價二萬六千マークかかる。

我々は素晴らしい上天氣の朝、かうしてバール・ハーバーをK入號に乗つて出發した。銅色の太陽がかがやき、海岸には十呎の甘蔗が揺れ動き、數人の日本人漁師が昔のサムバンに乗つて、潜航艇の根據地マガデン島の近くに見られた。かすかな軟風がフォード島から吹いて居たが、海はよく凩いで居た。やがて我々が射撃場に到着すると、其處には大きな浮標的があつた。

私は水雷室へ入つた。今しも Waine が砲身から出たところであつた。此處の水雷は皆名前を持つて居て、Waine と云ふのは「女」を意味する。そして此の鋼鐵魚も亦、多くの女のように「魔物」らしくあつた。操縦の複雑な焦點がキチンと合つて居なかつたのであらう。戸が開いて一人の中尉が中へ向つて叫んだところによると、美しい「Waine」は十呎海中を滑つて行つて、首尾よく目的のところ

で浮び上らないで、泥中に突込んでしまつたと言ふ。恐らく水本能の取り方の誤謬であらう。兎に角魚雷は水底に突込んで、百二十五馬力のモーターを持つた身體を珊瑚礁の中へ掘り埋めてしまつたのである。

二萬六千マークがさう易々と飛んでしまつてはたまらない。だから此の迷子の水雷を取りに潜水しなければならなかつた。さてアメリカの海軍では——大部分の他の海軍も同様だが——將校は船外で潜水夫を指揮する事は出来ない。潜水は自由意志である。ハワイの近海には鮫がウヨウヨして居るし、非常に危険な潮流や深淵がある。何故ならば、ハワイ群島は五千米の水深から盛り上つて居るからである。

アメリカの海兵團は勇敢な事は仲々勇敢であり、その一人々々は一流のスポーツマンだから、憶病など云ふ事は薬にしたくもない。併し魚雷のための「二弗」にその生命を賭ける?……となると問題だ。こんなわけで「Waine」を探し出さうといふ事を申し出る潜水夫はなかつた。ハワイでは水夫も労働者の様によい賃金をとつて居る。時には幾分無精な者も居る。此の時恐らく彼等は特に此の中尉に好感を持たなかつたわけではなくて、中尉を困らせる事が面白かつたのであらう。それとも又、ハースト紙に繰返し主張されて居た様に、實際に反軍國主義的宣傳がアメリカ海軍内に行はれて居るのであらうか? 兎に角「Waine」はそのまゝになつた。二萬六千マークのために海中へ飛び込む者はなかつたのである。かくてむしろオアフの美少女と散歩するに如かずとして我々は歸途についた。

此の體驗は決して一般に適用されないものであるが、啓發するところの多いことは疑ひない。ところで此の體驗後手にした新聞には、實に又も日本の事が多く載つて居たのである。

「日本で新たに造られた戦争用機械が使用されると、日本の陸海軍の兵は彼等の勇氣と自己拋棄の精神の勇敢な證明をする事が出来るであらう。最近の日本の發明は新式水雷で「それは普通の潜航艇から發射されるものであるが、その中一人のパイロットが居て、正確に目標に向つて舵を取るのである。パイロットは其の生命を犠牲にしなければならぬが、同時に目標の命中と云ふ事だけは確信出来るのである。ところで公示された四百の役目に對して、直ちに五千人以上の候補者が申出で、選ばれた四百人は既にその任に就いた」云々。

新聞の記事は以上の通りであつた。千九百三十四年二月此の新式魚雷の試験で八人の將校が生命を失つた。此の八人も日本の二萬三千九百人中の海軍將校である。彼等は二人宛、軍艦の小さな飾りけのない僧房に似た船室に住み、狭い木製衛舎床の上に寝て、食事毎に殆んど乾燥米以外には食へない。彼等は月に殆んど百八十マーク以上の俸給をとらず、それどころか「彼等の船の改良」のために、月々四十マーク乃至五十マークを出したり、自費で機械を買つたりする。彼等の一人が私に次の様に言つた事がある。「それでいいのです。我々は家族を養ふ事が出来る位充分な俸給は殆んどとれません、此の我々の節約によつて、今年には新たに軍艦が三隻出来ました。」

ダイヤモンド・ヘッドにしてもアメリカの富豪連にしても、その大砲や飛行機と、日本人の此の堅忍不拔の諦め切つた英雄的精神とを天秤にかけて、同じ重さにする事が出来るであらうか？

此の日本人——何等の躊躇なく生命を犠牲にする覺悟を持つて居るばかりか、更に重要な事は、一生を何の喜びも楽しみもなく送り、唯、國家に仕へるために全生涯の苦難に堪へる覺悟を持つた此の日本人と比較出来ると思ふだらうか？

日本は軍備をする。日本の敵も同様に軍備をする。併し必らず來るべき大戦に於ては、要塞、大砲、金の貯藏、同盟等は問題ではなく、寧ろ以前にもまして戦争の當事者と交戦國人の精神が問題となるであらう。日本は全一體であり、如何なる犠牲にも欣然として赴く國民である。日本の大敵たるアメリカは、今なほ金と機械は現代の神であるといふ信念にとらはれて居る。世界的不況とニューディールとは此の信念を震ひ初めた。併し依然として、アメリカと日本との精神的態度の間には大きな距りがある。そして依怙最負のないところ、若し戦争と云ふ事になれば、アメリカにダイヤモンド・ヘッド、甲鐵巡洋艦、航空艦隊があつても、日本の軍備の方が優れて居る。

然らばヨーロッパはどうであらう？

既にドイツ民族は犠牲の精神を徹した一體となり、イタリア國民も一人の指揮者の下に團結して、新しい生活地獲得の戦ひに乗り出して居る。缺乏はヨーロッパ諸國を、日本が迫る道と同じ方向に導い

たのである。世界は總身の傷から血を流し、人々は到る所で絶望して新しい手段を求めて戦ひ、混沌から逃れる道を求めて居る。併し如何に實力戦の形が多様であらうとも、テオドル・ルーズベルトやアレキサンダー・ヘルツェンが既に五十年前に何を言つたとしても、又彼等の後に出た他の先見の明ある政治家が、如何に數萬言を費して徒勞に終つたとしても、次の事は今日争ふべからざる事實になつて居る。即ち、我々の世界の歴史は古代に於ては地中海の歴史であり、ロムルス以來「大西洋時代」になつたが、それが今や「太平洋時代」に入つた——此の事實は動かす事が出来ない。二十年前日本の大政治家加藤子爵が言つた事は適中して居る。曰く

「日本はその望むと望まざるとを問はず、太平洋の覇者とならなければならぬ」と。

近い將來に於て必ず衝突が起るに違ひないと云ふ事、豊かなインドネシア群島や、イギリスがその大部分の護謨と錫を得て居る馬來半島のための決戦、オーストラリアの自由な植民地や印度の購買者大衆を求め戦争が目睫に迫つて居るといふ事——かういふ事は極東の色々の事件を観察して居る者には最早誰にも否定出来ない。此の戦争が經濟的のものになるか、或は又公然たる武力戦になるかに就いては未だ言論區々であるが、人々は日本の發展力は恐らく支那に於て疲弊するであらうといふ望みをかけて居る。

併し日本の將來、従つて世界の將來を豫言しようとして、太平洋上の争鬭の成行を豫言しようとする

(174)

る事は無駄である。我々は既に新しい日本の頭と腕、甲冑と運動具とを學んで知つて居るから、殘されたものは唯一つである。即ち、日本がその二百五十年の眠りから醒されて以來辿つて來た道を振り返つて見る事、日本の發展の過去から現在及び來るべき「危機」に處しての發展の戦術、範圍、方向を推量する事——これである。

(175)

第二部 南方への渴望

第八章 臺灣

南洋に於ける公然たる植民

日本人の先祖となつて居る大部分の人種は、ポリネシア諸島とマレー群島から出て、島傳ひに北方に移り、遂に日本に定住したもので、其處には風土的にも地理的にも、越え難い境界があつたのである。北海道でさへ豊富な森林、肥沃な平野、豊富な魚類や礦物があるにも拘はらず、日本人にとつては餘りにも北國的特色を持つて居た。本州の人口密度は想像出来ない程で、一平方軒に百七十人乃至九百九十人の割であつたが、北海道の人口増加は實に遅々たるものであつた。三十年も熱心な宣傳が續けられても、一平方軒に辛うじて三十五人の割である。

根が南方生れで、永久に暖い海洋を憧れて止まない日本人は、開港のために實際に移住や植民が出来た。根が南方生れで、永久に暖い海洋を憧れて止まない日本人は、開港のために實際に移住や植民が出来た。根が南方生れで、永久に暖い海洋を憧れて止まない日本人は、開港のために實際に移住や植民が出来た。同時に臺灣に向つた。既に七世紀に、日本の海賊が日本とフィリッピンの間にある琉球列島に根據地を置いたのであるから、先づ此の戦略上重要な地方の占領が考へられたわけである。既に千八百六十九

年、明治天皇は支那の主権の下にあつた琉球王を日本の華族に列したが、この事は宮廷の儀禮に従つて、琉球王をして天皇の側近く、即ち東京の宮廷内に生活する義務を負はせた。そして琉球列島を監督しないで放置しておく事は出来なかつたので、同時に其處に日本の總督を任命する事になつたのである。支那はこの様な小事に大騒ぎをやらなかつたし、宮廷生活が琉球王に非常に氣に入つたので、琉球列島はかうして日本のものとなつた。

この様に易々と成功したのに味を占めて、日本は千八百七十年小笠原諸島と硫黄島諸島を手に入れた。この様に易々と成功したのに味を占めて、日本は千八百七十年小笠原諸島と硫黄島諸島を手に入れた。この様に易々と成功したのに味を占めて、日本は千八百七十年小笠原諸島と硫黄島諸島を手に入れた。しまつた。これは以前、一時日本の流刑地となつて居た島である。そして英米佛の諸國が、これを承認すべきかどうか争ひ合ひ、白人列強がお互ひ同士の嫉視のために、一緒になつて日本を威嚇する事を妨げられて居る間に、日本は南方進出の實に重要な第一歩を印した。即ち、千八百七十四年に於ける臺灣占領がこれである。

ポルトガル人は支那の東南海岸の前面に横はる臺灣を「恰好のよい」島だと云つたが、この臺灣は大きい島ではない。長さは四百軒あるかないかで、幅は百二十三軒に過ぎない。併し琉球列島と臺灣を占有すれば、黄海を握り、上海・天津への航路を支配し臺灣海峡を扼する事が出来る。と云つても日本の占領當初には、勿論誰もこんな事を考へる者はなかつた。當時ヨーロッパ諸國はドイツの再生と勃興を餘りにも嫉妬深く觀察して居なければならなかつた。臺灣は白人世界にとつて、何は扱ておき航海者の恐

怖として、首を漁る蕃人ばかりの島と思はれて居たのである。日本が最初に臺灣遠征をした頃、この島は世界の恐るべき海賊の巢窟であつた。一ヶ月として、船が襲はれ全乗組員が虐殺されない月はない。不幸にして外人が臺灣の海岸に上陸すれば、滅茶苦茶に切りさいなまれた揚句、その頭蓋は長い竹の棒に突きさされて、勝利者の家の前に地にさしておかれた。この臺灣のマレー原住民の蕃人は、何百年となく侵入者に對して激戦を續け、白人も何百年となく占領を試みたが、その都度失敗に終つた。千六百二十四年、オランダ人はこの「臺地海岸」臺灣に植民地を建設した(臺灣はそれより少し前オランダ領となり、其の當時臺灣と云ふ名稱で呼ばれ、今日再び此の名稱を持つて居る)。併し彼等の近代的な武器でさへこの生蕃に對して何もする事が出来なかつた。彼等はこの裸體の蕃人達を何度も銃砲で攻撃したが、いつも蕃人はオランダ人から武器を奪ひ、彼等を殺す事に成功したのである。

間もなく蕃人は丹念に火薬を集め、森林の一部を開墾してこれを蒔き、オランダの銃を植ゑ付けた。何故ならば彼等はこの武器の豐作を期待したからである。この豐作は實現しなかつたが、オランダ人も亦兜を脱いた。三十五年の精魂盡した戦ひの後に、なほ移住者の手に餘つた者は、支那人によつて驅逐された。支那人は南部に植民し、蕃人を煩はさず、たゞ租税を取るばかりで、白人の船を襲ふ邪魔はしなかつた。

併し蕃人のかう云ふ残忍な行爲が大強國の船に對してされると、その後では必らず討伐が行はれた。

さうしてフランス・イギリス・アメリカ等の艦隊が屢々臺灣に來る様になり、多くの彈藥が用ひられた。時には水牛や黒豚が殺されたり、藁葺小屋が焼拂はれたりした。併しその度に蕃人達は彼等の安全な山の隠れ家に入つて、美しい煙火を眺めて喜び、軍艦は手を空しくして去つて行くのであつた。

かう云ふ状態は永い間續いたが、とうとう臺灣の生蕃が數人の日本人を殺害した。日本政府は一隻の軍艦を派遣せず、この種の苦情を大官から大官へ持ち廻はすのを常套手段として居る不得要領な支那政府に抗議もせず、訴へ出た者達が事件を忘れてしまつた頃、俄然一軍を臺灣へ送つた。しかし砲撃はさせず、道路を建設させ、要塞を築かせた。かうして臺灣を占領した。そして臺灣の森林は高貴材に富む事、金山や銅銀等が多い事、石炭石油を發見した事などを確信すると、日本は最早臺灣を動かさなかつた。そして、支那がこの時になつて、いくら巨額の賠償を申し出ても、臺灣を離さなかつた。かくて臺灣は最初は非合法的に、次に千八百九十五年以來は合法的に日本のものとなつた。日本は三十年間あらゆる白人強國が望み、相互の嫉視から成功しなかつたところのものをやつてのけたのである。即ち臺灣の富源を獲得し利用する事になつたのである。日本は軍隊を上陸させたが、支那及び白人の抗議が餘りひどくなつたので軍隊を撤退させ、その代り益々多くの商人、工業家、宣傳係等を臺灣に送つた。基隆鑛山獲得のために千八百八十五年、フランスはクールベール指揮の下に一小艦隊を臺灣に派遣し、今なほフランスの軍用墓地在三ヶ所もあるが、この鑛山の石炭はやがてすつかり日本へ送られてしまつ

た。臺灣は公式に日本領になるずっと以前から、既に日本の綿布を買ひその砂糖によつて日本人を富まして居たのである。

千八百七十四年から同七十八年に至る討伐によつても、千八百九十五年に於ける日支平和條約による法式的移譲によつても、更に經濟的滲透、精神的滲透によつても、日本はこの植民地に對する完全な支配權を握る事が出来なかつた。この植民地は今日、樟腦は世界産額の七十五パーセントを出し、その森林は評價し切れない價値を藏して居る。又その砂糖産額は世界第四位に位し、石油、銅、金銀、硫黄等は年々千七百萬圓の産額がある。併し臺灣に和平を維持するためには、今日でも相當の苦戦をしなければならぬ。此處では四百五十萬の支那人と二十五萬の日本人とが、依然として血に餓えた二十萬の山岳人種たる蠻人の脅威を受けて居る。彼等はホリ社地方の大部分を支配し、百年前と變らず外人侵入者と戦つて居る——最初はオランダ人及び支那人と、そして今は日本人と。

勿論五十年前には、これ等の蠻人はこの島の火山地方ばかりでなく、海岸にも住んで居た。そして日本人は蠻人の主だつた村落のあつた所——五十餘の藁葺小屋——へ基隆市を建設した。この町には今日約八萬の住民があり、整然たるアスファルト道路やコンクリート岸壁等を持ち、その貯藏所、造船所、穀物倉庫等で、ロマンチックな灣を取り圍んで居る。此處から出る鐵道線路は蠅蜒千八百軒、茶、煙草、甘蔗、稻等の田畑の間を走つて居る。一年を通じて殆んど變らない濕潤な暖かさのために米は年三回の

收穫がある。又今日では一萬六千軒の道路が火山の谷々、大森林を貫いて居るが、その開拓のためには、世界一の冒険と見られて居るケープルカーまで出来て居る。この島の豊富な原料は、臺北、基隆、臺南等に、豪壯な大厦高樓、莊嚴な官廳、世界最美の二に數へられる庭園を持つた病院等を現出させた。アメリカ人の製材所、ヨーロッパ人の別荘等の直ぐ近くには、天を衝くばかりの山、深い峡谷、神秘的原始林の一部があり、其處にはなほ臺灣生蕃が住んで居る。如何に多くの飛行機があり、教師が居り、道路があり、又日本の機械があつても、この臺灣の未開なマレー人の間では、敵の首を持つて居る者ばかりが男と見なされる。そして巡査、木樵、電信技手、教師等が一人で居る時、よくこの信仰の犠牲になる。

千九百十年、同十二年及び十三年、日本は大「掃蕩遠征」の用意をし、生蕃絶滅を試みた。支那人の時代には障壁が造られて、其處で晝夜監視して沃野を守る役目をしたが、近代的な日本人は鐵條網を張り、それに高壓電流を通じさせた。日本人及び土民から成る六千人の武装警官が送電を見張つた。併し生蕃は、鐵條網の下にトンネルが造れる事や、竹柵は電氣を傳へない事を發見し、虐殺は續けられた。千九百二十九年には、霧社で二百人以上の日本移民が虐殺され、千九百三十二年十月にはホリ社地方の更に恐るべき殺戮を報じた電報が、又もや世界中に達した。即ち此の事件で死者二百五十名、重傷者三百八名を出したのである。十月三十日、私がフカ社(Fukata)の兵營に行つた時、丁度二臺の飛行機が形勢

偵察に出発すると云ふので、私は通信員として同乗させて貰へた。先づ玉蜀黍畑が眼に入り、それから稲作の臺地續きの丘陵、高い竹のバリケードをめぐらした藁葺小屋、その中央に煙雲、この煙雲が割れると、血の様に赤い布切を高い竿につけた蠻人の軍旗が見えた。あらゆる槍と天幕の棒の尖には頭蓋が刺さつて居る……やはり霧社は救ひの道もなく、再び生蕃の手に落ちたのだ。何故ならば、この蠻人が現はれた所では、女も子供も老人も一人として殺されないからである。

飛行隊の報告によつて、三日の後二千六百名の武装嚴重な軍隊が霧社に向つて出發した。蒸し暑い氣候の時、崩れ易い山の小道を登るのには、一歩進むのも仲々の困難で、進軍は遅々として涉らず、前哨が破壊された村落に到着した時最早濠抜けのからであつた。蠻人達はとつくに彼等の山の隠れ家に逃れて居た。そればかりでなく絶えず同じ様な仕打ちを繰り返すのであつた。——植民部落の襲撃、殺害、奪略、祝盃を舉げてのお祭り騒ぎ、人跡稀な山谷への逃亡等々——こんなわけで蠻人と戦闘すると云ふわけには行かなかつた。どうしても一人々々捕へてしまはなければならぬ。と云ふわけは、彼等は殺戮をすますと小分隊に分れてバラ／＼になつてしまふからである。併し此の征討の時はずうまく生蕃の頭目とその妻の一人を捕へた。彼等は此の島の全住民と同様に暗褐色の皮膚をしたマレー人種である。身體は大きくすらりとして居て、男の方は先づ美しい方だ。此の男は短い黒い着物で大腿部を蔽ひ、胸には箱んだ飾りを斜にかけ、頭日の日印として頭に貝殻で出来たふさのついた帽子を載せて居た。一口も口

をさかす、通譯が明朝斬首する旨を言つても、臆一つ動かすのではなかつた。

此の夜は野營の周りに火をたき、一叢の木の後では、霧社の殺された人々のために、兵士達がなほ墓堀りをつゞけるのであつた。切斷された屍體が山砲の砲架に載せられて、續々運ばれた。女も子供も年寄りも男も、彼等は大抵運動服を着て居た。生蕃が襲つた時、霧社は丁度運動會をやらうとして居たところだつたからである。喪に服する者は一人もなかつた。と云ふのは皆殺されてしまつて、此の慘虐行為を逃れて生き残つた者はなかつたからだ。我々は屍體の苦しみに歪んだ顔を一つも見ると出来なかつた。何となれば一つとして頭のある屍體はなかつたからだ。言語に絶した恐ろしい、血だらけの胸體だ！

此の間に無線電話係は、高く燃え上る火の側に坐つて、臺灣の首都臺北に居る役人に向つて報告を打電した。臺北の役人達は、蕃地とは反對にアメリカ式の豪華な自動車に乗つて鏡の様なアスファルト道路を走らせ、役所では鋼鐵製家具にとりまかれて事務をとつて居るのである。

翌朝、グルリと取巻いた人垣の中に、一人の將校が進み出で、上着を脱ぎサーベルを吟味した。人垣の中央には墓穴の側に生蕃の頭目が膝まづいた。彼は一本の細腕をしばられ、もう一本で頭と膝とをしつかりと結びつけられて居る。二人の將校が軍法裁判の判決を讀みきかせた。曙の光にきらめく軍刀の閃光、末期の叫び、頭先から爪先まで刑人の血を溶びて驚いて飛びすさつた一人の兵士——かくて

臺灣の原住民族と移民間の戦闘のエピソードは又過ぎ去つて行つた。敷時間の後、我々は臺北に歸つた。すると其處の商工會議所の大玄關に、次の様な文章がデカ／＼と書いてあつた。

「二十三萬の市民が生活し勞働し、富と進歩と安寧とが支配する當市に於て、日本政府に對しては何等の不安、恐怖、迷信ある事なし。」

此の題字が實際であると云ふ事、既に四十年も此の地に於てはさう認められて居ると云ふ事、日本人があらゆる困難をおかし、フィリッピンやニューギネヤの土人よりも取扱ひ難い原住民を征服して、臺灣を豊かな植民地にする事に成功したと云ふ事實は、やがて植民地を持つ總ての強國を極度に不安にさせたのである。

臺灣の氣候が日本人に合ひ、この新しい土地が彼等に米作を可能にさせ、海は魚類を供給し、彼等が太陽の光を充分に浴びる様になると、彼等は如何なる植民地的特性を發展させたであらう？ 日本人の臺灣に於ける成功はこれを證明して居る。日本の占領によつて、生蕃の襲撃がすつと少くなつたが、これに反して、それ以來イギリス人、オランダ人、アメリカ人等の不安は益々大きくなつた。ボルネオやニューギネヤの大部分は、未だ事實上未開人種の支配下にあり、彼等は奥地に住んで、臺灣の蠻人と全く同じく外國人と見れば殺害斬首する昔の習慣を今も持つて居る。臺灣土民征服の成果の騎虎の勢を驅つて、日本人はボルネオやニューギネヤの蕃人も開化しようとする下心があらはれないか、などと云

ふ危懼を抱く者がなかつたらうか？ 日本は臺灣占領によつて、一流の軍略的據點を獲得し、小笠原諸島の占據とハワイに於ける日本人の不斷の増加とによつて、太平洋上に於ける日本の勢力が危険な程度に達したと云ふ事——ヨーロッパ諸國は突如として此の事實を見てとつたのである。そしてフランスとイギリスが躊躇して居る中に、アメリカは行動に出た。當時の大統領はマッキンレーで、新アメリカ帝國主義の闘士であつた。アメリカの探検家はインドネシアの何處にも見られ、アメリカの金鑛漁りはハワイと同様ニューギネヤをも識つた。此處では金、石油、銅、錫等が発見されたが、殊に北方の土地では栽培出来ない此處だけの植物が繁つて居た。即ち、稻、椰子油、大豆、マニラ麻、棉、バインアツプル等である。既に臺灣の砂糖、染料木、樟腦、タバコ等が日本の手に歸して居る今日、どうしてこれ等のものを日本に委かされようか？

千八百九十八年七月、隸屬條約によつてハワイはアメリカ領となり、合衆國は日本人植民の此の重要な據點であり、主要目標たる土地を決定的に奪い取つた。キューバに暴動が起つて、此の島の知識階級がスペインからの獨立を主張すると、アメリカは好機逸すべからずとし、スペインに最後通牒を發して此の島の明け渡しを要求した。かうして千八百九十八年米西戦争が起つた。アメリカ艦隊はフィリッピンのカヅイト灣に入り、そこに居たスペインの古い木造船二隻と舊式の砲艦とを撃滅した。千八百九十八年十二月十日、パリに於ける平和條約が成り、アメリカは二千萬ドルの賠償金を支拂ひ、これに對

してフィリッピン、キューバ、ポルトリコが米領になつたのである。マドリッド政府は、これによつてその太平洋上の勢力を失つたものと認め、未だ手許に残つて居るものまで賣つたので、千八百九十九年カロリン、マリアナ、バラオ等の島がドイツ領となつたのである。嘗ては強力であつたスペイン植民地帝國は此處に滅亡した。日本は包圍され、その南方發展は妨げられた。少くとも日本の公然たる發展は阻止されたのである。と云ふわけはインドネシアの經濟的宣傳的浸透が益々進捗して來たからである。

第九章 舊獨領南洋諸島に於ける日本の行政

南洋諸島に於ける日本の成果

スペインは軍略上經濟上自國にとつて無價値になつた散在的領土の放棄に依つて、政治地理的必然性と其の事情とに對する大きな理解を示したが、アメリカのフィリッピン占領はドイツの南洋諸島購入と同じく非論理的なものであつた。

ドイツの植民思想の大岡士であるカール・ペーター博士は、千八百八十四年簡潔な文章で次の様に略説して居るが、その内容は今日ヒルマー・シャハト博士も繰返し言つて居るところである。

「原料根據地、貨物交易及び植民地の擴張は、ドイツの様に人口過剰な工業國にとつて已むを得ざる

必要である。」

南洋諸島が購入された當時、既にリューデリッツとペーターは、アフリカに領地を得る事によつて、この言葉を事實上實現して居た。即ち、己が國民を養ひ、過剰人口を植民するために土地を獲得して居たのである。併しペーターは顧みられず、忘れられて世を去り、ドイツの植民の大目標は見失はれてしまつた。ところで、ドイツの大戦前に於ける植民政策は自由主義的なもので、明確な指針なく、對外政策と同様デグザツの進路を辿り、威信と云ふ事ばかり考へられた。マリアナ、マーシャル諸島を買ふには買つたが、餘り遠隔の地にあるために、原料供給も經濟がとれず、植民地にもならなかつた。例へばマリアナなどは、既に弓狀的配置と古代蛇紋石の産出によつて、東アジア弓狀列島に屬すべきものであり、地質學的にも國勢上からも元來日本に屬すべきものである。然るにドイツはスペインから二千五百萬ベセタで買つた千四百以上の群島に植民し、此の南洋國のために大量の精力と金を費した。一方同時にアフリカの土地は少し施放棄され、サンシバ條約によつて本國に近い黒人大陸の關係深いドイツ領植民帝國は分裂する事になつた。

避くべからざる事が遂に起つた。ハワイとフィリッピン、それから英領、佛領等に取り圍れたこの南洋諸島は維持不能に陥り、既に千九百十四年に失はれたのである。しかもドイツの手から離れたばかりでなく、白色人種全體から失はれたのである。何故ならば、同盟國は日本を戰爭に引き入れるためには、何

を措いても南洋に於ける領土擴大を約束しなければならなかつたからである。平和談判になつた時、勝利者の諸國は氣が變つたり、グズ／＼したりして、イタリーに分け前を拒んだ様に日本にも拒まうとした。併し日本政府は斷乎として動かされなかつた。日本は獨領南洋諸島に對して實際上の勢力を持つて居たのだ。既に千九百十四年及び十五年にこれを占領して居たのである。ところでウィルソンに依つて聲高く叫ばれた「非併合」の原則と、領土擴張に躍起となつて居る英、佛、日の主張とを一致させるために、何か適當な方法を發見しなければならなかつた。そして千九百十七年の覺書では、他の英國植民政治家よりはつきりと没收の眞の背景を放棄した南阿のスマット將軍は一つの切掛け策を考へ出し、千九百十七年、「英國の世界的帝國にとつて重要な取引の將來に於ける安全を考慮して」「ドイツの植民地組織の破壊」を要求し、千九百十九年のバリ平和會議に際して、委任統治地の設定を提案した。ドイツとトルコの海外領土は國際聯盟の所有に歸し、聯盟は統轄のために更にこれを特別の國に與へ、その統治の監督をすると云ふのである。かくてマーシャル、バラオ、マリアナ諸島は日本に與へられ、一括して南洋廳の管下に置かれた。つまりこれ等の諸島はドイツから奪はれて、これに對してドイツよりもつと物騒な敵である日本に軍略上實に重要な地點を與へてしまつたわけである。南洋植民地はドイツにとつて耐久力の無い餘りに分散した軍事的にも全く價値のない領地であつたが、日本にとつては根據地の領となり、日本を論理的にマレー諸島へ即ちイギリス世界帝國の心臟に向つて延長する橋となつたのである。

ドイツ第一の極東通カール・ハウスホーヘル教授は次の様に書いて居る。

「ワシントン會議の準備に際して、日本と合衆國の間に行はれた非常に根本的な公然たる論議は、確かに次の事を明らかにした。即ち、合衆國の勢力圏の中央、所謂「四邊形地」(グッチャーハーバー、ハワイ、サモア島のペーペゴ)の中央とフィリッピンの間の日本領群島の要塞化は戦争を意味するであらうし、同様に日本にとつても、日本の滿洲國に於ける特殊の目的を承認しない事は戦争を意味するであらう、と云ふ事を明らかにしたのである。そして此の二國は相互の顧慮と斷念に基づいて一致をみた。かくて千九百二十二年以來、南洋の日本領分地に於ける防禦施設に對しては何等重大な事が起つて居ない。香港やフィリッピンの場合と殆んど同じである。併し今日出來上つた根據地の何と迅速なる事よ。此の根據地を作れば、入念な測量とその記録作成によつて前以て用意された群島の渦の中にあつて、二十四時間以内にU潜水艦及び驅逐艦數隻、航空母艦一隻、大砲・鐵條網其の他の器具を滿載した運送船數隻が到着する事によつて、一艦隊全部が『大きな團體で腹ペコで』日本近海に現はれる前に、既に半ば弓折れ矢盡きと云ふ様な有様——恰もゲーゲネルス海峡に於ける聯合國側の如く——になる程役に立つのではないだらうか？」

南洋諸島の軍略的意義は、太平洋の地圖を一瞥すればはつきりするが、此の前ドイツ南洋植民地は、

此の他にやがて日本にとって最大な經濟的意義をも持つことになった。

白人經營の大航路で、嘗てマーンシャル或はカロリン諸島、ヤップ、マリアナ等に寄港する船は一隻もなかつたし、此の南洋領土に達するためには、個人としてはドイツから三ヶ月半、アメリカからは二ヶ月もかゝつたものである。ところが日本人は、先づ近代船の定期航路を編成し、今日日本郵船會社の大旅客貨物船は横濱から四日半で此の委任統治地に達する。何處であらうと珊瑚礁が爆破されて港口が作られ、タナバクでは三千噸級の船を入れる棧橋が築造された。又例へばマリアナ群島中のサイバン・テイニアン等の島の港へは、以前は土民の小舟で行くのがせいとであつたのが、今では非常に安全になつて日本の旅行家にとつて絶好の旅行地になつて居る。多くの商人が渡つて来て、今日では南洋情緒など殆んど感じられず、全く日本内地の島の様である。現在、サイバン島には八千人の日本人が住み、此の二島だけでも、先づ年々二萬二千噸の砂糖、七萬リットルの「サイバン製、純オールド・スコッチ・ウイスキー」、これと略々同量の「オールド・ポート」等を出して居る。此の「スコッチ・ウイスキー」と「オールド・ポート」は、糖蜜から造られ、非常に美味でアジアの到る所に顧客を見出して居る。

日本は南洋委任統治地によつて、英佛の植民地から椰子の乾果（ココナ）を輸入しなくてもすむ様になり、此のココナで大人造バタ工業を創設する事が出来た。今日日本の殆んど總てのレモンはラムトリク島とフェイス島から來るもので、東京で食べられるバナナの大部分は其の他のカロリン諸島から來るの

である。甘蔗、ジャム、ボタン製造用の貝殻等も日本に行く。又ドイツは輸送の困難のために、南洋諸島の磷酸鹽層を殆んど掘らせて居なかつたが、日本は直ちに到る所に機械化された工場を建てた。アンガウル島（Angaur）の磷酸鹽山から立ち昇る薄い灰色の砂煙は、すつと遠くからも望まれる。其處では軍需工業にも農業にも同様に重要な原料が、年々七萬噸も生産されるのである。群島の各地から労働者が此の小さいアンガウル島に來るが、日本はこれを有効な宣傳に利用して居る。トラックを建て、ラヂオを備へ、運動會だスポーツだと云つては島民を忠良なる日本臣民に育て上げて居る。到る所にテニスコートが出来て、此處で裸體のカナカ族が素晴らしいバックをやつて居る。かうして彼等の闘争心をテニスによつて滅殺させるのである。日本人は南洋諸島に殆んど統治機關と云ふものを持たず、三つの群島に對して百十九人の警官を置くだけで居る。千九百十四年には南洋領土の二萬二千平方呎の中に僅か三千人のドイツ移民が居たのに過ぎなかつたが、今日南洋諸島（Netherlands East Indies）と云つて居るのは官廳の意味でなく、著者は南洋委任統治地を指すには二萬八千人の日本人が居て、彼等が支配する約七萬九千人の土民からよい儲けをして居る。此の土民等は、日本の安い工業品と、ココナ、乾魚、砂糖、バナナ等を喜んで交換するのである。

占領後間もなく、ルムング島やヤップ島の日本商人の家の前や、ヤップ島内に入る所の日本人移住地などに挽臼に似た大きな丸い石板が置いてあつた。これは真中に穴があげられてあつて、太古の「大錢」

であり、今日でもなほ土民からは認められて居る貨幣なのである。これ等の石はパラオ島から出るが、直徑六十種から六米位迄のものがあり、各々その大きさによつて評價され、一番高價なものでも三百圓位の値打のものである。併し土民にとつては、嘗て傳道教會や百貨店が、スペイン人やドイツ人に與へた以上の信用を持つものなのである。

パラオ島から出る玄武岩の破片はヤップ島の貨幣になるのであるが、このパラオ島は又南洋諸島の中央政廳の所在地である。此處には「南洋廳官房」があつて、東京にある「拓務省」の直管下にあり、長官々郎も此處にある。殊に此處には南洋諸島の大きな語學校がある。ヤップ島の住民はパラオ島やトラック島の住民の言語を解しない。アグリカン島又は鳥島の者は、ボナベ島やクサイエ島の人と話す事が出来ない。マリアナ諸島の土民に苦心して説教を教へた傳道師はマーシャル島に於ては使ひ道にならないし、ヤップからマリアナへ持つて行く事も出来ない。日本人は到る所で土民の教師を雇ひ、一步步々徐々に、唯々行動によつて、あらゆる新設學校（今日まで六十七校）に於て日本語も教へる様にした。そして二十年の周到な宣傳の後、今日では日本語は南洋諸島の一般語となつた。唯ひどい年寄りは今日でもドイツ人を思ひ出す者が居るし、それ以上の老人にはスペイン人の事を思ひ出す者も居る。ヤップ島ではサンフランシスコ、メナド、グズム、上海等に行く海底電線が合流し、その無線電信局は全太平洋交通を傳達し、その自然港、トミラ灣は南洋一の波止場であるが、日本人は今日此の重要な交通の中心地ヤ

ップを支配して居るのであるから、益々ミクロナシア人の思想と行爲を支配する事になるのである。ドイツが南洋に築いた白人の根據地は、最早廢棄されたばかりでなく、既に殆んど忘れられてしまつて居る。南洋に於けるフランスの植民地は、フランス政府の無關心のために次第に亡びて行き、その貿易は支那人に依つて白人から奪はれてしまつた。この支那人と云ふのは、アメリカ人がハワイの農園開拓のために日本人を雇つた様に、白人の利権漁りが千八百八十年タヒチ島の燐酸鹽地の労働者として連れて來たものなのである。今日では苦力から商人になつた者もあつて、佛領南洋諸島のコブラ全産額の九十八パーセントは支那人のものである、カヒチで取引されるワニラの百パーセントは支那人の手を経て居る。例へば千九百三十二年、支那人一人だけでも緑ワニラ八十二噸を買ふ事が出来たが、これは七十萬マートの支出に相當するのである。タヒチには白人經營の事業が三つあるが、それ等は辛うじてやつて行けるに過ぎない。ところが支那人の「店」は二十五もあつて、ありとあらゆる日本製の最新の品物を豊富に並べて居る。タヒチと其の他の佛領諸島間の航路の船は、黄一色（黄色人種ばかり乗つて居る事）である。彼等は千九百三十一年までは殆んど支那人ばかりであつたのだが、それ以來は日本人が多くなつた。

それならアメリカはどうであらう？

日本の南洋諸島の北方に、アメリカは植物の生長しない島、海底電線の陸揚地グズム島を持つて居

る。アメリカ人は西部に於ては日本の委任統治地をハワイ諸島から威嚇する事が出来、南部にはサモアの一部を領して、此の島の五萬六千の人口の中一萬人を支配下に置いて居る。千八百九十九年ドイツ領になつた其の他の部分は今ニューギニア島の委任統治地になつて居る。併し千九百二十六年以來、全サモアには反白人種の力強い運動が起つて居る。所謂「マウ」(Maui)といふのがそれである。最近歸國したドイツ人ベーター・ラックハルトが述べて居る様に、此の國民的運動は次の様な事實によつて、その活動の出足を挫かれてしまつた様に思はれる。即ち、此の運動は同時に土民の指導的評議員會フェーブル(Febler)に、行政官廳そのものに、又白人移民の同様な反對運動に向けられた事、一方では一部異教徒との婚姻や親戚關係によつて、此のサモア人の事件に關係をもつた白人達をも包括してしまつた事、又それ自身好意的ではあるが、軍總督リチャードソン大將の顧問として、勢力を持つて居る傳道會社を敵に廻した事——これ等の事によつてこの運動は初め成功しなかつた様に見受けられた。

最も人望のあつた指導者、前サモア王の子孫タマセス(Tamasese)の追放によつて、大示威が起されたが、これも亦一網打盡的逮捕と追放、英國驅逐艦の應援、三人のサモア人派白人望家の隔離によつて再び水泡に歸した。その結果は殆んど全島に亘る納税ストライキ及びイギリス商品とイギリス人との取引に對するボイコットとなり、印度の例に従つて一般的「非協力運動」となつた。判決を受けた者及び追放にあつた者の歸還が遅れた事は、文字通り疾風の様な大示威を呼び起したが、千九百二十九年十二月

二十八日に起つたこの様な一事件に當つて、ニューギニア島の警察はまるで氣も顛倒した様になつて、武装しない民衆のデモの中へ機關銃を發砲した。そして數十人の負傷者と二十人の死者を出したが、その中にタマセス及び此の運動の他の指揮者も入つて居た。此の事は當然鬭争を益々尖鋭化させ、國家主義者をして一種の独自の政府を作り、棍棒武装をした防護梯團(Protektorat)ナチス武裝團の一)を組織させる事になつた。次に世界の不況の結果は、此の嘗ては幸福であつた島に迄及んで、益々此の運動を支持した。コブラ輸出が不振になつてからは、バナナの輸出がサモアの經濟活動の主たる對象になつたが、ニューギニア島政權はこれを利用して輸送を獨占し、土民の運送業者から、納税拒否による滞納金を彼等のバナナ調達の價から引き去り、住民を壓迫した。一方このマウ運動の方では直ちに同志に對して、政府船への貨物輸送を禁止し、罰金、組合からの除名、耕地の破壊等の威嚇によつて、あまりいゝ顔をしない土民や困つて居る土民にこれを強制した。

日本がサモアに於ける白人の難儀を大なる關心を持つてデツと眺めて居る事は、勿論明らかである。アメリカが此の島の一小部を失ふ危険にさらされて居ると同じく、ニューギニア島は今日その委任統治地を失ふ懼れがあり、又假令ドイツの南洋領土は皆無になつたにしても、此の地位を得んとする鬭争であるのであつて、嘗ても獨領諸島を一つ残らず獲得せんとする鬭争があつたのである。一方日本の南方に位するアメリカの重要地、膨大な富を藏し、軍略的にも非常に重大なフィリピンは、千九百三十四年何

等の闘争もなく放棄されてしまった。そしてこれは日本及び全アジア半球の眼には屈辱の頂點ではあつたが、日本にとつて幸先のいゝ勝利の前兆であり、白色人種の来るべき敗北に對するよい證明であつた。アメリカがハワイを占領した時、それは日本にとつて横面をなぐられた様なものだつたが、日本は自己の行くべき道を知つて居た。併し同時にアメリカの艦隊がカヅイト灣に入り、臺灣から僅かに四百軒、日本内地から僅かに千八百軒、アメリカの一番近くの港から一萬三千軒の距離にあるフィリッピンを占領すると、日本では誰でもアメリカは何等の明白な理由なく日本を窒息させようとするのだと信じる様になつた。アメリカがスペインからフィリッピンを奪つた時、日本の全國民は此の行爲の中に、何かの作爲、地理的にも政治的にも正しくない動機を見てとつた。フィリッピンは日本を南方から切り取つてしまつた。併しそれはいはばアメリカの勢力範圍から切り取つたのではなくて、オーストラリア及びインドネシアのイギリス、オランダの植民地に向ふ道を塞いだのである。日本の南方發展が一體アメリカ人にとつて何の關係があるのであらう？

ところで千九百三十四年に於けるフィリッピン放棄は、全く内政的原因によつたものであるが、これと同じく、千八百九十八年に於ける占領も亦、自國內に於けるアメリカ政府の行き詰りを原因としたのである。ドイツが南洋植民地を必要としたのは、その増大する艦隊の活動態を靜めるためであつたが、これと同様に前世紀の末に於けるアメリカ艦隊は、沿岸警備のためだけに餘りにも強大すぎた。此處に

於て假令提督や水夫を「相應に維持しておく」と云ふ理由以外に何等の理由がなくても、遠方の領地を必要としたのである。アメリカの軍艦はマニラ迄行くのに三十二日かゝつた。それは石炭業者と石油業者のポケットに金を入れてやつた事になる。遠隔の植民地のために當然新しい船を必要とし、鋼鐵工業は大きな儲けをした……。

ヨーロッパ諸國は恐らく如上の事情を理解したであらう。併し日本には合點が行かなかつた。三井や三菱があつても、日本の考はアメリカのそれとは違つて居た。日本にとつて、アメリカのフィリッピン占領は、「激しい憎惡の現はれ」以外の何ものでもなかつたのである。それは未だ自國內にさへ植民し切つて居ない一つの國家によつて、重要な生活地を封鎖される事であり、自らその富の中で殆んど窒息せんばかりの敵のために餓死させられることであつた。

第十章 日本とフィリッピン

日本の南進に對して放棄された壘壁

フィリッピンは大小千以上の島から成り、アジアとニューギネヤの間に横たはつて居る群島である。その一部は未だ探險されず、僅かにその三分の一が名稱を持つて居るのに過ぎない。フィリッピンは二十九

萬八千平方呎の多くの島で密林が多く、千五百二十一年ポルトガル人マガリャイス(Cabral)の発見以來、これ等の島々をめぐつてポルトガル人、スペイン人、アメリカ人、フィリッピン人の闘争が行はれた。そして諸國が此の島に力を入れるのは、それだけの價值があるからである。即ちマレー諸島の西部の延長と見られる此のフィリッピン群島には、米、砂糖、煙草、マニラ麻、高貴材、バナナ等が産出するからである。種々の果實は住民の口のために實り、椰子の木は彼等に輸出のための食物、衣服、油、建築材、コブラ、纖維等を供給する。子供の身體位太い竹は、同様に多方面に利用される。又此の島には蘭科植物が九百種もあり、ジャングルには猛獸の危険がない。多くの木からはゴムが流れ出るし、附近の海は世界中最も魚類の豊富な場所であつて、大きないせ、蝦、親指大の高價な蟹等を産する。フィリッピンは植物にも豊富で、僅かにその十分の一の土地が耕作され、景氣のよかつた千九百二十四年でさへ耕地は僅かに十二パーセントの三萬七千平方呎であつたと云ふのに、その千二百萬の住民を豊かに養つて居るのである。

かう云ふわけで、此の様な富、この様な天國が日本の國境のすぐ近くに轉がつて居るわけだ。だから既に日本の發展當初に移住者がフィリッピンに來て、臺灣から僅かに四百呎のミンダナオ島に上陸し、ペルギーの五倍の大きさを有するこの地域を開墾し初めたのは少しも不思議ではない。日本人は臺灣で集めた經驗を巧みに利用して、この島の土着の生蕃、未開の回々教徒「不平黨」(Lolo)の反抗を鎮壓す

るのに成功した。彼等はダバオ海の周圍六萬ヘクタールに「アバカ」即ちマニラ麻を植ゑたり、砂糖農園やバナナ栽培を經營したりした。今日でもダバオで見られるのは日本人ばかりで、日本の航路は此處に住む二萬人の日本人を定期的に横濱と聯絡して居る。又アメリカの郵便局には日本人の使用人が居る。併し事實上マニラからの魚類供給を獨占して居るツイト灣の日本人植民地やダバオ、フィリッピン全體の日本人商人八千人等、——此の様なもの、これだけの大きさを持つてはゐるが、日本とは比較にならない程豊穡な土地のほんの一小部分に過ぎない。此の豊かな土地に就いては、アメリカ人さへも千二百萬どころか五千萬の人口を容易に養へると云ふ事を認めて居るし、日本人は此の土地は一億人を容れる餘地があると主張して居る程である。

ルソン島には大鐵鑛脈があり、ミンダナオ島には鐵と金、北ルソン島には鉛、亞鉛、銅、銀、石油、硫黄等の鑛床がある。皆原料ばかりである。アメリカが豊富に持ち、日本が切實に必要を感じて居る原料、アメリカがそのために三十七年前、フィリッピンを占領し、又そのためにこれを放棄した所以のもの正にこれ等の原料なのである。

アメリカがフィリッピンの砂糖と銀を手に入れようとした時、フィリッピン人の獨立運動を氣にかける者は一人もなかつた。スペイン人に對して起されたキューバ人の暴動と土着のフィリッピン軍人の叛亂とは、スペインに對する宣戰布告の口實とされ、又アメリカ人のマニラ占領の際、反スペイン派の土民

の援助を得たりしたが、やがてこの「解放者」は壓制者に變化したのである。戦争が未だどつちつかずの時、アメリカ政府は千八百九十八年六月、フィリッピン共和国設立を支持したが、パリ平和條約が調印されるや、此の共和国はアメリカの海軍々人によつて早く片付けられてしまつた。アルギナルドの下にフィリッピン人の叛亂があつたが、これは多くの血を流して鎮定された。外人に對する暴動闘争はそれから幾度も續いた。併しアメリカはフィリッピンの砂糖を必要としたから、その代りに自動車、冷蔵庫、蓄音器等で支拂つた。そしてフィリッピンは日本の植民に對しても日本品の輸入に對しても固く門戸を閉ぢたアメリカの一版圖たる事をつゞけた。アメリカはフィリッピンへの日本の植民をあらゆる奸策を弄して妨げる事に努め、日本人の数が六萬四千人から三萬八千人に減じて、フィリッピンに生する一萬二千人の白人が益々富んで來ると、フィリッピン人の反抗は益々衰へ、彼等はその運命に従ひ初めた。そこへ世界的不況が來て、原料はその價値を失ひ、砂糖は有り餘り、銀の相場が下落した。此處に於てアメリカ政府は俄然フィリッピン人に對する人情を見出し、千九百三十四年春フィリッピンに對して殆んど無理やりに獨立を迫つた。かくてルーズベルト大統領は三月二十八日、フィリッピンに完全な自由を與ふべき法令に署名した。此の法令は十年の試験期を経た後、フィリッピンに完全な獨立を與へるもので、千九百三十五年九月以後彼等自身の大統領、昔の自由闘士たるマニユエル・ケズンを元首と仰ぐべき事を許したのである。

(200)

ルーズベルトは止むを得ずこの署名をした。それは彼の國民に對する人道的感情とか、上院の人類愛とか云ふものによつてではなく、自國內で自由な行動をとり、多數の投票を得たく思つたので署名せざるを得なかつたのである。彼は日本との關係を緩和しようとして署名したのではない。彼の前任者の帝國主義が昔流の「ドル外交」によつて、富の無計畫な蓄積をさせたからである。

フィリッピンはその甘蔗と農産物の輸出によつて生活して居る。そして又アメリカの植民地として、勿論無税でこれを合衆國に賣つて居る。千九百二十五年に於ける砂糖は二千六百萬噸、千九百三十二年には既に五千二百萬噸も賣つて居る。

キューバも亦、殆んどその砂糖ばかりで生活し、その唯一の販路は合衆國である。併しキューバは公式に獨立國であるから、アメリカがキューバ砂糖を輸入するには高税をかけてゐる。さう云ふわけで、フィリッピンの砂糖輸入は次第にキューバの輸入を壓迫し、キューバの殆んど總ての農園と精糖工場とはアメリカの資本家のものであるから、彼等はその巨萬の富が徐々に失はれて行くのを知つた。そこで彼等はフィリッピンの獨立宣言、ひいてはフィリッピン砂糖に對する關稅を要求した。あらゆる壓迫手段を講じて、彼等の銀行にキューバを隸屬させて居た同じ人々が、俄然熱烈な自由の友となり、あらゆる手段を以てフィリッピン人のために反帝國主義者となつた。彼等の知己の上院議員は、三十年間もフィリッピン壓迫のための軍事クレヂットを實施して來たのに、この同じ上院議員がこんどはフィリッピン

(201)

の放棄を強制したのである。砂糖關係者に従つたのが農業者、煙草栽培者、モンタナの銀鑛山主等であつたが、既成品工業家は反對した。フィリッピンは實に千九百三十三年にさへ六千六百萬ドルに上るアメリカ自働車、電氣機械、紙、鋼鐵製品を買つて居たからである。併しニュー・デイルは既に工業法「NRA」に依つて工業家を敵にして居たから、農業者をも失ふと云ふ事は不可能であつた。今日では公正な見解を持つて居る米國の政治家や、理想主義的革新家でさへ、上院議員と下院議員の助力を得て統治するより他は何も出来ないものである。ルーズベルトはフィリッピン放棄が世界政策にとつて持つべき意義をよく知つて居た。併し結局背に腹は代へられず、彼は讓歩し、フィリッピンはその自由を得た。それ迄日本の植民は妨げられ、三十七年間も憎悪が重なつて居たのであるが、今やその地位が投げ出された。權力、數十年もの間の無暴な、顧慮するところなき權力、そして其の得た所は結局ゼロだ。此の事は日本人にとつて、白人が其の場合で受けたかも知れぬ魂の傷手より輕蔑すべきものに思はれるのである。

フィリッピンは先づ理論的には獨立したが、アメリカ人はなほその艦隊駐泊地を放棄せず、千九百四十四年以後、即ちフィリッピンの完全な獨立以後も必要によつてはこれを保持すべき事をフィリッピン人に交渉したのである。一方日本人が高雄港とその港口は釜港の「金門」よりも更に印象深いを完成し、臺灣の南端に強力な小要塞を造つて、臺灣が重要な防禦地の一つ、恐らくは又日本軍の襲撃根據地ともなつた時、

アメリカ人はカツイート灣を固め、マニラの近くに強力な小要塞マッキンレーと、大要塞アンボアンガを造つた。そしてこれ等の根據地は千九百三十四年三月の法令によつてさへ破毀されなかつた。これ等のものは「この島の中立を維持するために」、依然として利用されると云ふのである。日本人はかう言つて居る、「アメリカは依然としてフィリッピンに權力手段を持つて居て、フィリッピンをちやうど骨を手に入れても喰ふ事が出来ず、その骨に近づかうとする者に飛びかゝる犬の様に取扱ふ事が出来るのだ」と。

アメリカは依然としてフィリッピンにその飛行分隊と砲とを置いて居るが、千九百三十四年以來それ等を利用する如何なる口實をも失つてしまつた。フィリッピンにもグラム島と同じく、重くしい社會的不安が漂つてゐる。アメリカの守備兵が居てさへ今日既にさうなのだから、フィリッピンの獨立が理論的なものから實際的なものになるような時はどうであらう？

この群島の土民の上流階級を作つて居るマレー系のフィリッピン人はアメリカ人と同じ様に、自治、(住民は十年後に於てさへその時機に達しないであらう)によつて、此の島の繁榮が問題になるであらうと云ふ事をよく知つて居る。それ故にフィリッピンで結局失はなければならない權益を持つて居る者は、アメリカ人が徹底的に手を引くと云ふ點で、合衆國の主權が他の強國の主權によつて離脱させられる、と云ふ事を頼りとして居る。フィリッピンの大部分の地方では共産分子が蠢動し、千九百三十五年九月多大の生

命を犠牲にして、漸く此の農業ボルシェヴィズム的過激派の組織の騷擾を鎮壓する事が出来た。此の組織は、日本に於て益々強力になりつゝある彼等の同志と全く同じ目的を追求して居るものである。千九百三十五年十月、ラグナ州は共産主義者の侵入を防がなければならなかつたが、召集を受けた強力な警官軍は主として日本人の農夫二十人を殺し、なほ多くの者に負傷させた。合衆國がフィリッピンからの輸入を阻止すれば、益々増大する困窮は此の農業ボルシェヴィストの水車場に水を導く事になるであらう。「フィリッピンを占領するのは止むを得ず」なのだ。アメリカが手を引いたから、さうせざるを得ないのだ。日本の植民地臺灣にとつて危険千萬な近くの物騒な竈を掃除して、秩序を立てなければならぬのだ。此の様に日本が説明したら、これに對して抗議の出来る白人強國があるだらうか？

日本はフィリッピンを植民地として、原料貯水池として、商品の販路として必要として居る。アメリカの主権の下にあつては、フィリッピンはどんな意味でも一種の柵であつた。貿易にとつても植民にとつてもさうであつた。今やフィリッピンは跳板になつた。日本がこれを利用するのを誰が妨げる事が出来るか？

この事は特にシドニーからモントリアルに至る迄、英帝國內で問題にされて居る。千九百三十五年の春、イギリス皇帝の戴冠式のためにロンドンに集つた英領各總督は、モリス・ハンキー卿によつて非常に念入りに準備された諸計畫に従つて、祖國の政治家達と英帝國內に關するあらゆる問題を談合した。

其の時これ等の諸問題の中で、「フィリッピン問題は特別注目される地位を持つて居た。何故ならば、日本の勢力下に入りつゝあるフィリッピンはアジアとオーストラリアの間の柵を意味するのみならず、それは又東南支那への鍵の地位を占め、香港、ボルネオ等はマレー諸國と同様にこれによつて脅威を受けるからである。イギリスはその全植民地の中に、次の様な事を早くも感づいた。即ち一白人強國によつて、かくも重要な海外要塞が一戦も交へずして放棄された事は、重大な精神的結果をもたらしたと云ふ事、印度及び其の他のアジア、否全東半球がアメリカの行動の中に、彼等の秘かな確信の證明を見たと云ふ事、白色人種は最早手がなくなつて、未來は印度太平洋の地域の本然の支配者としての日本のものであると云ふ事（此の印度太平洋の地域に於ては、肉體的には優れて有爲な、精神的には敏活で同型の一億七千萬以上の人間が、有色人種の中で最も近代的な強國の主權意志から、最早殆んど選りかたなく出て居る。）——かう云ふ色々の事を英國は感づいたのであつた。

それ故にイギリスはアメリカをして、フィリッピンの獨立宣言を思ひ止まらせようとして、あらゆる方策を講じた。それは印度自身が、領土的現状の許容に就いてイギリスと争つて失敗して居ると云ふ理由ばかりではない。ルーズベルトは何が問題であるかよく知つて居たが、彼は海外地位の放棄か、國內に於ける全行動の可能性の放棄か、二者其の一を選ばなければならなかつた。そして彼は國內の方に向つたわけである。

そこでイギリスにとつては、日本の南進に對して、自分自身の根據地、自分自身の障壁を極度に強化する以外には方法がなくなつた。押し寄せる黄色人種の波をシンガポールで喰ひ止め、マレー諸國を以てフィリッピンの代りをさせようとする——これ以外には致し方がなかつたのである。

第十一章 シンガポール——東洋の十字街

イギリス世界帝國の弱點——シヤムとクラ運河

日本の全海運の中、一千九百三十四年にはその五十三パーセント、千九百三十五年前半にはその六十一パーセントがシンガポールを通過した。日本を南方と結びそれから近東地方、印度、ヨーロッパ等で獲得された市場と結びつける途上に於て、シンガポールは白人國家にとつて、軍略上大なる價値のある一種の柵を意味する。シンガポールは極東へ出る閘である。それはイギリス世界帝國の西洋及び極東に於ける領土を境するドアであり、オランダと蘭領印度を結ぶドアである。それは印度洋を支配する。イギリス植民地の四分の三は印度洋を廻つて群り、これ等の領土は、イギリスの全ゴム消費の九十パーセントを滿し、黄麻の九十七パーセント、茶の九十七パーセント、亞鉛の九十六パーセントを供給する。又大英國消費量の中棉の八十九パーセント、硝石の八十六パーセント、錫の七十一パーセント、粗

(206)

麻の七十七パーセント、米の六十三パーセントを産出するのである。

シンガポールはオランダにとつてその植民地に住む六千萬の土民に對する鍵であり、又イギリスにとつては、不穩な遠鳴りをして居る印度の三億人に對する鍵である。シンガポールをイギリスが持つて居れば、日本の貿易を封鎖する事も出来るし、日本の原料輸入の死命を制する事も出来、少くとも日本の宣傳家を待ち伏せて、その一部分でも捕へる事が出来る。併しシンガポールがイギリス以外の國の手に落ちれば、イギリス世界帝國は二つに切斷されてしまふ。例へばシンガポールが日本の手に入つたとすれば、日本は總ての白人の軍艦、總ての白人の輸出を支那、安南、スマトラ及びジャバ、オーストラリア及びニュージールランドから遠ざける事が出来、ヨーロッパをその最も重要な原料から切斷し、オーストラリアとニュージールランドの維持力を奪ふ事が出来る。

(207)

日本はこの事を知つて居るし、イギリスも知つて居る。そしてこの二國は、この神經中樞、東洋のこの「手形交換所」獲得の來るべき決戦に備へて、用意おさ／＼怠りないのである。イギリスはシンガポールを世界一難攻不落の要塞に造り上げる事により、日本はシンガポールに有能なスパイと宣傳家を置き、同時にあらゆる手段を盡してシンガポールからその軍略的要地たる事を奪ひ、世界地圖を變へ、シンガポールの鍵的地位を奪はんとする事によつて準備しようとしてゐる。ところで此の鍵的位置が一般に認められたのは約百年前からの事で、イギリスの大植民家トーマス・スタムフォード・ラッフルス

(Thomas Stamford Raffles) が千八百十八年スマトラのベンコーレン (Bandar) 總督になつた時の事である。

此のトーマスが、シンガプーラの獅子の町の軍略的價値を認め、千八百十九年英人をしてシンガポールの在る島を占領せしめ、此處に自由港を築造させた。そこで方々に轉がつて居た頭蓋が取り除かれた。當時此のマレー地方に植民した者が書いて居るところによると「腐れかかつた頭や、未だ頭髪をつけて居る新しい頭、立派な齒のついた頭蓋、無数の頭……」等が到る所にあつたらしい。シンガポールの道路に沿つて轉がつて居た澤山の骨が埋められ、商店が建てられた。そしてこれ等の商店には、みんなそのベランダに銅製の望遠鏡が備へつけられた。これは年に一度モンsoonと共にやつて来るジャクタ隊を偵察するため、此のジャクタ隊は南洋の色々の富を運んで来て、その代りにイギリスの綿布を持ち歸るのであつた。シンガポールで一番古く一番上品なイギリスの商店マンスフィールドには、今でも古い望遠鏡をベランダに置いて居て、多くのジャクタは依然としてやつて来る。併し綿麻交織物は最早イギリスのものではない。千九百三十四年、日本の綿布九千九百萬ヤードがシンガポールに來た。これに對して英國製は僅かに二千五百萬ヤードであつた。

ところでそれにも拘はらずシンガポールは、今なほ世界で最も富んだ都市の一つなのである。錫とゴムとは、滿百年間に單なるジャングルから三十五萬の人口を有する首都を作つた。交通上の聯絡要地、東南アジアの重要な轉換地を作つた。錫とゴムとは象の通る小徑を廣いアスファルト道路にしたが、こ

の道路の上にはアメリカ製の自働車が富裕な支那人を乗せて走り、彼等をそのヨーロッパ式別荘に運んで行く。つひ百年前までは土民が危つかしいカヌーを操つて大龜をとつて居た所には、今年々々三萬七千の汽船がマラッカ海峡の青い波を蹴つて進んで居る。イギリス船だけでも此處へ輸送して來る貨物は年に英貨一億六千萬ポンドである。シンガポールが、ヨーロッパから東アジア及びオーストラリアに至る重要航路の交叉點であると云ふ事實は、それを汲んでも盡きぬ富の泉とし、又イギリスにとつては權力の盡きる事なき泉としたのである。ところがこの望ましいシンガポールはイギリスにとつて益々大きな頭痛の種ともなつて來た。

既に千九百二十一年に於けるイギリス提督會議は、シンガポールを強固な第一級の根據地たらしむべき事を決定した。千九百三十四年經濟的發展即ち印度及び支那に於ける日英の激烈な競争は、英國をして更に廣範圍にわたる豫防處置を講せしめた。即ちイギリスの元帥アレンバイ子爵はバタビヤ及びスラバヤに赴き、極東に於ける現狀維持に就いては、英國同様大なる關心を持つて居るオランダ當局の協力を確かめたのである。千九百三十四年の末、オーストラリア及びニュージールランド海軍司令官、イギリス東洋艦隊司令官、シンガポール及びマレー諸島總督等は巡洋艦セント號上に會合し、シンガポール要塞の計畫に就いて、斷乎その方針を討議した。此の會議の後ロンドン及びワシントンに於て、フランスとイギリスは必らず起るべき對日戰の場合、戰略上有用な太平洋南部の諸島を合衆國に讓渡すべき旨が聲明

された。此のシンガポール會議後、要塞構築の仕事は極度に促進されたりでなく、迅速に生産を増大させるために、専門家がボルネオの北西のサラワク (Sarawak) の油源に派遣された。そしてかの非回教徒の白人系トルコ人、サラワクのチャールズ・ブリューク卿——此のサラワクは公式には獨立國なので、日本は大なる關心を持つて見て居るが、英國は此の日本の態度を少し臭いと思つて居る——は例のケント號上の會議に個人的に参加した者であるが、多くの忠言と約束に身を固めて歸つて來ると、此の約束は彼をしてその國の全日本人を追放させる事になつた。千九百三十四年の初め蘭領印度前防備軍司令官ゲルト・バン・ウィーク中將 (Gert van Wyk) の大計畫が實現されるかの觀を呈した。即ち、フランス・イギリス・合衆國・オランダ等の諸國は、一致して太平洋に於ける日本の發展政策に對抗して前進を開始するかに見えた。そしてこれ等白人諸國のために——若し彼等が事前に再び相互間の争ひを初めなかつたならば——千九百三十六年には金城鐵壁の彼等の作戰根據地を用立て、シンガポールを「西洋の楯」とすべき總ての用意が備つた様に見えたのである。

二年間八千の苦力が毎日十二時間勞働し、山嶽によつて直接砲撃を防がれて居る幅約一哩の灣、かのオールド・ストリート (Old Street) のドック、造船所等を修繕補強するために、英貨七百七十五萬ポンド即ち約一億マーカーが投げ出された。又一大艦隊に六ヶ月間供給するに足る燃料、二十五萬噸のベンチンと原油——これがための地下貯油所建設にも相當の費用がかけられ、ロンドンとオーストラリアを結

び、ロンドン・シンガポール間を百航空時以下で結ぶ航空路の最も重要な根據地スレーター (Slaters) 空港の改良は晝夜兼行で行はれた。シンガポールには千九百三十四年以來、二つの爆撃隊と一つの水上飛行隊とがあつたが、やがてそれが六つになつた。チャージヤ (Changi) にある沿岸要塞は千九百三十五年末に完成し、ケツベル (Keppel) 灣及びベト・ストリート (Bechtel Street) 灣は、排水量の大きな軍艦も通過又は投錨出来るように充分深くされた。又、シヤムの石炭とマレー諸國の石油を運搬すべき鐵道も完成し、二つの無線電信局も建設された。如何にシンガポールに近づかうとしても、これを妨げる事が出来る機雷原の電氣設備もすつかり出来上つた。

日本はかうした總ての事を知つて居たばかりでなく、それ以上多くの個々の事實をも知つて居た。何故ならば、千九百三十二年以來日本の豫算案の中で、公然と「軍事機密費」と云ふ見出しの下に記される六百五十萬圓は、シンガポールに於ける日本のスパイ行動のために支出された金額のほんの一小部分に過ぎない程だからである。日本は危険を知つたが、迅速に蒐集堆積して行く文獻は此の危険を分析してくれた。池崎忠孝は「シンガポールは日本の南進途上の障壁であり、最も危険な障壁である。」と書き、又石丸藤太は「シンガポールが世界最強の要塞にされたのは、インドの大衆をイギリスの筈の下に置きつけ、インドネシヤを更に奴隸化させるためばかりでなく、殊に日本を窒息せしめんがためである。」と書いて居るが、日本の提督も大臣もこれと全く同様な結論に達したのである。そして宣傳の

キスバートがシンガポールへ派遣された。と云ふわけは千九百十五年戦時検閲はヨーロッパに於て、シンガポールの暴動に就いての一切の報道を抑へてしまふ事が出来たが、確聞する所に依るとこれは土民の暴動で、英國官憲は丁度港内碇泊中の日本巡洋艦の援助を求めなければならなかつた程重大化した事があつて、日本は此の事件を忘れる事が出来なかつたからである。それ故に日本は不穩行動を起させようとして密使をシンガポールに送つた。千九百三十二年オランダ巡洋艦ツエボン・プロビンツィエン號(Seven Provinciën)上で起つた不穩行動、又千九百三十三年の秋、イギリス東アジア艦隊の艦上で起つた三つの暴動(これ等の事件はヨーロッパでは嚴密に附されて居る)、千九百三十四年三月河内に起つた怠業事件の様な騷擾を劃策したのである。そして益々多くの益々有能なスパイを送つた。

シンガポール港の新造船所の周囲は鐵條網が張りめぐらされ、構内にそれ以上立ち入る事は禁じられ、撮影も嚴禁されて居る。そして航空路は築造中の要塞の秘密を保護するために幾軒か迂回し、そして完成された堡壘は實際に目につかない様にカムフラージュされて居る。併しこんなことをしても、此の要塞を造つた八千人の労働者が居る。目的のためには手段を選ばずだ。一人々々の過去を知るなど云ふ事は出来ない。だから此の労働者の仲間には何百と云ふスパイが隠れて居た。——日本のスパイが!

シンガポールは廣東と同様、住宅船、チーク材製の豪華船、箱板を組合はせこれを釘付けにして出來て

居る小船等の一大植民地の觀があり、これ等の船には「ドイツ製」或は「日本製」の字が讀まれる。此の船の群、言語に絶する混亂、巨大な浮動街の中には七千人の黄色人種が生活して居るが、此の一團に對する警察の監視は不可能も同様である。「シンガポール・ロード」即ち百十軒の小運河に沿つて、マレー人、支那人、日本人、タミール人等は「地代」を拂はないでもすむ様に、一種の干潟街を拵へたが、その家は杭の上に立つて居て、誰でも潜らうと思へば此處で消えて無くなる事が出来る。そして假令——千九百三十四年十二月に於ける様に——イギリス人が、一人の日本人のスパイを捕縛する事に成功したとしても、何百となくお代りが出て来る。當時日本の鑛山主西村を牒報局に連行すると、彼はストリキニーネを飲み、自殺によつて秘密を吐かせられない様にした。併しそれにも拘はらず此の他に殆んど百人ばかりの日本人と、彼等に材料を提供した嫌疑のある三十四人の白人とが逮捕されたが、彼等は大きくして重要な連類ではなかつた。海軍本部と親密な一團は、當時シンガポール沖に演習のために集結して居たイギリス艦隊に對する日本の計畫に就いて話して居た。此の艦隊は二十一隻の大戦艦で、その伴撃が新根據地の不可侵性を證明する筈になつて居た。併しイギリス政府自身も認めて居る様に、詳細は知られなかつた。そして此の大量捕縛も、日本のスパイ行動を阻止する事は出来なかつた。千九百三十四年冬の演習は全く秘密裡に行はれ、審判官はイギリスで最も信頼するに足る將校の中から選ばれ、三回にわたる廣濶な演習報告の至急報は、特殊飛行機によつてロンドンに送られたのであるから、此の演習で理

論的に勝つた方は、防禦軍側の航空隊及び四千人のシンガポール守備兵か、それとも攻撃艦隊と航空母艦イーグル號の爆撃機か、これを知つて居るのはほんの僅かの大將連ばかりの様に思はれたが、あにはからんや日本政府はその結果を知つて居るらしかつたのである。東京政府はシンガポールに對して、決定的な攻撃を開始した。シンガポールの上流社交界、ダングリン・クラブのお歴々が、なほ自ら白人の神々を以て任じ、イギリスの砲、飛行機、無電局、乾ドック、石油タンク、巨艦、機雷原等が彼等を永久に黄色人種から守つて呉れるものと確信し、イギリスの海軍將校連はバン・デイツクホテルで金髪美人に敬意を表してから、彼等の巡洋艦に歸つて將校酒保に腰をおろして居た間に、日本は東アジアの地圖を變へて居たのである。此の難攻不落のシンガポール、此の東洋に於ける白色人種最強の部署から、日本は防禦壁の最も弱い點を作り出した。即ちクラ運河開鑿の用意をしたのである。

クラと云ふのはシヤムをつまらない一地方の名で、此の地名に従つてクラ地峽と呼ばれて居る。長さ千軒以上に及ぶマレト半島は、印度の東部を蔽ふ自然の障壁をなして居るが、クラ地峽は此のマレー半島の一番狭い地點を形造つて居る。印度洋はクラで四十二軒の幅に狭まつて、太平洋に近づいて居るばかりでなく、なほ此の地點は水量の豊富なバクチャン河(河口の水深九米)が英領ビルマとシヤムの國境でベンガル灣に注ぐ所であり、地峽を縦走して居る山脈が、自然的な低下によつて中斷されて居る所である。クラ地峽は特に重要な運河開鑿には眺へ向きで、運河を通すのにスエズ地峽の様困難な沙漠地

帯もなければ、パナマの様膨大な費用のかゝる水閘を必要とする山地もない。クラ運河は技術上は大したことはないが、財政的にはスエズ以上に大きな仕事であらう。若しクラ運河が出来れば、それは世界交通にとつて、非常に大きな利益を意味するであらうし、今日西洋から東洋に至る唯一の道であるマレー海峽を迂回しないでも済み、従つて東アジア行全航行を短縮し、重要航路の航行距離を千軒乃至千二百軒、印度支那行の様な特殊の場合では二千軒も短縮するに至るであらう。

若しさうなれば、クラ運河はシンガポールのドックを廢れさせ、空交通を新らしい運河港に集める事になるであらう。殆んど直線航路でセイロン島から交趾支那へ行く事が出来る様になれば、マレー半島迂回路は廢物になつてしまふばかりでなく、印度を日本から分離して居る急所たる英領の防禦壁も破壊される事になるであらう。クラ運河が出来れば、實に一億マールもかゝつたシンガポールの砲は、最早古鐵の値打しなくなつてしまふ。シンガポールの他に、東西兩洋を結ぶ第二の通路が出来れば、しかも一獨立國內に、否、恐らくは親目的でさへあるかも知れぬ國內に此の通路が出来るとすれば、日本にとつては白人植民地の心臓への道が開ける事になる。さうすれば日本には、對アフリカ、對ヨーロッパ、對小アジア等への輸出及び原料輸入の死命を制せられる様な懸念が無くなるのである。

シヤムは恐らくすつと以前に運河を開鑿して居たであらうその費用は比較的少く、外國資本なしで工事だけは出来たであらうと思はれる。單に經濟上の問題だけなら、恐らくシヤム自身やつて居たのだらうが、此の政

治上の問題があるので實現しなかつたのである。既に五十年も前から、シヤムはクラ運河を開鑿すれば、バンコックにはシガボールの様に金が落ちるだらう、と云ふ事をよく知つて居た。併しシヤムはイギリスに對して均衡を保つ事が出来ると思はなかつた。シヤムと云ふのは *Mong Thai* 即ち「自由民の國」と云ふ意味であつて、此の國は古代帝國の殘骸から出来上つた十三世紀以來、印度支那に合併せんとするビルマや支那、更にフランスに對して、此の自由を守らなければならなかつた。當時此の國を統治して居たのはシュラロンゴルン王で、ラマ第五世(ラマとはシヤム王の祖先は神の子孫である事を證明する稱號と云ひ、彼は「大王」と呼ぶにふさはしい王であつた。彼は自國の獨立を守るために英佛二國を争はせる事を知つて居た。それは丁度アビシニアが、諸隣國の嫉視によつて百年もその自由を保持して居た事と同じである。

ラマ五世は大外交家で、又非常に近代的な人だつた。彼は多くの技術家をシヤムに招き、鐵道、道路、港等も建設させ、又電信線を附設させた。彼の顧問は大部分ドイツ人だつたが、彼等はシヤムをアジアに於ける近代的國家の一つにした。王は大のドイツ最良でフリードリッヒスルーにビスマルクを訪れた事があり、その息子達をポツダムで教育を受けた王子でなくて、全くイギリス仕込みの王子であつた。此のバツタからこそ、イギリスをも必要としたのであつた。と云ふのは彼の諸種の建築物は莫大な費用を要したが、此の資金を彼に貸したのは、先見の明のあるイギリスだけだつたからである。

(216)

王は其の子息にプロシヤ的教育を受けさせる事を望んだばかりでなく、彼の金主の御機嫌を害はさないために、第二夫人の子バジラット(*Basildad*)をイギリスへ遣つてオックスフォードで教育を受けさせ、後イギリスの聯隊に入らせた。偶然かどうかわからないが、此の親獨の父親に次いで千九百年王位に昇つたのは、ポツダムで教育を受けた王子でなくて、全くイギリス仕込みの王子であつた。此のバジラットは千九百十七年ドイツに宣戰した。イギリス人の顧問でとりかこまれて居た此の王が、千九百二十六年に死んだ時、遺されたものは彼の人民の五倍に當る一億五百万の借財と、全くイギリス化した國家であつた。彼の後繼者ラジャディボーク(*Rajadibok*)は王としての教育もなく、従つて品位に缺けて居た。彼は前王の兄弟がみんなその治世中に死んだので王位に就いたのに過ぎず、古くからの顧問をその官に留めておくより他には何も出来なかつた。そして彼等を喜ばすために俸給を三倍に増した。王にとつても、顧問等にとつても、唯英國の命令があるばかりであつた。彼はクラ運河の事など考へようと思はなかつた。

(217)

然るに日本は他國の經驗と自國の經驗から學ぶ事を知つて居る。アメリカは日本が脅威を感じるパナマ運河を如何にして手に入れたか——日本はこれをよく覺えて居た。大西洋を結ぶ運河の計畫は、既にアメリカ初期の征服者の時代に端を發して居たものであるが、フランス人レセップスがこれを實現し、千八百七十八年コロンビア共和國から工事の許可を得た。次いで合衆國は、フランスの會社の株を

二東三文で買つたばかりでなく、千九百三年コロンビヤが運河地帯の讓渡を拒むや、コロンビヤ國內に革命を起させ、パナマに逼つて獨立宣言をさせ、直ちに此の新共和國を承認し、艦隊示威によつてボゴタ政府の干渉を妨げて、先づパナマ地帯一帯の軍事上の勢力を確保した——かう云ふ事情を日本は知つて居る。

シンガポールが益々脅威的な關門となり、日本のスバイが次々と出来る地下飛行場、益々大規模になつて行く無電局や貯藏所、益々威嚇的になつて行く砲座等に就いて報告をして居た時、日本は一方シヤムに於て、三十年前アメリカがコロンビヤでしたと同じ勝負を打つて居た。日本はクラ運河はどうしても造らなければならなかつた。假令イギリスの拒否にあつても、シヤムの親英國王ブラヂャヂイポークの意に逆つても造らなければならなかつた。

此のブラヂャヂイポーク王は御多分に漏れず多くの敵を持ち、又人から嫉視もされて居た。恐慌は彼の國にも見舞ひ、不満の叫びが聞えて居た。彼の政府は一年の中に二回も崩壊した。そして彼は飛行機に乗つて逃じし、千九百三十二年彼の專制君主國を廢して、立憲君主國を作らなければならなかつた。日本はその當時既に仕事を初めて居つたのである。即ち非常に巧妙にシヤムの現首相の權力を固め、ベルリン・リヒターフェルデの幼年學校出身のファンオキールをつつついてイギリス人に反目させたのである。同時に經濟攻勢を初め、そのために千九百三十四年だけでも、イギリスの古い商店が十一軒も破

産した。待ち構へた聲があがつた。千九百三十四年十一月、國立「印度支那經濟代理所」は或る報告をして居るが、その中で次の様な事が言はれて居る。

「三井會社はバンコック第一の商館になつた。その支配人達や極めて薄給の社員達は、食事を共にし夜の一時まで働いて居る。彼等は時間に構はず骨身を惜しまず、かくて次第に總てのヨーロッパ人競争者を撃退して行く。彼等ヨーロッパ人は、極東の容易な生活、休日が多い事、莫大な給料に慣れてしまつて、誰も彼も途方もなく金を使つて到底やつて行かなくなるのである。」

シヤムに於ける日本品輸入の數字が何倍かになると、他國品の輸入數はこれに準じて減つて行つた。千九百三十四年一ヶ年の中に、イギリス品の輸入は二千三百四十萬チャカール（十三チャカールは英貨一ポンド）から一千八十六萬チャカールに、合衆國のそれは五百五十六萬二千チャカールから二百七十三萬二千チャカールに、支那のそれは六百三十九萬一千チャカールから四百四萬二千チャカールに減じたが、日本はその對シヤム輸出を千九百三十二年の五百八十萬チャカールから、千九百三十四年の一千八百萬チャカールに増大させた。併し此の日本品の輸入よりも更に重大な意味を持つ様になつたのは、日本がシヤム人の商品を買つた事である。日本は棉、革、コーヒー、羊毛等を大量に買ふ事によつて南米移民制限を緩和する事が出来、取引契約でオーストラリアの御機嫌をとつたりしたが、これと同じ手を用ひて、シヤムの不景氣の眞最中に錫を買ひ——イギリスは自ら此の金屬を海峽植民地に有り餘る程持つて居るので、シヤムか

ら買ふ必要はなかつた——又棉を注文する事によつて、シヤムの好意を獲得した。日本の商人はシヤムで稼ぎ、人氣を得る方法を心得て居た。そして彼等はシヤムの政府筋に向つて、クラ運河が出来ればシヤムの經濟状態がよくなり、忽ちにして不況を打開し國庫を充し、満足を齎すであらうと云ふ事を益々執拗に説明した。すると間もなく頻繁に外交官がやつて來て此の暗示を裏書した。彼等は次の様に言つたのである。

「英國の頭痛の種は多かつたが、それでもシヤムの運河開鑿計畫を妨害する事が出来た。併し若しシヤム政府が日本に特權を與へたらどうだらう？　これ迄英國は心配なかつた。國境附近に要塞らしい要塞も構築せず、クラ附近に特別な根據地を持つても居なかつた。日本の軍艦が運河の終點地方を巡航すれば運河地帯は安全だつた。イギリスのシヤム進攻は瑣々たるものであつたが、一旦對日戦になつたら……」

と云ふのである。

千九百三十四年十一月、日本政府がフォスホール將軍に明白な保證を與へると、將軍も話にのつた。シंगाポール沖のイギリス海軍の演習の詳報が、世界の新聞を賑はして居た時、又もや諸新聞は古シヤム王國の恐ろしい動搖に就いてのニュースで満たされた。それによれば、フォスホールはその手兵を以て政府の建築物を包圍し、無血にして政權を奪ひ、ブラヂャヂイボークは蒙塵したのであつた。か

くてシंगाポールの模倣占領に就いての審判官の報告が、嚴封のまゝ特別輸送機でロンドンに達した時、一方ラマ七世、シヤム王ブラヂャヂイボークも亦、追放された國王としてロンドンに到着したのである。

これ等の相互關係を知る者は誰一人なく、又誰もバナマ(日本がシヤムに對して、アメリカがバナマ運河を造るためにコロンビヤに對して行つた事と同様な事をしたからかく云ふ)の事などに考へ及ばなかつた。クラは依然として、専門の地理學者だけが知つて居る地名にすぎなかつたのである。これ等の事情を知つたのはイギリス外務省アジヤ局だけであつた。かうしてシヤム獲得の決戦——實際はインド獲得の決戦——が初まつたのだ。

それにも拘はらず、何故シヤム王はロンドンで餘り理解されなかつたのだらうか？　英國艦隊は何故シヤム王を連れ戻さなかつたのだらうか？　これは今日でもアジヤの政治に於ける多くの謎の一つである。ブラヂャヂイボークは千九百三十五年正式に退位した。ローサンヌの學校に在學中の彼の九歳の甥アナングが白象の王座に昇つた。彼が十年に達するまでは攝政が一千萬の國民を統治するであらう。

イギリスは一つの地位を失ひ、日本は新しい重要な地位を得た。千九百三十五年二月シヤム海軍の十二人の士官が、留學のために東京へ行つてから、此の年の夏にはシヤムのメナンブラヂャアブリカカンにある狩獵機(Shikhar)の學校のイギリス教官は、ドイツ人及び日本人に代へられた。バンコックのホテル・オリエンタルに入る日本の商人は益々その數を増し、バンコックの「平和路」(The Peace Road)たるニュー・ロードには、益々多くの日本人商店が開かれた。そしてシヤムは次第に激烈な日本の宣傳の中

心になつて行つた。日本の宣傳は、廣く極東の利害を日本のそれと結びつけ、支那、印度及び蘭領印度の友誼を得る事を目的として居た。何故ならば、日本の使命は大陸の全國家が屬すべきアジア聯邦を造る事にあると信じて居るのは「大アジア」聯盟の創立者の一人なる近衛文麿公爵だけではないからである。全日本及びその附近の國の多くもこれを信じて居る。これに對して松井石根大將は次の様な意見を持つて居る。即ち、「何でも千篇一律に取扱ふわけには行かない。最初は日滿支聯合で充分であらう。

これは五億の人間よりなる侮るべからざるブロックを作るべき「黄色人種」の聯合だ。日本人、支那人、滿洲人は同じ蒙古民族から出て、一つの宗教、一つの道徳、同じ傳統を持つて居る。そして此の三様の結合から、アジア大陸を向上發展せしめるべき力が現はれるであらう」と。松井大將の意見は大體此の様である。又、千九百三十五年十月二日に公表された「方策」の中で、日本の外務省は、その緊密な政治的、經濟的協調を、日本、支那、滿洲國の間にのみ限つて示して居る。此の松井大將の考へと外務省の方策が何を語つて居るにしても、殆んど總ての日本の歴史家、否、益々多くの政治家や軍部の人々は、日本民族は成吉思汗の後裔であるが、インドネシアにもその起源を持つて居り、日本民族の中には蒙古人種の世界とマレー人種の世界とが交又して居ると云ふ事を指して居る。

日本は今日、精神的にも物質的にもシンガポールの奥地を脅やかして居る。シヤムは白人の海の大要塞の背後にあつて、非常な危険を受ける事になるであらう。シヤムはイギリスに對しては切札であるは

かりでなく、支那に對しては手持の札である。何故ならば、シヤムが支那に對する納貢關係から脱して以來、兩國の間の緊張状態はつゞき、その國民の一部は支那系であるシヤムが、金をためた支那人の退國を嚴重な法令によつて妨げてから、殆んど公然たる敵意が存在する様になつて居るからである。そして北部に於てはクラ運河が實現されさうになつて居る時、南部ではシンガポールの足場がグラブとして居る。蘭領印度、スマトラ、ジャバ、ボルネオ、バンド等が、友好國の領土になつて居なければ、シンガポールは重要な鍵的地位たる役を果さない。オランダは太平洋を周る白色人種の地位強化のために全力を盡して居る。併しオランダにも内部から現はれる敵がある。それは恐らく軍艦よりも、日本の飛行機よりも更に恐るべきものであらう。

第十二章 蘭領印度瞥見

スマトラ及びジャバに於ける日本

蘭領印度——それは殆んど二百万平方呎の植民地で、その本國の五十五倍である。其處では二十五萬足らずの白人が六千萬の土人と百萬の黄色人種を支配して居る。十七世紀の初頭、このスンダ諸島はオランダ領になつてからは益々豊かになつた。ジャバ、スマトラ、セレベス等には石炭を産し、又レボン

グには金鑛山があり、高貴材、ダイヤモンドを出す。油椰子、椰子、阿片の原料となる罂粟畑があり、又米を産する。ヨーロッパの工業化が、益々多くの原料を要求する様になると、この植民地は西洋に於ける工業諸國の重要な支柱となつた。この植民地はゴムの世界需要の殆んど三分の一を充し、キナ皮産出を獨占し、今日年々石油四百萬噸、錫四萬噸、茶の世界需要の十七パーセント、世界總産額に於て種棉花の八十パーセント、砂糖の八パーセント、コーヒーの六パーセントを供給して居る。蘭領印度の總貿易は千八百七十五年の三億グルデンから、千九百二十九年の二十六億七千六百萬グルデンに増加し、出超は同期間に五千百萬グルデンから九億五千萬グルデンに増大した。他の大部分の白人植民地より管理がよく行き届き、戦争と云ふ戦争には中立であつたので、このミンダ諸島の富は、オランダの富のやうに確固不動に思はれた。

ところが次に起つたのが原料不況である。そして蘭領印度は「俄か景氣」の間に法外な利得を射中てたから、千九百二十九年から同三十四年に至る物價下落の際には、それだけ特にひどい損害を蒙つたわけである。總ては餘りにトン／＼拍子に行き、餘りに大きく廣げられすぎた。誰も彼も黄金時代の永續を信じ何につけても大量生産を目標にした。出超が千九百二十五年の九億五千萬グルデンから、千九百二十九年の三億二千百萬グルデンに收縮しても、依然として市場の一時、的停滯だと思ひこみ、更に合理化を進め、賈れもしないストックのために新しい倉庫を建てた。續いて千九百三十一年、輸出は千九百

二十九年の十一億六千六百萬グルデンから六億八百萬グルデンに低下し、出超は一億九千四百萬グルデン、即ち活況時代の五分の一に低落した。そしてそれは無數の農民の滅亡を意味し、何千人と云ふ人に、彼等が生涯かゝつてスマトラの原始林や、ジャバのジャングルや、沼地等から稼ぎ出したものをほんの二三ヶ月で失はさせた。戦争中利食ひの金持やヨット所有の大商人になつて居た何百萬の士民、原料の途方もない高値をよんだこの十年間に、アメリカ人以上の賃金に慣れてしまつた何百萬と云ふ勞働者は、再び貧しい苦力になつた。全滅に對して到底望みのない戦ひをして、その精力を磨り耗らす自人が益々多くなつて行く一方には、土民の間には不穩な空氣が流れ始め、彼等は其の窮狀がオランダにのみ責任があるものとした。日本の經濟攻勢が始まつた時、最初にその好餌となつたのは蘭領印度であつた。それは精神的にも道德的にもさうである。オランダ品の輸送はアムステルダムからバタビヤ迄三十日かかるが、横濱からの輸送日数は僅かに十五日ですむ。

オランダのグルデンは金本位を持ち、圓は下落して居る。日本品は既に爲替の單なる悪戯だけでも、オランダ品より六十パーセント安い。

オランダの賃金は世界最高のもの、一つであり、日本の賃金はどの文明國のよりも低い。競争は全く始めから比較にならないのである。

ジャバとスマトラにはよい病院やよい勞働者住宅があり、植民地では最も優れた社會的施設、最も完

備した衛生設備がある。工場や倉庫には合衆國のよりも、屢々近代的なものがある。道路は大規模に建設され、七千軒の鐵道も出来、港は非常に擴大された。これ等の總ての事は、莫大な金の費消となり、ジャバの細民を尊大な小市民とした。今日蘭領印度の砂糖は衰頹して居る。と云ふのは、オランダの法令が、農業労働者に生活に困らないだけの充分な金を保證して居るからで、これに反して臺灣では何等の勞働法がない。又今日、ジャバの絹が依然として賣れないのは、その住民が何十年となく良い生活に慣れて、日本の大衆には大金に見えるものを、食ふや食はずの賃金だと稱して居る程だからである。

オランダ政府が窮狀を緩和し、高利を根絶するために、植民地の到る所に公立質屋を開き、自轉車一臺に付き十マークを貸與して居る間に、スラバヤとバタビヤでは新らしい日本製自轉車が四マークで賣られて居る。課税、社會的負擔、賃金等がオランダ製と銘打つた木綿一米に五十プフェンニヒかけさせて居るのに、日本人は同じ原料を關税と運賃がかかるにも拘はらず、到る所で十二プフェンニヒ乃至十六プフェンニヒで賣つて居る。

かうして既に千九百三十二年には、日本はジャバの御用商人として第一位に立ち、オランダを驅逐してしまつた。オランダは自分自身の植民地に於ける全輸入の一五・七五パーセント以上は與らなくなつたのである。千九百三十四年に於ける蘭領印度の輸入の中、オランダの分は二・九パーセントに減す

ると、日本の分は三一・六パーセント、即ち千九百三十一年の倍になつた。一方蘭領印度の輸出の中、本國向けは千九百三十一年の二〇・七パーセントから同三十四年の二七・二パーセントになり、日本向けは四・三パーセントから三・六パーセントになつたに過ぎない。又アメリカ品輸入は、千九百三十年にはまだ十一パーセントもあつたが、千九百三十三年になると僅かに五パーセントに減じた。又日本人が必要な自動車は何でも一臺につき英貨十五ポンドで提供したので、一日四十臺の製造能力のあるジェネラル・モーターズ・バタビヤ工場の仕事は停止された。フランス品の價値は千九百三十年の八百三十萬グルデンに對して、同三十二年には三百六十萬グルデンになつた。と云ふのは、日本は「バリ商品」即ち石鹼、香水等を生産し、それがフランス商店のものより遙かに土民の嗜好に適するからである。

不況時代に没落を免れたオランダ大輸入商は、この事態に直面して非常に迅速にその政策を變更した。彼等は最早日本人と争はないで、ヨーロッパからの輸入を中止し、日本に輸入事務所を造り、日本の諸會社は非常な短期間に注文に應じる事、品物の質がよい事、ヨーロッパよりサーヴィスがよい事等を全世界に向つて説明した。つまり彼等は敵と契約を結んだのである。そしてオランダはこれを傍觀し、日本の競争に對して永い間何も企てず、依然として躊躇したり、待つて見たりして居た。一方日本は目的を自覺してその活動は活潑となり、日本人は蘭領印度に對して、共產主義的理論家の創造語「インドネシア」と云ふ言葉を益々頻々と用ひる様になり、ロシア人の様にインドネシアを「歐亞の橋」と呼ん

だ。ブハーリン、スターリン、ラヂック等は、インドネシア解放の結果は、アジアの植民地の自由を意味するであらう。」と言つて居るが、日本人はこの「歐亞の橋」に經濟的に滲透すれば、それは彼等にアジアの他地方の否、恐らくは全世界の市場に於ける覇權を確保してくれるであらうと確信して居るのである。彼等は對インドネシア輸出を益々増大させた。そしてオランダがその植民地の全行政費、全負擔、全責任を負つて居る間に、日本人は益々此の植民地の主要な利益者になつて行つた。さうだ、それは正に日本人であつて、その租税によつて此の領土を維持し、その資本によつて此の領土を造り上げたところのオランダの工業ではないのである。若しヨーロッパ人の經濟組織が近い將來に於ても變化を見ず、日本がその經濟的滲透を全世界に及びし續ける事が出来るならば、この蘭領印度こそ全ヨーロッパが直面すべき運命の典型的な例、否恐るべき例になつたわけである。

ハーグ政府もこの事を認識した。そして千九百三十四年日本の對蘭領印度輸出が、更に五十八パーセント増加して一億五千八百萬圓に達すると、オランダ人は反撃の用意をする事になつた。イギリス政府の原料買上げの保證を表面上の理由として、日本の輸入は大いに壓迫された。日蘭經濟會議が千九百三十四年六月バタビアに召集されたが、これは初めから失敗の運命にあつた。即ち十一月の激論討論の後、會議は千九百三十五年の夏中絶されたのである。オランダ人が日本の商品輸入を制限しようとしたのみか、日本船の航行に對して非常に不利になる方法を講じ、今日蘭領印度に住む七千の日本人を追

放しかねまじき脅迫的態度が見えると、日本は砂糖に對して商品供給する事を拒絶した。砂糖は日本自身、臺灣で豊富に持つて居るのである。そこで關稅戰になつたが、千九百三十五年蘭領印度に於ける貿易統制に關する規定が人民評議會に提出され、評議會はこれを採用して、「不況時輸入對策本部」の創設を認めた。この機關は價格制定の權能を有し、割當額の範圍で(日本は殆んど完全にシャットアウトして)、總ての商品を自ら購入し、これを更に免許所有者に分ち與へるのである。この免許所有者(勿論日本人は一人も居ない)、政府規定の價格で賣らなければならない。この輸入本部が狙つた利得は、一定の日用品を特に貧民の居る地方では、原價以下に賣ると云ふ事に役立つ筈である。それ故に日本の計畫的な經濟發展は遂に相手に計畫を立てさせる事になり、一方かうして更に新しい大きな危險が呼び出された。即ち國內に於ける不満と、外部からの脅迫的軍事行動がそれである。

日本の商品は安かつた。日本の價格だけが、貧窮の苦力に靴や新しい上衣や自轉車を買ふ事が出来る様にした。だから此の本部はやがて大衆の敵になつた。千九百三十五年二月日本の陸軍省の證明書の中で豫告された事が、既に半歳の後蘭領印度で適中した。即ち今や日本は貧者の友と見做され、オランダ人はたゞ競争者を葬るために、その有色臣民に必需品を渡さぬ利己的な搾取者と見做されたのである。バタビアに於ける會議が決裂に終ると、日本の輸出組合は今後オランダ植民地へは輸出せすと云ふ規定をした。スンダ諸島に於ける殆んど全部の安い磁器品は日本から来る。だからやがて全面的の品不

足となつた。又殆んど總ての綿布は日本品であるから、やがてストックがすつかり無くなつた。蘭領印度行航路を持つて居る日本の四商船會社は輸出商と協定を結んだが、此の協定は事實上オランダの「ジャバ・日本航路」の廢滅を來し、オランダ船による日本品輸送を事實上閉め出した。品不足と、同時に起つた價格騰貴は、全く必然的に不穩な不滿の聲にならざるを得なかつた。既に千九百三十四年の始め、又更に同年の八月の日蘭會商のための示威運動の際、警察はジャバ國民黨の全リーダーを捕縛してしまつたが、それがために此の黨が無くなると云ふ様な事はなかつた。黨は更に無数のピラを印度洋のエヌペランドなるマレー語で印刷し、これをスマトラの革命的メナンカバン人 (Menantakan) やセレベスのブギネシア人 (Bugianese) マレー諸島中のマレー族の一種) 等に撒布する事を心得て居た。一夜にして多くの價格が八十パーセント乃至百四十パーセント上つたから、マレー諸島の四十にのぼる民族の總ては怨嗟の聲を發し、その叫びは最早自由を求める聲高い叫びばかりではなくなつた。千九百三十五年の九月と十月だけでも、ジャバとボルネオでオランダ人官吏が二十一人殺され、暴動の危険は恐ろしく増大した。ところで、蘭領印度の國家主義者がその目的を達し、オランダ人を放逐する事に成功したならばどうであらう？

總ての白人と又相當数の土人の有力者とは此の點で一致して居た。即ち、その地域と權利を不當に定められたマレー諸島の四十の民族や人種は、彼等に大損害を與へ、彼等の力を殺いで「外國の霸權」に甘んずることを餘儀なくさせたあの内亂に再び参加するであらうと云ふのである。

これ等の民族が白人に對して反旗を翻へしても、彼等は將來に就き、否彼等が學校で教へようとする言語に就いてさへ意見の一致を見る事は出来ない。オランダ人は地方語と並んで、到る所でマレー語を教へて居る。と云ふわけは、マレー語はジャバ語、メナン・カバウ語、バリネシア語、ブギネシア語等よりも普及されて居るし、又マレー語習得は、他の言語を學ぶより容易だからであるが、結局土民の無数の方言や言語の僅かに四つを言ふだけ位しか使はれないのである。國家主義者の間では、此の方法を續行すべきか否かに就いての議論が果しもなく續く。彼等はこれから作らうと思つて居る中央議會の所在地を、何處にすべきかに就いて討議するが、意見は區々として一致しない。スマトラ及びセレベスの國民黨員と、バリ及びジャバの國民黨員は、お互ひに裏切者だと言ひ合ふ。こんなわけで「被壓迫者」に對して如何に同情しても、又自由を如何に尊重しても、「オランダの羈絆」が失はれても、その後では直ちに他の羈絆によつてとつて代はられるであらうと推論する以外には、土民政府の事など考へられないのである。何故ならば、此のスンダ諸島は、若しこれを「壓迫する者」が無ければ、混亂するまゝに委せなければならぬからである。それならば誰が此の新らしい主になるであらう？ 疑ひもなく日本がそれである。

支那人もマレー人も又蘭領印度のアラビア人も、日本政府を喜ばないであらう。併し感情が問題では

別々に戦つて勝たうと云ふのである。」

こんなわけで、花崗石と鋼鐵で出来た長さ數軒の高價な岸壁、石油及びベンゼンの貯藏所、空港、小要塞、軍需品倉庫——これ等のものがいくらスラバヤにあつても、かうしたものを造つた人々でさへ、公然たる争鬭の際に對しては餘り信を置いて居ない様に見受けられるのである。

アジア獲得の經濟戰に於て、白人列強は負けて居る。千九百三十三年以來、日本は過去數世紀を通じて王座を占めて居たイギリスより多くの綿布を賣り、又ベルシヤに於ける輸入、アビシニアに於ける輸入に於ても同様に優位に立ち、日本の商品は印度でもスマトラでも又ジャバでもブラジルやニカラグアでも、白人諸國の製品を驅逐して居る。

日本が公然たる武力戰に於ても勝つならばどうであらうか？

フィリッピンは放棄され、ハワイの人種的混亂は重くする危険を孕んで居る。シンガポールの多くの砲はクラ運河によつて、容易に價値のないものにされるかも知れず、蘭領印度の六千萬の土民は「一握の『壓迫者』」など掃き出してしまふであらう」と益々聲高く世界に向つて叫んで居る。太平洋をめぐり白人人種の地位は脆くなつて居る。精神的に、そして經濟的には特に足元が崩れかゝつて居る。併し唯一つの例外がある。それはオーストラリアである。オーストラリアは餘りにも強大である。それは他の世界から隔絶されて生活し、殆んど無人の大陸である。その地下の寶は未だ利用し盡されず、英國は

六百萬の人間のために此の大陸を樂園にしようとした。一方その周圍には、殆んど十億にも達する人間が、空地にも食料にも深刻な不足を感じて居るのである。オーストラリアを犠牲にする事によつて、ヨーロッパを救ふ事が出来るであらうか？

第十三章 オーストラリア

「日本にとつての空地」太平洋上の眞空

我々がポート・ジャクソン(シドニー港のある灣)に着き、世界最美の港の一つであるシドニー港に入港して、第一に目に着くものは一つの大きな橋、世界で一番金のかゝつた橋である。それから豪華な自動車で溢れて居る道路を通つて、大理石造の大厦高樓の側を過ぎる。ピット街、ジョーヂ街、キャツスリー街の摩天樓が見られる。手入れのよく行き届いた大きな公園、ゴシック風の教會がある。立派な別荘の側を敷時間車を走らせ、マンリーやクイーの別荘町に驚嘆の眼をみはる。シドニーは非常に美しい大都會だ。シドニーの正面は首府のそれである。併しシドニーの家の様子はテヘランの多くの家や、南米の多くの建物と同じである。即ち、實際の建物より一、二階高く、四階しかないのに六階ある様に見える。シドニーは人口數百萬の都會で、人間と勞働に溢れた大陸の様に見える。而もその奥地にあるのは

人跡稀な荒野で、未曾有の豊かな土地、而も未だ全然利用されてゐない土地で、其處に住む人間はやつと六百萬位だから、まだ何千何百萬を容れる餘地がある様に思はれるのである。

此の小大陸と云ふ空所は、未曾有の世界政治的危険を藏して居る。オーストラリアは、黄色人種の利害區域の真只中にある白人の餘りにも弱い前哨である。オーストラリアは放棄されるか、或は強化されなければならぬであらう。併し此の二つとも可能性がない様に思はれる。

日本に來る外國人に最初に眼につくものは、運轉手の外にもう一人必らずその側に助手が一緒に乗つて居るタクシーと、いつでも二人連れで働いて居る新聞配達少年であつて、それは此の島國が如何に恐ろしい人口過剰に悩んで居るかと云ふ事の目立つた證左である。

オーストラリアに來る外國人に最初に眼につくものは、がつしりした愛想のいい、波止場人足の老人である。彼等は板を起重機にとりつける前に正確にそれを敷へる。何故ならば、彼等の組合は彼等が荷揚げの際怪我をするのを許さないからである。オーストラリアの奥地に入つて一番最初に眼につく事は、數百哩隔たつて僅かに二つの家、即ち一種のホテルと電信局とでなつて居る町がある事である。

カンベラへ行つて見る。此處は聯邦の首都で、千九百十三年、全體の首都を持ちたいと云ふ聯邦各國の感情を害さないために、荒地の真中でメルボルン・シドニー間の山脈の谷の盆地の中に造られたものである。そして其處ではオーストラリアの特徴は一層明白に見られる。小さな停車場がボツンと耕地の

中央にあつて、バスへ二十分ばかり乗ると、漸く最初の一廓の家屋群に到着する。更に耕地を通つて二十分乗りつゞけると立派なホテルの建物がある。それから歩いて五分ばかりで議事堂へ着き、更に五分かゝつて大臣官房に着く。その間に何も無いのである。人氣のない土地を通つて居るアスファルト道路がギラ／＼輝いて居た。オーストラリアの首都のある所は此の様に馬鹿々々しい程廣大な所であるから、どんなに宣傳しても人口は今日でも一萬に過ぎず、二百年たつても計畫通りに建築物で塞がると云ふ事はないであらう。此の大陸では何處でもさうであるが、首都の人口も極くまばらである。此の大陸は、地圖の上では他のどの大陸よりも多くの白い點（白い點とは白人の住む場所を云ふ）を示して居る。さうかと思ふと、奥地へ行けばほんとうの石器時代の最後の人間が生活して居るのである。又此の大陸は世界最良の羊毛と肉を産し、労働組合と教會の樂園である。未曾有の富を持つて居るが、又同時にどの國よりも負債が多い。移民の居ない未開拓の植民地なのである。併しそれにも拘はらず、千九百三十五年にはその六百萬足らずの住民の中の七十萬人に、失業者補助金が支拂はれたのである。

オーストラリアは何百萬年前の三疊紀層に他の世界から離れて島になつたのであるから、全く独自の動物界と原住民を持つて居る。併しオーストラリアの今日の支配者達は、依然として此の完全に離脱したものに（オーストラリア大陸を指す）にしがみ着かうとして居る様に見える。彼等は飢餓に頻し空地の不足のために息詰まる様な思ひをして居る多くの人間の真只中に、今なほオーストラリアを樂園にしようと思

つて居るのである。

日本の土地で生産的なのはその十七パーセント、即ちドイツより小さい一國の約六分の一である。

オーストラリアの土地の少くとも六十九パーセントは收穫がある。これはドイツの十六倍にあたる大陸の約六分の四である。

日本の可耕地一平方杆の人口は一千人で、東京近郊は一平方杆につき二千六百人、ジャバは二百七十七人、東アジアは九十二人、全オーストラリアは平均〇・七人、オーストラリアの北部地方は三千平方杆につき一人で、しかも此の北部地方は全然沙漠ばかりと云ふわけではないのである。

太平洋を廻るあらゆる國が人口過剰で苦しんで居るのに、苛酷な法令に依つて移住及び植民に對して嚴密に封鎖されて居る殆んど無人にも等しいこんな一大陸があるのだ。それなのに日本が、無理にもオーストラリアに地歩を占めようとするのは不思議な事だらうか？ 又、支那人が密輸入と云ふ手を用ひて、オーストラリアに侵入しようとし、千九百三十三年だけでもポート・ダーウィンに三つも大きな事件があり、三十四人の將校が黄色人種から買収されて居たと云ふ廉で移住任務を解かれなければならなかつたと云ふ様な事は意外な事であらうか？

この新大陸の十分の九が寶の持ち腐れになつて居り、途方もなく大きく豊饒なオーストラリアが、小さなベルギーより人口が少いと云ふのに、モンロー主義や人種的憎悪は、黄色人種の中で最も勤勉で生

産的な、工業化された民族を、火山の多い瘠せた島の中へ閉ぢめておくのだ。

日本がこれに反抗するのは當然ではなからうか？ 又日本が、ダーダネルス海峡に於ける艦隊援助のための秘密交渉に際し、或は對ソヴェト戦に於ける援助のための交渉に際しても、その代償として北部オーストラリア全部を要求したのは當然ではなからうか？ イギリスの政治家フリートウッド・チャイデルは、將來の戦争を避けるために、否特に少くとも白色人種のために南オーストラリアを残して置かなければならないから、此の日本の要求に従つて北部オーストラリアを日本に割譲すべしと提議した。

併し彼の言は徒らに憤怒を招いたゞけで、雷々たる反對に合ひ、ロンドンからセント・ジョンに至る迄、メルボルンからクープ・タウンに至る迄、「斷じて譲るべからず」と云ふ反對論で湧き立つた。全オーストラリアが、迫りつゝある黄色人種の侵略を絶えず口にして居るが、そこで論せられて居る危険は全然無根のものでもなく、又遠い將來にある危険でもない。それにも拘はらず、此の危険を遠ざけるべき何物もなされて居ない。オーストラリアはイギリスの艦隊を信頼して居る。ところが最早イギリスの移民さへ殆んど上陸させない……失業、恐慌……どうしてオーストラリアがイギリスの失業者などを必要とするだらう？ だからオーストラリアの移民法の一條は非常に奇妙な内容を持つて居る。即ち此の法令には、移民は一種の智力考査を受けなければならないと云ふ事が規定されて居る。それ故に何かを或る國語で書取らせるのであるが、何語でやるか指定されて居るわけではないから、イギリス人にはフラ

ンス語を書かせ、ドイツ人には日本語の書取をやらせたりする。こんなわけで（此の試験に合格するやうな者は先づないから）オーストラリアは依然として六百萬の白人國となつて居る事が出来、明かすの國で居る事が出来るのである。何故ならば、此の大陸の植民は原住民を殺す事によつて初まつたのであるから。タスマニアには千八百七十六年以來最早原住民は一人も居ない。ヴィクトリアにはまだ五十五人、新南ウエールズには千九百九十七人居る。此の大陸全體でなほ五萬人のオーストラリア黒人が居るとすれば、それは多い位である。オーストラリアの北部全體は熱帯で、南アフリカより暑いから、白人は殆んど植民労働をする事は出来ない。土人は居ないし、黒人や黄色人種は入る事を許されて居ない。だから容易に豊饒な土地にする事が出来る場所を沙漠の儘にして置き、錫、銅、石油等をそのまま放置しておく。と云ふのは、此の土地の生活は地球上如何なる民族の生活より豪勢で、快適なものだつたからである。

オーストラリア人は粘ばり強く、よく労働に堪へる。併し何のために？とすると疑問だ。女はみんな自動車を持ち、労働者は誰でも年とつても稼く事はわけはないと云ふ事を知つて居た。シドニーの大橋が造られた時、絞釘打ちの賃金は鋼鐵の構脚が一米高くなる毎に増して行つた。一時間につき英貨一ポンドが支拂はれたのだから、シドニーの橋は大きい事も世界一であるが、又世界一高價なものなのである。

オーストラリアの生活方針は理想的なものであるかも知れない。即ち、人は少く空地は多く、生産狂

も地獄の様な労働ランボもなく、あるのは安らかな享樂ばかり、民主政治で平等主義、總ての者にはよい生活——と云ふのだから。深刻な不況にも拘はらず、今日でも下男下女と云ふ者が居ない。私は大臣が自ら靴を磨き、百萬長者の令夫人が洗濯物を庭へ吊すのを見た事がある。又一方に於て有名な醫者の息子が鉛鑛山の抗夫だつたり、高官將校の息子が市街電車の車掌だつたりしても、零落したものと見做す事は出来ない。

併し如何にオーストラリアと雖も、今日では最早孤立しては居ない。自分だけの樂園を持たうとするわけにはいかない。オーストラリアにとつても、太平洋にとつても、人生の多くの事物と同じく、互ひに連絡して居る容器と云ふ法則は逃れられないのである。オーストラリアは「太平洋上の真空」である。それは真空なるが故に依然として恐るべき危険であつて、黄色人種の侵略を挑發するのである。オーストラリアは自ら整頓する必要がある。オーストラリア自らその基準を下げるか、若しくは他の者が基準を上げなければならぬ。そして今迄やつて来た方法とは全く違ふやり方で危機を調和しなければならぬ。羊毛の價格下落、ヨーロッパ取引の停滞は此の大陸全體の顔を變へたが、それは以前よりも親しみ易くしたのではなくて、一層とりつきにくい顔つきにしたに過ぎない。オーストラリアは人口に比較すると今日世界の私有飛行機の大部分を持つて居る。あらゆる發展段階を飛び越えて、一息に牛車から飛行機になつてしまつたのだ。鐵道は附設されては居るが、それは失業對策に過ぎない。オーストラリア

の鐵道の經營は皆非常な缺損である。此の大陸にとつては鐵道は適當ではないのだ。例へば月に二回、アデレードから北部のオードナゲッタ行の列車が出るが、此の汽車でさへ殆んど乗客が無い。だから大百姓は皆飛行機を持つて居る。併し現在はこれを利用しなくなつた。と云ふのは保険と燃料が餘りに高くなつたからである。又大百姓は羊毛剪截用の機械を買つたが、これも用ひては居ない。旅の羊毛刈の群がやつて来て、此の複雑な道具の數人の専門家や、電流代、修繕代よりも安く剪毛するのである。とこゝで此の旅の羊毛刈は大抵都市の失業者だから、彼等は此の仕事に馴れて居ない。彼等のする事を側で見て居ると、とてもはらくする。二、三十人の荒くれ男が羊をひつ捕へて、家畜置場へ追ひ込む。羊の頭を無理やりに脚の間へはさんで、何程か伸びた毛の中へ目茶苦茶に鉄を入れる。たまらない羊の悪臭が空氣中に漂つて、此の悪臭は二、三時間の後に刈手を酔つた様にさせてしまふ。そして暑氣が彼等のあらゆる思考力を奪ふのである。此の様な状態で、自分に丁度渡された羊を亂暴に突き刺してしまふ労働者も居る。又、羊は脚の間にギョツと押へつけられて往々窒息する事もあるし、鉄で重傷を負つて、止むを得ず殺す様な事になる場合も屢々である。

羊は無くなる、毛は悪い、機械は錆びる。更にこれよりも悪い事は、羊毛の價格が下落した時、オーストラリアの大部分の者は、羊飼育の最も悪い此の敵によつて生活し初めた事であり、羊毛の代りに兎の毛を賣つた事である。野兎はいつもオーストラリアの公害であつた。兎が餘り牧場を荒してしやうが

ないので、ニュージーランドや新南ウエルズ地方では黃鼬を輸入した。と云ふのは、黃鼬はヨーロッパでは兎の大敵だからである。ところが、どうしたわけかオーストラリアでは、黃鼬は殺す筈の兎とすつかり仲良くなつて、今度は一緒になつて鳥を片端からやつつけ出し、キビ鳥やウヱカ鳥を喰つてしまつた。不況が襲つて来た時、オーストラリアの多くの農民はこれを喜んで、水溜りに柵をめぐらして兎を捕へ、肉はそのまゝにして皮を帽子工場に賣つた。そして益々多くの「兎農場」が出来たが、就中タスマニヤが最も多く、千九百三十四年だけでも五千ヘクターの耕地が手離された。新らしく作られる水溜めは最早羊のためではなく、それは兎のためであつた。積荷も無くシドニーに繋がれて居る冷蔵船の數は益々多くなり、イギリスではやがて肉類の缺乏を告げたが、オーストラリアでは兎肉が腐つて居た。兎肉利用をやらうとしても割に合はなかつたのである。

近代的冷蔵汽船、近代的剪毛設備、飛行機及びトラクター、二、三米の針金格子等がかうした事に代つた。オーストラリアはかうして生活し、一足飛びに二、三十年の發展をしたが、今では再び二、三十年逆戻りして居る。オーストラリアは新しい人間を一人も入れないし、新しい道を行かうとはしない。實際さうはいかないのであらうか？ 機械も無しで急がずに！ オーストラリアはこれ迄に劣らず「未完成大陸」である。その周辺は非常な文化に浴し、奥地は石器時代の動物や人間が居るばかりでなく、今なほ原始的な種々の方法が行はれて居るのである。併しオーストラリアは生きて居る。オースト

ラリアにとつてはそれで充分なのである。他に生活する者があるだらうか、などと考へる者は誰も居ない。併し日本では何百萬と云ふ人間が餓えて居るのに、オーストラリアでは穀物を腐る儘に放置し、柑類を海に投げ、棉の一部分を棄て、或は家畜の肉の僅かに十九パーセントしか食べないで、残りは品質が気に入らないと云つて手も出さない様な事があるのは實に不合理な話である——これは誰しも肯くところである。ヨーロッパやアジアに氾濫して居る何百萬と云ふ人間にオーストラリアの門戸を開放する事によつて、間斷のない挑戦を除くのが當然なのではないだらうか？ 假令オーストラリアの意志に反しても。

英米の眞面目な名望のある經濟専門家によつて、かう云ふ考へ方が益々頻繁に抱かれる様になり、殊に日本がオーストラリアに對して次第に激しく攻勢に出る様になつて、賣行の不振が國家の破産を氣遣はせる様な形をとるに至ると、オーストラリアは千九百三十三年の末「好意を示すために」外務大臣ラサムを日本と支那に遣つた。

既に千九百三十三年、日本は羊毛六十九萬三千捆の輸入でオーストラリアの最上の顧客であつたが、ラサムは穀物供給の用意もして居た。對支輸出（支那の織物工場は大部分日本のものである）はラサムの交渉によつて、千九百三十三年の英貨三十萬ポンドから、同三十四年の五百萬ポンドに増加する事が出来た。併しオーストラリアは、これに對してその母國の工業品の代りに日本の工業品を買はなければならなかつ

た。ラサムは歸國して盛んな歓迎を受けたが、千九百三十四年七月十日カンベラの國會に於て非常に悲觀的な演説をして、次の様に説明した。

「戦争は不可避である。そしてオーストラリアには、太平洋を廻る戦争に巻き込まれないと云ふ可能性は無し。」

アメリカは日本の絹を、日本はアメリカの棉を必要として、その重要な原料を互ひに有無相通じて居るから、此の兩國は親善關係を持ちつゞけるであらう。併し正に此の相互依存と云ふ事が、憎悪と敵意に導くものである——かう云ふ様な考へ方が一時信じられて居たが、ラサムはそれを思ひ起した。日本はオーストラリアの羊毛を買ふが、滿洲に於ける羊の飼養を擴大し、南アフリカやアルゼンチンと羊毛取引條約を結んだ。これは全く唯一の供給者に頼つて居ないで、常に數人の供給者を同時に持たんがためである——ラサムはこんな事も思ひ出した。

ラサムの演説が如何に悲觀的であつても、彼は決して此の危険を誇張したのではなかつた。日本はラサムの提議を非常に歓迎はしたが、同時に次の事を一瞬たりとも忘れるものではなかつた。即ち滿洲は餘りに寒すぎ、シベリヤと蒙古の氣候は日本人に適さない事、北方移住ではなく、常に南方への大量移住が問題である事——日本は此の事を忘れはしなかつた。又日本は、オーストラリア政府が如何に好意的な態度を見せても、此の殆んど植民されて居ない國へ充分に商品を買つて、その金でオーストラリア

からの輸入の支拂ひをするわけにはいかない事、つまりオーストラリアに賣る既成品の三倍の價格に相當する羊毛と穀物とを買はなければならぬと云ふ事をよく頭に入れて居た。若しオーストラリアの原料を大いに利用しようと思へば、商人の代りに兵と移民を送らなければならぬ——これも日本のよく知つて居るところであつた。

「未完成大陸」の未徴集富源

オーストラリアの原料は羊毛と穀物の他には一體何もないのか？ かう云ふ疑問は繰返し起される。北部オーストラリア、即ち此の大陸の過半は、元來さなくとも沙漠で、植民する價值はない——かう言はれる。

併しそれは正しく間違つて居る。オーストラリアは寶の國だ。しかも此の寶は奥地でも海岸地方でも利用し盡されては居ない。

我々はシドニーからニューカッスル迄、素晴らしい新設の自動車路の上に車を走らせた。しかし外の自動車は往來はない。

ニューカッスルはオーストラリアに於ける石炭産地の心臓である。其處には非常にいゝ港があり、鑛山労働者のために、マッカリー湖畔に立派な住宅地が出来て居る。鑛山はどうか？ 數頭の跛馬が、地下

僅かに百三十米位の坑道へ炭車を引いて行く。其處には大人の背丈位の高さの石炭地平層があつて、探鑛されて居るのはそれだけである。此處ではルール地方やザール地方にある様な地平層は掘られて居ない。一體こんなに豊かな、便利な富は、何のためにあるのだらう？ 何處にも揚鑛塔が見られない。地下の深い所で働くのは氣持のいいものではないから、全く地表に近い所にある鑛物を掘つて居るわけである。僅か一就業時間働いただけで、一日の賃金は英貨二ポンドだ。これが千九百三十三年の事である。それにも拘はらず絶えずストライキは起るし、勿論工場閉鎖もある。ニューカッスル地方は、世界中で最も豊かな石炭産地の一つであらう。併しそれはヨーロッパなら博物館へ行かなければ見られない様な機械を備へつけたひどく時代遅れの鑛區である。だから其の石炭は日本が拂ふ事の出来る様な値段では供給され得ないのは勿論で、まして支那の近代的な炭坑とはとても競争が出来ない。そしてやがては全然採掘を止めてしまひ、徒らに舊式な方法を固執するのであらう。日本は森林を焼く事や、木材燃焼による巨費の蕩盡を防ぐため、年々六千萬噸の石炭を必要とする。現在日本で産する石炭は年々三千万噸である。ところがオーストラリアの炭坑は上述の通り利用されて居ない。

日本はその艦隊の石油必要量の四分の一を自給すると云ふ状態にさへ到つて居ない。然るにオーストラリアの油源は全く顧みられない有様である。クワイーンズランドの山地にはあらゆる貴重な鑛物が埋藏されて居る。就中錫はその主なものであるが、かう云ふ多くの鑛物を掘る段になるとまるで舊式な方

法を用ひて居る。私はハーバートンで「北部大鑛山」と云ふのを見たが、其處では運搬用桶が昇降機に用ひられ、他の鑛山では此の運搬用桶が手力捲揚機で動かされて居る。かうした錫鑛山には、何處でも危険極まる梯子があるだけで、凡そ合理的な労働方法らしいものは少しもない。

北部クウィーンズランド全部は、殆んど植民されて居ない。甘蔗農園が海岸に二三つあるだけで、その他には何も無い。何百萬の人間を容れるに足る空地である。併しオーストラリアは依然として門戸を閉じて居る。耕地の所有者は、クウィーンズランドの此の豊饒な土地に南洋諸島のカナカ族を植民しようとした事がある。彼等はそのためには若干のカナカ人を多少無理矢理に連れて來たが、其の方法は餘り芳ばしいものではなかつた。併し千九百四年に政府がやつた事は更に慘酷であつた。總てのカナカ人は國外に放逐され、其のために約七十五萬マールも支出された。ところが船長達は、この労働者の一人一人が何處からやつて來たのか知らなかつたから、彼等をその故郷の島でなく、彼等の敵の島へ歸したりする様な事が屢々行はれた。そこでカナカ人は打ち殺されたり、又時には喰ひ殺されたりしたのである………かうしてクウィーンズランドの奥地はいつまでも荒地の儘である。何故ならば、白人はこの地方の氣候の中では誰も過激な労働に堪へないからである。クウィーンズランドだけでも、ドイツの四倍の大きさがあるのに、その人口は八十萬に過ぎない。

だから此の大陸に對する日本の垂涎おく能はざる状態は無理もないであらう。

日本の重單橋快走船は、毎年カロリン諸島からやつて來て、その漁夫達は、蘭領印度の無數の島々の間に、あの「大きなバリエード」に到る道を開拓して居る。祖國からは二千籽隔り、北部オーストラリアを前にして鯨の出沒する此の狭い沿海に、彼等はトロックス(Trocks)と云ふ軟體動物を發見する。日本のボタン工場は此のトロックスの貝殻を求めて居るのである。オーストラリア人で此の動物を捕へようと努力した者は一人もない。ところが日本人がオーストラリア近海で漁をすると、政府はイギリスを通じて日本に抗議を申し込んだ。併しそれも徒勞に歸したので、十八萬ポンドをかけて武装モーターボートの小艦隊が作られて日本人は千九百三十三年以來組織的に放逐されて居る。日本人は屑の様な僅かなものでも拾ふ事を禁じられ、遠い所からでさへ此の「無人大陸」を観察する事は許されなくなつた。これが日本で一種の挑戦と考へられるのは當然であらう。かうなつたら日本は平和的手段以外の手段を用ひても、オーストラリアに地歩を占めようとしてあらゆる方法を講ぜざるを得ないではないか？日本はオーストラリアに移民地を求めたが、それは單に口で求めただけでなく、既に千九百三十四年の初めにはこれを實行に移し初めた。即ちポルトガルに對して、葡領チモール買入れの交渉を初めたのである。此のチモールと云ふのは、オーストラリアのポートダーウインに丁度向ひ合つて居る植民地である。此の「明かすの樂園」から僅かに五百籽隔つて居るに過ぎない。

ポルトガルの此の植民地は今日では何の價値もない。チモールは小スンダ群島の中で最大なもので、

半ば以下はオランダ領、半ば以上はポルトガル領になつて居るが、大部分開墾されない荒地から成り、それだけでも既にオーストラリアの北部地方に非常に似て居る。九十萬の住民は小麦を作り、白檀材、臘、龜甲等を賣る。併しポルトガル人には賣らないで、マレー人や支那の商人に賣つて居る。ポルトガル領の首都のデイルーは、アジアに於ける白人勢力没落の全く驚くべき一例である。デイルーは、まるで白人の植民地支配に反對する恐しい宣傳機關として役に立つたためにのみ維持されて居る觀がある。ポルトガル領チモールには、金といふものは一つもない。何故ならば、此の植民地の「國立銀行」は千九百三十二年に破産してしまつたからである。此の銀行が發行した紙幣「バタカ」は最早何の價値も無い。ポルトガル政府はチモールの忘れてしまつた様に思はれる。その官吏の俸給も支拂ふ金を少しも送つてよこさないのである。そこで代々の總督は、デイルーの國立博物館にあつた物を次々と全部賣り飛ばした。オランダ領チモールのオランダ人は、十六世紀及び十七世紀の珍らしい原稿を十回か十二回の食事で買つた。美術品が投賣され、遂にポルトガル人の發見者の遺産まで使ひ盡されると、チモールの總督は獨特な處置をとる事に決した。即ち、此の植民地の支那人は誰でも「リスボンから金が来るまで」白人官吏に貸賣りをなすべし、と云ふ事を指令したのである。支那人は二年間貸賣したが遂に本國からの送金はなかつた。そこで彼等は残つた物を荷造りして、國境を越えてオランダ領チモールへ移住した。デイルーは淋れ果て、自動車はベンチンを買ふ事も出來ず立ち腐れになつてしまつた。ところでポルトガ

ル政府はチモールに金を送つて寄越さなかつたけれども、政治上の容疑者だけは全部送つて來た。首府で政府攻撃の演説をした者も、爆弾を投げた者もチモールへ來た。そして流刑者は自然に共產主義的宣傳をしたが、それは名狀し難い状態に導く事になつた。千九百三十四年、ポルトガルは遂に此の植民地を維持し難くなり、此處に日本はチャンスと認めたのである。そこでポルトガル政府に對して、その植民地チモールの二千七百萬圓で譲渡して欲しいと申し込んだ。そして商人を送つた。(デイルー駐在日領事は、今日既に此の植民地の事實上の領主である。ポルトガルの總ての國債、未拂利札をその國庫に入れてあるイギリスは勿論直ちに干渉し、あつさり此の賣却を禁じた。

イギリスはポルトガル政府に對して、賣却を一切禁じたのみか、それ以上の事もした。即ち、ロンドン、メンボロン間の有名な空路侵入を企て、千九百三十四年の夏、「かくも遠く隔つた植民地オーストラリアにも防備は遺憾なく整ひ、僅かに五日半で首府ロンドンから飛んで來られる」と云ふ事を、日本人に得心が行く様に證明したのである。一方アメリカの飛行機は北方から日本に接近して來たが、イギリスはロンドン——シンガポール——メルボロンの定期空路を開いた。千九百三十五年の秋、汎米航空路會社が試験的に香港行空路を開き、ウェーク島が中部太平洋に於けるアメリカの最も重要な根據地となつた時、イギリスも亦此の交通網に結びついた。即ち千九百三十五年十月二日シンガポールの帝國航空路會社の四發動機飛行機は離陸上昇し、時速二百十哩の此の巨機はベナン(マレー半島西

方の二島に向つて爆音を轟かしつゝ飛び去つたのである。イギリスの錫輸送にとつて既に重要であつたベナンは、今や秘密裡に第一流の空路根據地にもされたのだ。さて此の巨機は發動機を冷却する暇もなく再び六百五十哩をベナンから佛領印度支那のサイゴンに飛んだ(サイゴンは既に定期空路によつてマルセイユ及びパリと連絡されて居る)。それから更にトラン(安南の町)に向つて飛び、結局南支那を越えて五百五十哩飛び、上昇してから十時間の後香港に着陸した。かうして千九百三十四年十二月に於ける海軍會議決裂の際、英米間に意見の一致を見た「協力行動」は殆んど気がつかない中に實現され、オーストラリアは三方から防禦される事になつた。そしてチモールは「無人大陸」と同様に日本人から遠ざけられ、汚辱としてその名を止めたのである。假令どんな方法にしても、オーストラリアを日本人によつて植民させる事は、歐米市場の氾濫を日本品によつて堰き止め、四億乃至五億の白人の生活標準を効果的に守る唯一の有効な手段であらう。

オーストラリアを日本に開放する事は、狼の群に追ひかけられた北の果の獵師がその獵犬の一匹を殺し、その肉を千切つて狼に投げてやつて彼等の追跡を逃れるのと同じ様なやり方であらう。カナダの捕獸業者やアラスカのエスキモーの命を救ひ、保護移民村の一同が到着するまで狼と戦ふのがよく使はれる此の戦法である。

今日白人諸國家(白人諸國家)などと云ふ者は抑々救はれない樂天家である。こんな單位はないのだから)は、日本の發展

に對して公然と戦争出来る程強力であらうか? 白人列國、ヨーロッパ各國、否日本以外の諸工業國は今日でも日本の發展を武力戦に訴へて阻止する事が出来る状態になつて居るであらうか? 彼等が助かると云ふ唯一の可能性は、彼等のトリック——彼等はこれで時をかけない様にする。又これは少くとも一般に、全世界を包括し全世界を生存させる經濟を除去し再建させる目的のために何等かの妥協を許すものである——の中にも存在しないのであらうか?

千九百三十三年八月、太平洋を廻る状態の検討と此の恐るべき問題に對する解答を發見するために、百五十人の専門家及び著名政治家等がカナダのバンフに會合した。フランス人はその政權下にある南洋及びインドネシアの二千萬の住民のために、オランダ人は蘭領印度を作つて居る六千萬の住民のために集つた。新渡戸博士共の他十二人の日本人、支那人、オーストラリア人、「貝殼印(BE)石油」創立者の息子サー・ハーバート・サムエルに率いられたイギリス代表の多數、ハワイの大部分の所有者たる百萬長者フランク・クリーク・アサートン及び非常に多數のアメリカ人も集り、カナダやニュージランドの代表も來た。關係各國は總て此の「太平洋回卓會議」「太平洋事情協會第五回會議」に参加したのである。二週間の討議に依つて、經濟的闘争は必らずしも必然的に戦争に導くものではないと云ふ事が確認された。シベリアを除いたアジアは、ヨーロッパやアメリカに比して鐵と石炭とに恵まれて居ないから、重工業を發達させる事は無理かも知れないと云ふ事に就いては、此の會議の専門家の意見が一致したが、

其の他の問題は全部解決されず、取り上げられさへもしなかつた。結局ホルルに其の本邸を持つて居ると云はれて居るアメリカの書記官長を選擧したり、フィリッピンの療養地バギオを千九百三十五年の會議候補地として選んだりしたゞけであつた。ところで此の新會議が成立する前に、フィリッピンは既にアメリカから放棄され、白人の此の重要な地位は失はれて居たのである。一方日本の國家はその間に支那で二倍になり、その輸出は更に六十六パーセント増加して居た。そして東アフリカに於ける戦争の勃發、イタリーのエチオピア攻撃は、言葉は無に過ぎないと云ふ事、一國民の有する空地が餘りに少く、その原料缺乏が制限も飢餓も殆んど無効にさせる様な點に達すれば、最良の討議目的も無價値なものであると云ふ事を又も適切に證明してしまつたのである。如何に道徳的な人間でも、飢が餘りにひどくなれば盗みをする。若しイギリスやフランスが時機を逸せず、彼等の廣大な植民地からイタリーに新生活地を譲渡してやれば、恐らく戦争にはならなかつたであらう。オーストラリアを日本に開拓させ、日本の力を此の大陸に結びつける事が出来るならば、恐らく災禍は未だに喰止められて居るであらう。併しパンフ會議では此の様な事に就いて一言も話されなかつたのである。それは英國の威信に關する事であつて、エチオピア問題ではムツソリーニの威信に關係したのと同じ様なものである。かくて太平洋から出發し、世界の外貌を徹底的に變へてしまふかも知れぬ事態は、除々に無氣味な適確さを以てその歩を進めて居る。かくて「黃禍」は、否、更に適切な言葉を用ひれば「黃苦」は、我々の生活を左右

すべき現實となつて行く。我々以前の何者でもなければ、又我々の子供達の時代に至つて、初めてその生活を左右するのではなくて、正に現在我々の生活に影響を及ぼすべき現實となりつゝあるのである。

第三部 日本 の 北方 發展

第十四章 朝鮮、日本の心臓を脅かす懷劍

支那及びロシアとの最初の争闘

太平洋を廻る白人諸國の地位は、今日精神的にも物質的にも、餘り信用出来る様には見えないが、それは一方に於て三十年以上も、日本の發展の自然的、民族學的方向を外らせ、日本を益々北方へ、支那とロシアの方へ追ひ立てるのには充分であつた。又太平洋上の白人國の地位は、日本をオーストラリアの空地と、フィリッピンの植民地から遠ざけ、これを束縛して、遂に滿洲征略を餘儀なくさせた程強力であつた。日本の南方にある白人諸國の要塞は、日本の内部の壓力を今日の爆發的危險にまで成長させ、實際、日本をして滿洲國の原料（これに日本は今日既に白人の工業と戰つて驚くべき成果を収めて居る）を、無理にも取らざるを得なくさせた。そしてその揚句の果に此の要塞は放棄され、或はその内的な力を失つた。南方にある白人の防壁は、日本の國內に殆んど病的な懸念「白禍」に對する恐怖を起させた。そして此の恐怖は「黃禍」の悲觀論が、嘗て我々に影響を及ぼした以上の強い反響を呼び起した。それは三十年もの間、脅迫的に振りあげられた拳の様なものであつた——最後のドタン場には力が抜けてブランと下つた拳だ！

大倉は次の様に書いて居る。

「日本の新生活に目醒める直前の千八百四十二年、一キリスト教國は、武力を以て支那に阿片を輸入し、香港を強奪した。千八百六十年英佛の聯合軍は些細な口實の下に北京に侵入し、夏宮を掠奪した。夏宮の諸財寶は今日ヨーロッパ各地の博物館の誇りとなつて居る。又ロシア人はこれと時を同じくしてアムール河とイリ河の流域に於て、聖なる國家の良き人々の時代が創造した物を蹂躪した……かくて日本は戦慄した……」

日本は既にロシアの長崎砲撃とアメリカの江戸砲撃に依つて、白人を忽必烈の蒙古の遊牧群（それは日本を十三世紀にドニエプル河から朝鮮に達する大版圖に併合しようとしたに比較せざるを得なかつたのであるが、その後日本の港が開かれて、此の「夷狄」の強力な武器と云ふ武器がすっかり日本人の眼につく様になると、日本は恐ろしい不安に襲はれた。蒙古人が朝鮮を通つて日本へやつて來たが、それと同じ様にこんどはロシア人が朝鮮に向つて前進して來た。朝鮮は既に日本の非常に古い記録の中にも、「日本の心臓を脅かす懷劍」と言はれて居り、今日多くの日本人は「生命線」と稱して居る位、日本にとつては重要な地である。

クリミア戦争の最中ニコラス一世が薨じてアレキサンダー二世が帝位に即き、バルカン半島に於ける

ロシアの勢力喪失、ロシアをして東南ヨーロッパに於けるキリスト教徒の宗主権を放棄せしめ、黒海の中立を餘儀なくせしめたパリ平和條約に續いて極度の帝國主義的アジア政策が始まつた。ロシアはバルカンで失つたものを極東で取り返さうとし、千八百五十八年支那から奪つたアムール流域、千八百六十年占領したウスリー地方だけでは満足せず、明治天皇の即位の年には、トルキスタン、ブハラ、サアルカンド迄も占據した。そして中央アジアに於て日に日に勢力を張り、續いて朝鮮に來て貴族に財産を分ち與へ、その行く所何處にも必らず勢力を扶植して行つた。日本は益々不安に驅られ、軍部は「夷狄」に併呑されないためにはこの際何等かの行動に出なければならぬと主張した。當時の朝鮮王大院君は日本の敵で、日本を憎み、日本は東洋の理想を裏切つた者だと彈劾した。昔の武士階級は對朝鮮戦争を主張したが、早くも千八百六十八年その口實が発見された。即ちフランス人宣教師の虐殺と、外國人に對する暴動がそれである。此の暴動事件の間に大仕掛のギロチン——一時に二十四人の首をおとす事が出来る殺人機——が建設された。それから間もなく、フランスは對獨戰爭に巻き込まれてしまつたので、此の虐殺に對して報復する事は出来なかつた。日本は今日の如く既にその當時からヨーロッパのいざこざを必らず何かに利用して居たが、此の時はフランスに代つて此の制裁使命を引き受けようと申し出た。日本はその「アジア・モンロー主義」の正式聲明以前、既に六十四年も「秩序の力」と云ふ假面の下に、「平和の擁護者」として、その侵略戦を企んで居たのである。千八百七十年夏には、朝鮮侵入の準備がすつかり整

つた。

ヨーロッパ諸國が、普佛戰爭で注意を外られ、ロシアが有名無實の脅迫だけに止つて居たのに反して、アメリカは日本の意圖を察すると、直ちに行動を起した。先の外人虐殺の暴動の時も、アメリカのスクーナー船「シャーマン將軍號」の乗組員が殺されて居た。アメリカ自身は朝鮮を必要としなかつたけれども、これを日本の所有にさせたくなかつたのである。上海駐在アメリカ領事スワードは事件を調査し、賠償と通商條約締結を要求したが要領を得ず、かくてアメリカにも思ひがけない干渉の機會が與へられた。日本が朝鮮に軍を進める前にアメリカの小艦隊は朝鮮に向つて出發して居た。千八百七十年八月、戦闘艦コロラド、三檣軍艦アラスカ及びベニシア、砲艦四隻、輸送船一隻等が長崎へ現はれ、此の艦隊デモは効を奏して日本は躊躇した。アメリカ艦隊が更に朝鮮に向つて航行を續け、明らかに會戦のために沙里河の河口に近く碇泊した時分、日本の最初の留學生がアメリカから歸つて、合衆國の實力を説明したので、日本は朝鮮攻略を延期する事になつた。千八百七十一年五月アメリカのロジャース提督は、六十八名の兵を上陸させて朝鮮の要塞を占據し、その船が沙里河畔にあつた朝鮮軍の他の陣地を砲撃したが、日本は寧ろ琉球列島を占領した。明治天皇の顧問等は、日本の發展にとつて南進こそ唯一の自然的方向であり、朝鮮への伸展は力の浪費であると云ふ斷定に達し、北方進出は放棄された。そして武士階級の人々は國元へ歸された。白人の權益は何等害せられる事なく、世界は日本の此の行動を認め

たのであるが、さうかうする中に日本は同様に血を流さずして小笠原諸島と硫黄島群島を占領し、續いて臺灣に於ける生蕃掃蕩の準備に乗り出した。日本の伸張はその論理的發展を始めたのである。

海賊が出没するので航海者にとつては頗る危険な未開拓な島を重要な原料供給地にする事は、何と云つても非常に稱讃すべき植民事業であると云はざるを得ない。白人列國は本來此の事業を支持しなればならなかつたのだ。ところが、臺灣の山林に當もなく榴弾を打ち込む以外には自ら何もしなかつたヨーロッパ各國は、日本の行動を見て怒つた。日本はヨーロッパ各國にとつて、餘りに迅速に大きくなり過ぎたのである。だから日本が千八百七十四年、軍隊を臺灣に上陸させると、これに對して白人列國は念の入つた警告を發した。佛、露の軍艦が出動し、イギリス政府は、支那に日本人の被害者に對する賠償を支拂ふ様に勧めた。ところがそれがいつ迄たつてもうまく行かず、従つてヨーロッパ諸國はあらゆる手段を以て日本の南進路を遮らうとした。そして日本を徹底的に壓迫するために、千八百七十五年ロシア政府はロシア領でもない千島に對する「賠償」として、當時日本領であつた樺太の割讓を要求した。

南方に於けるロシアの新らしい脅迫と抵抗は、全く必然的に朝鮮に於ける日本壓迫の強化となつた。千八百七十五年、朝鮮の軍略上の要地漢江の要塞に接近し過ぎた一日本船に對して朝鮮人が發砲するや、それは日本政府にとつて損害賠償を要求すべき絶好の機會である様に思はれた。そこで黒田大將

が派遣され、その砲の偉力によつて千八百七十六年春通商條約調印に成功した。此の條約によつて朝鮮はその港を日本に開放し、支那に對する隸屬關係を脱すべき事が約された。併し日本人が、此の條約に依つて朝鮮に確固たる地歩を占めたと信じたのは間違つて居た。ロシアは直ちに隙間に割り込んで來て自ら己が地歩を確めるために、切角日本が無理に作り上げた朝鮮の自主宣言を利用したのである。ロシアは非常に上手に日本を追ひ立てたので、此の最初の條約から六年後、既に京城に於ける日本公使館は廢止の運命となり、日本は千八百八十二年とう／＼元の默阿彌となつた。

又、それから三年後に調印された對支協約、即ち千八百八十五年の「李・伊藤協定」(此の協定によれば日支兩國は朝鮮に出兵しない義務を持つて居た)も、徒らにロシアの役に立つたばかりで、朝鮮に於ける日本の勢力は益々衰へた。

かうして日本の北進路も、南進路も閉塞された様に見えるが、偶々千八百九十年、イギリス外相ロッド・サリスバリーは、アジアに於て益々危険になつて行くロシアと、それからイギリスのアフリカ政策を妨害するフランスに對して最後の手段を用ひた。サリスバリーにとつて日本は有用な全く危険のない相手に思はれたから、先づ此の日本に他の國々と同様な權利を與へようと思つた。そこでイギリスは千八百五十四年日本から強請した諸條約の修正を提議した。かくて列國は遂に千八百九十四年七月、關稅に關する日本の自治制を承認し、治外法權を撤廢した。二等國「未開民族」と云ふ烙印は消された。そ

して日本は解放され、強くなり、強國として認められた様に感じた。かうしてサリスベリイが期待した通りになり、日本はその價值を示さうとした。千九百三十四年、フィリッピン獨立の約束は、十四日後に日本を勇躍させてアジア・モンロー主義を宣言せしめ、合衆國に對する攻勢をとらせるに至つたが、丁度それと同じ様に、此の「白人の地位の喪失」(日本人は千八百九十四年に於ける此の條約の修正をかう呼んだ)にすぐ續いて起つたものは、對支宣戰であり、朝鮮攻撃であつた。ヨーロッパ列國と新條約が締結されたのは千八百九十四年七月十六日で、同月二十七日には早くも戦争が起されたものである。

日本は京城を占領し、旅順港を攻撃し、威海衛を取つた。日本の戦死一萬八千、戦費二億圓。併し戦争開始後二百三十日にして巨像支那は敗れた。千八百九十五年三月、下關平和交渉。支那代表李鴻章は、日本人の暗殺のために命を捨てさうになり、此の交渉をベッドの中でまとめた。四月、支那は朝鮮の獨立を承認し、正式に臺灣、遼東、澎湖列島を日本に割譲し、賠償金二億テールを支拂ふ事になつた。支那は此の金を拂へなかつたから、關稅權を抵當としてヨーロッパ諸國から借りなければならなかつた。又支那は貿易のために四大港を開き、賠償實行まで威海衛をそのまゝ抵當として日本に委かせておかなければならなかつた。かくて日本の北進の道は開かれた様に思はれた。

併し、それは唯「思はれた」のに過ぎなかつた。何故ならば、下關條約締結後間もなく、ドイツ、フランス、ロシアの三國は、日本に對し條約に従つて決定した併合を放棄し、その代りに追加賠償金三千萬

テールを要求すべしと「忠告」したからである。日本は戦争に勝ちましたが、全力を使ひ盡して居たから、止むを得ず讓歩して澎湖列島を斷念し、威海衛から撤兵し、遼東半島を支那に還さなくてはならなかつた。四十人の陸軍將校は「抗議と屈辱の印」として、共に切腹して果てた。併しそんな事はヨーロッパ人にとつて、彼等の干渉報酬を手に入れる何等の妨げともならなかつた。即ち、ロシアはシベリア鐵道完成のためにバイカル湖とハルビンを結び、かくしてアムール地方を迂回せずに滿洲を通つてウラヂオストックに達する事の全權と、續いて旅順港使用の特權を得、ドイツは膠州灣を租借し、フランスは雲南省に於けるその地位を強化したのである。

今日ではロシアもドイツも、此のた易く手に入れた獲物をほんの少しでも残しては居ない。又雲南省に於けるフランスの利得も殆んど無に等しい。當時彼等の遣り方を怒つたのは日本人ばかりでなく、支那人もこれに對して不快の念を抱き、それはやがて兩國を親善關係に導く事になつた。そして支那人は血腥ぐさい戦争の餘熱がまださめない中に、又もや千九百四年に於ける日本の對露戰を著しく容易にした。ロシア人はその強奪ぶりのために、極度に憎まれて居たから、日本をして此の勝目のない戦争を敢行させたのである。極東に於けるドイツの威望は地に墜ち、フランスも同様な運命になつた。彼等と行動を共にせず、此の戦争を利用する事が出来たのは獨りイギリスばかりであつた。

英國と日本—かう云ふと可笑しいかも知れない。何故ならば日本は下關條約とこれに續いたヨーロッパ

バ列強の干渉（それは日本に甚重な犠牲を拂つて獲得した結實を失はしめた）が起る迄、列強を信じ己が模範と見做して居たからである。それまでヨーロッパ人は日本人の眼にいつも「夷狄」と見えただけども、日本人は白人に對して、何か尊敬の念の様なものを抱いて居た。日本は泰西の哲學者、政治家の著書を翻譯し、精神による世界の平等、親和、進歩の美しい教へを信じた。ところが下關條約後に於ける列強の行爲は日本の眼を開かせた。日本は道德の覆ひもして居ないむき出しの暴力を見た。そこで最早ためらふ事なく實力行爲に移り、白人の暴力行爲の教訓をも學んだのである。さて支那の徹底的な朝鮮放棄を利用するために先づ日本の手で朝鮮の女王が殺害されたが、それでも京城に於けるロシアの勢力は減退しないばかりか、ロシアがベツオブラツォフ特權を得、朝鮮の大森林さへ獲得するに及んで、日本では對露大決戦の準備が着々と行はれ、同時に支那大陸に於ける併合政策が初められた。此の新らしい進撃に機會を與へたものは義和團事件であつた。支那人は此の事件で奇襲によつて外國の束縛を脱しようとしたのであるが、その最初の犠牲になつたものは北京日本公使館の書記官であつた。そこで日本は「暴徒廢懲」、即ち千九百年の北京占領に参加し、かうなつたら他國より永く支那に軍を止めておかうと考へた。併し再びロシアと衝突した。日本がその意圖を完成するより早く、ロシアは其の舊同盟國から離れ、その約束を破つた。ツァールは義和團事件を口實として、引き続き滿洲に軍隊を置いたのである。

日本は交換條件を持ち出した。滿洲をロシアの自由に委せるから、その代りに滿洲の十二分の一位

しかない朝鮮に於ては、日本の自由行動を認めてもらひたいと申し込んだのである。併しロシアは餘りにも強かつた。ロシアは朝鮮も滿洲と同様一人占めにしたかつたのだ。千九百一年、日本が權益範圍の分割を提議した時は、千八百九十一年に着手されたシベリア鐵道の建設がチタ迄完成して居た。此の「鋼鐵の腕」は、カナダ太平洋鐵道よりも早く出来上り、年々六百料も進行した。そして今やロシアは既に日本海の安全を脅かす程近づいたのである。又ロシアはベルシヤに於ても成功を収めた。即ち、ベルシヤと印度の國境近くに於て物騒な活動をやり初めたのだ。ところでイギリスはエヂプトに厄介な事が持ち上つたので南阿戰爭を起さなければならなくなり、又一方ではドイツとの競争を益々痛切に感じ初めて居た。こんなわけでツァールには世界で何も恐ろしいものはなかつた。殊にアジアに於ては何者をも恐れなかつた。恐らく彼は實際最も強かつたかも知れない。しかし彼はそれを餘りにも外に示し過ぎた。かうしてロシアがその強大を誇つて、到る所に敵を作つて居たのに反して、日本は健實な親交を求めこれを發見した。ロシアは日本人に對して朝鮮を遮閉し、滿洲をつひ鼻先から取り上げてしまつたが、日本はこれに對して致命的な反撃を加へるべく用意おさ／＼怠りなかつたのである。

イギリスとの同盟は、既に千八百九十五年以來問題になつて居た。日本と同じく、運命から天然の資源を恵まれず、日本の過剰な人間と同様に、その本國の島に充分な土地も充分な食物も持たず、その商工業で生きて行かなければならなかつた英國——日本は此の英國に朋友を見出して居た。白人列國の中

で、最も日本人から理解されて居たのはイギリスだったのである。ところでイギリスはあの「白人の強奪」(三國干渉)に加はらなかつたから、親英感情は更に大きくなり、ロシアに對する同じ恐怖は又これを補つた。千八百九十八年、ヨセフ・チエムパレンが具體的提案を出すと、日本は狂喜し、ロシアの滿洲占領と共に、早くも日英同盟が成立した。即ち千九百二年一月三十日、ロード・ランズダウンは日本と條約を締結したが、此の日英同盟は世界變革の現實を齎し、ロシアの没落の原因となり、ひいては間接にイギリスの大敗北となつたのである。

勿論當時これを前以て知つて居たものは、イギリスはおろか誰もなかつた。日本が此の新らしい親善關係を外交的行爲以外のために利用しようなどと考へた者もなく、日本がロシアの様な大國と勝敗を決する程無鐵砲だとは誰も思はなかつた。しかし日本は假令日英同盟があつても、依然として南進の路は阻まれて居る事をよく承知して居た。日本はアメリカ人の鐵の様な抵抗を感じ、フィリピンと云ふ障礙物をまたぎ越す事が出来ないのを知つて居た。既にウラヂオストックとアムールに依つて日本をしっかりと抑へ「日本の心臓を脅かす懷劍」を手離さないロシアは成程強大ではあつたが、北進の道は日本にとつて、南進の場合のアメリカの抵抗に比べれば、邪魔が少い様に思はれたのである。此の道こそ滿洲の鐵と石炭に至るばかりでなく、日本に確固たる安全を約し、軍略的に堅固な境界を與へるものである。ロシアに於ける革命の氣運益々濃厚となり、日本が滿洲に關してロシアと交渉を重ねて居る間にロシア

高官將校の腐敗と不得要領を認め、愈々決定的な瞬間の來たのを知つた。日本は先にイギリスと同盟し千九百四年にはあの有名な兒玉覺書を敢行し、フランスに對してインドネシアは無防備であるから、フランスが此の植民地を維持しようと思へば、日本に對する好意的中立を宣言すべきである旨を明らかにした。日本はフランスに對して、ロシアの鐵道建設によつて得べき巨額の利得を斷念するか、インドネシアと東洋に於ける全優越權を失ふか——此の二者の選擇を殆んど何の危険を感じずに提出する事が出來、結果は日本の豫期した通りになつた。日英同盟は日本を他の「白人盜人國」から守つたのである。フランスは躊躇したが、遂に此の脅迫に對して逃避的な回答をし、かくてロシアは孤立した。

ヨーロッパ各國はその上日本に十四億二千萬圓を貸して日本が大國に飛躍する資本を供給したが、自ら日本と云ふ強敵を作つた事になつたのである。そして日本は更に公債や寄附等で自國民から約三億圓を調達すると、此處に初めて千九百四年二月五日日露の國交斷絶し、日本は疾風迅雷ロシアの東アジア諸障地を突いた。日本の陸軍は、ドイツ式の組織によつて徵集され、プロシヤ式訓練を受けたものであるが、當時漸く十萬を動員出來たに過ぎず、豫備兵も高々十五萬に過ぎなかつた。併し全軍は此の戰爭の意義を知り、日本はその生存のために戦つたのだ。これに反してロシアはその國民の眼から見れば、何等の價値のない寒帯地、詩人や思想家、自由の闘士等が追放されたステップのために戦つたのである。千九百四年二月九日、殆んど同時に旅順港と鎮南浦とが攻撃され、乃木大將はその兵を率いて、露軍

保羅の鐵條網を越えて突進するや、日本軍の死者數千、やがて旅順港の高地は血の海と化し、日本兵で陥穿に落ち入る者數千、地雷に吹き上げられる者も數知れなかつたが、残つた者はものともせず前進し、到る所で露軍を蹴散らし、氷の河の中に、又風に吹き荒された岡の上に從容として死んで行つた。戦死者數知れぬかうした恐ろしい光景を見ても、彼等は福島大將が彼等のために書いた軍歌を益々固く信じて行くのであつた。

ウラルの山から

日の沈む地の果までも

我等が軍旗を翻さん

人道と正義の軍の

向ふ所に敵はなし

されば此の戦こそ

我等が歡喜の頂なり

信ずべからざる事が起つた。ロシアは敗北したのである。しかし日本が今や有頂點になつて既に全世界を征服した様に思つて居た時、世界は一躍列強に伍した此の新らしい成上り者を恐れ初めた。日本では多くの若い熱狂家が、日支軍がドイツとロシアを屠つてパリを壊滅させるところを畫いた繪を賣り、新聞

は地球に跨がつて大手を擡げてヨーロッパと全アジアを抑へて居る武士を表はした繪を掲載した。そして日本は遂に自由になつたと信じ、過剰人口を廣大な滿洲、シベリア、蒙古等に流れさせる事が出来ると思つたが、此の時遅し、白人の陰謀家は又もや日本からその戦争の賜を奪はうとして居た。世界は突然支那も日本同様生存の權利を持つて居る事を思ひ起し、ロシアが奪つた滿洲と云ふ獲物を日本に引き渡す事によつて、此の奪略を合法的にする理由は少しもないと云ふ事を確認した。ウィルヘルム二世は「黃禍」に對する痛烈な宣傳を大いにやり初め、アメリカ國民は押し寄せる有色人種の潮に對する多くの示威によつて煽動された。又、フランスはロシアに貸した大金を忘れはしなかつた。かうしてアメリカ大統領テオドル・ルーズベルトが、交戦國相互に交戦中止を勸告した時は、日本の自意識を壓へつける用意はすつかり出来て居た。だからポーツマスに於ける休戦談判の際には、既に下關係約で日本人が體驗した事と全く同じ結果になつた。「白人世界」は日本の公然たる勝利から、貧弱な平和條約を作り出し、日本はロシアが支拂ふ用意のあつた五億ドルの賠償金を手に入れる事が出来なかつた。そして旅順港、滿洲に於ける貿易の自由、樺太の南半等を得たに過ぎなかつた。朝鮮に於ける日本の地位は強化されたが、此の時は既に此の特權を利用すべき資金を使ひ盡して居たから、日本は更に負債をしなければならなくなり、戦勝によつてこれをイギリス財界の人々から調達する事が出来た。日本の血は血の金利に變へられ、日本は英佛によつて經濟的制肘を受ける事となつた。(日本は千九百十四年から十八年に至る戦利に

よつて初めて此の束縛を脱する事が出来た。

かくて此の決戦による物資的利得はかくも貧弱なものであつたとは云へ、その精神的利得はやがて莫大なものである事が證明された。「白人の闖入者を膺懲し」「成吉思汗の事業を繰返した」此の力に驚歎したのはアジアの諸國ばかりではなく、ヨーロッパ諸國も亦、日本の勝利から當然の歸結を引き出した。英國は既に日露戦争が終結する以前から、千九百二年の同盟を擴大更新せん事を急ぎ、千九百五年八月二日、對日新條約を締結するや、他の諸強國も日本が一躍一等國になつた事を承認した。各國は日本の意を迎へ「黃禍」論に反對したが、同時に一方に於ては同盟を保護しようとした。

戦勝の酔を満喫し、大國ロシアを屈服せしめた日本人は、今や我こそ無敵なり、神に選ばれて全世界を支配する者なりと固く信じる様になつた。併しヨーロッパの内部の勢力争ひは、此の戦勝の確信以上に日本を用心深くさせ、日本を新らしい危険な冒険に巻き込まうと云ふあらゆる試みを巧みに回避させた。日本は既に事物を鋭く觀察し、ヨーロッパの政策の絲の縋れを解き、白人の弱點を利用する事を學んで居たのだ。そして日露戦争がアジアに於ける勢力均衡にとつて決定的であり、ヨーロッパにも大きな影響を及ぼしたと云ふ事を早くも悟つたものである。

實際此の日露戦争は、當時既にドイツの周圍に張り初められて居た網を破り、英國に接近して來たフランスから前者を引き離したのである。フランスはロシアがアジアで起した戦争を「同盟國がヨーロッパ

から逃亡した」と稱し、同時にイギリスは日本との同盟によつて、フランスの財政的利害關係を著しく傷けたと云つてこれを非難した。十九世紀から二十世紀にかけて、ロシア、イギリス、フランスの三國の同盟が殆んど實現しかけては居たが、一方日露戦争中には英獨の接近が今迄になく期待されて居た。ドイツはロシアに對する莫大な戦費や軍需品等を引き受けた事によつて、日本の感情を傷けたばかりでなく、此の對露供給を政治的に利用しようとしたやり方が悪かつたので、ロシアまで敵にしてしまつた。即ちドイツは千九百二年新税率によつてロシアの地主の感情を害し、彼等はその報復手段を求めたのである。戦争中フランスが對露金融を謝絶してから、ロシアはドイツのクレデットを望んだが、その時ドイツはこれを新率法に依らせた。又、イギリスがスエズ運河を閉鎖し、ロシアが希望峰を迂回しなければならなくなつた時、ハンブルグ・アメリカ航路會社は石炭輸送船を必要だけ動員して用立てたが、外務當局は此の石炭供給を利用して一般的な同盟協定を作らうとした。併し此の協定の交渉がすむ前に戦争は終つてしまつたけれども、此の試みはそれだけでも非常にイギリスとロシアの感情を傷けたのである。日露戦争はヨーロッパの緊張を柔げるどころか、事態を更に悪化させた。そればかりでなく、ポーツマスに於ける平和談判は日本に警告を與へた。此の交渉の際アメリカが演じた役割と、滿洲の鐵道で一儲けするために、此の交渉を利用しようとした鐵道王ハリマンの東京訪問とは、日本にその戦術を全く變へさせる事になつた。日本はロシアと云ふ大國を取つた後は、戦争をしてもその結實は他人が摘み採

つてしまふから、今後は公然たる武力戦に依らずに侵略を続けようと思ひ、その代り經濟的な「平和的な滲透」によつて侵略を試みようと思ひ決したのである。かくて日本は先づ朝鮮に兵を送り、續いて銀行家と技師を派遣した。商人と技術家に依つて占領された所が、他の方法では維持出来ない時に限つて兵を送らうと思つたのである。先づ占領、而る後に宣戦である。日本は此の新戰術で、千九百六年頃には完全にその師を凌いでしまつた。つまり日本は日露戰爭によつて、ヨーロッパ各國が世界戰爭によつてさへ未だ完全には知る事が出来なかつたものを、既に學んでしまつたのである。日本は朝鮮を試験地として利用し、やがて續いて支那の半ばを侵略するために此の方法を用ひる事になつた——然り、此の方法に依つて、ひいては世界征覇を望みつゝ。

日本の朝鮮經營

日本は千九百四年の戰爭の間に得たあらゆる軍事的勝利を、直ちに朝鮮に於て政治的に利用した。宣戰二週間後の二月、形勢は非常に混沌として居たが、朝鮮は日本に對するその「深い信頼」を現はした書類に簡單に調印した。それから五ヶ月後、戰況は好轉して朝鮮政府は日本の財政顧問の言ひになりになる程になつた。そして千九百五年五月三十日には、朝鮮の郵便、電信、電話等の官職の長官は日本人が占め、それから三ヶ月後には關稅關係の事もその手中に收めた。朝鮮が千九百五年十一月公式に日本の保

護國となつた時は、日本の統轄は既に事實となつて現はれて居たのである。

併し統治中とか、統治そのものから利得を得る迄には、未だノ道遠しの觀があつた。日本人が朝鮮に來た時にあつた運輸機關は、駄獸と荷擔ぎに限られて居た。一萬七千軒以上の海岸に、近代船を入れる事の出来る港は僅かに三つよりなかつた。既に千九百年には京城鎮南浦間の鐵道附設が着手され、續いて日露戰爭中には、日本兵が大縱貫線の標示をし始めたが、これは八百軒の鐵道で、今日朝鮮を縱貫して釜山から安東に至り、朝鮮と南滿洲鐵道及びロシア鐵道を結び、又汽船によつて日本の鐵道と連絡させて居るものである。併し主な仕事は他にあつた。即ち日本は鴨綠江流域の森林からとれる木材を利用し、重要な朝鮮炭を採掘する事が出来るやうに、鐵道を建設しなければならなかつたのである。そして今日二千五百五十軒に及んで居る鐵道と一萬五千軒の道路とは、石炭、銑鐵、金及び銅、銀及び硫化鉛礦等による利得(年平均二千萬圓以上)の費用を要したのである。日本は先づ漁獵を合理化し、八萬人の漁夫を朝鮮に送つた。壊れた支那の揚水機械を修繕し、新しい田を作り、大豆の栽培を擴大し、南部では棉と煙草を栽培し、殆んど植民されて居ない山には大麥を作り、又勞働賃金を信じられない程低くし——朝鮮人の賃金は、今日日本人の約二分の一である——かうして朝鮮開拓の費用は朝鮮自身から出させようと、萬策を講じたけれども、何と云つても金の出方ははiri方より早い。それ故に巨額の戰時負債にかへ加へて、朝鮮開拓の負擔は益々これに重壓を加へて行つた。日本は稅率を上げ、それによ

百二十八年には八十一萬五千噸も採掘された様にその原料生産高は増大したけれども、朝鮮の鋼鐵工業は、同年になほ八十八萬二千噸の石炭を輸入しなければならなかつた。好景氣の千九百二十八年に於ける朝鮮の鑛産物の値は二千六百四十四萬に達した。併し日本はこれだけのものを得るために、同じ年に二千七百萬圓に相當する機械、車輛、船舶等を朝鮮に供給しなければならなかつた。千九百二十三年に朝鮮の工業に投資された一億六千萬圓の中、朝鮮自身から出たものは僅かに一千七百萬圓に過ぎず、日本人の會社は九百三十八、朝鮮人の會社は百三十二に過ぎなかつた。これ等の會社の資本金の中、日本から出たものは十八億一千三百六十萬圓、朝鮮からは僅かに二千二百一萬五千圓出たのに過ぎない。又朝鮮の漁業の年々の利得五千萬圓の中、日本に行つたものは二千七百萬圓であるが、これに對して朝鮮に落ちたものは僅かに二千四百萬圓であつた。

此の不均衡は常時に於てさへ非常に危険なものだから、世界的不況が來た時は全く收拾がつかなくなつた。既に日本の銀行は此の北方植民地の開發のために負債をしなければならなかつたのに、不況時代に此の植民地を維持して行くためには更に新しい負債を重ねなければならなかつた。しかもその企業に利益を生まうが生むまいが、外國に對して高利を支拂はなければならぬのだ。朝鮮の全人口の中、日本人は僅かに二パーセントであるが、朝鮮經營の九十八パーセントは日本人が賄つて居る。此の事は今や殆んど堪へ切れない重荷になつて來た。建設途上にある事業の將來の利得は既に債權者がこれを握

り、創立者が持つて居るのは負債だけと云つた様な事業が、正に此の朝鮮であつた。そこで日本の資本家は少し息をつかうと思ひ、新クレデットを拒まれると株を賣つた。かくて千九百三十三年には、朝鮮の鑛山の二十七パーセントはアメリカコンツェルンの資本下にあつた。

日本はかくの如く今迄朝鮮を殆んど經濟的に利用する事が出来なかつたが、統治二十五年の間に朝鮮人の政治的反抗を絶やす事にも成功しなかつた。此の北部植民地の住民は、今日でも併合當時と變らず日本人を除き好んで居ない。彼等は東京では暴動や暗殺によつてその反感を示し、又朝鮮にあつては色々の細かい保守的な習慣によつて日本人に對する嫌惡を示して居る。此の保守的な多くの習慣は日本人の感情を害し、彼等に苦々しい思ひをさせ、或は滑稽に見えもするものだが、さもなければ一旦對ソツイエト戰が勃發するとか、日本自身に革命でも起るとかすれば、日本にとつて致命的な形をとるかも知れない精神状態の現はれなのである。例へば朝鮮を旅行すると、大抵の年寄りが白衣を着て居るのを見て奇異に感じる。何故ならば白色は極東では喪の色だからである。家族の一人が死ねば六ヶ月間白服を着る。王子が埋葬されると、以前は九ヶ月間白服を着たもので、領主が死ねば一年半も着なければならなかつた。此の朝鮮人の白服に就いて日本人の話をきくと、十七世紀に五人の朝鮮王が相次いで死に、朝鮮人は七年間も喪服を着て居なければならなかつたさうである。此の事が彼等を白服に慣らして、今日に至る迄着つづけて居ると言はれる。これが日本人の解釋である。併し朝鮮人は次の様に説明して居

る。彼等はその失はれた自治を悲しむばかりに、日本の壓制に對する抗議として、此の白服を着て居るのである、と。

遮莫、朝鮮に於ける至上命令は清潔であつて、白衣は少くとも一週に三回は取り替へられなければならないから、朝鮮の女はその一生を通じて、夫の「政治的」白衣を洗濯する以外には殆んど何も出来ないのである。これは日本人にとつて恐ろしい力の浪費に思はれる。そして彼等は此の白衣の習慣絶滅のために大奮になつて居るが、少しも効果を上げて居ない。

京城の街路では到る所で老人の栗賣りを見かけるが、彼等は藪の上にデツと坐つて、細長い藁帽子を被り、帽子の下から辨髪をのぞかせて居る。視線をボンヤリと遠方に漂はせて彼等は長い陶器製の煙管で煙草を吸つて居る。此の煙管は非常に壊れ易いので、うっかり動かす事が出来ない。此の喫煙法は朝鮮人の懶惰を益々ひどくするものだ、と日本人は言つて居る。そして彼等が此の長い煙管をやめさせようと躍起になつて居る事は、白衣の場合に劣らないがやはり徒勞に歸して居る。

日本は朝鮮に最新式の空港を造り、舗装道路を建設し、新羅の古都、東亞の此の古都から上品な療養地を作つた。又平壤村を人口十二萬の都市にしたりしたが、それにも拘はらず日本の計畫を住民の間に實行する事には成功しないのである。何故か？ 日本政府は了解に苦しんで居る。朝鮮に居る日本人官吏は、彼等が文明の代表者であり、苟も理性的な民族なら、兩手を擴げて彼等を迎へる筈であると確信

し、朝鮮人の此の志思ぶりに激昂して居る。だから彼等が反日的組織を摘發すれば、拳を振つて掴み掛るのである。かくて朝鮮の國境から僅かに數時間の距離のウラデオストックにその本部を有する「朝鮮共産黨」が威を振ひ、その領袖等彼等は例へば徳田の様にうまく逃れたは、モスコに居て絶えず何等かの方法で朝鮮の共産黨員や滿洲の國家主義者等に、宣傳ビラや金を送つて居る様な事態になつて居るのである。日本は臺灣で生蕃に手を焼いても遂には完全な成果を収めたが、朝鮮ではその平和な農民を相手にしたのにも拘はらず、經濟的にも政治的にも、何と云つても失敗をしたのである。日本は此の事を早くから自認し、朝鮮には唯軍略的な地位としての價値を認めて居るのに過ぎない。即ちロシアに對する防壁として、又支那へ渡る橋として……。

第十五章 滿洲の「平和的」占領

日本の南滿洲鐵道

支那——それは日本の發展が始まつてから、その巨大さと壓倒的多數の大衆によつて、その國民に不安の念を抱かせた隣國である。それは又實にその内的な弱點と勢力の分裂によつて、日本に侵略の食指を動かさせる巨像でもあつた。

たのである。

打ちつゞく内亂で四分五裂となり、白人と隣國の黄色人種に虐げられて、支那は財政的にも膏血を搾られた。即ち日本には戦争賠償金として二億三千万テールを支拂はなければならなかつたし、義和團事件の賠償として四億五千万テールを白人諸列國に拂はなければならなかつた。對日敗戦後二年、ロシアが旅順港と大連をロシア帝國に保證すべきカッシニ協約(Cassini-Konvention)を強奪するや、支那はこれに抵抗する事が出来なかつた。千九百三年、フランス資本四十パーセント、ロシア資本六十パーセントからなる露支銀行の活動のお蔭で、鐵道線——自滿洲里至浦鹽、及び此の線の中央から分岐してハルビン、旅順を結ぶ線路區——が完成し、北部地方が納税を初め、中支及び南支の過剰人口の植民地になつた時支那はこれを喜びさへした。

併し此の滿洲の平和的開發が始まると間もなく日露戦争が起り、奉天(正に開花しつゝある都「繁榮」は激戦の中心となり、三十萬の兵が此處に相對峙した。そして出来上つたばかりのものは再び毀滅に歸した。日本が對露平和締結の後、ロシアに代つて滿洲租借權を得、ロシアの鐵道の南部——長春(今日の新京)、旅順線——を獲得し、ロシアと同様に、此の鐵道線の兩側二十二軒の軍事的占領權及び一軒あたり十五人の鐵道警備兵を置く權利を得た時、支那は再び十年前と同様な状態になつた。新しい支配者等はロシア人と同様に繁榮を約した。そしてその勝利軍を依然として滿洲に置いて居たので、支那は千九百五

年の十二月、日露媾和のために更に追加協定に調印した。支那は日本を新しい租借國として承認し、奉天地方の六大都市に於ける特權を日本に與へ、鮮滿國境即ち鴨綠江の支那側にある大森林を日本に貸し、關稅輕減を許し、日本の朝鮮鐵道線の滿洲鐵道網への接續を保證したのである。

日本は朝鮮に於ける先例を又も滿洲で用ひて、國家に與へられた政治的利得を民間會社に利用させた。即ち「アジアの穀物庫」「好機の國」(滿洲はかう呼ばれて居る)の開發のために、千九百六年の初め「南滿洲鐵道」即ちS・M・Rが創設されたのである。その資本(千九百三十三年迄は四億圓)の半分は國家が所有し、残りの半分は民間で受持つた。そして千九百六年から同三十一年迄S・M・Rの歴史は同時に日本の北方發展の全歴史であり、二十五年間の此の鐵道の發展は、シベリアと蒙古に挟まれ、萬里の長城と黄河の間にまたがつた此の北方植民地の發展と完全に同質のものである。何故ならば、S・M・Rは舊ロシア鐵道を利用し、これを近代化し、何百軒と云ふ支線を作るべき任務を負はされたばかりでなく、道路、停車場、橋梁等を建設する事が喫緊事であつた。と云ふよりは寧ろ先づ第一に道其のものを作らなければならなかつたからである。

滿洲はドイツの一倍半の大きさであるが、日本人がその仕事を初めた時は僅かに一千七百萬の人口であつた。滿洲の皇帝は殆んど三百年間、全支那を支配して居たのであるが、その臣民が遙かに文化人である支那人のために柔弱にされ、或は吸收されてしまひはしないかと云ふ懸念を持つて居た。そしてその

本國を大城壁の背後にある地方から遮断し、屢々支那人の移住を妨げた事があつた。滿洲の原野は支那本土のそれよりも肥沃であつたが、開墾されて居なかつた。滿鐵はその鐵道線から利を上げるために移民を必要としたが、いくら宣傳をしても日本人は餘り來なかつた。滿洲は日本人にとつて朝鮮と同様寒すぎたのである。又日本人は國內に定住して、祖先崇拜の念から家族の分裂を嫌ひ、本來餘り海外移住を好まず、魚、野菜、米等を主食物として肉類を殆んど食べないから家畜飼育に適さなかつた。従つて彼等は高々南方の諸國へ移住するだけだつた。千九百六年滿鐵の租借地に居た日本人は三千八百人であつたが、今日全滿洲でも漸く十二萬人に過ぎない。若し日本が豊饒な谷に植民しようとし、人間の二倍も背丈のある高粱、大黍、世界の大豆全産額の十分の九——かうしたものを供給しようとするならば、又若し滿洲の森林を燐寸、紙等にしようと思ひ、棉、煙草、砂糖大根等を栽培しようとするならば、何百萬と云ふ人間を必要とするのである。僅か二三千人の安い労働者はかりでは、決してその目的は達せられない。だから滿鐵は自ら農民や都會人から移民を徵募し、募集係を支那本土に派遣したりしたから、やがて年々百萬の支那人が滿洲へ移住して來た。その中約六十萬人が滿洲に留まり、残りは收穫が終ると歸國して、季節々々には又やつて來た。滿鐵はこれによつて巨利を博した。季節労働者の往來で列車は滿員になつたのである。かくて滿鐵は四億圓の資本で、千九百六年から同三十一年の間に九億八百萬圓の利益を得た。そして滿鐵の重役達はそれ以來倍加した資本で、向ふ二十年間に三倍の利を得て見せ

ると豫言して居る。

滿鐵は支那の労働者や移民が落して行つた金で村や町を造り、安東、長春、奉天等を擴張し、其處へ順次に二百三十一の工場を建てた。又、農業試験所(現在四十)を建て、地質研究所、奉天醫科大學、工科大學等を創設した。又、その益々増加する社員の子供のために日本小學校を創立し、彼等の病人のために理想的な病院を、旅客のためには大和ホテルを開設した。此のホテルはヨーロッパのどんなホテルにも劣らない豪華なものである。

滿洲が益々多くの機械を要求し、原料生産が増加すると、日本と天津、上海の航路連絡が必要となつて來たので、滿鐵はやはりその經營で船舶會社「大連汽船會社」を創立し、その新汽船のために新たに大連港を造つた。大連は千九百四年には旅順に近い一小漁村に過ぎなかつたが、今日では人口四十二萬五千を有する都市となり、上海を凌駕してアジア第一の商港となつた。これは滿鐵が七千八百萬圓を費した業績であるが、一方これがために大連の運輸は千九百七年から同二十七年の間に六倍となつた。即ち八千萬テールから四億八千六百萬テールになつたのである。今日この港を經由する貨物は年々八百萬噸で日本は七億圓以上の關稅を得て居る。

かうして本國との連絡が完成すると、日本が切實に必要として居た地下の寶——鐵と石炭——が盛んに採掘された。運賃は價格形成に於て重要な役目をするものであるから、滿鐵は自ら撫順鑛山を開鑿し

た。撫順は露天掘では世界最大の炭坑で、埋藏量五十億噸と評價されて居る。採炭の際同時に得られる地氈青様の板岩から重油が蒸溜された(今日年産二十一萬噸)。そして此の撫順炭はやがて鞍山(撫順から百軒足らずの距離にある)の鑛石と結びつけられた。此の鑛層はナグル山から見える限り延びて居る。併し鑛石は貧弱で、僅かに三十八パーセントの金屬を含んで居るに過ぎない。それにも拘はらず十億噸以上と評價される埋藏量があるので、既に鋼鐵工場を建てても引き合ふのである。昭和製鋼は千九百三十五年十五萬噸を生産したが、千九百三十七年には二十二萬噸出來るさうである。又バウクシート(含水アルミニウム酸化物)金、約七億噸のアグネシート等が発見された。そしてかうした總ての富源の採掘は滿鐵の手中にあるのである。やがて滿鐵は日本と云ふ國の中で一國を形作り、支那が日本や日本軍以上に恐れた強國となつた。滿鐵は支那の省長等を買収し、一種の「情報局」即ち「間諜本部」をやつて居た。滿鐵の總裁は内閣と共に更迭されるが、國家の全權を有し、會社は外交的特權を享有して居る。かくて既に五年の孜々たる活動の後には、經濟的浸透の方が武力侵入より効果があり、支那領の滿洲からあげ得た利益は、日本領の朝鮮から得たものより遙かに多かつたと云ふ事などが確證された。滿鐵は民間會社であつたが、直ちに英、獨、佛、米等の金錢を得、そして滿洲を日本の植民地としたばかりではなく、此の拓殖によつても亦巨額の利を得た。白人の列強はこれを見て、早くもポーツマス條約で滿洲を日本に委した事を後悔し、千九百十年アメリカのノックス次官(偶然に鐵道人だつた)は、滿鐵の國際化を要求し

た。併し未だ此の提議、この殆んどむき出しな掠奪計畫に就いて協議が行はれて居る間に、支那に革命が勃發し、千九百十二年滿洲王朝は廢絶された。そして滿洲を日本から奪ふ事が出來ない中に世界戦争が勃發したのである。

日本がアメリカと共に、アジアに於て交戦列強をよい顧客にするために此の機會を利用したのは勿論の事である。又日本が永年の開米國の同盟國である關係上、充分な利得分配の約束を受けて、大戦に加はつたものも不思議ではない。同様に又、最初の戦闘行為として、千九百十四年八月ドイツに對して、その全軍艦を日本及び支那の近海から撤退せしむるか、或は解體せしむべき事、遅くとも千九百十四年九月十五日迄に膠州灣を無條件且つ無償で「必要によつては支那に還附するために」日本官憲に「引渡すべき」事、等を通告したのも怪しむに足りない。又日本人がドイツの反抗即ち十週間に及ぶ勇敢なる膠州灣防禦を口實として、今やドイツはその租借地を讓渡せず、膠州灣は日本の血を以て占領された。それ故にこれを支那に返還する必要は毫もないと聲明したのも當然である。併し日本が支那の正當な抗議に對して、かの有名な「二十一項目」若し支那がこれを受諾すれば、事實上全支那は日本の保護國となつたであらうを以て答へた事は大きな過誤であり、此の赫々たる成果を收むべき經濟的發展を、今や政治的、武力的壓制によつて擴大しようとした事は重大な結果を生ずべき失策であつた。

滿鐵が日本の對支政策の唯一の機關であつた間は、萬事うまく行つて支那の「顔」は認められて居

た。鐵道會社は何時でも必要な支那の勢力家を買収出来、買収された勢力家は又容易に民衆を動搖させずに置く事が出来た。支那人も日本人も得をし、誰でも多かれ少かれ満足して居たのである。ところが例の「二十一項目」は、旅順港の特權二十一年延長、新鑛山の租借、全支に於ける日本商人及び移民の優先權等を要求した。そればかりでなく千九百十五年の此の日本の文書は、更に「東蒙古に於ける自由行動」をも要求したのである。

即ち第五部第一項に曰く「支那政府は日本人顧問に對して、彼等があらゆる外交政策的、財政的、軍事的要件を呈示し得べき權能を能ふべし」、又第三項には「支那の重要な地方に於ては、警察力は日本人と支那人共同にて行使するを必要とす」とあり、第四項には「支那は日本から一定量約五十パーセントの軍需品を購入すべく、支那の軍需工業は日本人専門家の指導を受け、日本より購入の原料のみによつて行はるべき事」が規定されてあつた。要するに、日本は千九百十五年に此の大きな支那を一撃の下に征服する事が出来ると思つたのだ。既に千九百年、聯合軍による北京占領後は唯列強相互の嫉視によつて支那の分割が妨げられたが、今や列強は交戦中だから支那を顧みる暇はない——かう云ふ事を日本は頼りとして居た。

そして實際、若し列強の庇護と國內の力が無かつたならば、支那は日本に抵抗する事は出来なかつたのである。支那は日本の殆んど全要求を容れ、これに屈服した。併し個々の談判をいつ迄も延引させて置

き、國民の大部分が日本に對して激昂して到る所で反日暴動が勃發し、怠業行爲が滿鐵の生命を危くさせて日本の貿易が停滯し、殊に世界戦争が終結して白人列強が再び息をつく事が出来る迄待つたのである。日本は支那から幾つかの經濟的便益を強奪して居たが、既に千九百二十二年のワシントン會議によつて九ヶ國條約が成立し、それは支那に對して「門戸開放」を確立し、日本がその特權を事實上利用出来な様にした。更に悪い事には、既に日本の開發事業に懸命に協力し初めて居た支那人を千九百十五年以來敵にしてしまつた。日本の公然たる權力政策は、親日支那勢力家達にさへも永く日本の權益を守る事を不可能にさせたのである。

一例を擧げて見る。日本の滿洲進出以來、到る所で「奉天の小匪賊」と云はれて居た張作霖が滿洲に君臨して居たが、此の長官は海城と云ふ滿洲の縣に百姓の子として生れた。百姓の子が誰でもさうである様に彼は收養がよければ月に一回肉を食へたが、不作の時は飢に苦しんだ。未明から夜まで田畑で働いたり、山で薪を集めたりしたが、或時彼が森に居る間に匪賊が彼の村を襲ひ、何も眼ぼしいものが無かつたので村を焼き拂ひ、若い張の親戚知己全部を殺してしまつた。一夜にして此の村に残つたものは薪を集めて居た數人の少年だけになつた。そこで張は彼等を盜賊の一群とした。彼は盜賊のためにその持つて居る物の總てを失つたが、こん度は掠奪が又彼の身を保つ事になつたのである。かくて未だ子供ではありながら、張の子分達は到る所で殺人も掠奪もした。彼等の親分は多くの大人の親分より抜目がない

かつた。彼はその両親を苦しめて遂に殺害した匪賊を発見してこれを殺した。彼の一團は獲物が多くなつた。彼は益々強大になつたが、彼は此の一團をしっかりとまとめ、遂に奉天附近まで侵出した。そして此の首都の長官が正に彼に對して軍隊を派遣しようとした時、日露戦争が勃發したのである。張は此の好機を掴み、その子分等と共に日本の志願兵となる事を申し出た。彼は武器と衣服を得ると勇敢に露軍に立ち向つて戦功を立てたので、東郷大將でさへ彼に注目する程になつた。戦争が終ると日本人は此の二十歳足らずの部下に、支那軍團長としての地位を與へた。張は此の跳板を利用して事を忘れず、既に千九百十六年には奉天地方の軍長になつた。彼は最早「奉天の小匪賊」と呼ばれず「北方の狼」と呼ばれた。そして彼の滿洲の大先輩努爾哈赤の様に、次第に支那本部に向つて蠶食を初めたので、千九百十八年、支那政府は彼を懐柔する目的で全滿總督に任命せざるを得なくなつた。彼はその敵を買収したり殺害したりしてその勢力範囲——ひいては彼の黒幕、即ち日本人の勢力範囲——を益々擴大して行つた。そして此の時既に支那共和國大統領になる希望を持つて居る様に見えた。彼は立派な衣服を作らせ早くも滿洲王朝を創立した様な夢想に驅られ、奉天の宮殿では神帝ぶつて散歩して居る彼の姿が見られた。かう云ふ有様は千九百二十二年まで續いたが、遂に吳佩孚のために徹底的に打ち破られ、總ての官職を褫奪された。日本はこれに干渉し、張をして滿洲獨立を宣せしめた。日本が既に此の年試みた事は千九百三十二年に至つて成就した。即ちその植民地を支那の一獨立國としてカムフラージュしたのであ

(290)

る。それ以來張作霖は北方の眞の支配者となつた。併し彼(或は日本)は、飽く迄全支を手中に收めようとし、千九百二十四年、二三の軍長連の反逆をうまく買収し、一時北京に君臨した。併しバン層は餘りに大きくて彼はこれを消化し切れなかつた。彼の金主であり武器供給者である日本は、千九百二十四年にはその興隆時代の終りに到達した。千九百二十三年の震災の結果は慘憺たるもので、日本はその大陸政策を一時中止し、先づ本國の復興に努力しなければならなかつたのである。支那に於ける發展は放棄せられ、張作霖は一先づ見捨てられた。ところでソツエト人は帝政時代のアジア政策を持續し、千九百二十四年三月十四日、カラハンは支那と一條約を締結したが、此の條約は「帝政時代の不平等な協定」を全部取消して居る。かくて支那革命家の大時代が初つた。孫逸仙は共產黨の典型に従つて國民黨再組織を完成し、モスコイ代表ボロヂンと支那の最も有能な革命的將軍蔣介石は支那全土を占領した。そこで張作霖は自己保身のために彼等と協定し、日本の知己を裏切らなければならなかつた。

(291)

「支那革新の父」孫逸仙は百姓の子に生れ、ホノルルと香港で醫學を學び、既に千八百九十四年の日清戦争當時に「支那復興聯盟」の運動を起した。併し彼は其の當時日本人に對して餘り反抗する事は出来なかつた。千八百九十五年九月、廣東で暴動を企てたが、その時は亡命しなければならなかつた。併し海外にあつた支那の豪商達は殆んど彼の言に耳を傾けなかつたが、彼が秘密結社を作つてその政策を神靈禮拜と降神術者の所作で包み、靈媒に彼の教へを唱へさせて神秘的な禮拜式を考案すると初めて入が集

り金が入つて来た。彼は同志を得るや、支那の排外結社の方式に結びつけ「大刀會」と「防衛拳打」等即ち千九百年の叛亂を組織した結社に新しい生命を吹き込み、かくして千九百四年には彼の宗派は既に百萬の信者を持つに至つた。

千九百十二年の革命で新國家の大總統になつたのは孫逸仙ではなく袁世凱であつたが、その後孫の黨派國民黨は益々勢力を得た。孫逸仙がレーニンの援助を得てロシアが資金、武器、指導者等を支那に送つた時、實際新しい時代が来たかと思はれた。併し千九百二十五年三月、建設の途上で孫は死んだ。彼の屍體はレーニンの屍體と同じく木乃伊にされて廟内に置かれたが、此處に支那統一の時代は終つたものである。孫の後繼たるべき激烈な争闘が起り、支那の各地では内亂が荒れ狂つて此の巨人國は再び混沌の中に沈んだ。ロシアは公然と力を借さうとし、一方共產主義者は引き續き虐殺され、支那の革命家は何千となく死刑に處せられ、ポロデンは追放された。滿洲では直ちに張作霖が、再び以前の親日政策を採つた。彼には新主が餘りあふなつかしく思はれたのだ。そして結局彼は其の目的を達した。即ち千九百二十六年、共產黨が張の部下の大將を買収する事に成功し、郭松齡が彼を裏切り、彼が奉天も彼の武庫も彼の妻妾も總ての金も失つてしまつた時、日本は再び干渉し、奉天を中心とした廣範圍の地域の中立を宣言し、張のために機を得てやつたので、張は遂に吉林で彼の部下を集める事が出来て敵を打ち破つたのである。しかし如何に赤軍が退却しても、共產主義思想は残つた。そして日本人はやがて、此の

思想は如何なる公戦よりも危険な事に気がついた。一種の「公安委員會」である「黨部」は孫逸仙の死後も存在し、此の秘密結社は支那のあらゆる小さい町村にもその支部を作り初めた。

蔣介石は中央政府を南京に樹てる事に成功し、黨部は此のあらゆる陰謀を報知した。到る所で排外宣傳が行はれ、南京政府が勢力を張つて来れば来る程、日本權益保護の任に當つて居る張作霖は益々氣が變り初めた。そして滿鐵列車に對する襲撃は頻繁になり、匪賊の横行は眼に餘る様になつて、事態は益々切迫して来た。この間に孫逸仙は次第に支那の國民的神となり、各官廳兵營では、每朝彼の遺言狀が壯嚴な禮拜の下に奉讀され、全員は三分間黙禱を捧げた。又支那の學校には、何處にも此の革新者の言葉が大書して壁に貼つてあつた。曰く

「戦へ、最後まで戦へ、條約の不平等と外國の壓制者に對して、絶えず力を新たにして戦へ！」

若い人々の時代が覇權を得た。併し彼等は新時代の思想を持つて居ても、多くはその理解を誤り、身に着けたばかりの泰西智識を、彼等の民族の數千年間に亘つて試験済みの傳統の上に位せしめるのであつた。彼等は支那革新を志してはゐるが、常にその方法如何を争ひ、權力獲得に汲々として民衆を煽動しても、此の民衆運動を有用な軌道に導くだけの力に缺けて居た。此の様に支那は物情騒然として極端から極端に走り、國內では何等の改革もする事の出来なかつた施政者達が、益々外國人に敵意を示した。日本は支那に於て今までにない抵抗を發見したが、一方その本國に於ても、「白人禍」を感じる様になつ

た。戦時利得のために各地の旅行をする事を得た日本の青年達が、アメリカやヨーロッパの大學から歸國すると祖國の因襲は總て時勢遅れの馬鹿々々しいものに思はれた。彼等は共產主義と自由戀愛を説き蓄音器を買ひ、サキサホンを奏で、ブリッヂをした。そして自分の一家の事などまるで頓着せず、國際會議が日本にとつて不首尾に終つたと云ふ理由だけで、切腹するなどほくどらない事だと思つた。彼等は支那の青年と親交を結び、日本のレーニンを憧れた。その當時大阪のある女學校では、全生徒が胸にアメリカの映畫スターの名を墨で書いて居たり、又首都東京の繁華街銀座には「ステッキガール」が出没した。これはアメリカ娘に負けないケバウしい服装をした女で、望まれれば誰とでも一回一圓二十五錢で彼方此方と散歩をする女である。今や労働黨の數も増し、日本の大學所在地の共產主義細胞は著しく増加した。そして外國仕込みの平和主義の波は、支那に對する極端な干渉を不可能にした。

當時滿洲に駐在して居た「鐵道防備隊」は、日本から見棄られ裏切られた様な感じを抱いた。日本の軍事政策はその當時から明らかに外務省側の政策とは分離し初め、軍部の「急進路」即ち寡頭政治家に對する公然たる暴動が始まつた。一方では雨後の筍の様によえた東京の夜の酒場では、ジャズが最後の樂手や歌手、男のダンサーを驅逐し、日本の到る所にダンスホールが出来て「タキシードダンサー」を雇ひ、又大實業家の夫人や令嬢が、お抱へ運轉手と駈落ちしたり、フットボールの名選手を養つたり、全くヨーロッパの「上流」社會の様な振舞ひをして居る間に、滿洲駐屯軍當局は行動を起したのである。千九百

二十八年六月四日、張作霖は占領したばかりの北京から再び逃れて、彼の乗つた私有列車が日本人が警備して居た奉天附近の鐵橋を通過すると、突然爆彈が投せられて列車は河中深く轉落した。併し表面張は死なうい事になつて、奉天へ連れて行かれた。病床日誌は數週間彼の様子を民衆に知らせ、彼が署名した命令は北部地方の事務を滞りなく取り行ひ、又軍法を下して居た。ところが三ヶ月も此の患者を誰一人として見た者はなかつたから、事態は蔽ひ切れず、遂に張は公式にも死んだ事になつた。彼の養子張學良が彼の後を繼いで滿洲の主となり、日本は一難去つて又一難を蒙る事になつた。何故ならば、張作霖はやくもすれば反逆し勝ちな大匪賊で、遂には非常に獨裁的な人間になつて日本人を極度に怒らせ、又彼は假令厚かましい色々の要求を出し、ために滿鐵は千九百二十五年から二十八年に至る迄の配當を半減した程大金を出させられたが、彼は何と云つても斷然統率者としての器量があり、その勢力を以て滿洲をしつかりと纏め、秩序を維持して居た事が認められるからだ。ところが張の後繼者は自動車、妾、競馬馬等の事ばかりしか考へず、その父以上の浪費をした。彼は柔弱漢で、殊に人に監督される事が大嫌ひだつた。關東軍の將僚達から権力を與へられると、俄かに彼等に背を向けて東京で陰謀を企てさへした。滿鐵からゆすり取つた金で日本の政治家を買収したのである。千九百三十五年二月の議會に於ける討論に依つて、千九百二十八年床次遞信大臣は「政府に張の誠實を説得するために」五十萬圓の收賄をした事が明らかにされた。

新長官が奉天に着任してから間もなく、張は出来るだけ多くの將僚と結び、機に應じて彼の指令者たる日本軍を欺き、遂に押しも押されぬ國民黨の一味となつた。事態は急天直下悪化して、日本人の地位はぐらつき初めた。今や奉天の主権者が滿鐵の利得の分配を欲して居たばかりでなく、支那民衆一般も自分等の財寶の分配に與らない事の不満を鳴らして居たのである。

千九百三十年に法令が發せられ、これによつて外國人による支那鑛山探掘は殆んど不可能になり、加里、バウキシート、マンガン、燐酸鹽、タングステン等の探掘は禁止された。又此の法令は百一種の鑛物（その中には鐵、銅、銀、金も含まれて居る）探掘に對して、外資の參加を支那資本に比較して少額に限定し、又石油、石炭、地脈青含有の板岩探掘は支那政府以外には許されない事を規定して居る。

ところで千九百十五年の條約は、日本人が支那の土地を九十九年間租借する權利を承認したのであるが、今や支那は一法令を發して「曠されて土地を賣る事」を禁じた。これに依ればその所有地を外國人に讓渡した者は五年乃至二十年の禁錮に處せられ、又此の地域が一定の大きさを越える時は死刑に處せられる事になつて居た。かう云ふ法令が發せられる様になつた事は、日本人にとつて非常に都合が悪く思はれたが張は此の法令を利用しさへしたのである。日本がその滿洲に於ける企業に投資して居た十億五千萬圓からあがる收益は、やがて大激減を見るに至つた。ところで支那は千九百十八年の協定に依つて、南滿洲鐵道に平行する線もこれを横斷する線も附設する事が出来ない旨をほつきりと取決めて居た。

併し千九百二十七年以來、支那の手で四平行線が建設され、その一本は奉天と海龍を結ぶものである。かくて滿鐵の利得は低落し、軍の上層部は公然と戦争を要求した。そして日本では全國到る所で示威運動が催された。併し資本家と貿易商聯盟は、その大缺損にも拘はらず協調政策を望んだのである。彼等は支那の日貨排斥を恐れたが、これは又無理のない事である。支那と云ふアジアの重要市場の喪失は、永い間には日本にとつて、個々の企業行為以上に悪い結果を齎すに違ひなかつたのだ。

政府は迷つた。千九百二十七年當時の田中首相の覺書が外國で公表され、その眞偽は明らかになつて居なかつたけれども、その内容は日本の全政治家の意見であつた。

即ち「世界征服の目的のためには、日本は先づ支那を征服しなければならぬ。支那を征服せんがためには、先づ滿洲と蒙古を占據しなければならぬ。」と云ふのである。非軍人政府は軍部と同じく滿洲が絶好の大陸國境であり、日本の防禦組織の必要な要素である事をよく知つて居た。當局の此の評價を疑ふ者は東京に一人も無かつた。此の公式の評價に従つて、今日始めて滿洲の豊饒な土地の四分の一が開墾される様になつたのである。寡頭政治家達は、此の地域には現在の住民三千二百萬人はおろか、九千萬乃至一億の人間が容易に生存する事が出来ること云ふ事を將軍連よりよく知つて居た。「そして此の新移民の一部分は日本人であらう」と日本の外相は言ひ、そして次の様に續けるのである。

「勿論此の日本人達は、土地の富源を開發するのであるが、そればかりではなく、彼等は又我が國の

商品の優れた宣傳係りであり、我が國は我が商品を出來るだけその土地々々の好みに適せしめるであらう。そして我が國の工業のために、恒久的な確かな市場が出來るであらう。」

日本の支那駐屯軍、即ち關東軍の幹部達は言つた。

「此の市場、此の生活地のために我々は戦争しなければならぬ」と。

又、日本の寡頭政治家達は言つた。

「此の市場のために、否就中我々が年々全支から得る殆んど四億圓にも達する金額のために、我々は平和を必要とする」と。

そして此の寡頭政治家たる實業家達の方が正しかつた。千九百三十一年、滿洲に新守備隊が置かれ、鐵道警備兵が條約による規定數以上に増員されて軍部が今にも戦争せんばかりの様子を公然と示し、「匪賊討伐」の際に支那村落を破壊したり支那の有力者を射殺したりする様になると、全支に反日團體が生れてニューヨーク・サンフランシスコ・シンガポール等の支那人街には、日本商品を販賣して居た商人の名を書いたブラックリストが掲げられた。そして激しいボイコット運動が起つた。南京、上海、漢口等では國民黨に依つて取りきめが作られたが、これによつて、日本商品の購入も輸送も禁せられ、日本爲替、日本通貨の使用が禁止された。又此の黨員は誰も日本人と個人的な關係を結ぶ事を許されず、日本の銀行に預金してはならなかつた。そればかりでなく、日本人に食料品を賣る事さへ禁じられたのであ

る。反日團體は日本人商會に雇はれて居る總ての代理人及び使用人の強制的辭職、及び日本との總ての取引中止を指令した。又苦力が日本船のために積荷の揚げ卸しをする事を禁じ、水先案内が日本船を嚮導する事を禁じた。日本新聞の頒布は阻害され、郵便局は日本人に對して一定の發送を拒んだり、又配達しなくなつたりし始めた。やがて此のボイコットは尖銳化して、日本の三領事館は閉鎖の運命になり、二千人の日本人は支那を去らなければならなくなつた。何故ならば最早食料を買ふ事が出來なくなつたからである。

かくて日本の取るべき手段は戦争があるばかりになつた。日本は殆んど三十年間、一種の「平和的占領」を試みて商人を送つて居た。滿洲の人口は日本の隠れた主權の下に三千萬に増加した。千九百七年五千三百萬テールだつた滿洲の對外貿易總額は、滿二十年後には五億七千七百萬圓になつた。日本人が來た當時、滿洲は毎年八百五十萬圓の入超で、常に負債があつたのに千九百二十七年には既に年々の出超一億四千萬圓となつた。然るにかうした總ての成果が今や危險に類して居た。支那の政治家は日本の開拓者の成果をわけなく全部ぶち壊す事が出來たのだ。支那は濫掘を防止しようとした。次の時代のために、鐵、石炭、森林、鑛山等を幾分でもとつて置かうとしたのだ。併し日本はその資本に利子を生ませなければならず、自分が開拓した土地を速かに利用しなければならなかつた。滿洲の全資本の七十四パーセントは日本のものだ。日本は最早滿洲を手離す事は出來なかつたのである。日本は統治、警察業務

の煩瑣、公然たる主権を得ればやがて生ずべき責任と外部的紛争の可能性を厭ひはした。又經濟的利得で満足しては居た。併し若し支那の政治家が日本品をボイコットしようと云ふならば、日本はどうしても彼等を驅逐しなければならなかつたのである。

日本の外務省はその宣傳公表の中で、次の様に言つて居る。

「滿洲と蒙古は我が國の原料需要にとつて好個の資源である。何故ならば滿洲と蒙古は日本に近く、従つて輸送の安全さが大きいからである。遠隔の國々から殆んど總ての原料を輸入するなど云ふ事は、日本にとつて、平時でも感心した話ではないが、そんな事をすれば戦時の場合には生命の危険が生じるであらう。此の考へ方だけでも全世界に日本は滿蒙に向はざるを得ないと云ふ事を確信させるに違ひなす。」

滿洲を放棄して國家的破産を申告し、徳川時代の様に再び鎖國して人口増加を小兒殺害に依つて防ぐか、或は商人と技術家に依つて作られたものを兵によつて確保せしめるか——日本は實際此の一つを選ばなければならぬ立場になつたのである。勿論日本は對支戦の方を選んだ。そして既に世界戦争に依つて學ぶ所があり、戦争をカムフラージュする必要を認めて居たから、徐ろに好機の到來を伺ひ、よい口實を待つた。而も此の口實は早くも千九百三十一年の秋に現はれて「滿洲侵略」が初められたのである。かくて再び、飢餓は正義より強く、世界が偶然に——非計畫的に——分割されて居る間は、公然たる闘争と眞の権力政策とが、唯一現實の様に思はれると云ふ事が證明されたのである。

第十六章 軍事的占領から媒介に依る發展へ

千九百三十六年の滿洲國と滿洲王朝を經る迂路

千九百三十年十一月及び十二月、滿洲にとつて有效な採擷法と、土地賣買法とが發令され、千九百三十一年三月と四月には「排日團體」の結成が始まつた。そして早くも同年七月には、軍事的エピソードに依つて此の諸團體を無効にすべき機會が現はれた。一定の統制の下に支那を旅行して居た無数の日本スパイの一人で、その旅券には「農學者」となつて居た中村大尉が支那兵に殺害されたのである。日本は抗議のための召集を行ひ、八月十七日に至つて奉天の日本分遣隊は此の中村事件こそ戦争の動機となるかも知れない事に感づいた。日本は支那人に賠償を要求したが、一方張學良は抜目のない事日本人に劣らず、調査委員会を作り、十二人の支那高官を現場に派した。そして長いコムミュニケが作成され、千九百三十一年九月十六日、奉天駐在日本總領事は支那人と應接して、滿洲當局の公式の賠償を受け取るべき案内を受けた。總領事は十八日に代表を招待し、此の日の午後六時、事件は外交的にケリがついた。支那人は叛人等を八日以内に死刑に處すべき義務を負ひ、日本領事館當局から要求された總ての聲明を

發表した。

此の日の夜十時、張學良の兵は滿鐵鐵道線を一米ばかり爆破した。かくて駐滿日本軍司令官本庄大將は次の如き布告を發した。

「九月十八日午後十時半、支那東北軍の一隊は、奉天西北側北大營附近に於て我が鐵道を爆破し、日本軍守備隊を襲撃せり。滿鐵は日本の所有にして他國をして一指だにも染めしめざる所なり。然るに民國東北軍は鐵道線路を破壊せしのみならず、帝國軍隊に對しても發砲せり。これ帝國に對する挑戦なり。それ故に本職は斷乎たる處置を執るに寸毫も躊躇するものに非ず……」

此の對抗處置は、殆んど同時に全滿洲駐屯軍と朝鮮軍とに、長春より旅順口までの滿鐵の全區域に亘つて行動を起さしめる事にあつた。日本軍は奉天の砲兵工廠を押へ、軍路上の地點を全部占據した。そして九月十九日、東京に於ける閣議の席上で時の外相幣原男爵が、事件は一局地に限定さるべき旨を説明した時は既に遅かつた。軍部は非軍人政府の知らない間に早くから奇襲計畫をめぐらし、中村事件が豫期の口實を提供しなかつた時は、更に新しい口實を仕度して居たのである。東京の閣議の決定を本庄大將に傳達すべき任務を帯びて居た林奉天總領事は大將に面會を許されず、軍は非軍人政府の政策には最早耳を籍す事を好まなかつた。政府が滿洲駐屯軍に對して増援軍も軍費も送らない事に決定して居る間に、滿洲では各所で苦戦が行はれたが、更に「都合のよい取引」が起つた。既に本庄大將は二人の總督、重要

(302)

都市當局の長、十八人の支那將軍等を買収して居た。日本人はその優秀な軍備で獲得出来なかつたものを、支那から奪つたのである。齊々哈爾のやうな方法が、それで、そこは豊裕な大都會で、その城壁の中に多くの碼子(宿なし浮浪人)と「Egghin」と「尊敬すべき全能の人々」とを隠して居た。碼子の人と云ふのは、金のためには何でもする人間で、「Kilala」と言はれて居るものと全く同じである。嫩江の江岸に砲聲殷々と轟く頃、齊々哈爾ではブラウニング拳銃が發砲された。滿洲最大の秘密結社「大幫」では大活動が始まつて居た。偶然にも日本人の最も能動的な敵手たる馬將軍の宿敵が此の「大幫」のメンバーであり、「福榮銀行」の支配人も同様に此の結社の一員であつた。彼はその銀行で隱氣臭い悲觀論を鎮壓するに足りる金を拂ひ渡し、又日本人の友誼を獲得するに充分な金額さへ出した。日本の騎兵隊が市内に進入して支那銀行にあつた有價物を押収し(全く偶然に支配人所有の物は忘れられた)、輪轉機で號外を印刷し、支那警察を解散させた時は、一發の發砲も聞かれなかつた。

併し日本人が齊々哈爾の様な確實な親誼は、滿洲の何處にも見出せなかつたのは勿論である。そして既に千九百三十一年十一月には十萬の戦死者を出し、三十四の村落は廢墟となつた。猛烈な憎惡が支那の大半を襲ひ、日本が豫期しなかつた様な抵抗力を支那に與へた。併し此の憎惡は日本にばかり向けられたのではなかつた。支那は役にも立たぬ討議、果しもない空談、國際聯盟の頼りない事などによつて非常に

(303)

氣を悪くして居たから、日本を弾劾したばかりでなく、白人諸國をも憎んだ。白人列國は千九百二十二年のワシントン會議に於ける九ヶ國條約で、再び正義と保護を約しながら、爪の垢程の權利さへ主張出来なかつたのだ。ヨーロッパで小競合がとやかく言はれて居る間に、戦争と疾病と憎悪は滿洲を荒廢せしめ、英國やフランスが支那に元氣をつけてやらうか、それとも日本に積極的な好意を見せようか、支那市場を賭けようか、日本市場を賭けようかなどとグズグズして居る中に此の兩方とも失つてしまつたのである。併し日本も亦、二十五年間粒々辛苦して支那で作り上げた多くの物を失つた。日本は支那の北部四省即ち、黑龍江省、奉天省、吉林省、濱江省等を占領し、國土は百萬平方浬以上大きくなり、三千萬の新らしい臣民を得たけれども、千九百三十一年の軍事的エピソードは日本にとつて少しも利得にならなかつたのである。

日本は世界戦争當時の白人列國の宣傳法を巧みに模倣し、千九百三十一、二年の滿洲出兵の間、ヨーロッパ諸國民が手も足も出せない様に、千九百十四年に發明されたあらゆる手段を用ひた。即ち日本の新聞代辯人は英米佛等の新聞に「色を着けた種」を供給したのである。そればかりでなく、例へば二つの寫眞が同時に發表されたが、其の一つは「支那兵に指を切り取られた二歳になる朝鮮の子」と記され、もう一つは「奉天日本赤十字病院に收容された支那負傷兵」と云ふ説明がしてあつた。此の反對の事も明白であるが、日本の所期の目的は達せられたのである。何故ならば、その子供が何時、誰に指を切られ

たか檢べやうなどとする者はなかつたからである。此の寫眞は効果があつた。少くともヨーロッパと日本に於ては。僅かに人口の二パーセントしか讀む事の出来ない支那には、此の種の「説得法」を用ひても未だその効を擧げる事は出来なかつたのである。日本はその行動を白人世界の前には取繕ふ事に成功したが、破壊された家や、殺害された身内の者等で、毎日事實を見せつけられて居る支那人の前には蔽ひ隠す事が出来ず、支那人は依然として日本に敵意を抱き、日本をボイコットした。そして此のボイコットは、日本軍の勝利毎に激しくなつた。右手が手頭の前で打ち切られ、恐ろしい傷を負つた支那商人が血だらけの顔死の状態で天津や上海の日本租界に運び込まれる様な事件が多くなつた。彼等は日本品を賣つた廉で、その手を手斧で打ち切られたのである。日本の工場主達はそのストックをスイス製として包装し、その燐寸をソツェット燐寸の様に包み變へた。又支那の日本製綿布は非常に巧みに製造されたイギリスのマークを着け、日本の鋼鐵品はソリンゲンのマークを着けて登場したが、支那國家主義者は日本人との契約の嫌疑を受けた商店へ爆彈を投げ込む事を止めず、千九百三十二年は日本經濟破滅の年になつたのである。例へば對支輸出は千九百二十八年に三億七千萬圓であつたが、千九百三十二年には僅かに一億四千八百萬圓になつてしまつた。此處に於て支那駐屯關東軍の將軍達も、如何に優秀な機關銃も軍隊も、此の商品ボイコットに對しては無力な事を認めた。そこで彼等は調子を優雅調に變へたのである。即ち占領地を合一して一國家とし、これを滿洲國と命名、此の新産物に支那人大臣を按配し、千九

百三十二年三月一日には此の國に「完全なる自由と獨立」とを與へた。彼等は軍事的占領から「媒介による發展」に移行したのである。「媒介による發展」は別に珍らしいものではない。それは心理學的熟慮に基づいた保證つきの壓制方法で、殆んど總ての植民民族はこれを用ひて居る。イギリス人もオランダ人もフランス人もその保護國に皇帝とか國王とか君主とかを持つて居て、彼等は廷臣や印象的な華麗さで取巻かれ、外見上はその國民を支配して居る様に見えるのである。そしてヨーロッパには此の見掛けにだまされる者は誰も居ないが、士民を瞞着するには充分である。スラカルタの皇帝陛下とか安南王とかは唯彼等の「偉大なる白人同胞」から助言を受けなければならぬ。かう云ふ方法で、つまり「媒介」に依つて統治されて居る國民には、「惡魔の様な外人」に依つては無く、彼等自身の王朝に依つて抑壓されて居るかの如き錯覺が残るのである。

ところで日本は此の方法が模倣すべき價值のある事を知り、これは滿洲ばかりでなく、全支に對しても理想的な戰術だと思つた。此の方法は北部に於ける平和恢復の可能ばかりでなく、南方侵略の可能性をも提供する様に思はれたのである。

日本は一種の「媒介」即ち張作霖將軍による試みは、失敗に終つた事を隠しはしなかつた。併し日本は、大支那の平和を維持する事が出来る程強力で、而も同時に日本の傀儡となる程聰明で弱い廢帝だとか將軍乃至は革命家と云ふ様な者を發見する事の至難であるのをよく知つて居たのである。併し此の勝

負は危険極まりないが、その賭金は莫大である事も承知して居た。日本の政治家は世界の歴史を詳細に識り、又總督とか表面上の皇帝とか云ふ者が、よくその黒幕に叛いた例、例へばイタリアがエチオピアでメネリツク二世に武装させてこれを強力にし、以てエチオピアの統治を行はせたが、千八百九十六年此のメネリツクのために、アドアの戦で全滅の憂目に會つたと云ふ様な事を知つて居る。日本の政治家はかうした事を知らなかつたわけではないが、同時に支那人の心も知りぬいて居ると信じて居た。三つの事が此の民族の生活を支配して居る。是非とも見掛けの偉大さ即ち「面子を護る」事、出来るだけ商賈をする事、傳統を何よりも尊重する事——此の三つである。

若し日本が滿洲の匪賊横行を斷ち、商人の擄取を總督や將軍に依つて防ぎ、これによつて貿易を繁榮させる事に成功するならば又同時に、少くとも外見上は此の新國家を完全な獨立國家であるとして、それに依つて支那大官の「面子」を守り得るならば、更に又帝位に適當な候補者を發見する事が出来るならば、日本の成功の本質的前提は與へられたのである。

ところで此の帝位の候補者は既にすつと以前からあつたのだ。千九百二十四年、キリスト教徒で又共產主義者であつた馮玉祥將軍が北京を占領した時、彼は何かうしろめたい理由から、主だつた頭目連ばかりでなく、此處に流謫生活を送つて居た廢帝溥儀をも壓迫した。此の廢帝は、十七世紀に清朝を創建し、爾來約二百八十年間支那全土に君臨して居た滿洲征略者の繼承者なのである。彼は千九百九年初少

にして帝位に即いたが、間もなく千九百十二年の革命で放逐せられ、同十七年或る將軍に依つて再び數日間主權を握らされた事がある。その後落魄の身を北京に横へ、貰へる筈になつて居る四百萬ドルの示談金を毎日あてにして居た。

千九百二十四年に溥儀を齷弄した生命の危険は、當時の日本公使吉澤謙吉に素晴らしい考へを與へた。

「此の溥儀こそ『媒介發展』にとつておあつらへの人間ではないか？」と。

滿洲皇帝は篡奪者ではあつたが、永い間君臨したから一つの傳統となり、彼等に對する國民の信望は此の大國を革新しようとした何人かの若い革新家より何と云つても大きいのである。

溥儀は愚昧にも危険にも見えなかつたから、日本公使は彼を厚遇し、彼を自分の邸に留めてその負債を全部拂つてやり、彼の教育係りで、前威海衛稅關官吏サー・レヂナルド・デヨーンストンに意を含めてこれを味方にし、かくてその考へを實現し初めた。溥儀は先づ北京で、次に天津の日本租界でその新しい役目の準備をととのへさせられた。

關東軍の將軍連は、滿洲の三千萬の住民を懐柔するにさへ五師團を必要としたのだから、支那殘部の四億五千萬の國民を左右するためには、日本中の男子より多くの兵が必要だと云ふ事を認めたので、彼等は溥儀を滿洲へ連れて來た。溥は千九百三十二年の初め日本汽船「淡路丸」で極秘裡に大連に到着し、秘かに長春へ行つたのである。北部戦線では未だ砲聲が止まない時、上海の東亞同文書院（これは一種の大

學で、其處では選り抜きの日本人が根本的に支那語を學び、此の征服すべき國の歴史、經濟、地理、心理學、宗教等を非常によく教へられて居る。では日本の専門家、日本政府の出先官憲等が、溥儀を滿洲國王にすべき華麗な祝典準備を急いで居た。

萬里の長城の北方に住むツングース及び蒙古民族たる滿洲人は、嘗て文化的に彼等とは比較にならな程高い支那人を屢々征服し、永年支那全土を支配した事がある。此の事が溥儀の下に又容易に實現されるのだ——彼等は今やまことしやかにかう話される。日本人の宣傳エキスパートは滿洲人の支配的人物に信じこませる。「日本の庇護の下に彼等にとつて偉大なる新時代が始まつたのだ！」と。多くの人はこれを信じ、日本人に對する反抗は衰へた。

既に千九百二十四年、日本は次の様に豫想した。此の若い廢帝に印象的な姿をさせて、いつか滿洲の百姓共に見せてやらう。彼等にとつては、金刺繡の衣服、斧石の玉笏、四十八の銅鑼と四十九の太鼓、二十四の笛からなる樂隊（帝の宮殿出發の際、その車の前を行く）等の方が、機關銃裝備の裝甲車や日本人行政の官僚主義より遙かに大きな偉力を示すに違ひない……と。

北部地方の軍事的占領が終ると此の豫想は正しかつた事が認められ、關東軍が滿洲の日本に對する地位を確定すべき記録を作成して居る間に、溥儀は先づ執政の職に就いた。かくて千九百三十二年九月十二日「日滿兩國の善隣の關係を永遠に鞏固にし互ひに其の領土權を尊重し、永遠の平和を確保せんがための

共同防衛」に就いての議定書が調印され、溥儀はこれに署名した。その第二項に曰く

「日本國及び滿洲國は締約國の一方の領土及び治安に對する一切の脅威は同時に締約國の他方の安寧及び存立に對する脅威たる事實を確認し、兩國共同して國家の防衛に當るべき事を約す。之がため所要の日本國軍は滿洲國內に駐屯するものとす」

かくて此の様な公然たる條約と、更にそれ以上の密約とが滿洲をしつかり日本に繋いでしまふと新國家の編制が初められたが、それは前例にない程よく目的を意識して遂行されたものであつた。

先づ憲法が作成されたが、これは實に巧みに出來て居て、表面上の權力を滿洲人に與へ、實權は日本人のものになつて居る。溥儀はその顧問官と共に全統治機關の上に立つ遂行權を有し、四つの機構が彼の下に直接に屬して居る。國務院、立法院、總務廳、法院がこれで、此の下に内閣各部が從屬して居る。總理大臣から最低位の平大臣に至る迄、大官は全部支那人か滿洲人で彼等の大部分は民間でよく知られて居る舊政體の著名な學者とか政治家である。併し實權は「參議府」によつて行使される。單に、此の機關は憲法により國務院の上に置かれ、その權能は國有なものであると云ふ事によつてである。即ち、此の機關は法律を發布し、俸給を決定し、官吏及び國務院顧問官を任免し、財政を規定し、あらゆる供給契約を結ぶ。そして此の全能の委員會は全く日本人ばかりで出來て居て、新京に居る日本特別公使、即ち「特命全權大使」から方針を授かるのである。而も、此の特命全權大使は、必らず關東軍司令官の兼任

である。

さて法的事情が規定され、支那人の「面子」と日本の權益とが守られると、滿洲を一つの範例、日本に隸屬すべき民族を待つて居る幸福の看板とする事が始められた。

日本が一定の計畫に従つて作り上げられた様に、滿洲に於ても、偶然に委されるものは何一つなかつた。國家は管理人であつて、浪費は是非とも防がねければならなかつた。千九百三十五年三月一日の滿洲國政府の聲明の中には次の様な事が言はれて居る。

「無統制の資本主義の破壊的生長を防ぐために、國家の管理がどうしても必要である。我が國の主要なる利害關係は即ち國民の主要なる利害關係である。それ故に如何なる特權階級と雖も國家の自然的富源を搾取する事は許されず、地下の財寶も、産業も、これを單に利を目的とする企業にする事は許されない。又無用のものを作る事によつて資本を浪費してはならない。それ故に國家は經濟の合理化に注意しなければならないのである」云々。

實際滿洲の總ての新事業は國家の許可を必要とし、個人發起の事業は國家の計畫の枠の中に適合しなければならぬのである。最初の新建設として行政本部が準備され、次に溥儀の邸宅建築が初められた。又、即位式氣分が漲つて居る間に「永遠の春」を意味する長春は「新しい帝都」と云ふ意味の「新京」と改名され、最早中華民國二十一年ではなく、大同元年と書くべしと指令された。三井は「新京の

美化」のために二千萬圓を用立て、日本の「企畫院」は無用の土地を没收したり、或は買つたりした。そして一萬六千人の苦力を日給三十プフェンニヒで募集し、眞直な道路を引かせ、下水装置を設け、燈光設備をし、土地を分賣し、更にそれを時には三千パーセント以上の利を得て賣つたのである。

殆んど無制限に滿洲を支配して居た滿鐵は、新京の小さな乗換驛を近代的な大停車場にし、支那人が北部地方に建設した三千杆の鐵道を譲り受けた。又滿鐵は、千九百三十五年三月、ロシアの東支鐵道を受け取るべき賣買交渉を開始し、新鐵道線の標示を行つたが、此の新線は全部、軍事的にも經濟的にも重要なものになつたのである。次に朝鮮を通つて要港羅津と新京を結ぶ鐵道線附設が開始された。關東軍が「熱河及び察哈爾の征定」準備を急いで居る間に、滿鐵の技師は既に此の地方と滿洲の中央とを結ぶ線の設計圖を引いて居たのである。

建設司は新京停車場前に大都市計畫を起したが、此の計畫は、日本が描いて居る此の新首都の姿を示すもので、それは三百萬人を容れるに足る廣さになると云はれて居る。そして此の三百萬人は全部健康者ばかりの筈である。日本人は「解毒計畫」を作成し、五十年後には滿洲に一人の阿片喫煙者も居なくなると云はれて居る。二千人收容の解毒病院が建てられた。

財政計畫、新軍隊計畫、新國家の對外政策計畫等……新政廳の各事務室には夜遅く迄電光が輝き、狂亂の様な活動が滿洲國內に漲つた。新首都では到る所に新鮮な色彩が香ひ、財政部の高い大理石柱の前

には自動靴磨機が置かれ、人夫は日本がその吏員の爲に建てる近代的住宅の瓦を運んだ。此處に生れたのは世界最大の公使館で、新京に於ける日本代表の館そのものが既に小都市なのである。宣傳係りは村々を歩き廻つた。何故ならば日本は滿洲の農民に世界市場商品たる大豆栽培を止めさせ、日本の最も切實に必要として居る原料の一である小麦と棉の栽培をさせようとして居るからである。三井と三菱は直ちに新京に大銀行を建て、かくて商品クレジットを興へた。日本の對滿輸出は千九百三十二年の二億七千萬圓から同三十四年の四億七千八百萬圓に跳ね上つた。新らしく金が入る様になつた多くの苦力、地價の騰貴、滿洲の總ての新生活等によつて支那商人の商賈は未曾有の活氣を呈し、商人は皆ホク／＼であつた。そして最早や貼札や三層の高い廣告板——日本人、ロシア人、朝鮮人、支那人が腕を組んで歩き「四民族協和」と云ふ銘題を掲げて居るもの——等を引き破つたり、又打ち壊したりする様な者は一人も居なかつた。此の廣告に對してロシアの領事だけは、ロシア人は「かゝる混成社會」から除いてもらひたいと要求し抗議したのである。

かうして新京が模範的植民地になつて行く間に、一方各神社に於ては溥儀のために祈禱が捧げられた。廢帝は到る所で知己を得、南京の新聞でさへ彼に對して除々に軟化して行つたから、千九百三十二年の末には滿洲は溥儀のために出來たのも同然になつた。併し國境地方はなほ意のまゝにならず、匪賊の襲撃は依然として後を絶たず、日本の軍略的地位は不充分で、國境警備は餘りにも金がかゝつた。永續性を

欲するならば、滿洲國はあらゆる方面に於て安全でなければならなかつた。それには熱河と察哈爾を必要としたのだ。かくて關東軍は此の地方をも奪ひ、山海關を占領して長城を越えたのである。

熱河地方の峨々たる岩山は、山海關附近で傾斜して黄海に續く平野となつて居る。此處でタチ河の谷は、滿洲國の「脅威」となる地方への道を形成して居る。山海關と云ふ字義は「山と海の終極」と云ふ意味である。

さて千九百三十三年の一月元旦、此處へ數人の日本人が現はれ、郵便局へ侵入して卓上から電信機を取りはづし、北京線及び南京線を切斷した。支那官吏は射殺され、犯人は脱走した。

支那人は最初此の町に住んで居る日本人のテロ行爲だと思ひ、此の場合日本のスパイと目されて居る二人の男を射殺すより他はなかつた。ところで山海關のすぐ近くには炭坑があり、三つの外國租借地がある。又秦皇島の港もある。山海關の銃聲が鳴り止むか止まない中に、其處に碇泊中の日本巡洋艦から軍使が来て、八時間以内に山海關を引き渡す事を要求した。そしてなほ呆然自失して居る守備隊が意を決する事が出来ない中に、榴弾が續げざまに市中に落下し初め、二隻の潜航艇が現はれてその甲板砲で山海關の二千年の歴史を持つた厚さ數米の城壁を破壊した。戦車は突撃路を進み、數時間で長城は乗り越された。かくして熱河進撃は始まつた。かくて千九百三十三年三月、此の地方全體は日本のものとなつた。滿洲國は關東軍司令官が誇らかに公言する事が出来た様に「國內に於ても、外部からも金城鐵壁にな

つた。而もその結果は悪くなかつた。と云ふのは、支那は全く意氣沮喪してしまつて、その運命に身を委せる様に見え、ヨーロッパ各國は見えない振りをして居たからである。千九百三十三年五月三十一日、日本と支那の談判委員は祕かに天津の近くの塘沽に來り、一種の媾和を締結した。これによつて兩國は、支那軍は規定線(蘆溝から通州を通り、天津に近い寧河に至る線)の南へ、日本軍は同線の北へ撤退する事に意見の一致を見た。そして支那はその「義勇軍」の武裝を解除し、日貨排斥を禁ずる義務を負はされ、日本は「支那がその義務を履行した事を確認すると同時に」長城迄撤退する事を約した。

「支那の面子を保つために」兩國は此の媾和條件は發表しない事に決したのであるが、さうかうする中に既に東京では號外が發行され、大阪や神戸の街では年寄りの男(日本では新聞記者の少年の役をする)が下駄を鳴らして走りながら、此の勝利と「強行媾和」を聲高く叫んで居た。談判委員が塘沽で休戦祝ひの乾盃をして居た時、既に蔣介石の敵は支那の到る所で此の「屈辱媾和」に反對して立つた。馮占海將軍は北京——張家口線附近に兵を集めて北京に向ふ途中張家口に行かうとした方振武將軍の軍と遭遇した。廣東に於ける定評ある「第十九赤軍」は南京に向つて前進を開始し、キリスト教徒の馮玉祥將軍は、日本人と交渉を行ふ者は誰でも自分の憎むべき敵であると公言した。馮は附近の總ての隊長に打電し、自ら「國家救民反日軍」の長となり、彼の下に馳せ參じた者は四萬人にのぼつた。

かくて對日戦が公式に終ると、これに代つて支那各地に再び内亂が起り、日本は薄儀の計畫を他に妨

げられる事なく終了する事が出来たのである。日本は彼を二年間國家の元首として試験し、「彼の」國を軍事的にも經濟的にも強固にし、これをいはゞ陳列品とした。今や彼の盛大な即位の式も近づき、彼は遠く支那全土からも仰がれる象徴となり、南京政府の敵にとつては磁石となつた。熱河と察哈爾が占領されてから、日本兵は新京の民家を片つばしから家捜して武器と彈藥を沒收し、首都の貧民には貨車四臺の穀物を分與した。日本の勞働者は階段の附いた北京の大殿堂を模して同じ様な大伽藍を造り、其處で千九百三十四年三月一日の祝典が舉行される事になつた。溥儀が幼少の時宣統帝として王座にあつた頃、彼に仕へた廷臣は復辟の望を失つて北京の古物商に賣り拂つた華美な禮服を再び手に入れようとして氣をもんで居たが、此の廷臣達とは別の意味で躍起になつて居たのは白人列強であつた。彼等は何とかして此の即位式に參列して、彼等の承認して居ない此の國家と取引出来る口實を求めて絶望して居たのである。そして實際、黒檀材に龍と蘭を彫つた金色の彫刻の飾りのある玉座が康徳帝^{ハルビン}溥儀は此の様に呼ばれたのために用意された時、刺繍した禮服を着用してダイヤモンドのボタンをつけ、毛皮の山高帽を被つた滿洲國の大臣の中に「フランス伸展國民協會」の代表者が居た。同協會は滿洲國との條約に調印して十億フランのクレジットを承認し、又十五年のクレジットで滿鐵に機關車と車輛を賣つたのである。又其處にはポーランド政府に報告すべき「特種」作成の指令を受けたポーランドのモスチツキ大臣や、イギリスとアメリカの非公式のオブザーバーも居た。

ところで此の様に溥儀に對して代表を送つた總ての國は、日本が全く公然と滿洲を征服した時、ジュネーブで日本に宣言を下し、日本の行動を憤激した國々なのである。ところが彼等は今になつて新らしい皇帝を讚美し、彼に追從して居るのだ。取引が問題になつてからは、最早溥儀は「日本の被造物」ではなくなつて獨裁の君主となり、フランスもイギリスも滿洲の農民の存在を疑はない様に溥儀の存在も信じたのである。否少くとも一見その様に装つて居た。何故ならば溥儀は日本にとつてよい考へだつた様に、列國にとつてもよい考へだつたからである。列國は議會で黃禍に就いて一席辯じる事も出来れば、同時に「滿洲國は常に廣く門戸を開放するであらう」と宣言した此の「獨立」の皇帝に、武器や彈藥を賣る事が出来た。

實際は日本のものなら何でも入國出来、日本のものでなければ何でも外へ出せる、と云つた様な門戸開放ではあつたが。

さて新京では大昔風の銅鑼が鳴らされて溥儀の足下には蓮の花が撒かれ、國民は土下坐して皇帝の黄緞子の衣裳が冷い滿洲の日に輝き、蓮の花を現はした金色の肩章の着いたカーキ色の立派な軍服に身を包んだ新帝が謁見を行つて、「神の御手によつて導かれた余の治世が、趙王朝大黄金時代を復活させる事を望む」と言はれたが、此處に於て白人列強は、滿洲國の不承認は非常に不利であつた事を認識した。當時タイムズ紙は、リットン報告書は修正されなければならぬと書き、又例の「非公式」のオブザーバ

一違は、日本が白人諸國の滿洲國無視を憤激したかの様に見せたのは、日本の巧みな策略の一つに過ぎない事を速かに認められた。と云ふのは、滿洲國はヨーロッパ諸國とアメリカにとつて名義上存在しないから、英米佛等の諸國が、領事も公使も經濟使節（フリードリッヒ大王はこれを優待スパイと呼んだ）も派遣する事が出来ないこと云ふ事を、日本は喜んでいゝ充分な理由を持つて居り、又日本は結局滿洲人も奸策を廻らす事を最も好む支那人に過ぎない事をよく知つて居るからである。新京には公使館も治外法權の探偵も、カムフラード^カされた買収専門家も宣傳家も無くて、日本の生活はあらゆる外交機關があるよりも氣樂なのである。だから滿洲國は依然として日本に「監視された狩獵場」である。

ヨーロッパ諸國が今迄より好意を以て滿洲を見、滿洲が益々多くのヨーロッパ製機械を買ひ初め、張作霖の負債と張學良（此の男一人でもドイツの會社に三百萬ドルを拂ふ事を忘れた）の負債が益々此の新しい國家に承認されたが、支那も亦溥儀の即位に反對運動を起す様な事もせず、期待されたより遙に惡意を示さなかつた。勿論支那は溥儀のために頌歌を歌はなかつた。又日本は新京の盛典によつて、支那の勢力家の間に更に人氣を失ひはした。併し支那は公然たる敵意は示さずに滿洲國を無視し、北部地方が依然としてその屬領であるかの如く振舞つた。即ち滿洲國を依然として統計の中に算入し、税關も設立しなかつた。と云ふのは、さうすれば理論的には支那を横斷する關稅障壁と同様になるに違ひないからである。又支那は滿洲向けの郵便物はテキサス片付けず、日本向けの郵便物はよく管理した。そして日本に對する敵意は薄らいだが——此の敵意がかくも驚くべき速さで薄らいだと云ふ事は、日本人の技術にその原因があるのではなく、——非常に奇抜に聞えるかも知れないが——それは或る點に於てルーズベルト、即ち日本の敵アメリカのお蔭なのであつた。

る敵意は薄らいだが——此の敵意がかくも驚くべき速さで薄らいだと云ふ事は、日本人の技術にその原因があるのではなく、——非常に奇抜に聞えるかも知れないが——それは或る點に於てルーズベルト、即ち日本の敵アメリカのお蔭なのであつた。

汎アジア主義とアメリカの銀政策との關係

日本人はその滿洲國建設以來、絶えず支那に對して友誼と援助、それからヨーロッパ人に對する共同戦線を申し出て居た。南京政府はその名義上の領土十八省の中、實際にはその四分の一さへ統治して居ないが、此の政府にとつて、新たにその四省が日本の治下に入つたと云ふ事實は、實際のところ特殊な政治的意義を持たなかつたのである。張作霖は南京政府の言ふ事など到底聽きはしなかつたが、その點では溥儀に同じである。併し調停好きの競争者達は、その歩調を合はせる必要と傷けられた自愛に打ち克つために外部から突衝く必要を感じた。併し衝撃を與へる機會は未だに訪れなかつた。

それは千九百三十三年の終りまで現はれなかつた。ところがその頃、各國民の運命が今日如何に密接に繋がり合つて居るか云ふ事にはかに明らかにされ、又利己的な政策は結局自滅の原因だと云ふ事が適切に證明された。又、議會制度は無用になつた事、一見熟慮の結果出来たかの様に思はれる計畫經濟でさへ、これを逐次國際的に調子を合はせなければ紛糾此の上もない道具になつてしまふ事等が、反

對の餘地もない位はつきりと證明された。

さて日本とアメリカは敵同士であり、兩國はそれを知つて居る。特に此の二國は支那の大市場あるがために敵同士なのであつて、日本は生存のために此の大市場を必要とし、アメリカは最大工業國としての地位を固守せんがために必要なのである。世界戦争中ヨーロッパ諸國がアジアの顧客に商品を提供する暇の無かつた時、既に日米兩國の商人は支那で衝突して居た。支那のために日本とアメリカの争ひは絶えなかつた。支那は今日でもその輸入の四分の一をアメリカに仰ぎ、アメリカの輸出だけでも千九百十三年から同十八年の間に千五百パーセント増加して居るのだから、アメリカにとっては支那は將來最も重要な販路なのである。支那市場を得んがためにスタンダード・オイルは六百萬の石油ランプを原價より遙かに安く分ち、支那の好意を得んがためにアメリカはその優秀飛行家を南京に送り、又アメリカ人は支那の近代的航空武器を製造したのである。又支那政府の愛顧を得るためにアメリカは原料クレジットと金を與へたのである。日本がこれを繰返し抗議すると、それに對してルーズベルトは五年間に九億マークもかゝると云ふ建艦計畫を以て答へたのである。

此の建艦計畫を貫徹し彼の國內改革を是認して貰ふために、ルーズベルトは上院に於ける議席の多數を必要とした。又アメリカの經濟を無計畫と超資本主義的不愛想から引き離すために、代議士の投票を必要とした。代議士は選舉されるために、明白な効果を用ひた。即ちアメリカ西部の鑛山國銀の國モンタナ

州が最も窮迫して居た事——此處に効果を狙つたのである。砂糖關係者と一般地主は彼等の意に逆らへば今にも暴動を起しかねる様な態度をとつた。かくてフィリップスの獨立が宣言され、その農産物は關稅がかゝる事となつた。——ひいては日本のために南進の道が開け、又かうして銀政策が始められ、價格を昂騰させた——同時に此の政策は支那にとつて、日本と結びつく機を熟せしめたのである。

千九百三十三年十二月二十二日、ルーズベルトは次の様な布告を發した。即ち、アメリカ政府は向ふ四年間二千五百萬オンスの銀(世界産額の約七分の一)を、一オンス六十四セント半で買ひ、時價より十九セント高く支拂ふ意志があると布告した。そして彼の期待した通りの結果になつた。即ち、銀相場は騰貴し、アメリカ銀鑛山株、否全世界の銀鑛山株は未曾有の値上りを示した。そこでアメリカの銀産國就中モンタナ州はこれに満足し、モンタナ州の上院議員はルーズベルトに祝辭を述べ、かくてルーズベルトは正に會期の迫つた上院で絶對多數を得たのである。さもなければ二三週間前には政府の敗北が殆んど確實だつたのだ。

併し此の銀相場の騰貴は南アメリカで、合衆國に對する新たなる憎惡の波を起させた。南米では一部分銀貨が流通し、又此處は日本が既から地歩を占めようと努力して居る所である。又此の銀の騰貴は殊に支那を破滅に傾せしめた。何故ならば支那は銀本位だからで、テールの價値は一晩の間に三分の一も上つたのである。ところで支那の輸出品、例へば山羊皮、仔羊皮、卵、棉、茶、絹、落花生油等

の世界貿易価格は従前通りだったから、さなきだに飢饉に類して居る支那農民は、彼等の商品に對してにはかに三分の一安く支拂を受ける事になつた。彼等はアメリカの自動車も冷蔵庫も蓄音器も買ふ事は出来なかつたから、貨幣本位問題の暗黒面ばかりが彼等の生活に影響を及ぼし、アメリカに於ける支那貨幣の購買力増大の様な明るい方面は毫も影響を及ぼさなかつたのである。支那の大衆は大世界の事もルーズベルトの國內政策の事も少しも知らなかつたから、銀買占め屋は大衆のなけなしの貯へを取りあげて何千噸と云ふ支那銀を昔の相場で集め貯め、巨利を得てアメリカへ賣付けるのにわけもなく成功した。約二十年前ヨーロッパ及びアジアの諸國は銀本位から金本位に移り初め、その結果、支那國內市場に於ける銀の購買力は低下した。例へば千九百十年から同十四年迄の平均を一〇〇とすれば、六一・六パーセントに低下したのである。此の銀洪水のインフレ的傾向は、支那の貨幣本位と經濟にとつて好都合なものであつた。千九百三十二年には、それは支那の豫算案を外債の助けを借りないで平衡を保たせる事が出来た。そこで日本は到る所の戦線で敵を發見した。支那は日本の金を必要としなかつたから、滿洲事變で受けた傷を黄金の膏藥で癒さうと思つた日本の銀行家の甘言を斷乎として拒んだのである。それから起つたのが銀の値上りであり、ルーズベルトの銀政策であつた。支那の價格は急速に、又廣範圍に暴落し、租税、賃金、利息等はともこれと歩調を揃へて行く事が出来ない位であつた。破産が頻發し、工業生産は千九百三十三年から同三十四年の間に二十六パーセントの減少を見た。支那の財政

缺損は千九百三十二年の零から、同三十四年の一億四千七百萬メキシコドルに、同三十五年の二億一千五百萬メキシコドルに上つた。支那の恐慌はアメリカの銀政策に依つて、千九百三十五年二月の始めには上海に於ける緊急委員會の制定、支那二大銀行の破産、六十四に及ぶ地方銀行の閉鎖等の原因となる程深刻な形をとつて來た。商業界は現金の不足で停滯した。支那は當時公然と申し出された日本の金融申し入れを公式に拒絶し、支那の貨幣本位を、同本位に安定させようとする日本の提案を卻けはしたが、それは單に宣傳的デエスチャーに過ぎず、内々日支間の態度は急激に根本から變つて居た。即ち日本の國家的資本の代りに個人資本が支那へ流れ込んで、危機に類した支那の諸銀行は三井と三菱の支持を受けた。かくて日本の援助に依つて一種の「銀溜り」が造られたのである。千九百三十三年には、未だ支那に於ける日貨排斥は極端な状態で、六千七百人の日本商人が上海を去り、破産して歸國した程だつたが、今や此のホイコットは突然下火になつた。そしてヨーロッパ各國が此の間の關係を探究しようとする努力をせせず、白人世界の新聞が單にアジア政策の「思ひ掛けない」方向轉換ばかりを話題にして居た間に、ルーズベルトの銀政策は日支の接近を齎した。千九百三十三年には、日本品を買つた支那商店に爆彈の投げ込まれない日はなかつたが、それが千九百三十四年になると、かう云ふ爆彈事件は僅かに七回に過ぎなくなつた。一方同じ千九百三十四年、支那の全輸入の正しく半分を占めて居る上海では、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス等からの輸入は前年に比べて三十四パーセント減少し、これに

反して日本からの輸入は十二パーセント増加した。千九百三十四年の三月及び四月にはアメリカの銀買上價格の新騰貴は又々支那に於ける銀の値上りとなり、財政困難となつた。七月中旬以後には更に三千万オンス(世界年産額の七分の二)の銀がアメリカへ流出した。支那特別公使の東京行きが、最早持ちこたへられなくなつた支那貨幣本位の危機に對する王寵惠大臣の平和的交渉を説明するのに、何等かの關係があるなどとはヨーロッパでは誰一人考へつく者は無かつたのである。

支那政府が千九百三十四年の夏、その敵の金融を利用して——勿論日本の金で——敵を買収したのをヨーロッパでは誰も怪しまなかつた。此の妥協的傾向は、誰でもその隠謀をバラす事は出来はしたが、やはり看過されたのである。と云ふのは、支那政府は、わめきたて騒ぎたて、全く公然とその政治上の敵を買収する世界唯一の政府だからである。蔣介石の代理人は先づ香港へ行つた。彼等は嚴重な格子作りの家を見せられたが、その家は口の所まで武装した多くの印度人によつて警固されて居た。そして中には二年半このかた孫逸仙の前秘書官「支那のトロツキー」胡漢民が入れられて居た。彼は蔣介石の仇敵で、蔣が外國、殊に日本と商議しようとするれば彼を反逆者と呼んで多くの効果を収めて居た男である。蔣介石の使者が威張りくさつた英領香港を去ると、彼等は南京政府に吉報を齎した。それは胡漢民がヨーロッパ及び其の他の地方の生活を視察するために外遊する事に決し、その旅行は二十萬ドルしかかゝらないであらうと云ふのである。又彼等は、胡漢民はいゝ先例を作つてくれるだらうと云ふ希望を述べ

た。そして彼等の言は正しかつた。やがて孔子の七十五代の裔で蔣介石の義兄弟である孔學士は、北支那のすばらしい旅行をした事、北支は南京政府の對日交渉を妨害しないであらうと云ふ事を公言する事が出来たのである。

かうしてヨーロッパに於てさへも危険が感知され、イギリスは最初の經濟顧問サー・フレデリック・リースロスを東京と南京に派遣した。イギリス政府は日本金融が支那に於て迅速に獲得し初めた覇權を倒さうとし、又日支間の敵意が最早イギリスに利用される所とはならなくても、日支英の協同作業を成就しようとして奔走して居た。ところが此のイギリスの使者が未だ訪日途上にある間に、既に日支經濟會議が始まつて日本の外務省は日支協同作業の詳細な計畫を發表した。此の計畫と云ふのは、支那の農業發展に對する日本の技術的援助、採鑛の發達に對する技術的財政的援助、交通關係に於ける日支協同作業、日支貿易評議會の制定、支那關稅率の修正等に關するものであつた。

日本の不倶戴天の敵に依つて起された貨幣本位危機と銀政策は、支那に於ける日本の行くべき道を非常に平坦にした。千九百三十五年二月十九日には支那の獨裁官蔣介石自ら東京へ赴いた。かくて日本の敵達は遂に日本が既に永年努力して來たところのものを間接に誘致してやつた。即ち、中國との提携、大ブロック、アジア世界の統一への力強い第一歩がこれである。

嘗て下關係締結及びボーツマン條約締結の際に於ける白人列強の干渉の後、日本と支那は「外人盜

賊」に對して同じ様な激怒に驅られた。大革新家孫逸仙の犬養首相との親交、蔣介石の受けた日本の教育、菊地武男男爵の張作霖への影響、弊原の親支政策等は益々兩國の接近を容易にした。其の上千九百二十四年アメリカの移民法が發布された時、日本は支那と此のアメリカのひどい敵意に對する悲しみを共にしたのである。滿洲事變前にもその後にも、日本の先見の明ある指導者達は繰返し言つて居る。「日本の政策の核心は支那にある、假令一時的にせよ支那との接近ばかりが此の政策に實を結ばせたのだ」と。又半官的な「ジャバン・アドバタイザー」は次の様に報道して居る。

「日本は現在又は將來の支那との提携を斷念するよりも、寧ろその他の總ての利害關係を敢て犠牲にする事が出来る。」

又日本の發展に就いての大理論家鶴見祐輔は嘗て次の様に述べた。

「日支は提携しなければならぬ。我々は結局新しい基礎の上に統一的アジア文明を建設せんとする切實な希望を考慮しなければならぬ。機械の奴隸たる西歐文明は、日本に關する大問題に對する解決を齎しはしない。日本に關する大問題——それは國家の永遠の安定、嚴正なる精神、人間自身による人間征服である。」

日本と支那は絶えず互ひに求め合ひ、絶えず離れて行つた。併し日本が支那の四億五千萬の顧客とその原料を必要として居る様に、支那は資本と専門家を欲し、飢餓と混沌に對する戦ひのための助力を必要として居るのだ。支那は外國の援助を頼つて居る。そして實際日本がロシアかの選擇の前に立つて居る。ロシアと密接な結合をした事はあつたが、共產主義から受けた經驗は、ツアールの暴兵の經驗より好ましいものではなかつた。それ故に頼りとするのは日本があるばかりだ。勿論日本に對する支那人の感情は必らずしも親愛的のものではない。併し日本は強い、支那人は現實主義者である。支那は日本と闘つて居る間に白人からも損害を蒙つた。國際聯盟ばかりでなく、アメリカもイギリスも爲す事なく傍觀して居ればかりでなく、イギリスは支那の無力につけこんで、自分から無理やりに支那の貴重なるものを奪ひさへしたのだ。

日本が支那の北部に迫る毎にイギリス人は秘かに西部に押し寄せた。既に彼等は千九百三十一年、英領ビルマ國境Samanの西、支那領の江心坎及び片馬(Pi-ma)に來り、千九百三十三年にはPang-Pang及びPang-Liang地方に道路を建設し、Kou-Kan, Lan-Kiang等に鑛山を採掘し始めた。そして此の支那領土の金を採掘するために、資本金英貨七百五十萬ポンドの會社が建てられ、勿論英軍が此の巨額のものゝ「保護」しなければならなかつた。Pang-Pangは支那のものだと言つて異議を唱へる者は一人もない。だから英國人は平氣で其處に居坐り、金銀は英人のポケットに入つて行く。白人は治外法權、支那主要都市に於ける租界、一方的條約等の特殊權益及び支那人が出来るだけ早く免れたがつて居る其の他の多くの事柄等から利益を得て居るばかりでなく、彼等は又日本の方法であらゆる地方を掠奪したので

ある。イギリスは西藏及びビルマ國境地方に於て、フランスは印度支那國境地方に於て。

敵としての日本、それは支那にとつて全戦線に於ける敗北を意味する。これに反して援助者としての日本は、例へば支那をして、大きな危険を冒さずに租界條約無効を宣言させる事が出来るであらう。實際日本は日支接近を容易ならしめるために、或る條件の下に治外法權原則の撤廢の用意がある旨を再三明言した。又日本はほんとうのところこんな特權は殆んど必要ないのだ。何故ならば日本は萬一不法行為があれば、これを容易に力づくでも是正する事が出来る位支那に近いからである。併し白人列強に此の特權が無ければ、彼等はアジアに於ける最後の足掛りを失ふ事になる。支那貿易の中心に投資された莫大な資本ばかりでなく、威信の最後の残りをも失ふ事になるのである。

それ故に支那は日本を必要とし、日本は支那を必要とする。此の二國は互ひに屢々求め合つたが、千九百三十四年末に至つて、彼等は今迄にない程固く結びついた様に見えた。兩國は地下の財寶の共同利用を申合はせ、支那はアメリカの金融申し込みを二つとも拒絶した。又蒋介石は南京の南方三百哩にある大飛行場で未だ完成してない彼の大空軍根據地を放棄した。新しい友誼を確證するために支那は此の今日唯一の重要な兵器を千四百哩も西へ移し、總ての爆撃機を偏鄙な四川省の成都に輸送した。同時に支那軍用飛行家を教育したアメリカの教官(彼等が居たために千九百三十四年春の日本の有名な「アジアモンロー主義」の聲明となつたのである)は解雇され、米人ジュエット大佐及び彼の助手達の契約は繼續されず、彼が教育した

二百人の操縦者は支那將校の指揮下に移された。これと同時にアメリカ人の創立にかゝる飛行學校はローマのロルディ大將管理の下には中立のイタリア人専門家の手に引渡された……かくて大アジアブロックは遂に固く結合された様に見えたのである。

併し此のブロックは再び粉砕した。成る程日本は、少くとも外部に對しては強固な結合とその心掛け次第では約束を守る條約相手を指示しては居る。併し支那と云ふ國は、如何に蒋介石が超人的な努力をしても結局混沌として永久に醜醉し、無数の方面に動く、想像も出来ない程複雑な巨體である。南京政府は日本との平和を望む事切で、日本との協同作業を非常に期待して居たのであるが、それだけその政策を歸一的に實行する事が出来なかつたのである。支那政府が十人の敵を買収すれば、更に金に餓ゑた二十人の敵が現はれて来た。又滿洲に於ける匪賊襲撃は後を絶たず、殊に國家主義の青年は反日演説を續け、日貨排斥を固持する國民黨の支部は依然として各地に存在した。

日本にはかう云ふ事情はすつかりわかつて居た。又かうした總ての事柄は、普通なら此の親誼をこんなに早く破壊してしまはなかつたであらう。ところが支那へ「平和的」に滲透する計畫が日本で練られて居る間に、ヨーロッパではエチオピアを取巻く争闘が勃發したのである。恐らく遠い將來になつて初めて實を結ぶであらう様な、何と云つても餘り強固でない此の親善關係を顧慮して、日本は再び大侵略を始めるために此の絶好の機會を逃す様な事はしなかつた。ヨーロッパに猛り狂ふ戦争の叫び、ヨーロッパ

ツバ自らを破壊する激昂、然り日本が世界戦争の場合の様になり再びエチオピア戦争を直ちに新らしい軍事的進出に利用しないわけではないのである。

日本に好都合な世界政治的事情にかへて、国内政治的原因もこれに加はつた。国内の緊張は既にすつと以前から危機を孕み、軍部の上層部は既にしびれを切らして居た。又日本の急進的ファッショ青年階級は、寡頭政治家の面々が巨萬の利得を得るために再び對支交渉に於てやつた芝居を感じて居た。駐滿新日本大使、關東軍司令官、北支の獨裁者たる南大將は、既に千九百三十四年十二月二十六日、次の様な事を言つた。

「我々はどうしても滿洲に於ける我々の計畫を遂行しなければならない。若し我々の行動を妨害する様な政府が東京に出来たならば、そんな内閣は直ちに片付けてしまはなければならぬ。ふち壞してしまはなければならぬ。」

日本の軍人の中で、此の言葉の中に特別なものを發見した者は一人も無かつた。滿洲は軍にとつては常に一種の神聖な土地であり、戰場なのだ。十六萬の日本人が生命を落してロシアの手から奪つたばかりでなく、支那からも獲ち得た戰場なのである。併し非軍人當局は警戒信號の意味を了解した。かくて千九百一年に於ける「義和團協約」の一條が掘り返へされた。それは、調印各國に北京に於ける領事館守備隊を任意に増加する事を許したものである。日本は極秘裡に六百人の陸戦隊を北京に送り、日本領

事館付衛兵長伊原大佐は警察業務を引き受けて指導的な支那人、例へば此の天國の最大の哲人胡適等を逮捕し始めた。日本は南京政府の朋友であつたのにも拘はらず、今や北京にある公使館守備隊の兵力は七百七十七名になつた。これに對してアメリカは四百八名、フランスは二百七十七名、イギリスは二百三十八名、イタリアは九十五名であつた。白人諸國は此の不均衡を苦し初め、不利を感じた公使等は本國首都へ長い報告を送つた。支那政府當局が七百名も南方の南京にあるのに、彼等外交官達が北京に駐割して居ると云ふ事實に依つてさへ、既に滑稽な彼等の地位は、實際日本の行動に依つて更にグライツキ出したのである。併しイギリスもフランスもイタリアも今は支那を顧みる暇なく、ヨーロッパの紛擾で轉手古舞をして居たから、北京から來た報告などはそのまま放置されてしまつた。事件が未だ吟味されない中に自然に解決して、千九百三十五年六月北京は殆んど一戦も交へずして日本のものとなつた。傳統的に昔の首都に駐割して居る白人外交團は、必要に依つては交渉相手になるかも知れなかつた最後の支那當局さへ、かうして驅逐されるのを袖手傍觀して居なければならなかつた。今や彼等は丁度ベルリン・ウィーン間の距離程も彼等から遠く離れて居る國境の國の中で、彼等の祖國を代表して居た。ヨーロッパ諸國は彼等の報告を讀む暇がなかつたのである。ヨーロッパ列國は伊エ紛争に就いてとやかく口を出し、嫉妬と猜忌を以て戦争を煽動して遂にこれを避け難くしてしまつた。ところでアフリカに於ける此の戦争は日本にとつて大きな前進信號だつたのだ。イタリアがエリトリア遠征を開始した時、日本

は再び支那に軍を進めたのである。

伊エ戦争のために支那に於て漁夫の利を占めた日本

イタリアは人口過剰な國だから空地を必要として居る。イタリアは若々しい強大な白人種だ。近東地方に一步々と地位を築き、リビヤ統治とエリトリア及びソマリアランドの沙漠開墾に依つて、イタリアは立派な植民國である事を證明した。さて千九百三十五年の夏、イタリアは嚴然としてエチオピア征略の歩を進め——此處では道徳的政治は問題ではない。實際的政治が問題なのである。此の争闘を弾劾する者があるかも知れない。併しエチオピアはその全民族にとつてイタリアの手にある方が、奴隷を備ふ封建君主の手にあるより有用であると云ふ事は誰も否定出来ない。——東アフリカに於ける戦争が不可避になつて来たが、その時「世界の五分の四を盗み取つた老富豪イギリス」は、その富を少しばかり失ふのではないかと云ふ懸念に驅られて本國艦隊を地中海に派遣した。かうしてヨーロッパ戦争が賭けられたが、その際、これと同時に東アジアでは更に重大な事が起つて居る事は全然見落されたのである。ヨーロッパはエチオピアのために熱病にとりつかれた様になり、ローマ帝國再現の中に恐ろしい危険を感じた。それは白人種帝國で、とりもなほさず白人の地位強化を示して居るのではあるが、又イタリアの戦勝はイギリスの世界的勢力を弱めるかも知れないが、それは同時に黄色人種世界に對して英

帝國一國の代りに二帝國と對立させる事になるかも知れない——かう云ふ事にヨーロッパは氣がつかなかつたのだ。ヨーロッパは「均勢」が破れる事を懸念するの餘り、非常に危険きはまる日本の事を忘れてしまつたのである。新聞にはエチオピア事件と並んでアジアの事を構つて居る餘地が無かつた。その實、エチオピアは一つのエピソードに過ぎないけれども、アジアの事件は死活に關するドラマなのであるが。

ヨーロッパ諸國は互ひに争ひ合ひ、談論は幾日も果しなく、ジュネーブの政治家の演説を印刷するために貴重な紙が何噸となく費やされた。そんな事をして居る間にイタリアの三倍もある地方が日本の版圖となり、日本はヨーロッパの紛糾を利用して益々軍を進め、遂に東アフリカの戦争が初まらない中に此の戦に勝つた。日本は伊エ紛争を利用して猛烈な反ヨーロッパ宣傳を起したばかりでなく、國際聯盟がエチオピアの事ばかり話題にして居たのを利用して、支那から首都北京、第二の港天津、直隸省、河北省及び山西省等の豊富な炭田を奪つたのである。

千九百三十五年五月七日、イタリアは新たに三ヶ年の同年兵を召集し、ムッソリーニはイタリア軍の兵力は七十一萬に達した。戦争は不可避であると明言した。

此の同じ千九百三十五年の五月七日、日本の關東軍當局は支那人に最後通牒を渡した。それに依れば「排日宣傳が絶えないから」北京、天津、直隸省、河北省、山東省、山西省、察哈爾省全部を明け渡す

事を要求すると云ふのである。

千九百三十五年六月の中頃迄に、エチオピア政府はイギリスに對して、待望のツアナ湖溪谷堰堤構築に對する許可を與へ、イギリスはエチオピアの恐伊病を利用して遂にヌダン及びエチプトにとつて不可缺なナイル川に就いての總ての権能を握つた。そして今や「全く偶然に」英伊間に公然たる争闘が初つたのは勿論で、艦隊デモと制裁に迄高潮して來たイギリスの對伊戦は遂に領土擴張慾になり初めたのである。イギリスがイタリアの戦闘準備に依つてその望みを達するとイタリアにはかに勇猛果敢になつた。

此の同じ六月の中頃日本は更に支那攻勢をとり初めた。ヨーロッパは眼をつぶり、聯盟は見えない振りをした。談合は談合に續いたが、支那を省みる暇はなかつた。日本軍は毎日約三百萬の支那人をいはば天皇の新らしい臣民にし、丁度二週間の中に全面積はエチオピアより三分の一小さく、人口はエチオピアの一千萬に對して七千萬もある諸地方を「平和的に」占領したが、一方ジエネーブに集つた諸國は専らイタリアの權利、イギリスの權利に就いて、はては伊エ戦争の結果は場合によつては對獨包圍政策になるのではないか、などと云ふ事に就いての區々たる見解を知る事に大童であつた。これに反して日本は伊エ紛争の刻々に進んで行く局面を詳細に觀察して居た。七月十八日日本の外務大臣はその談話の中で「イタリア」に警告を發した。「何故ならば日本はエチオピアに大なる貿易利權を持つて居るからである。」七月二十八日三井はイタリアに對して、靴十萬足の供給を拒絶した。「何故ならば弱者に對

(334)

して強者を援助するのは禮でないからだ」これと同じ日に天津では反日宣傳をやつたと云ふ理由で四十人の支那人が射殺された。七月十九日有名な保守的資本家藤山をリーダーとし、千九百三十四年に創立された、「日本エチオピア問題協會」はハイル・セラシエに打電して「白人侵略者に對して徹底的に戦ふべし」と要請し、千九百三十五年九月六日、「日本青年同盟」は著名政治家の署名のある覺書を公布した。此の覺書は明確に反イタリアの態度をとつて居るが、就中その中には次の様な言葉がある。

「有色人種の同胞よ、起て。そして東アフリカの黒色の羊を虐げつゝある地中海の白い狼を打殺せ、全世界の有色人種同胞よ、起て。そして貪婪な白狼の爪からエチオピアの哀れなる同胞を救へ。そして此の白皮の動物を打殺せ。……白禍をして終らしめよ。……ムツソリーニの宣言は白人に我々共通の敵たる極印を押し込んだものである……」

(335)

日本はかうして煽動を行ひながら、同時に莫大な軍需品供給を引き受けた。東アフリカに於ける敵意の爆發は東京の株式市場をして、此の三年間に見られなかつた程の活況を呈せしめたが、ヨーロッパは支那に於ける事件には依然として盲目であつた。ヨーロッパの全關心がエチオピアに集中され、一方實際唯一の處女販路國たる支那は次第に日本に蠶食されて行つた。日本の新たな進撃は既に準備全く成つて居たのであるが、此の絶好のチャンスが到來すると、それは電光石火日本の利用するところとなつたのである。四十年前の日清戦争及びこれに續いた日露戦争は心理的な瞬間に初められたのであるが、日

本は此の度もアフリカに於ける白人と黒人の衝突が世界の關心をアドアに惹きつけ、オガーデン(エチオピア東南部の草原地方)の草原を蔭進するタンクと伊エ戦争が、新聞と人々の頭をいつばいにして、支那の事など考へる餘地も無くする迄デット待つて居た。イタリー軍がアドアに進出した千七百三十五年十月七日、七隻の日本砲艦が揚子江の長流を溯り、北部最大の工業都「支那のシカゴ」たる人口三百萬の漢口に到着した。日本の此の「示威」と、十隻の日本驅逐艦によつて同時に行はれた南支の汕頭(臺灣の對岸に位する商業中心地)攻撃の口實は、支那人が漢口で、滿洲占據四週年紀念日に貼りつけた掲示であつた。

「我々から奪ひ取られたるものを思ひ起せ」

貼紙にはかう書いてあつた。

日本人はこれを「我慢のならぬ反日宣傳」であると稱し、「これに對して充分なる名譽回復を要求せねばならぬ。」と言つた。

かくて漢口は事實上日本のものとなつた。汕頭では日本の軍艦が支那の輸入税廢止を強請した。汕頭の輸入税は、さうでなくてさへ臺灣米の大規模な密輸入によつて、月額四十萬ドルから一萬二千ドルに激減して居たのである。

白人諸國はイタリーのエチオピア進撃を「侵略行爲」として制裁を施したが、「日支間の内争」には關心を持たずと公言した。彼等は既に千九百三十一年日本がやつた滿洲の奇襲的占領と征略の皮切り(その

方法はそれ以來變化して居ない)を忍んでからと云ふものは、恐らくこれより他に何も出来なかつたのだ。日本の占領方法と云ふのは次の様なものである。

連續的進撃——往々幾分の抵抗——開城、日支兩軍間の非武装地帯設定——此の主なき地域の秩序紊亂——これが新たな進撃と新たな非武装地帯設定提示の口實となる。そして此の地帯で同様な事が繰返される。

ところでこんど問題になつた地帯は、熱河及び長城南部の地で、其處に全く戦慄すべき事件が起つた。電柱が鋸で抜き切られたのだ。此の犯罪の外に、日本は何よりも天津に於ける日本腹心の新聞記者二名の殺害事件に就いて抗議を持ち込んだ。此の二人の新聞記者は支那人で、犯行は支那の行政區域で起つた。それ故に國際法的には少しも日本に關係するところはないのである。その上支那警察は此の二人の犠牲者の保護のために全然何もする事が出来なかつたのであらう。何故ならば、此の二人は支那の保安隊が入る事を許されて居ない日本の保留地で殺されたからである。一方非武装地帯や日本直屬地は日本商人の治外法権と云ふ特權のお蔭で、阿片密輸入が支那人の間に怖ろしい荒廢を齎らし、それだけに全くひどい紊亂状態に陥つて居た。

次に先づ支那の經濟的罪惡がある。支那人の持主は支那鑛山(日本の租借地内にある事は言ふ迄もない)で、千八百噸の採掘をした。そこで日本人はこれに對して六萬噸の石炭を差押へて報復手段をとると、彼等はこ

れを南京政府に訴へた。日本はかゝる事件の發生防止に努めたが、それも世界の知らない間に根絶されてしまつた。イタリー人は溥儀の例に倣つてハイレ・セラシェの養子ラ・グンサを新たに占領したティグ、ル地方の王にしようとして居たが、一方日本の職人は極度に荒廢した北京宮殿修復のために働いて居た。溥儀が全支に君臨して居た時代の数々の部屋が新装を施された。滿洲國は確保されたから、今や皇帝は新占領地をも統治し、支那全土の皇帝として壯麗な戴冠式が舉行されなければならぬ。

千九百三十五年の夏、北支では未だ日本の機關銃が支那軍を掃射して居た時、日本公使とシャンパンの乾盃をやつて居た王總理や其の他の大官は勿論、南京政府もこれを全く拱手傍觀して居た。同年十一月一日、王はビストルで狙撃されたが、これは何等の政治的結果も齎らさなかつた。事態はかうして推移し、上海の日本公使館附武官磯谷中將は次の様に公言するに至つたのである。

「我々は支那國民自らその無能な政府を倒して、日本と共に討議出来る指導的人物を選んでくれる事を希望して居る。此の危機が何時來ようと日本はその新政府が安定する様に力を借す用意がある。今日二つの可能性があるのみである。即ち南京政府の政策的根本的是正か、或は北支五省の分離——南京政府から完全に獨立した北支國家の建設か——此の二つである……」

又新天津軍司令官多田中將は三十萬部も弘布したパンフレットの中で、これと同じ様な事を言つて居る。

(338)

「先づ支那の大政黨である國民黨を解散させて獨裁官蔣介石を下野させなければならぬ。此の事は支那に於て日支兩國を益する時代の到來を早めるばかりでなく、自主的な北支建設を容易にするであらう。北支諸地方は年收一億三千萬ドル以上もあるから、實際のところ南部を必要としないのである。」

云々。

次に多田中將はロシアに對する計畫を述べて次の様に結論して居る。

「日本の大陸政策は、四億五千萬の支那國民をその搾取者の手から救ふ事を目的として居る。日本は此の目的に反對する者を誰彼の別なく絶滅するであらう……」と。

ヨーロッパ諸國は關東軍の將軍連が此の豫言を實現するのを妨げないだらう。日本政府はどうであらう？ 平和的市場を必要として居る三井と三菱はどうであらう？

(339)

日本政府は繰返し明言して居る。支那に於ける事件に對して責任を負ふべきは關東軍當局のみである。又日本の外務省は、關東軍首脳部が屢々命令に反した独自の行動をとり、或は殆んど政府の命令も受けずに勝手な行動をすると云ふ事を幾度もほめかして居る。これは憲法によつて彼等にゆるされて居るのである。併し假令日本の將軍連が北支を彼等の國家共產主義的思想の試験地とし、無数の日本人投機屋を滿洲から追ひ拂つて新占領地の經濟を三井の力を借りて（やがて此の三井の利害關係に反して）、指導するとしても、關東軍對日本政府の此のような明らかな争闘は、何と云つても外國にとつて實際の軋轢と云

ふよりは寧ろ明白な喜劇である。日本程新聞検閲の嚴重な國はない。此の軋轢がほんとうのものならば、それに就いての電報は決して外國へ入らない筈だ。ところが日本の外務省にしても陸軍省にしても「北支軍を制御する」事の至難をよく口にするのである。ヨーロッパが抗議する度に、日本政府は關東軍の將軍連の行動には政府自身さへ實際手を焼いて居るのだと答へる。「どうしようもない。憲法を變更する事は不可能であるが、憲法は正に參謀本部に自由行動を許して居るのである。全く遺憾の至りだが、彼等の行動にブレイキをかけるためにはあらゆる方法を講じた……」と云ふ様な回答である。ヨーロッパはこれに對して返事のしようがない。而もヨーロッパ自身行動に出ると云ふ事も出来ない。白人諸國は支那に於ける軍事的干渉など思ひも寄らず、極く瑣細な事さへ仕遂げると云ふ見込は全然ない——かう云ふ事はイギリスもイタリアもフランスもアメリカも既によく承知して居るのである。

日本政府は思ふ存分な口をきく事が出来、ヨーロッパ諸國はその無能を自白して居る。そして關東軍は一省々々と併呑して行く。千九百三十五年十一月二十四日、東河北省は南京政府からの獨立を公式に宣言し、十二月十六日には塘沽(千九百三十三年五月三十一日の日支協和が成立した港)が日本のものとなつた。北河及び察哈爾の獨立政府が樹立されると、間もなく日本人は「委員會」を作つたが、此の「委員會」は財政、軍事、交通等の問題に於て内閣の九省に「助言を與へた」。そして警察、鐵道、銀行事務は日本人の手に移つた。支那の國家主義者の青年はこれに反抗し、千九百三十五年のクリスマスの日、上海に於

て蒋介石の片腕、外交次長唐有壬は射殺された。續いて十二月二十八日徐老將軍が孫文の廟の前で自刃したが、將軍はその遺書の中で次の様に言つて居た。

「余は余の血と心とを孫の靈にさしげる。それは支那の指導者をして我慾と反逆から覺醒せしめんがためである。余の犠牲によつて、日本の政策に對して直ちに反抗の氣運が呼び起されん事を望む」

親日支那政治家でさへ彼の死を知つて不安に驅られたのである。

一方關東軍首脳部は止まる所を知らず、益々進撃を續け、かくて一市は一市と「獨立し」、一省は一省と「南京政府の手から離れて」行つた。二十五年前、その生命を祖國の自由のために捧げると孫逸仙に固く誓つた蒋介石は、益々裏切者呼ばはりされた。併し彼が關東軍に向つて何が出来たであらう？ 正に四十年前、日本の侵略は朝鮮から初まつて老國支那の土地は次第に蠶食されて居るのだ。強奪された土地は「領地の確保のために止むを得ず」と云ふ理由の下に、益々新たに強奪された土地を加へて行く。かうして日本の將軍連は四十年間に朝鮮から北京迄併呑してしまつたのだ。その歩んだ道を辿るならば、二千三百軒の瑣々たるものである。それは約全ヨーロッパの道程であり、ストックホルムからリスボン迄の距離にも匹敵する。これと同じ速度で進むならば、既に來るべき半世紀は彼等をインド又はツクライナに於て發見するであらう。

併しヨーロッパ諸國はこんな事を氣に懸けて居ない。イタリアとドイツを押へなければならぬのだ。

を放逐するのと同じ理由で人々がローマからキリスト教徒を追放した事は偶然ではない。彼等の運動は思想上のもので、掴みどころが無かつた。彼等が國家を建設せず、稜堡を固め初めない間は、彼等に對して殆んど手を下す事が出来なかつた。法王がその兵や土地を所有するに及んで人々は始めてこれと戦ひ部分的にこれに勝つ事が出来たのである。

孫逸仙がロシアに求めた時も又蔣介石が北進をした時も、ロシアは支那に對して煽動員や金を送つたばかりでなく、兵までも派遣したが、此の方法は失策であつた事をロシアは早くも洞察してしまつた。又千九百二十四年、張作霖に迫つて、千九百十七年から同二十三年に至る間國際化された東支鐵道を再びロシアのものとしたあの協定を無理にさせたのは、やはり失策だつたと云ふ事を早くも認識したのである。千九百三年に開通した此の鐵道が再びロシアの職員を持つ様になると、支那人や日本人との衝突が頻發して毎日いざこざが絶えなかつた。その點に於てはソヴィエトロシア人も、滿洲を占領し支那人を壓迫したツァール時代のロシア人と何等異ならなかつた。それ故にロシアは早くも此の鐵道を手離さうとしたのだ。既に千九百二十七年リトビノフが此の鐵道は持つて居なければならぬと明言した舌の先がかはかぬ中に、ロシア政府は千九百三十一年の春、支那に對して公式に賣却を提議した。それから日本が益々進出する様になると、千九百三十三年の初め、此の賣却提議を日本政府に持ち込み、滿洲里とプログラニチャヤ(ウラヂオストックに最も近い滿洲の驛)を結ぶ線及び哈爾濱と新京を結ぶ千七百軒の鐵道線

に對して五億圓を要求した。此の値段は安かつたが、日本人は丁度此の要求額の十分の一に當る五千萬圓しか値をつけなかつた。彼等は此の交渉は直ちに決裂するものと確信を以て期待して居たのである。ところがロシア側は讓歩し、いつも戦争の口實になりさうなツァール時代の遺産を是非とも手離さうと決心した。かくてロシアは既に千九百三十三年八月四日には、その要求を三億五千萬圓に引き下げた。そこで日本は新しい戦術を知つた。日本は既に入しい以前から、ロシアの東支鐵道放棄を要求して居たから、後へひく事は出来なかつたのである。そこで次々と新しい陰謀を企て、鐵道従業員の逮捕によつてロシア人を脅かした。併しその結果は空虚な抗議文とロシア側の新たな値引き以外には何物も得なかつた。千九百三十四年二月二十六日、東支鐵道は原價の十分の一足らずの二億圓の値打しかなくなり、同年五月十八日同鐵道はロシア人にとつて一億九千萬圓、六月二十八日には一億七千萬圓になつた。それにも拘はらず日本は交渉を中止した。そこでロシアは一億四千萬圓、即ち約一億マークにまけた。日本は最早引きさがるわけに行かず、此處に調印が行はれた。かうして千九百三十五年三月二十三日、ロシアは支那に於ける最後の物質的支柱を放棄した。そして直接攻撃され得るもの、或はそれによつてロシアの感情を傷ける事が出来たもの、又は戦争を挑發出来たものは一物も無くなつた。日本は心も重く支拂ひをした。そして結構な演説が行はれ、支那に於ける日本の自由行動を認める日露秘密協定の成立さへ噂された。續いて日本の代表をジュネーブから連れ去つた男——松岡洋右が滿鐵の總裁になつた。

或る夏の早朝のこと、二千人の日本人線路工夫は特別口糧の^{ミンニ}（これは精力がつくものである）を與へられ、新京哈爾濱間では九十六勞働隊が同時に、日本レールより三吋半幅の廣いロシアレールを取りはづし初めた。そして約三時間後には二百四十粒が滿鐵式に改良された。今では流線型列車「急行アジア號」が大連と哈爾濱を九時間半で結び、時速百粒を出す事が出来る様になつて居る。

それにも拘はらず關東軍は決して満足しなかつた。そして千九百三十一年、例の中村事件が平和裡に處理されると早速次に新しい戦争口實を見つけた様に、關東軍は東支鐵道が最早何等の摩擦の可能性を提供しなくなると蒙古を威嚇して又ロシアと事を構へようとした。

千九百三十五年三月二十三日日ソ買賣契約が調印され、同三月二十八日「滿洲國政府」は内蒙古合併を要求し初めた。その理由とするところは「蒙古王族の一族が、皇帝に請願書を提出し、彼等の國の滿洲國併合を希望した……」と云ふのである。ロシアはこれを默殺した。そこで關東軍當局は自ら七月四日庫倫に於て最後の通牒をつきつけ、次の様な要求をした。即ち、内蒙古のみならず外蒙古も——即ちロシアの默認を得て——滿洲國との貿易のために、即ち又「軍事的オブザーバー」たる日本のためにもこれを開放し、此の「オブザーバー」のために道路と電信機を建設せしむべしと云ふ要求である。日本の司令長官は此の際次の様に聲明した。

「我々は外蒙と滿洲國を隔て、居る戸を押しあけるであらう。それは丁度八十年前、ペルリがその艦

隊を率ゐて横濱に來り、日本の戸を押しあけて日本を世界に開いたのと正に同じ事である。」

誰も此の言葉の諷刺を聴きのがすものは無いだらう。日本は今日武力を以て西方發展をはかつて居るが、その瞬間自ら再び白色人種の弟子であり、それ以上の何物でもない事を告白して居る。ところで此の最後通牒は、ロシアにとつてバイカル湖及び新らしい大工業國たるシベリアへの進攻と同じ意義を持つものだ。此處にはロシアにとつて、ロシアを日本から隔て、居る最後の堡壘が賭けてあつたのである。關東軍が打ち破らうとしたのは正に此の堡壘なのだ。何故ならばロシアは東支鐵道の賣却に依つて、その政策を最後まで的確に遂行し、日本も亦内蒙古威嚇に依つて、そのなすところを知つて居る事を證明したからである。即ち、若しロシアが他く迄も武力戦を避けようとするならば、日本には此の公然たる戦ひを求めるか、或はロシアを威嚇してその地下の擾亂、宣傳を斷念させ、日本の同盟國たる事を證さしめるか、此の二つの何れかの道以外にはないのである。ロシア人に對する日本の態度を見ると、一見その眞意を了解しかねるかも知れない、否、狂氣沙汰の様に思はれるかも知れない。併し更によく觀察して見れば、日本のやり方は蟻に食料倉庫を荒らされて、考へもなく無駄に蟻を踏みつけるだけですから、蟻の跡をつけてその道を辿り、巢を探し出して其の巢を石油か火ですつかり絶滅させてしまふ人のやり方以外の何物でもない事が明らかになつて來る。國內の敵は國外の敵より更に危険で、自國の農民及び勞働者の困窮はアメリカの砲よりも破壊的な事がある——日本は此の事を既によく知つて居

る。共産主義的宣傳に對して、日本程徹底的に戦つて居る國はなく、又大學に於ける共産主義細胞を日本程用捨なく殲滅し、かくも多くの宣傳員を逮捕して居る國はない。日本の共産主義者はロシア型であつて、彼等はその主義の實現のためには死も厭はない。その運動資金を得るために日本で初めてアメリカ式に銀行襲撃をやり、三井の支店の金庫室に自畫侵入したのは共産主義者だつた。その當時、即ち千九百三十二年の十月、東京の警察だけでも六百八十七名の共産主義者を逮捕した。特記すべきは、此の中勞働者は僅かに五十七人に過ぎず、残りは一インテリであつた事である。東京以外で逮捕された他の「赤」は千五百四十人にのぼつた。次々に公布される法令は共産主義者の宣傳活動を困難ならしめるが、千九百三十五年三月七日に提出された法律案は、現存の政治形態變革を企てる團體の統率者乃至指導的メンバーに對する死刑を寓意して居る。

(348)

日本以外の諸外國も、共産主義は國家を危くし、あらゆる國境を抹消して國家的建設を妨げ、論理的發展、除々の合生、他日結合して世界的同盟になるかも知れない獨立の國家組織の誕生等を妨害し、モスコ政府の司令下に一つの世界を造らうと努力して居ると云ふ事をよく知つて居る。そして諸外國に於てもやはり共産主義者は迫害されて居る。併し日本は此の禍根の後をつけて行く。白人諸國はソヴェトに對抗して先づ兵を送り金を費し、やがて此の鬭争を斷念してロシアに對して大クレヂットを承認した。次に白人専門家及び機械を提供して、ロシアをヨーロッパの最も危険な競争者とし、日本の場合

でも既に破壊的であつた事をソヴェトに對しても繰り返した。又共産政府をミュンヘン、ベルリン、ペラ・クーン、ハンガリー等から放逐したりしたが、此の害惡の温床には益々氣をとめなくなつて居た。いはゞ二三匹の蟻を踏み潰しておいて、同時に蟻の群に砂糖をまいたのである。

日本のやり方はヨーロッパより論理的で果敢で又躊躇する所がない。日本の工場はアメリカの工場と見違へる程類似し、日本の急進軍國主義者の説は共産主義思想と酷似して居る事は居る。併し——否正に此の外見上の類似のためかも知れぬが——大日本は米國が殆んど全物質的事物に於ける敵で、ロシアが精神的物事に於ける大敵である事を知つて居る。

ロシア人は反資本主義的であり、日本の將官連も反資本主義的である。此の二國は計畫經濟を信じて居る。併しロシアはモスコ政府司令下の世界を信じ、日本は日本の主權下の世界を信じて居る。アラビア人はキリスト教徒やユダヤ人を寛容して居るが、キリスト教徒やユダヤ人は異教徒のアラビア人を深く憎惡して居る。二つの反對黨は相並んで存在する事が出来るが、二つの類似國は獨裁權を得んがために互ひに他を全滅させる迄戦ふ。第二インターナショナル及び第三インターナショナルより憎むべき敵は考へられない。日本はロシアに對するその殆んど悲劇的な鬭争を告白はしないが、ソヴェトが出来て以來、あらゆる手段を以てこれと戦つて居る。そして自國內の總ての共産主義者のみならず、殊にこの治安妨害の根源たるロシアそのものを絶滅せようとして居るのである。

(349)

既に千九百十八年日本は聯合國に對して、捕虜としてシベリアに置かれたチエッコ人の軍團を解放し、過激派に對する遠征軍を組織する事を提議した。ウラデオストックには重要な彈藥倉庫があつたが、日本はこれをドイツ人の手から守らなければならないと言つた。日本の司令權、日本人、大谷大將の指揮下に、米、英、佛、支、日、伊等の軍はウラデオストックからバイカル湖を越えた地方迄進撃した。彼等は千九百二十年迄其處に駐屯したが、その頃赤色宣傳はヨーロッパに於ても極東の白人軍の間に於ても著しく奏効した。アメリカ人はそのシベリア遠征軍兵士が、危険極まるロシアのパンフレットより更に危険な手紙をその家庭に寄せる事を知つて驚愕した。やがてロシアはイギリスとフランスとを争はせ、アメリカと他の總ての諸國とを反目させて、以て漁夫の利を占める事に成功した。かくて白人軍は撤退したが、日本軍はそのまゝ居残つた。彼等は七億ドルを犠牲にしたがその闘争を斷念しなかつた。日本はその賭けた物をよく知つて居たのである。日本は感傷を識らず、ロシアを戦ひ倒すが、少くとも出来るならアジアから追ひ出さなければならなかつたのだ。だから日本軍は千九百二十二年の十二月迄シベリアに駐屯して居た。ところがその當時既にワシントン海軍會議が始まつて居て、日本は九ヶ國條約によつて支那から閉塞されたばかりでなく、シベリア撤兵を強制された。日本は殆んど數ヶ國の白人諸國と戦線に對峙しなければならなくなり、殊に國內が脆弱であつたから止むを得ず讓歩した。日本人がバイカル湖地方から撤退すると、ニコライエムヌスクで四十人の日本商人がロシア人に殺害された。此の事件

は日本に、少くとも樺太には駐屯を續けると云ふ口實を與へた。併しそれも長続きせず、千九百二十三年日本は此の島のために賣買交渉を初めなければならなかつた。此の島は千八百八十年、帝政ロシア政府が日本に百萬ドルで賣らうとした事があり、ソツイエトも七億五千萬ドルではどうかと言つて賣りたがつて居たのであるが、實際それだけの値打のあるものであつた。何故ならばアメリカの地質學者は、樺太の石油石炭の富を合衆國に現在ある石油石炭埋藏量の五分の一と評價し、ロシアの地質學者は二分の一と評價した位だからである。

ロシアと日本の代表が會議を重ねる事七十回以上にしても交渉成立に到らず、日本は七億五千萬ドルに對して一億五千萬ドルに値を付けたが、その間にロシアは樺太の油田に關する特權をアメリカ人に與へ、勿論これをアメリカ政府の外交的調停と云ふ段取り迄運んで行つた。併し千九百二十五年日ソ條約が成立し、これに依つて樺太の油源及び石炭埋藏量の半ばは日本人に讓渡され、ロシア領海、カムチャツカ半島附近、アムール河口、シベリア沿岸等に於ける漁獵の特權も日本に與へられた。ソツイエト政府は更に一步進めて、日本に對し再三再四侵略協定締結を提議したが、日本はこれを拒否し、のみならず通商條約をも拒絶した。そして假令全世界はソツイエトの此の平和的態度に好意を示し、日本人の頑強を責めはしたが、日本としてはどうしてもこれ以外には何も出来なかつたのである。何故ならば、ロシアは益々強力を傷け難くなり、而も益々攻撃を避け、次第に不可解な存在となつて來たからである。

日本は樺太の半ばを獲得したが、それから正に十年後東支鐵道を手に入れた。一方ロシアはこれと同じ年数の間に、支那に於ける七千萬人の同志を得た。日本が莫大な血と金とを犠牲にして支那北部三省と滿洲の三千万の人民を得て居る間に、支那本部では共產主義的の五省が南京政府から獨立した。日本がロシア革命の最初の日から怖れて居たものが眞實になつた。思想が拳を凌駕したのである。千九百二十五年日本がロシアに對して如何なる協定も拒否した時、日本の行動は最初正氣の沙汰と思はれなかつた。又眼の眩んだ戦争狂とも思はれた。そして東支鐵道賣買契約調印後數日にして、ヨーロッパ各國は此の契約を極東に於ける平和意志の重要な證書だと云つた。——日本がロシアの屬國たる蒙古に最後通牒をつきつけた事は不可解な行爲と思はれた。併し實際に於ては、此の事は日本が事物の奥底まで極めて行くのに反して、ヨーロッパ諸國が表面にばかり粘着し切つて居ると云ふ事實の必然の結果に過ぎなかつたのだ。蒙古に對する最後通牒はハーリンが千九百二十八年に公言した言葉に對する日本の戰略家の正しい認識を更に證明したものに過ぎない。

千九百二十八年ブハーリンの公言した言葉とは次の様なものである。

「我々が支那に一兵も持たなくなつて以來、我々の勢力は今迄になく擴大した。日本は支那の土地を獲得するが、我々は支那のハートを獲得するのだ。支那革命は胎動して居る。それは現代史の最も重要な要素である。資本主義世界はこれに氣がついて居ないけれども……」

(352)

日本の戰術家の軍事政策は遂に日貨排斥、匪賊襲撃の原因となつたが、ロシアの革命戰術は既に千九百三十三年汎ソツヴェト會議を可能ならしめ、ロシア政府の考へは今や支那に頻發する暴動の原因となつたばかりでなく、よく組織立てられたソツヴェト共和國實現へ導き、又——ロシア政府の直接的影響を證明する事は出来なかつたであらうが——支那の「赤」が千九百三十四年春には沿岸地方まで進出し、南京政府の必死の努力にも拘はらずこれを絶滅する事が出来なかつたと云ふ事——かう云ふ事情を日本の戰術家は既に認識して居た。又日本は、支那に於て此の事の方が共產主義運動より恐れられなくなつたと云ふ事を知つて愕然としたのである。千九百三十五年七月、支那の事實上の獨裁者たる蔣介石が、日本軍の天津北京進攻に對して、「友邦日本」に對する新聞の攻撃を嚴重に禁止し、同時に支那共產黨に對しては彼の精兵四萬を動員し、中國の死命を制する揚子江中流地方の「赤化地帯」に對して潑刺たる討伐を開始した事は、實に意味深い事である。彼等は支那交通の主脈たる此の川の中流以下を遮斷し以て西部地方を、ソツヴェト、日本、蒙古、西藏等の政治家の勢力に解放したのである。

總司令蔣介石が少くとも支那の胸體を揚子江と云ふ脊梁で持ちこたへようとするならば、先づ共產黨に對して勝利を占めて居なければならぬ。

日本が滿洲に永遠の足跡を残さうと思ふならば、やはりロシア人に勝たなければならぬ。日本は既にこれを承知し、又、その軍事政策が責任を加重して滿洲開發が日本を國家的破産の瀬戸際まで追ひつ

(353)

め、ロシアが黙々として日本の總ての地位の下に穴を掘り、何等辯明の責任を持つ様子も見せず黙々と全アジアに勢力を張つて行く事も日本はよく知つて居る。更に日本は、ロシアの多人数による革命的行動は恐ろしく大きな九頭の怪蛇の様なもので、武力でなく心に徹する思想の力で戦はなければこれを打ちとる事が出来ないと云ふ事も知つて居るのである。

日本は溥儀を滿洲の皇帝にまつり上げる時、ロシアと同じ武器を利用しようとした。即ち「精神で」侵略しようとした。併し滿洲皇帝の名聲に對する信仰は、此の世の樂園の夢(その中では支那の貧農もその主人の様に金持になり、貧しい苦力でさへ「Gold」の様に偉くなれると云はれて居た)である共産主義に對する信念に比べれば、問題にならない程大きいのである。

日本は此の争闘が比較にならない事を知り、日本の運命は支那が日本のものになるか共産黨のものになるかにかゝつて居る事も知つた。又日本は東支鐵道によつては最早ロシアを蹶跌させる事も出来ず、民福を計るソヴェト政治と搾取的な帝政とを比較する事によつて、ロシアの威信を傷ける事が出来なくなつたので、ロシアを遠く支那から退けて、最早一人の宣傳員も沙漠と警戒網をくゞつて来ないやうに、ロシア政府の抱いて居る考へが少しも支那の地に入らない様にとめなければならなくなつた。そこでロシアがその國境外に挑戦の手段となるべき具體的な何物も所有しなくなつた時、日本はロシアの國境を越えなければならなくなつた。ロシアの根據地を破壊する必要を感じたのである。

かうしてロシアは日本と闘争せざるを得なくなつた。併しロシアはアジアに於ける公然たる侵略は喜んで放棄しても、そのアジア領地を放棄する事は斷じて出来なかつた。それは威信に關すると云ふ理由と、放棄を初めれば際限が無いと云ふ理由——支那の例が日本は決して他く事を知らないと云ふ事を證明して居るからばかりでなく、主としてロシアの全勢力はアジアから得る原料に基づいて居ると云ふ事と、アジアにはヨーロッパの三倍にも相當する千五百万平方呎の版圖を持つて居ると云ふ事とによるのである。

シベリアの工業化

共産主義は力強い闘争據點を持つて居るから存続する事が出来た。ソヴェトが多くの敵を向ふにまはして防禦する事が出来たのは、他の如何なる大國よりも資源に富んだ國を持つて居るからである。それは「太陽の没する事のない」大國であつて、三千萬に及ぶ一時的な人口増加を年々樂々と消化する事が出来、飢餓によつて國を疲弊させるところか、貧民の増加によつて一層國を強化するところの大國である。世界のあらゆる新聞は十年一日の如く共産主義者の没落を豫言したが、彼等が依然として亡びないのは、その生活必需品を總て自國內に持つて居るからであつて、工業の未完成のために一時窮迫はしたが、封鎖に依つて飢餓に頻せしめられる様な事はなかつたからである。

レーニンの遺言状の文章の中で、ロシアの主権者達によつて「烟霧の中の支那を支持せよ」と云ふ勸告程よく遵奉されたものはないが、「ロシアを他國に從屬せしむる勿れ、鐵から穀物に至る迄自給出来る様にせよ」と云ふ訓令も全力を以て實行された。千九百二十四年レーニンが死んだ時、ロシアは列強の中で鉄鐵の産額最も少く、最も工業化されない國であつた。それにも拘はらずロシアは既にその當時合衆國の一億一千万人に對して一億七千万の人口を持つて居た。そして鐵の年産は僅かに六十六萬一千噸に過ぎなかつたが、アメリカは四千二百萬噸、イギリスは一千三百萬噸、ドイツは八百萬噸を産した。併し五ヶ年計畫の第一年、即ち既に千九百二十八年には鉄鐵三百三十七萬噸、鋼鐵四百三十萬噸を出し、千九百三十二年には鉄鐵六百三十萬噸、鋼鐵五百八十五萬噸を産して居る。ロシアはレーニンの死後十年にして、鐵及び鋼鐵の産出に於てドイツとイギリスを凌駕し、百十三の熔鑛爐を使用するに至つた。併しこれ等の熔鑛爐に用ひられる石炭と鑛石はヨーロッパからは産出せず、滿洲、蒙古、支那等に隣接する地方、即ち日本が虎視眈々と狙つて居る地方から出るのである。植民の行き届いて居るロシア本國は比較的原料に乏しく、ドムブロツァ（千九百二十年以來ポーランド領）の炭田喪失によつて更に乏しくなつた。併しアジアロシアは石炭、鐵、其の他あらゆる種類の金屬が豫期以上に豊富なのである。

例へば其の筋の評価によると、ソツエト共和國の埋炭量は一兆一千五百五十億噸にのぼつて居る。此の中ヨーロッパロシア（トネツ盆地）にあるものは僅かに七百億噸に過ぎず、其の他はクスネツク、西シベリ

ア、北シベリア、東シベリア、ウラル及び北極地方に分布して居る。

帝政々府はアムール河とバイカル湖の間、即ち北氷洋と黃海との間にまたがつて居る巨大な國土の木材、魚類、毛皮、穀物等の輸出路を發見するために、ウラチオストック、ニコライエフスク等を得んとし、戦つて來たが、主として滿洲を占領した。前世紀の七十年代にロシア人の調査員チエカノフは、エニセー河の支流、下トウングスカで炭層（二千呎以上にわたり、河で中斷されて居る石炭地層）を發見し、又、既に千八百九十五年には、中部アングラに於て大石炭層が發見されはしたが、これ等の富源は少しも利用されず、シベリアは單に人跡稀な廣大な國土に過ぎなかつた。そして大抵のロシア人がシベリアを政治犯の追放地としてより他に知らなかつたのは他の世界の人々と同様である。併しソツエトは今日シベリアの諸川の水産富源を利用して居るばかりでなく、アジアロシアの河はロシアの工業化にとつて缺く可からざるものになつて居る。アシカラ地方だけでも時能四百億キロワットの中央發電所を十一も動かす、オビ河、イルタイシユ河、エニセー河等の地方にも多くの水力工場がある。千九百三十年に於けるロシアの水力、六千四百八十萬馬力の中、ヨーロッパロシアのものは僅かに二十三パーセントで、七十パーセントはアジアのものである。

千九百十年ロシア當局はベテルブルグに於てロシアの鐵鑛埋藏量の見積りを發表したが、それに依ると中部ロシア、南部ロシア、コーカサス、ヨーロッパウラル等の埋藏量は十六億二千百萬噸と見られ、

アジアロシアのそれは僅か二千七百萬噸に過ぎなかつた。又千九百十年から同十六年に至る間に、更に四億噸の鐵礦がウラルで發見され、續いてソヴェト人はクスネツクの南部、テルベスの鐵礦脈を發見したが、これは六十乃至六十三パーセントの金屬を含有する優良な鐵石二千七百萬噸を有するものである。それからシベリアを實際組織的に開發する計畫を立て見ると、トミの鐵礦脈にぶつかつて、それは約二億噸の鐵石を埋藏するものと見られ、千九百三十一年の夏期中だけでも、東シベリアに於て少くとも五億噸の鐵礦を供給し得べき鐵脈のある事がわかつた。これ等の鐵山の一つであるソスノヅイ、パエツはヤクト炭坑の南端にあり、イリム河の鐵礦脈はトウングース盆地に隣接して居る。此處に於てロシア工業の重點は突然位置を變へ、オビ河とバイカル湖にはさまれた地方はロシアの最も重要な地域となつた。毎日何か發見され、新道路や新空路、又新たに就航可能になつた河川等の各所はいづれも新しい富を齎した。ヨーロッパロシアは全く輕金屬に恵まれて居ないが、やがてエニセー川流域のミスシンスク、ウリアンカイの銅産地、又トランスバイカルの銀、鉛、亞鉛の埋藏、東アムールのアンチモニー等が非常に豊富なるものである事がわかつた。鋼鐵生産にとつて重要なバナデン、マンガンから硫黃、アスファルト、ナタン、水鉛等に至る迄、アジアロシアには自給自足の工業が必要とする總ての鑛物が産出する。そして言ふ迄もなく新しい發見物がある毎にロシアの重點は益々東方へ移つて行く。千九百十七年の革命直後共產黨員はヨーロッパを占領する必要を知り、千九百二十年赤軍はワルソーの都門に

逼つた。併し東方への第一歩は既に千九百十八年に初められて居た。その當時レーニンは政府をチムールの舊地たるモスコ、ウラル街道の隠れた商業地に移した。アジア人はロシア統轄に於て次第に優勢になり、西洋的感化を受けたレーニユンやトロツキー等のインテリタイプの中には益々蒙古型、キリギス型の人間が來り、遂にライフリス生れのスターリンは日本の新聞記者に向つて次の様に誇らかに言ふ様になつた。

「余はアジア人だ。そしてロシアはアジアの國だ」と。

ロシアは既に對歐武力戰を斷念し、ヨーロッパ諸國が豊かな植民地を持つて居るアジアに向つて、間接的な破壊法を選んだ。即ち植民地民族はロシア兵を絶滅させずヨーロッパ諸國を絶滅せしむべしと云ふ破壊法である。ソヴェト政府は——少くとも外見上は——ウスベーク人、キルギス人、アルメニヤ人、タタール人、コサック人、蒙古人（これ等の民族は帝政々府からは征服された非ロシア民族として奴隷の様に取扱はれて居る等に自治をさせ、安南人、フィリッピン人、印度人、マレー人等にも同様に自治を要求する様に喚びかけ、以前にもまして彼等に白色人種を壓迫者と思はせ、ソヴェト人を解放者と思はせる様にしむけた。此の戰術は上手だつた。大戰の終る時分、全くイギリスの植民地化して居たベルシヤはその羈絆を脱し、英人を放逐して獨立したので、ベルシヤ政府は千九百三十三年、神聖なる「アングロ・ベルシヤン・オイル」會社に對して種々な制約を命ずる事さへ出來た。又アフガニスタンもトルコと共に獨立し、

印度と印度支那には暴動が絶えなくなつたのである。

ロシアが其の所有物を固守しなければならなかつたのは、かう云ふ精神的徒黨とか自分の威信のためばかりではない。又シベリアと海岸地方を防禦しなければならなかつたのは原料のためばかりではなく、ウラヂオストクを強化し、アムール國境地方を金城鐵壁にしなければならなかつたのは、戰略的根據からばかりではない。ロシアは公然たる征略を少しも用ひなかつたが、その國土は寸地もこれを放棄するわけに行かなかつたのだ。何故ならばロシアは、極度の窮乏を忍び、多くの國民を犠牲にして、漸く富源の開発に成功したからである。ロシアの内部の力は、労働者が飢餓に苦しみ「資本主義的搾取者」のために働かせられる労働者よりひどい苦役をしても、自分の作つた物は自分と自分の子供達のものだと信じると云ふ事にその基礎を置いて居るのである。それはロシアの労働者が、未來の樂園を描きつゝ現在の苦惱に堪へ、自分自身のために労働したのだと信じる事に依つて居るのである。ロシアの労働者は手に血を流して掘り出した鐵が、侵略のために用意される榴彈に變はる事を望みはしなかつたが、彼が取る前に日本がその鐵を取らうとすれば、むしろこれを砲にする事を望んだのである。ロシアはその内政的理由から攻略戦をする事は仲々困難であるが、同様に領土の喪失もこれを忍ぶ事は出来なない。ロシアでも日本と同様に工業化のために最も搾取されたのは農民であつた。ソツィエト政府でさへ穀物の購買力を極度に引き下げる必要があつた事を承認し、又政府は千九百十三年には百磅の小麥で三

(360)

十三米半の綿布、二十疋半の砂糖、二十二・八疋の石鹼等を買ふ事が出来た事、千九百三十三年にはロシア農民が同じ小麥で、僅かに四米半の綿布、三疋半の砂糖、一・八疋の石鹼しか手に入れる事が出来なかつたと云ふ事を否定しはしなかつた。此の様な犠牲を要求する事が出来るためには、その代りに又やがて取上げてしまふ様なものをあてがふわけには行かなかつたのである。

ロシアはシベリアの富源探掘のために、金を輸出し高利短期の外債をしなければならなかつた。又アジアから原料を引き出すために機械を必要とした。その短期外債は千九百二十六年の四億八千五百萬ルーブルから千九百三十二年の十四億八千六百萬ルーブルに増加し、ロシアは此の巨額の外債に對する利子を支拂ふために、その所有物を確保しなければならなかつたのである。

そこでロシアは今日世界最強の一と見做されて居る空軍建設に乗出し、シベリアと中央ロシアを結ぶ鐵道系統を夢中で擴大して行つた。五ヶ年計畫の第二年には鐵道建設のために十三億ルーブルが用意され、東支鐵道が見離されてからは、此の金額の丁度三分の一がバイカル・アムール鐵道に向けられた。ハバロフスクとニコライエフスクを結ぶべき鐵道線が猛烈な勢ひで建設された。此の鐵道線はブレイア盆地の炭田やキンガン地方の鑛脈を開發するのである。此の地方は、クスネツク地方が「日本の前線」から五千軒離れて居るのに反して、僅かに五百軒しか離れて居ない原料貯藏地なのである。此の鐵道建設の理由は、大陸と樺太海岸間の間宮海峡の港ニコライエフスクが、餘りに攻撃され易いウラヂオスト

(361)

ツクの代りになれるからである。そこでロシアは非常に組織だつた勞働に依つて、アムール河をハバロフスク迄大洋汽船の航行可能にさせ、鐵道に依つてニコライエフスクとソヴェツカヤ・ガパンの森林の多い非常に豊饒な奥地を開發し、以て新根據地のための食料基地を造り初めた。そして益々精銳な聯隊が滿洲國境附近に来て、ウスリー河とアムール河に沿ひ、四千軒にわたつて太平洋からバイカル湖に達して延々弓状をなす大國境線の百米と雖も警備されて居ないところはなくなつた。又ロシアの邊境地方には到る所に飛行場が出来たが、それはみんな東京・大阪まで八百五十軒の距離にあり、従つて爆撃可能の範圍内にある。ソヴェト飛行士も駐屯して居るが、これに對して日本は戦闘機を用ひる事は出来るが、爆撃機を用ひる事は出来ない。何故ならば、ロシアの最も近い眞の要地たるクヌネックでさへ日本の國境から七千軒も隔つて居るからである。併し兩國とも躍起となつて軍備を充實して居る。千九百三十五年、日本は常備軍の丁度二分の一を滿洲におき、これに十一萬五千の滿洲軍と一萬二千の白系ロシア人軍が加はつた。日本は千九百三十二年十一月から千九百三十五年六月の間だけでも、二千二百軒の軍用道路をロシア國境に建設したが、その間にロシアは、オレンブルグからタイシエツト、キレンスクに達しシベリア鐵道を二様にトゥルクシツプ鐵道と結ぶ線を完成したのである。

かうして網は締められ、日本が既に怖れて居た事が起つて來た。即ち、ロシアの新らしい大工業中心地たる中央アジアと東シベリアとが結ばれたのである。日本が絶えず邪魔しようとし、日本の軍部が繰返

し説いて居たところのものが實現されたのだ。ロシアとの一戦は不可避である。我が方が一日遷延すればそれだけロシアの利する所となり、ロシアは一時間毎に強大になる。これは日本軍部の常に説いて居たところだ。今やロシアは思想を以て戦ふ事も工業生産品を以て戦ふ事も出来る様になり、日本の輸出も日本の支那に於ける地位も妨害する事が出来る様になつた。

既に千九百二十八年、荒木陸相の協力者平田晋作は次の様に書いて居る。

「若しシベリアと蒙古を敵に渡せば、我々は國民に飢餓を宣告する事になる。躊躇して居れば決してロシアに勝てないだらう。假令一時は不安かも知れないが、最早便々と待つては居られない。シベリアを占領するのは今だ。今やらなければ手遅れになつてしまふ。」

彼の言は常つて居た。又、ソヴェトがアジアを工業化するのを妨害せよと主張した中山も、ロシアが一瞬々々強大になる事を數字的に證明した佐々木一雄大佐の考へも同様に正しかつた。

關東軍がロシアに備へて、最初の大々的な準備をした時、ソヴェトの飛行士は初めてトルキスタンとシベリアの境をなす山嶽の寫真測量を初め、此處に初めて苦心を重ねた結果チヨクバル陸路が起される様になり、漸く探る様にして千四百四十軒の軌道を建設すべき道が求められたのである。此の軌道は千九百三十年四月二十八日「トゥルクシツプ鐵道」として立派に開通し、支那國境に沿つて、未だその重要性が評價されて居ない一つの國を開發したのである。日本が滿洲進攻を開始した當時、トルキスタ

ン及びタチキスタンはシベリアの鐵石炭の産地から三ヶ月も要する距離にあつたが、今では三十時間で旅行する事が出来る。今やインド、アフガニスタン、ベルシャ及び支那に接して居る中央アジアの此の鐵道は、シベリアの穀物をトルキスタンに運び、それによつて廣大な棉栽培地を自由に得て、ロシアにエチプトとアメリカの棉の恩澤を殆んど蒙らなくてもいゝ様にしたばかりでなく、既に遊牧民を工場労働者にし、天幕村を町に化した。そして今や此の「鋼鐵の腕」に依つて沙漠は豊かなホルホーズになつた。トゥルクシツプ鐵道の開通以來、中央アジアの生産價値は三百パーセント増大し、例へば千九百三十二年には一億四千四百萬メートルの織物が生産された。それより五年前には一メートルも出来なかつたのである。

日本がシベリア徴兵を完了してから十二年、ソヴィエトは此の十二年の間にその三百萬軒の道路二本を自動車道路にし、新道路三十六萬六千軒を建設した。又、フォードの設立にかゝるニジニノゴロ自動車工場は、六年このかた生産十四萬臺に達し、ロシアの自動車路は多くの河川の支流と共に、これ等の大河にも比すべき鐵道の貨物を運んだのである。

日本軍がシベリア遠征をした時、シベリア鐵道は荒廢して殆んど役に立たない軌道であつたが、今や總ての無用な屈曲や、單に都市又は政黨の利害關係のために造られた總ての支線は、新しい直線軌道に代へられた。そしてロシア人は勾配を緩和して石炭を節約した。今や膨大な貨物の流れがロシア内部に入り

これに對して多くの機械類がシベリアへ送られた。千九百二十五年には一軒あたり一噸の貨物の運賃が二プフェンニヒもしたのに、今では一プフェンニヒですむ様になつたのである。

日本人が優柔不斷の議會と白人の陰謀と金融逼迫によつて止むなく待期を餘儀なくされて居る間に、ロシア人はドニエプロストロイの發電所を完成した。彼等は此の發電所だけで八十一萬馬力、即ち労働者千六百萬人に相當する能率を得た。何故ならばどんな強い人間でも一馬力の二十分の一以上には相當しないからである。而もロシア人は此の大軍を殆んど無料を得たのである。と云ふのは此の建築物はアメリカのクレヂットで出来たからである。利子を計算に入れても、今日ソヴィエト人にとつて一軒ワット時僅かに二プフェンニヒのかゝりに過ぎない。ところで一キロワット時は一人の人間の約三日間の労働日に相當する。三日で二プフェンニヒ——これでは日本の勞賃でさへ競争する事が出来なかつたのである。

日本が樺太及び東支鐵道のために、對露交渉を重ねて居た何年かの間に、ロシアはその地下の富源を生かしたばかりでなく、これを工業品に變化させた。スターリンが「ウラル・クズネツク聯合」創設を指令し、ロシアの西部國境から四千軒離れて居て、實際ヨーロッパからも東アジアからも攻撃不可能な東シベリア工業國建設に乘出して以來、又、シベリアの原始林の中に、發電所、熔鑛爐、展鐵工場、機械工場、加里鐵山、爆藥工場、「織物巨人」、罐詰工場等が續々出来てから、英、佛、伊、米等の諸國は絶え

その専門家や新機械をシベリアに送つて、新しい競争相手を作つたのであるが、此の競争相手に對しては、既に今日ヨーロッパの最大中心地と雖も小さく見える程である。かくて今日のロシアは日本に對して、ボルシェビズムの宣傳によるばかりでなく、激烈な經濟競争によつて、蒙古、支那の大部、印度、アフガニスタン、イラン等の道を閉塞するに至つた。

ソツイエト人は日本人より安値をつけるので、千九百三十四年末以來アフガニスタンではロシアの白熱電球ばかりが買はれた。千九百三十五年八月二十七日ソツイエト・イラン經濟條約が成立し、イランはロシアに對して、ヨーロッパ及び日本の商會との激甚な競争の中に、脱穀所五、羊毛洗濯所二、收容量各一萬六千噸の穀物倉庫十及び六萬五千噸のもの等の建築委託を保證した。又此の條約は、八つの發電所、大製粉所、パン製造所等の機械供給の獨占をソツイエトに委任したのである。

千九百二十八年に於けるロシアの輸出は、蒙古向け七百七十萬ルーブル、東支那向け一千六十萬ルーブルであつたが、千九百三十三年には蒙古に二千六百四十萬ルーブル、東支那に三千百七十萬ルーブルの商品を買つて居る。

日本の代理人はアジアの何處へ行つても外國に於ける工業建築物のために特別に作られたロシアの國立協會の代表者を發見した。又彼等が何處で買らうとしても、ヨーロッパの競争者ばかりでなくそれ以上のロシアの競争者に出遭つた。日本は昔から或る種の原料に於てはロシアに依存し、白金タンタル、

水鉛、バナチンを敵國ロシアから買はなければならない。その支拂金額は千九百二十六年二千四百萬圓、同三十年三千七百萬圓、同三十四年四千九百萬圓となつて居る。そして此の同じ年に於ける對ソ輸出は夫々僅かに五百五十萬圓、一千三百萬圓、七百萬圓等に過ぎない。此の様に日本はロシアの原料の恩恵を蒙つて居るが、そればかりでなく今やロシアは日本に對して既成品工業の競争をもやり出したのである。日本はこれを攻勢と見做し、此の點に就いては日本の總ての資本家も軍部と同じ見解を持つて居る。即ち、輸出は日本にとつて最も重要である、何故ならば輸出は全國民にとつて生か死か、パンか飢餓かを意味するからであると云ふのだ。ロシアの國內市場は國家がアジアに投げ賣りする生産物を餓える程欲して居るのであるが、國家はその地位を獲得するために輸出し、政治的目的のために輸出する。そして既に今日輸出に對するロシアの關心が此の様に目立つて居るのであるから、これは將來危険なものになるのではないかと思はれる。此の恐威を感じるのは、どの國よりも日本が第一である。何故ならば日本は他のいづれの國よりもその工業で生命をつなぎ、どの國よりもその土地から得る産物のお蔭を蒙る事が少いからである。

東シベリアの工業地帯は廣大で、それは何處にも負けない競争をする事が出来る。而もその意義は單にロシアと日本に關係があるのではない。と云ふのは、我々はこれを北アジア及び中央アジアに於ける工業時代の誕生と見做さなければならぬからだ。その生産物は全く必然的に東方へ向ふ傾向を持ち、

マグニトゴルスク、タチール、クスネツク等の鐵は自然に與へられた唯一の市場として、シベリア、東支那、蒙古、支那トルキスタン、西藏國境に至る迄の支那中部諸省等を持つて居るのである。

日本はその石炭層、鐵礦脈に於て、ロシアの富源に比較すれば、實に比べものにならない程貧弱で、その調達に苦心し、アジア市場獲得戦ではロシアが總ての切札を持つて居る事を知つて居る。日本は支那に於けるソヴェートの政治的宣傳を恐れるばかりでなく、益々その機械を恐れて居る。

ヨーロッパ諸國が國境紛争や日ソ兩國が交互に提出して居る抗議書等に關心を費し、或はアムール河畔の瑣々たる發砲事件に耳を傾け、又ソヴェート官吏の拘引とか列車襲撃事件等に昂奮して居る間に、ソヴェートの眼に見えない、それ故に少からず絞殺の慾望に燃えた腕が既に日本の周圍に廻はされてロシアは日本を殺さなくては止まない勢でしがみつき抑へつけ初めて居た。即ち日本の支那侵入に對して眼に見えない共產主義思想が活動して居たのである。此の掴み所のない思想の活動と共に、一方ロシアの工業品輸出は何十億と云ふマツチ箱、白熱電球、何百萬メートルと云ふ綿布等になつて對日抗戦をやつて居るのである。

ロシアは日本を殺すために輸出する。何故ならばロシアが現在の道を飽く迄歩み続けようとするならば、どうしても日本を滅さなければならぬからである。

日本は生きるために輸出する。その兵を養つて行く事が出来るためには、市場を獲得しなければなら

ない。市場のためには全世界をも攻撃するのだ。

そこで再び悲しい哉、地下に埋れて居る力以外の力は總て空しいものと云ふ事が明らかに證明されるのである。日本は此の八十年以來、一步々々新らしい土地を攻略し、その地表面積は三十八萬二千平方方呎から六十八萬一千平方方呎に増大して、滿洲國を算入すれば百五十萬平方方呎以上のほり、半世紀の間に五倍の大きさになつた。日本の主権の下にある人口は三千萬から一億二千萬に増加した。併し今日總ての新版圖を合はせて、漸く百五十萬の日本人が居るばかりで、彼等は朝鮮でも臺灣でも、滿洲でも南洋でも百姓にはならなかつた。日本が各地を占領したのはその土地を得るためではなく、市場と原料を得るためだつた。日本はその農民を工業化の犠牲に供し、大地の力に依らず機械に依つて支配しようとして居る。日本の闘争は産業闘争である。それ故にロシアにも、支那にも、如何なる相手によつても侵され易い。又それ故にこそヨーロッパ諸國にとつても、ドイツにとつても危険なのである。ロシアと日本、或は日本とイギリスとが耕地獲得の争ひをする様になれば、その闘争は恐らく一局部に限られるであらう。併し若し思想と市場を賭して争ふとなれば、それは世界の半ばを引きつり込むに違ひない。日本は後へひく事は出来ない。人々はこの事をよく知つて居るかも知れない。併し日本の産業戦に依つて、我々にとつて眞の問題は何處にあるかと云ふ事も明らかになつた。世界的工業國としての日本は、我々にとつて此の戦ひを運命的に困難なものにしてしまつたのである。

今日の日本にとつては最早土地は問題ではない。既に日本にとつては、支那及び滿洲とマレーの間に横たはる空地は問題ではないのだ。日本の關心は全世界である。どうしても全世界を問題にしなければならぬ。何故ならば日本人は商業的國民であつて、決して農業的國民ではないからだ。日本は大戦前ドイツが進み、現にイギリスが追つて居る同じ道を進んで行く。唯日本の歩み方は此の二國より一層自覺的で徹底的である。

イギリスは今日日本との勝負に於て散々負けて居る。併し將來はどうであらう。

イギリスの弱點はフランスの長所であり、それに依つてフランスの昔からの、否、現在又復活して居る同盟國ロシアが助かるばかりではない。又、英米の地位喪失は總ての白色人種の損害であり、アーリヤ人種の損害であるばかりではなく、日本は敵味方を區別する事が出来ず、總ての工業國を絶滅したがつて居るのであらう。ロシア、支那及び其の他インドネシア地方の全民族に對するドンキホーテ的闘争に敗れないためには、どうしても全世界工業國絶滅を計らざるを得ないのである。

今迄述べた事は實に悲劇的な偉大な巨人の格闘であり、計畫と放任の間の最初の決戦であり、既に久しい以前から世界の面貌を變へて居る巨人の戦である。併し如上の事は未だ我々に直接の關係がなかつた。日本の南進も北進も我が國の國境から遙かに離れて居る様に思はれた。併し世界の日本、日本の工業的發展はどうであらう？

(370)

第四部 世界の日本—産業的發展と精神的發展

第十八章 超機械化

日本の貿易政策に於けるドイツの地位

明治時代のスローガン「産業立國」といふ命題こそ、日本の大規模な工業化が不平等條約を破棄し、自由を得る唯一の手段であると云ふ當時唯一の可能な道を示したものである事は疑ひない。今日日本の機械化は極度に達して、そのために日本の富は全く不平等に分割されて居る。日本は機械化のために根こぎにされてしまつて居る事も疑ひの餘地の無いところである。

最近に於ける公式發表の數字即ち千九百二十九年の數字によれば、日本の總ての課税商業資本は、千八百九十五年の三億八百萬圓に對して、約百三十七億九千七十六萬圓になつて居る。

ところで日本の此の約百四十億圓の資本の中、農業及び漁業に投資されて居るものは僅かに〇・三パーセントに過ぎず、四十四・七パーセントは製造工業と鑛山業につき込まれ、全資本の四十二・七パーセントは銀行と商業的企業に、九・五パーセントは運輸業に、残りは手工業に用ひられて居るのである。

(371)

だから日本は純粹の商業民族である。住民の半ばが依然として耕作に従事して居ても、彼等の仕事は商工業の収益と全く關係はない。農民は肩身がせまく、辛うじて存在を認められる位であつて、手を代へ品を代へ壓迫されて居る。日本の耕地、農民の収入等は開港以來殆んど變化して居ないが、これに反してその商業は千八百六十八年の二千六百萬圓から千九百三十三年の四十八億二千三百萬圓、千九百三十五年の約五十億圓に増大して居る。

千九百五年以來日本の銀行は非常に巧みに編成された統計上の業務を保存し、それに依ると日本の國富は千九百五年から同十三年に至る間に二十四・九パーセントの増加になつて居るが、人口一人あたりの富は僅かに二・七パーセントの増加しか見られない。又千九百十三年から同二十四年に至る間の國富は五十四・六パーセント増大して居るが、國民一人あたりの割當は三十九・八パーセントの増加に過ぎない。日本の歳入は千八百八十七年の二億三千五百萬圓から、千九百三十三年の百五十四億三千萬圓となり、五十年足らずの間に六十五倍に増加したが、國民一人當りの平均年収は二百四十圓、即ち百七十マールに足らずである。又、今日日本の國民財産は一千二十億圓と評價されて居るが、一人當りの収入はイタリーの六十三パーセント、フランスの三十八パーセント、ドイツの三分の一、イギリスの四分の一に過ぎない。

日本の工業發達は他國の追従を許さず、日本の國富は世界何れの國の國富増加の速度にもまして、倍

加に倍加を重ねたが、國民は依然として他の如何なる工業國の國民より貧窮である。その理由は簡單だ。人口がその工業収益より迅速に増加するからである。日本がその工業によつて得たものは、更に新しい仕事を始めるために直ちに新會社創立に投資されるとか、新機械購入に費されるかしてしまふ。日本の工業は純粹の加工工業であつて、その製品を世界市場に多く出せば出す程、益々多くの原料を買はなければならぬ。日本の貿易尻は赤字である。千八百七十八年は約七百萬圓、千九百三十三年は一億一千百萬圓、千九百三十四年は九千萬圓の入超になつて居る。日本の經濟の車輪は益々速かに廻るが、それは少しも前進しない。日本は工業化に依つて自由な境遇になり、對支戦にも對露戦(千九百五年)にも勝つ事が出来たが、今やその工業は日本を益々新しい戦争に驅り立て、居る。當時日本は新領土に植民し、農民を租税輕減と國家補助(これはいつも工業ばかり支持して居た)に依つて窮迫から救つてやらなければならなかつたのではなからうか。又その當時朝鮮、臺灣、滿洲等を、銀行家や技師によらず、先づ農學者に開拓せしむべきではなかつたらうか。日本人が北部植民を嫌ふのは確かである。併し國家が國民に對して工場へ行く事を強制した様に、新領土を耕作する様に強制すべきではなかつたか？ 又、國內市場を作つて徐々に昂騰して行く價格に對して、自國民自身の購買力を増大せしむべきではなかつたらうか？ ところが日本はそれをしなかつた。臺灣は氣候から云へば日本と同じであるが、日本の占領以來その人口は倍加したに過ぎず、今日四百六十萬に達して居るが日本人の移住して居る者は僅かに二十萬人で

ある。朝鮮の面積はドイツの約半分、所によつてはドイツより遙かに豊饒であるが、人口は僅かに二十五十萬、東京近郊の一平方軒あたり千人以上に對して九十九人で、占有後三十年になる今日に於ても、此の北部植民地に生活する日本人は四十五萬五千人に過ぎず、本國人口の〇・五パーセントに過ぎない。又滿洲の人口は日本の侵入以來倍加して三千二百萬人に達したが、日本人の数は非常に移住が容易になつたにも拘はらず五十九萬人に増加したのに過ぎない。

日本は工業に依つて自由な身になつたが、更に又此の工業の過度の發展によつて再び世界の奴隸となつた。ドイツで世界戦争前に起つた事が現在日本に起りつゝある。即ち、その當時ドイツでは農民は何にもなれなかつたのだ。國家は新しい土地を得るより新しい市場を得んとし、「平和裡に」得らるべき世界帝國を夢想して平和主義的に傾いたが、それは英國の意に反するところとなつた。農民は不満足な工業プロレタリアートとなり、利益ばかりが唯一の神になつた。かうして世界戦争が起つた。起らざるを得なかつたのだ。そしてドイツの商業世界制覇の夢は破れた。何故ならば、ビラミッドは頭上に立つて居ても、國民的基礎が貧弱で、世界の利害關係は餘りに大きかつたからである。

日本は世界戦争で何十億となく利益を重ねたが、此の戦争から何物をも學ばず、大戦前のドイツの轍を踏んで行つた。日本はその工業を膨張させて巨象の姿に作り上げた。そして今や正に世界の原料と共に世界市場をも手に入れなければならなくなり、二十五年前のドイツの様に諸外國の反抗を感じて居る。諸

外國——其處にはやはり工業品を生産すると同時に自國の原料をも持つて居るロシア、アメリカの如きものがあり、國內に大市場を包擁し、恐るべき潛勢力を持つて居るイギリス、フランス、ドイツ等の國もある。今や日本は根こぎにされて廣い敵の世界に投げ込まれた事を感じることが、最早引つこみがかないと思つて居る。實際、恐らく破産もせず又五十年前の状態に押し戻される事なくしては此の工業にプレキヤをかける事は出来ないであらう。その工業故に世界の奴隸になつて居る日本は、若しその意志を世界に押しつければ又自由になる事が出来ると思つて居る。かくて地球に跨がり、大手を擴げて地球を抱えこんで居る武士の古い繪は徐々に眞實性を帯びて来る。日本は氣が狂つて居るのではない、ヨーロッパ諸國が逡巡し、探索し、永久に左顧右眈して居た場合に首尾一貫した態度をとつて居るのだ。日本は奴隸たる事を肯じないから、世界を征服せざるを得ないのである。出来る限り商品をして、止むを得ずんば武力に訴へて……。

總ての事は一夜の間に準備されたものではなかつた。總てはベルリが横濱に來た日、アメリカが日本の門戸を押し開けた日に始まつたのだ。

併し世界はそれを判らうとしない。今日の東京——ロンドンよりも大きく、嘗て震災で壊滅した都、其處には昔の名残りは少しも見られず、總ては新しい漆喰細工だ。そのコンクリート・ビルディングは大洋汽船やグマ風の塔に型どり、夜だけは恐ろしく大きなネオンサインの廣告で美の虚飾をまとい

——此の東京を通つて見るがよい。否、光の波の打ち寄せる銀座を歩いて見るがよい。蓄音器とラヂオの擴聲機の咆吼はまるで耳を聳せんばかりだ。此の銀座だけでも小さな酒場が千八百もある。その入口は大抵神殿の門を型どつて居るが、内部にはバイエルン風のビール樽やアメリカ式の酒場がある。其處では歡樂に酔つた所謂「モボ」が所謂「モガ」と手を組んで、日本の「作曲家」が「新時代の要求」に應じて巧みに調子を合はせて作曲したウィーン風のワルツに合はせて踊つて居るのである。日本は西洋から接吻を學んだ——つひ二十年前まで日本の戀人同志は背中は合せに坐り、手と手を互ひに組合はせたものだ。又接吻は日本語で「キッス」と云ふが、此の様に歐米の言葉からとられたものは原語を少し變へて日本語になつてしまふ。例へばブレッド即ちパンは「パン」になり、バターは「バター」と云はれる様なものである。日本はその技術を總てヨーロッパ及びアメリカから採つたが、貨幣制度と陸軍をプロシヤ式に、出産法をフランス式に、海軍を英國式に従つて編成したのである。だからヨーロッパの世界貿易思想をも採り入れて、少くとも部分的にはヨーロッパがやつた昔の——そして最近の——過失を犯し、實際に世界を「平和裡に」經濟的に征略する事が出来ると思ふのは無理もないのだ。日本はヨーロッパの方法を模倣したばかりでなく、これを完成した。ヨーロッパが目標なくやつたのに反して、日本は計畫的に活動したが、それを戦前のヨーロッパと同じ様な誤つた動機でやつたのである。日本は他く迄日本的である。例へば如何に西洋の技術を採り入れたところで天皇は臣下にとつて飽く迄神であり、御真

影でさへ神聖なものとされて居る。日本では何處の學校でも此の御真影を掲げておがなくてはならぬ。着色石版畫を買へない學校は大新聞の凸版印刷附録を切抜いて壁に貼つて置く。千九百三十三年此の種の貧乏學校に火災が起り、新聞切抜の御真影を火中から取出さうとした先生が焼死して屍體は焼跡から黒焦になつて發見された。當時東京の英字新聞は、「一枚の紙のために先生が焼死した……」と書いて、その主筆は拘引され、此の新聞は長い陳謝の言葉を印刷しなければならなかつた。何故ならば、裕仁は此の世に於ける神の象徴であるばかりでなく、彼自身神と見做されて居るからである。日本人が御真影を火中からとり出す事はわかり切つた義務なのである。

千九百三十四年十一月中旬、天皇は二つの學校を視察のために中部日本へ來られた。御乗車が違ふ道を通つたものだから、豫定より數分早く式場に到着した。奉迎委員は用意が整はず、天皇は止むを得ずお待ちになつた。此の事件によつて、警視總監、知事、内務省内の當該關係官は辭職しなければならなかつた、そして直接の責任者——御召車に先行したオートバイに乗つて居た二人の警官は自殺した。千九百三十四年十一月十八日日本田長官は禮服を着用し、日本刀の刃を掴んで頸を斬つて果てた。新聞は本田長官が昔からのしきたりをちゃんと守らなかつた事をも述べて居た。即ち、手で握らなければならぬ刀の部分に布を巻きつけるのを忘れたと云ふのである。だから頸を斬つたばかりでなく、手も斬つてしまつたのだ。かう云ふ不始末は面目問題で、自殺する際の日本の正規のやり方では行はれない事である。

千九百三十三年、東京の最も大きな紡績工場の一つである某工場の労働者がストライキをやり、彼等の正常な要求に注意を向けさせる方法を發見しようと考えた結果、彼等はその同志の一人を選び、皆寄合つて、此の同士に若し彼が工場の高い煙突に攀ち昇つて、その頂上でストライキの終る迄待つて居れば五圓やると約束した。此の氣の毒な男は晝夜十四日間煙突の上で暮し、食料は綱で上へ引き上げて俄を渡いだ。時は二月の酷寒で、此の戦術は素晴しく効果があり、苦行者を見ようとする物好きな連中が群をなして集つた。併し工場當局はこれ等の事に向動かされなかつたが、全く思ひがけない特別な事情のために遂に譲歩せざるを得なくなつた。と云ふのは、天皇が北日本の或る宗教的儀式に參列する事があつて、旅行にお立ちになる停車場が此の工場のすぐ近くにあつたのである。天皇を高所から見下す事は、日本の神聖な傳統が何人にも禁ずるところであるから、此處に當局の調停となつた。此の賃金争議はまとめられ、煙突男はおろされた。それは彼がこの間にひどい肺炎に罹つて居たからではなく、全く天皇のお蔭だつたのである。

日本の天皇は神である。此の點はヨーロッパの機械でも變へる事が出来なかつた。日本には自動車やラヂオと竝んで、未だ依然として何千年と云ふ歴史を持つた敬神の念を入れる餘地があるのだ。ところで又この觀念はヨーロッパ諸國にとつて危険なものである。と云ふのは、大昔からの口碑によれば、天照大神は天地と共に永遠に統べ給ふと云はれて居るからで、日本の國は古い傳説によれば全世界なのである。

この様にして工業化の必然性は日本の使命に對する昔からの信仰と協力し、日本が神を失つた歐米から採つたものはその祖先崇拜と同じ目標に向つて行く。一見して我々は破滅的な分裂と思はれるものは極度に増大された力である。それは今日初めて世界に向けられた力ではないが、今や抑壓し難く感じられるところの力である。

日本は千九百五年ロシアに勝つてから一等國となり、世界戦争の巨利で工場を近代化して、ヨーロッパ諸國が顧みなかつた市場を獲得してからは世界的工業國となつた。併し我々は千九百三十一年に至つて初めてこれに氣がついたのである。それは此の年に滿洲侵略が初まつたからといふわけではなく、當時此の新領土獲得のために資金の必要に逼られ、それ迄の輸出を二倍乃至三倍にしなければ此の必要を満足事が出来なかつたからであつて、又日本は今や滿洲、蒙古等の公式非公式の植民地のための必需品を、アジア市場からばかりでなく、南アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ等の市場からも調達しなければならなくなつたからである。世界は俄然三十年間も見えなかつたものを發見した。何故ならば千九百三十一年は世界的の不況で、貨幣本位は安定を缺き、あらゆる市場は混亂して居たからだ。千九百二十七年から同二十九年に至る間、合衆國がその生産品の洪水を世界に溢れさせた時、これが殆んど感じられなかつたのは世界貿易が活況を呈して居たからである。アメリカがいゝ儲けをしてもヨーロッパは損をした事

ヨーロッパ三十一パーセントで、千九百三十二年から同三十三年迄の日本の輸出総額の増加二十一パーセントであり、千九百三十三年から三十四年迄は四十九パーセント、千九百三十五年の上半期には更に十七パーセント……等。

千九百三十三年の夏、英國議會の織物討議に際して、フレデリック、ダヴリュー、アッスバリー代議士は次の様に言つた。

「黃禍は今までになく大きくなり、嘗て見ざる程危険になつた。恰も軍隊の形を呈して居る如き有様である……」

併しそれはイギリス人の警報の叫びに止まらず、スイスに於ても日本品との競争のために時計工場が閉鎖せざるを得なくなり、又イタリーには人絹恐慌が起つた。何故ならば日本の人絹輸出は千九百三十一年に百七十萬圓だつたのが、千九百三十三年には既に八百五十萬圓になつたからである。

千九百三十一年、日本が圓價切下をやり始め、やがて圓はその金價の四十パーセントの値打しかなくなると、日本はイギリス人ばかりを追跡した。又、千九百三十一年日本がその力強い産業攻勢に乗り出した時、日本は大いに活動したが、その考へ方は根本的には帝政ロシアに勝つた時代の考へ方と變らなかつた。日本は益々多量の商品を支那と北米に輸出し、その工場は西洋諸國のものより益々よく組織立てられて行つたが、根本に於て本質的なものは少しも變つて居なかつた。千九百三十四年にさへ日本

の貿易は初めて世界貿易の三・五パーセントになつたに過ぎないが、その價格は平均して世界貿易價格より五分の三安く、現在何はさておき日本の發展は世界的になつて居る。今や總ての工業國は日本の競争を感じ、日本はあらゆる市場に姿を現はして居る。今や日本は總てのものを製造する。最早その輸出活動の初期の様に陶器、扇子、磁器、綿布、骨董ばかりではない。例へば日本の化學工業は千九百三十年には主にソーダ、苛性ソーダの如き重化學製品を生産して居たが、此の單純な製品の生産力を信すべからざる速度で増大したばかりでなく、複雑な藥學用機械、良質の染料等をも製造する迄になつた。日本は千九百十九年にはドイツからアムモニヤ硫酸鹽を十萬七千噸も買つて居たが、千九百三十四年には少しも輸入しなくなり、今度はこれを逆に二十萬噸も輸出する様になつたばかりでなく、既に大阪の化學工場「S.N.K」は嘗ては全然ドイツからの輸入に仰いで居た此のドイツの「十八番」を製造する様になつたのである。日本の藥品輸入は既に千九百三十二年には千九百二十六年の金額の十分の一に減じ、千九百十四年には未だ全然なかつた日本の染料工業は、千九百三十四年になると國內全需要の八十七パーセントを供給した。

アメリカ人やヨーロッパ各國は、此の進歩は日本が彼等から特許を盗んだから出來たのだと主張したが、これは論證され得ない彈劾であつて、兎に角競争の事實に就いては何等變化を與へないものである。何故ならば、千九百三十三年世界最大の靴工場（チエッコスロヴァキアの町ツリンにある靴工場）ツリン市のバタに

於て、チェッコ人の職工長を買収して設計圖と製造法を買ひ取らうとしたために、二人の日本人が逮捕されたと云ふ事實さへ、日本の製靴工業の發展を妨げる事が出来なかつたのは言ふ迄もない事だからである。日本では千九百二十六年に千五百萬足のゴム底靴が製造され、既に千九百三十二年には此の生産は四千四百五十萬足に達した。そしてそれは一ダース四圓五十錢、即ち約三マーク十プフェンニヒで買られた。千九百三十三年、此の生産力は更に倍になり、現在では既に五千五百六十萬足が輸出されたのである。此の様な計算なら幾頁にもわたつてつゞける事が出来るであらう。例へば千八百七十三年、東京の場末の町深川に小さなセメント工場が建てられたが、此の工場は「セメント王」淺野が買ひとる迄は殆んどなすところがなかつた。千九百十年から同二十三年迄に生産は五百パーセント増加し、千九百二十三年から同三十年には更に倍になつた。日本のセメント輸出は千九百二十三年に六十萬九千樽、同三十一年に三百五萬九千樽で、千九百三十三年末には五百萬樽に達した。

(384)

日本の白熱電球製造は家内労働を廣汎に用ひる事に依り、即ち一部分小兒労働に依つて、最近の四年間に百八十三パーセントの輸出増加を來した。そして此の電球を買つたのは極東地方ばかりでなく、オーストラリア、南アフリカ、スペイン、オランダ、バルカン諸國、北米等も大顧客だつた。これが千個で十四マーク六十プフェンニヒであるから、世界各國は千九百二十九年には九千七百萬圓買ひ、既に千九百三十二年には二億七千四百萬圓も輸入して居る。千九百三十三年にはドイツのタングステン電球特許も

満期になつたので、最早競争などと云ふ事は考へられなかつた。懐中電燈の電球はチュリゲン製が五プフェンニヒ、オスラム會社製が七プフェンニヒ半するが、日本人はハンブルグで二プフェンニヒに賣つた。そこで日本の對英タングステン電球輸出はドイツのそれを犠牲にして、千九百三十四年には千七百萬個から五千七百萬個に増加し、既に千九百三十年に主だつたタングステン電球の特許が満期になつて居るアメリカに於て、日本の賣上げは千九百三十二年に九千萬個(その前年は四千萬個)に達した。

日本製鑄鐵管がオランダで附設され、千九百三十四年に於けるアムステルダム自動車博覽會では日本製ブレイキ履ひ、タイヤ、挿入瓣、ヘッドライト用硝子等が見られたが、南アフリカには最初の「ダットサン」(日本製四人乗自動車)が到着し、八百マーク足らずの四百八十グルデンで買られた。

千九百三十二年に於けるドイツのビール輸出は、前年に比べて三十九パーセント減少したが、これに反して日本のビール輸出は八十五パーセント増加し、ドイツの磁器輸出が四千四百萬マークから二千二百萬マークに減少して居るのに、日本の磁器輸出は二千七百萬マークから三千百萬マークに増加して居る。ところで此の數年前迄は歐米各國が其の唯一の本案本元として通つて居たところのこれ等總ての工業の日本に於ける發達は、既に憂ふべきものがあつたがやがて更に事態は惡化した。これ等の工業は、何れも技術上の準備、機械及び屢々複雑な器具を必要とする。ヨーロッパ諸國は大戦終結頃迄その唯一の供給者であつた。日本は千九百八年迄その工業に必要な機械は何一つとして製造せず、千九百十四年迄に製

(385)

造した数量も全く微々たるものであつた。そして外國はその特權に對して支拂を受けた事は勿論で、例へば日本人が英米から輸入された織機を買ふ場合、運賃を除いてヨーロッパ人より四十パーセント高く支拂ひ、アメリカで五十五ドル乃至六十ドルの紡錘装置は日本では九十三ドル出さなければ買へなかつたのである。東京や大阪に事務所を持つて居たヨーロッパの大機械工場は巨利を博し、その專賣權の利用に依つて豪壯な邸宅やヨット等を購入した。此の事は勿論日本人に、あらゆる手段を講じて此の專賣權を撃破しようとした。そして彼等はその目的を達し、大部分の外人代理人は今日では立ちゆかなくなつて居る。而も日本の機械工業は、自國內の需要に應じ得る状態にあるばかりでなく、全く競争を許さない程の値段で支那、印度、アフリカ、及びバルカン諸國等へも供給して居るのである。ヨーロッパ諸國がその機械類を世界中に賣り、かうしてアフリカ、印度、支那、日本等に競争者を作つてからは、今では最早此の「自殺的方法」で少しも商賣にならなくなつた。日本は此の點でも外國の眞似をした。一時日本製重要特殊機械輸出禁止が問題になつた後、政府は機械輸出商をも補助し、現在では主として、日本の織物工業を世界一にした機械、即ち豊田式完全自動織機を賣つて居る。此の機械は實際優秀なもので、英國の某會社が百萬圓でその特許權を買ひ取つた程である。ところで此の會社は百萬圓の損失をした。と云ふのは、イギリス労働者協會が「豊田式」を設置する事を妨害したからで、——これはもつともな事であるが——最近に於ける失業の深刻化を恐れたからである。併し印度は豊田

式を用ひ、ポーランド人もこれを買ひ、フランスでも輸入したがつて居る。だから日本が千九百二十九年には未だ一億三千萬圓の機械を輸入し、千九百三十三年にも機械及び器具の總輸入額は七千二百萬圓に及んだのにも拘はらず、その反面に於ては既に二千六百萬圓も輸出して居た事は極めて當然である。又千九百三十四年には輸入が一千百萬圓に減少し、千九百三十五年には日本が自國の工業品を益々氾濫させて諸外國からは殆んど機械類を買はなかつたと云ふ事も當然である。

ところで機械では特にドイツが新しい競争を感じた。ドイツは日本で失つたところのものを一部分アジアの他地方で埋め合はせる事が出来、又例へばドイツの對支輸出は増加する一方で支那の輸入の中、ドイツは千九百三十三年の七九五パーセントから千九百三十四年には八、九九パーセントに、千九百三十五年一、二、三月は一〇〇五パーセントに増加し、現在既にイギリスの對支輸出をも凌ぎ、その専門化と高級な品質によつて、白人工業國の中では比較的最も日本の工業發展の餘波を蒙らない方であるが、我が國に於ても「黃禍」は益々目立つて来る。それは古くからの輸出國に對する販賣難と云ふ形であらば来て来たばかりでなく、ドイツ自國內に於ても此の被害が顯著になつて来たのである。

ドイツの日本向け輸出は千九百二十九年の二億四千五百萬マークから千九百三十三年の七千九百萬マークに減少し、これに反して日本——及び事實上全く日本に入れられる滿洲國——からの輸入は此の同じ期間に四千三百萬マークから一億三千三百萬マークに増加して居る。千九百三十四年、ドイツが建設

途上にあつた満洲と日本に對して賣る事の出來た商品は、その非常な努力にも拘はらず八千六百萬マ
クに過ぎなかつたが、これに反して日本及び滿洲から買つた商品は九千五百萬マクに達した。

大學教授エルンスト・シュルツェ博士は次の様に書いて居る。

「ドイツ工業は白熱電球、自轉車、織物、管、鉛筆、ゴム靴其の他の各種商品に於ける日本の競争に
悲鳴をあげて居る。ドイツの日本品輸入は千九百三十一年から同三十三年に至る間に、例へばマルガ
リンは千二百六十六ドッペルツェントネルから一萬九千三百九十ドッペルツェントネルに、油槽は四百九
十五ドッペルツェントネルから六千七百四十九ドッペルツェントネルに、ゴム製品は八十六ドッペル
ツェントネルから千七百七十七ドッペルツェントネルに、マンガン鐵は九百七十七ドッペルツェントネルか
ら九千六百七十七ドッペルツェントネルに増加し、千九百三十三年に輸入された人絹は二十二ドッペルツェ
ントネルであつたが二年後には七百八十三ドッペルツェントネルとなり、一萬八百七十二ドッペルツェ
ントネルの綿製品は二萬四百八十ドッペルツェントネルになつて居る。日本は今日木綿の上シャツを一
ダース十五マクで供給して居るが、ドイツのどんな精細な計算人でも三十六マク以下に下げる事
は出來ない。又亞麻靴では一流のカナダは、千九百二十八年有名な亞麻靴をドイツ輸出商に對してアメ
リカの十ドル（ハムブルグ迄の費用製造者負擔で供給したものだが、今日日本のツック靴は既に一ダース八
マクでハンブルグ自由港に來て居る。而も此の値段は既にドイツ輸出商の儲けを算入しての話であ

る。日本はドイツが絶對優越な地位をもつて居た所にさへ色々な方面に侵入して來た。錠前、鉄、マ
ツチ、鉛筆等は、ドイツの製造家が船の運賃もかけずに供給する事の出來る値段より、ハムブルグ迄
の運賃を日本の輸出商が持つても、一般にドイツ品より二十パーセント乃至四十パーセント安い。こ
んな例はいくらでもある。ヘアーピンであらうが、ポマードであらうが、セメントであらうが、七寶製
品であらうが、日本は大躍進をして居る。日本の輸出ビルは一箱に付モンバサ（アフリカ東海岸の港）迄
の運賃を向ふで負擔して十三グルデン半である。ところがブレイメンの輸出は手いづばい二十七グル
デンであるが……」

かうした事は一々極度に不安に聞えるが、恐慌氣配の下地にはならない事は確かだ。我々は、三十年
と云ふ間、日本の競争など問題にならないと高をくくつて居た。そして日本を先づ櫻の國、藝者の國、
多情多感の國として知つて居たが、今や稍々もすればその正反對に陥り、日本は今や俄然總てのものを
破滅せしめないでは止まない極度にアメリカカナイズされた商賣仇となつて居るのである。うまく行か
なかつた事には何でもかんでもソウエイエトの手が廻つて居る様に考へた時代が嘗てあつたが、今では何か
商賣がうまく行かなかつたりすると、往々にしてそれを日本人のせいにしたがる傾向が現はれて來た。
何十年となく此の敵を見くびつて居て、今になつて盛に買ひ被つて居るのだ。併し唯一の事は動かさ
なす。

それは、自人工業國にとつて日本は敵であると云ふ事だ。そして少し言葉が不自然に響くかも知れないが、日本はその世界的な工業發展に依つて又益々白人の精神的な敵ともなりつゝある。と云ふのは附近の國々の商品に對しては門戸を閉して居る國が、やがて最早これ等の諸國の新聞や書籍も讀まなくなると云ふ事、否これとは反對に貿易關係は常に文化關係の原因となると云ふ事があるばかりでなく、日本の廉價な商品（それは殊に蘭領印度の場合に證明されて居る）は、白人達が日本商品を閉め出し、自分達の身を守るために輸入割當制を採用して價格を暴騰させた時、彼等に搾取者の極印を押ししたのである。インドネシア人は日本の靴は買ふ事が出来たが、オランダ製の靴を買へる程豊かではない。だから日本品の輸入禁止によつて再び跳足で歩かなければならない。彼等は社會學者ではないからその「壓制者」を非難し、日本を救済者だと思ふのである。

日本の工業攻勢はヨーロッパ諸國から顧客を奪ふのみならず、次第に最後の讚美者をも同盟者をも奪つて行く。例へば玩具工業などはその象徴である。

ドイツは千九百十三年には未だ事實上玩具類の世界的獨專權を持つて居た。そして年々約一億二千萬マークの人形、機械玩具等を買ひ、世界戦争後に於ても「ニュルンベルグ品」は年平均六千萬マークも輸出されて居た。頭の上に一種の大きな鶏小屋をのせて釣合ひをとつて見るアフガニスタン人や北部山地民族、みんな色白で長いブロードの髪を持ち、多くは細い繪にかいた革ヅボンをはき、ジュワールペン

かチロルの服裝をして居る様に見える布製人形やセルロイド人形が澤山入つて居る格子付の檻——かう云つたものが、インドの街々に於てさへよく見られたものである。又暗黒のアフリカにも楊子江岸にもこれと同じ様なドイツのシュバルツワルド人形が見られた。それはヨーロッパの玩具工場が、海外市場のためにその見本を造る勞をとらなかつたわけでは決してない。ドイツの某大商會は數年前アフリカ向けにネグロ人形、アジア向けに布製支那人形を造つて大損害を蒙つた事がある。と云ふのは、黄色人種や黒人の子供達はつひ最近迄白人の人形を好んだからで、白ければ白い程、又髪がブロードであればある程よかつたのだ。ネグロ人形のあつたのはヨーロッパだけだつた。有色人種の子供達はせめて遊び事だけに敬慕すべき白人の様になりたかつたし、黒人の母達は子供達に白人の人形を與へ、自分達も支配者として敬慕すべき階級へ榮達する事を夢みただけである。ところで決して白人人形を買はなかつた有色人種が唯一つあつたが、それは日本である。既に大戦の久しい以前から、輝くばかりの黒髪と巴且杏の様な眼を持ち、昔の日本の模型に従つて藝術的に脂粉を施した顔の人形がニュルンベルグから東京へ賣られた事があるが、日本が外國から人形を買つたのはその位のものであらう。日本は昔から強大な國である事を自覺し、千九百五年以來は世界支配の機熟せりと思つて居る。だから日本の子供達が日本人以外の者になりたがる筈はないではないか。日出づる國には白人の人形などなかつたのだ。

そしてこれはやがて全アジアに姿を消す事であらう。何故ならば、日本は白人人形を買はないばかり

でなく、千九百三十三年以來玩具の一大輸出國になつたからである。此の事は經濟的に決して馬鹿ならぬ事である。と云ふわけは、北アメリカだけに於ても年々二億ドル以上の玩具が賣られるし、千九百三十三年にはドイツだけでも三千八百萬マークの玩具を輸出した程だからである。日本は千九百三十三年に二百五十萬圓の人形其の他の玩具を輸出して居る。そしてそれが正二十年後には十倍以上になつた。即ち二千六百萬圓にのぼる玩具が主として北米、印度、イギリス、オーストラリア等へ輸出されたのである。パリの百貨店にもオランダの百貨店にも「メイド・イン・ジャパン」の玩具が見出される。アフリカ向け輸出のために大戦後白人人形を製造し初めた日本は、その黒人人形、黄色人人形にとつても益々大きな市場を發見して居る。此の事は全く笑ふべき事でもなく、又輕視すべき事でもない。

寧ろ各大陸の趣味の變遷にとつても、否就申各大陸の白人に對する尊敬の念と云ふ事にとつても頗る憂ふべき現象である。「白人の支配する所プロントの人形あり」とは總ての専門家が信じて居た鐵則であつた。ところがアジアに於ける日本の興隆と、國際聯盟の明白な無力性曝露と共に此の事情は一變し、日本は既にアジア諸國の模範となつた。そして今や黄色い顔をした子供達は、黄色い人形を持つて遊んで居るのだ……。

宗教と商賣、日本と回教

日本の工業家達は言つて居る。

「我が國及び我が國の生産品にとつて最も良い宣傳は我々の競争者の叫ぶ警報である」と。そして如何なる關稅障壁も、永い間にはおし寄せる日本商品の波を喰ひ止める事は出来ないであらうと主張して居る。彼等は更に續けて言ふ、若し問題が貧弱な市場に關する限り、又高價なヨーロッパ製品を買ふ事が出来ず、日本の綿織物が輸入されてから初めて着物を着、一足三十プフェンニヒの日本の靴類が輸入される迄は跳足で走つて居た様な民族に關する場合、關稅は一種の罪惡であると。彼等の言ふ事は正し

日本商品の廉價な事は確かに危険な武器である。併し日本の工業家が、若しその成果を低廉な價格にのみ負はせて居るとすれば、彼等は餘りに大人し過ぎる。アメリカは唯數字のにばかり考へて、買手の心理を少しも考慮せず、南米に於ける販賣數字の増大と、ヨーロッパの負債奴隷が持ち込む利子の増加に有頂點になり、今日ラテンアメリカ諸國が「ヤンキー」臭いもの、「グリーンゴール」(メキシコ人がアメリカ人を輕蔑的に云ふ。ヨーロッパ人がヤンキーと云ふ如し)臭いものには何に對しても示す憎惡には氣がつかず、その高利のためにヨーロッパ諸國を破滅に陥し入れ、今や利子も元金もとれない様な始末で高價な犠牲を拂つたわけだが、日本はその心理と統制能力を巧みに用ひ、最初から市場ばかりでなく買手の心を研究したのである。日本は中部日本の一小都市を(譯者註)譯者改名させ、これをソリンゲンと名付け、今では

奈く堂々と「ソリゲン鋼製品」を賣り、かうしてドイツ都市の世界的名譽を利用する事が出来た。日本は白人諸國が相互の嫉視から貿易の自由と關稅の平等を行はせたモロッコやコンゴ等の地方で貿易攻勢をやり出し、自國の工業品を買つてくれる國からばかり原料を買ふと云ふやり方で巧みに貿易を擴大したばかりでなく、先づ第一に最初からその唯一の力強い同盟者——「被壓迫民族」の國民主義——をよく知つて居た。

白人はアジアに於て何十年と云ふ久しい間、その權力手段が築いたものよりも遙に恐れられて居た。日本は自然的反應を引き出してこれを促進させる事をよく心得て居た。現在では概して又何處にも白人を恐れる者は居ない。安南語で「私は貴君がこは」と云ふ配語法が、同時に「私は貴君を尊敬する」と云ふ事を意味するばかりではないのである。

白人の總督、牧師、醫者、統率者等は何十年となくその統治する民族に身を捧げて來た。檻にとぢこめられた可愛想な動物に滿腔の同情を注いで悲愁にとざされながら動物園の中に佇み、遂に溢れるばかりの好意を以て、持つて來た總ての菓子と一握の砂糖を素晴らしいベンガル虎に投げてやつたあの小さいお婆さん——白人達の行爲はこの婆さんのした事にも似て居る。ところが虎はものゝ正味十分とお婆さんに注意を拂つて居なかつた。それどころか砂糖の塊が後から後から虎にぶつかると、虎は吼え啼り、力いつばい尾で床を叩いた。虎は間違ひなく怒つたのだ。お婆さんにはわからなかつた。彼女は虎の恩知

(394)

らずを思つて殆んど泣きさうになり、快々として其處を去つたのである。

白人が植民地でやつた事、又現在やりつゝある事は非常に數多くの物にのぼつて居はしないだらうか？ 又我々の行爲は虎に砂糖や蜂鳥を與へるより更に悪くはなかつたらうか？

日本は白人の過失から學びとり、イギリスやフランスが盲目だつた處や、オランダやアメリカが目先の利かなかつた處で眼をさかす事が出來た。そしてそれによつて先づ市場と人心とを獲得した。

白人宣教師は訓へる。神の前には總ての人間は平等である。黒人も白人も黄色人種も。

ところで神の前に平等な人間が、どうして人間の前では不平等なのだらう？ 若し神の前の平等などと云ふ謬言が言はれなかつたならば、白人の殿様は黒坊などは及びもつかない雲の上の神様だと云はんばかりの態度をとる様になつたに違ひない。白人は此の黒坊のために活動寫眞を見せる設備をし、ツール人もタヒチ族も、パリ人も支那の四川省から來た人間も素晴らしい「社會劇」や「野蠻な西洋映畫」の中で、ヨーロッパ人の姦通、白人相互の殺害等を見る事が出來る様になつた。黒人は世界戦争で學ばれなかつたものを今や熱帯の映畫で學んで居る。又黒人は戰場で見逃したものを英人が到る所に造つた競技場で學んで居る。例へば、サモアではイギリスの一巡洋艦の乗組員はフットボール競技で土人に二十八對六で敗れ、ロデシヤ(ロードス島)譯者)では最近白人陸軍々隊は十四對二で土人に負けたのである。

神の前の平等！ 競技の敗戦！ それから金！ 不況は多くの植民地白人をして全く土人と變らない

(395)

状態に陥らしめたばかりでなく、多くの土人より更に窮迫した白人も少からず出来た。支那人やアラビア人がその金を貸し續けて居るのに、白人の銀行はどん／＼破産して行つた。今日香港、支那、印度等に於けるマレー諸國のヨーロッパ人大会社には支那人社員が多勢居る。シンガポール、パタビヤ、メダシ、バンコック等のアジアの銀行の多くは、若し支那人がその貸金を引つこめる様な事でもあれば窓口を閉めなければならなくなるであらうが、支那人は此の事をよく知つて居て、一介の苦力でさへ此の點をいくらか誇りにして居る。ボンベイ、東京、上海等から来たシンガポール、ヴィクトリア街の太つた饒舌の商人黒いタミール人、鬚もぢやのアラビア人等は益々尊大になり厚顔になつて行く。彼等は映畫によつてヨーロッパ人の道徳は餘りほめたものではない事を知り、銀行や事務所ではヨーロッパ人の經濟的破綻を餘りにも屢々目撃して居る。ところが日本映畫には英雄が居る。日本の劇場には劍戟、豪勇が見られ豪語が聽かれる。これに反して極東地方を旅して廻る白人の劇團は裸體の女——一種の滑稽なギョロ踊りの腕に抱かれた——を見せるのである。

熱帯に居る大抵の白人は氣候に堪へるためによく飲み過ぎるが、彼等は嘗て酔つぱらつた日本水夫を見た事があるだらうか？ 又彼等はいかに美しい女の居る場所か日本の兵隊を見た事があるだらうか？ ヨーロッパ人の代理人はボーイを六人、立派な車を一臺持つて居たりするが、日本人競争者は買手と同じ様に、餘り目立たぬ質素な小男である。ところが一旦大事な商賈と云ふ事になると、此の小男の日

本人は悠々とポケットから千ポンド紙幣を數枚引き出す位は朝飯前であるが、白人は可愛想に最早貸貸料も拂へる事は稀で、酒場の主人にも借金をして居る有様である。

此の様な事は總て非難ではない。寧ろ確證に過ぎない。併しそれは日本の發展を理解せんがために是非必要な確證である。印度人やタヒチ族は日本人を特に好んで居るわけではないが、尊敬はして居る。一方白人の信望は失はれた。若し總てのものが白人の信望を一日と殺すために一緒になつてかゝるとすれば、その點で責を負ふのは誰でもない、大部分はヨーロッパ人自身である。併し今は責任があるとかないと言つて居る場合ではない、生きるか死ぬかの問題である。白人は癡癡を起しながらも依然としてその植民地をしつかりと掴み、植民地のために堅固な要塞を築いて居る。併し貨幣はその貨幣に彫られて居る肖像の人種(ヨーロッパ人と南洋人)のものだらうか。それとも又その貨幣を財布の中に持つて居る人種のものだらうか？ 蘭領印度は地圖の上でオランダの色に塗られて居るからオランダ領なのであらうか。又郵便切手や貨幣がオランダのものだからオランダ領だと云ふのだらうか？ マレー諸國に於ける錫の七十パーセント、ゴムの八十一パーセント、小商業の全部及び大商業の八十五パーセントが支那人の手にあり、白人が支那人より多く負擔して居るのは統治費と「壓制」の危険ばかりなのに、それでもなほマレー諸國はイギリス植民地と言へるであらうか？ なる程スダ諸島の支那人やタヒチ、海峽植民地、ボルネオ等の支那人は白人政府に納税して居る。併しこれ等の租税は必要な要塞の費用より益

、少くなつて行く。而も土着の商人は以前にはヨーロッパ商品を買つて居たのに、今では先づ日本品を買ふ。そして彼等が貯へた財産は決してヨーロッパへは行かない。支那人は白人植民地ですつかり儲ければ本國へ歸つてしまふ。彼等は白人植民地で稼いだ金で自國の工業を復活させ、その工業が又白人商品の道を塞ぐと云ふ事になる。植民地の富がイギリスとオランダを工業化した様に、支那人の植民地財産は、直接に或は銀行の手を経て支那を工業化し初める。それは百五十年前、ヨーロッパに起つた現象と全く同じである。

「アジアをアジア人に」、これは唯一の論理的なスローガンであると思はれる。又東洋に於けるヨーロッパの頭痛の種子から逃れる最上の道の様に思はれる。併し乍ら假りに近い將來に於て、あらゆる白人大國に譬てドイツに起つた様な革命が勃發するとしてさへ、否假令イギリス、フランス、オランダ等が迷ひを醒し、自由主義的見解を捨て、國家的建設、自覺、力の集中へ赴く様な事があるとしても、アジア問題の實際的解決はそのために本質的に容易になると云ふ事はないであらう。イギリスの海外投資から上がる利得は、主として日本の工業攻勢のために千九百二十九年の英貨二億三千萬ポンドから千九百三十二年の一億五千九百萬ポンドに減少したが、此の利得さへも極めて重要なものだ。殊にイギリスだけでも依然として英貨約三十五億ポンドの海外投資をして居り、日本がその自然的勢力範囲と見做して居る地方には、此の三十五億ポンドの半分以上がつきこまれて居るのである。即ち、例へばその投資は

オーストラリアには四億九千四百萬ポンド、マレー諸國には一億八百萬ポンド、支那には一億三百萬ポンド、益々盛んに日本商品を買ふ南米には六億四千三百萬ポンド、シヤム・ベルシヤ・アフガニスタン及び他のアジア諸國には二億一千百萬ポンドと云ふ様な數字である。

「アジアをアジア人に」、此の言葉はイギリスにとつて威信喪失どころの話ではなからう。恐らくは破産を意味するであらうと思ふ。アジアに於ける投資が英國の投資の約五分の三に達するオランダにとつても同様であり、アジアの植民地へ三十億フラン以上、上海だけでも九億七千八百萬フランも投資したフランスにとつても同様である。

植民地を持つ列國がその因循姑息な政策を永く續ける程その失ふ所は多きくなる。併しそれにも拘はらず日本はもし白人にその位置を放棄させる事に成功しようと思へば、幾分なりともこれに手を貸してやらなければならないのである。「被壓制者」の國家主義は日本の最上の同盟者である。かくて今日日本が行くところとして、宗教の利用によつて、此の同盟者を煽動しない所はない。

千九百三十四年の末、杉村ローマ駐劄日本大使は「日日新聞」に對して次の様に明言した。

「余は正に法王と談合しようとして居る。南米との貿易を完全なものにする最上の手段は法王との友好關係であるから、此の談合はそれだけでも少からず重要なものになる可能性があるのである。……」

嘗て白人工業國は此の様に公然とはその意圖を發表した事はないとしても、日本は此の點に於てもイギリス、フランス、アメリカ等の先例に倣つたのである。

ヨーロッパでは廣告戰術、例へば「白人週刊」等に依つて綿製品の消費増加が計られたが、「未開人」の織物消費は、「裸體は罪惡なり」と云ふ宣教師の組織的な説教によつて増加された。フランスの「紡績工業聯合」の豫算中、「傳道會社補助金」として四千四百萬フランが計上され、千九百三十三年アメリカの紡績工業の四分の三を包括して居る組合「綿織物財團」が傳道會社に九百二十萬ドルを與へた様な事は全く偶然ではないのである。歐米の織物工業が「文化國」の市場を充分満足させてからは新しい販路獲得のために商人と並んで教會と兵とが賭けられた。日本は此の點でもその師たる歐米より上手であつた。多くのキリスト教傳道士は彼等の宗教——それ故に新しい宗教——を祖國の政治的經濟的利益のために利用しようとしたが、日本は其の地方地方にある宗教を利用するのである。日本はその大事な顧客の大衆が回々教徒で、その上此の回々教徒はアジアに於ける白人の主權にとつて最も危険なものであり、彼等は其の商才に依つて立派な産業代理人であるばかりでなく、有望な政治上の同盟者である事を認めてしまつた。かくてイブン・サウドがアラビアを統一して回々教の搖籃を一大國家とし、メッカが再び全回々教世界の聖地となり、今日二億三千萬の信徒を有する一宗教の中心地となつてから、ワハビイト(回々教の一派)の頭目であるイブン・サウドが回々教主の位を再び光輝あらしめようと目論んだ時、ジッダ

(400)

にやつて來たのが日本の傳道機關であつた。イブン・サウドが日本人と何を申合はせたか。併し兎に角非常にニュースパリュエーの多い興味ある會合である。メッカの新聞「アル・キブラト」が、回々教運動の中立的な唯一の傳記作者と名付けて居るルベルト・ドンカンが次の様に書いて居る。

「千九百三十四年十月、日本の代理人がジッダに上陸し、同十一月二十日神戸に於て日本最初の回々教寺院の基が開かれた。此の現象が何を語るかわからない者は、次の様に考へるがよい。即ち日本が回々教の世界に勢力を得ようと努めて居る事は最早事實らしく思はれる。イブン・サウドが回々教主にならうと云ふ意圖を持ち、稱號のあるなしに拘はらず回々教の指導者たらんとしてからは、彼は日本にとつて全く重要な人物になつた。何故ならば回々教主は實に回々教徒の世界的宗主だつたからである。スエーデン、オランダ、フランス、ドイツ等の正統派カトリック教徒には、ローマ法王を世界の元首と見做し、自分の國君以上の地位に置く様な事は考へつかないであらうが、支那の回々教徒は未だ非常に厳格な權威と非常に強大な支那皇帝が存在して居た時代にさへ、常に回々教主を皇帝より上位の世界最高機關と目して居たのである。そして此の點に於ては今日でも變りはない。假令教主は居なくても印度の回々教役員會が教主の機能を引き受け、此の役員會が指令するものは信者にとつて英國皇帝の結構な訓令より重大なのである。

回々教宗團はジブラルタル海峡から支那海にまで及んで居る。アジアに關心を有する者は此の宗團の

(401)

事を念頭に置かなければならない。日本は東洋の宗主なりと稱してそれを世界に吹聴し、その歸結するところを行つて居る。即ち、日本はヨーロッパ工業と堂々と戦ふ様になつてから、あらゆる方法を講じて回々教を支持して居るのである。日本に於ける回々教の進歩は真に壓倒的である。そしてマホメット・アブドル・ハイが日本に於ける回々教運動の指導者となつてから、全回々教世界は新改宗者に關心を持つて居る。マホメット・アブドル・ハイは——彼の知己の一人が嘗てフランクフルト新聞に書いたところによると——ロシアトルキスタンの人間で、ボルシエビズムの敵である。彼は韃靼人族長の子孫として高等教育を受け、帝政ロシアの末期には既に彼の狭い故郷の外に於ても、地理學者、歴史家として、又回々教の最も熱心な有識な信仰の闘士として多くの信望を得て居た。ボルシエビズムのために父祖傳來の郷土から追放され、東洋に放逐された不幸な亡命者の陰鬱な群の中から日本人に探し出されたのが此の男であつた。アブドル・ハイは哈爾濱で身分の高い日本人信者(日本にも回々教徒の家族が益々多くなつたと知合つたが、此の日本人は零落した亡命者の彼を助け、多くの立派な推薦状を持たせて東京へやつた。賢明で文化人たる彼は、東京へ來ると特殊な上流社會へ入る事が出来た。日本人はアブドル・ハイに巨額の資金を用立てたのに違ひない。さもなければ彼が如何に文化に目醒めた精神を持つて居ても、「回々教聯合」は彼はその創立者で今日でもその會長である)のために忽ち何千と云ふ信者を獲得し、多くの政治家、政論家、軍部高官、著名學者等をして豫言者のマホメットの教義を信せしめ

(402)

る事に成功する事は出来なかつたであらう。

アブドル・ハイが現はれたためにコーランの優れた日本語が出来た。そしてそれは版を重ねて日本の到る所で廉價に賣り廣められた。此の翻譯は日本人の心を非常に巧みに迎へて居ると、日本通として權威ある某氏は斷言して居る。かくて日本政府と「回々教聯合」の有力な後援者の支援の下に、回々教寺院が建てられ、回々教大學(宗教學部)が開設された。此の學校では昔から有名なカイロのアル・アツール大學の教授達が、回々教の教義を學ぶ日本の學生を、最近日本で政府から認められた此の宗教の指導的教役者とするために少額の報酬で教育に従事して居るのである。極東の島國に定住し、彼等の同胞アブドル・ハイの周りに固く結合した韃靼人達の許に、新たに「回々教聯合」の傘下に馳せ参じた者にシリヤ人、イラン人、印度人、アフガニスタン人、滿洲人、シヤム人、蒙古人、アラビア人等があつた。かくて公然と政府の後援を受けて居る此の團體から、日本國內に於ける盛な宗教運動が起つたばかりでなく、日本に於ける回々教の宣傳と、此の團體に屬するあらゆる異民族の信者の祖國との間に忽ち相互作用が起つたのである。支那、印度、イラン、アラビア等の新聞、殊にエチオピアの新聞を繰つて見る者は、主として印度やエチオピアの大新聞に個人的に發言して居るアブドル・ハイの活動の跡を到る所に發見する。特にエチオピアの國家主義者は日本人に魅せられたのに違ひない。さもなければ、例へば日本回々教聯合の幹部スタンネグロのベツクが、聯合機關紙に要求する事の出来る事

(403)

柄は單に不可解なものになるであらう。
要するに將來に向つて廣大な展望が開けて居る。回々教の根本教義は、極端な國家主義や日本の著しい人種的矜持と直ちに一致するものではないと主張する者があるかも知れない。併し日本人はアジア支配に際して、彼が考案する役を演ずるために、是非やりたいと思ふ事は何でも望む事が出来るのである。」

千九百三十一年、滿洲に於て日本人に頑強な抵抗をした唯一の支那將軍は馬(馬占山)——豫言者マホメットの支那文字——と稱した。此の回々教徒の支那人馬は千九百三十一年に日本の最も危険な敵であつた。油斷のならない相手だつたので、日本は彼の表面上の投降後一時滿洲國の軍政部總長にしておいた程である。

ところで、千九百三十四年流星の如く新京に現はれ、その東干(甘肅省、陝西省から移住した回族)即ち回々教徒の支那軍を以て、南京派の反日地方政權を追ひ拂つた支那人や將軍もやはり馬と云つた。

三年前には支那の回々教徒は日本の大敵で、今日は日本の朋友である。併しこれは多くの現象の中の唯一つの現象に過ぎない。何故ならば、例へば既に千九百三十四年六月に、ケマル・アタチュルクがその新同盟者イラン王のために催した饗宴の際、非常に物騒な乾盃の辭がなされたからで、それに曰く「回々教徒民族は日本を崇拜する。日本は白人に屬する事なく、又その思想的傾向、その信仰を否定せず、

キリスト教徒に對して何等の讓歩をせずして世界的強國となつたからである……」と。

日本は回々教を利用して居る。これは最早動かすべからざる事實である。特に伊エ戦争中に煽動した例の黒人對白人の對照の様な方法で利用し、又日本に對して、西藏及び蒙古への多くの門戸を開放した佛敎を利用した時の様なやり方をして居るのである。

それ故に日本の戦争は世界を股にかけた戦争である——靈魂による戦争、兵による戦争、商人による戦争、市場獲得の戦、原料獲得の戦等々……。何故ならば、假令明治天皇の「企畫委員會」は日本の自給自足經濟を志したとしても、世界戦争は原料缺乏に對する日本の危懼をほんとうの精神病にしてしまつたからである。世界戦争當時日本人の誰もが痛感した事は、日本が如何に遠方の供給者に頼らなければならぬかと云ふ事であつた。何故ならばアメリカ、カナダ、オーストラリア等が戦時輸送のために持船の全力を擧げて活動すると、日本にはドイツの様に食料飢饉が起り、物價は暴騰して間もなく大阪や東京には暴動が起つた程だつたからである。

日本に對する原料供給國をその重要さの順に數へ上げれば、第一に合衆國、次にオーストラリア、英領印度、フィリッピン、マレー諸國、蘭領印度、イギリス及び支那等の順になる。だから日本にとつて敵國ばかりである。

千九百二十五年から同三十年に至る年額平均に於て、食料及び被服工業原料に對する日本の輸入超過

は三億二千五百万圓に達して居るから、これは既に既成品の莫大な輸出を前提とする額である。
日本は窒息させられる事を恐れ、あらゆる手段を講じて防禦する。一方ヨーロッパ各國も亦危険に頻して居る。そして此の白人世界は如何にすれば身を守る事が出来るだらうか？

第十九章 日本の同盟と歐洲の同盟

經濟論理に代る包圍政策

日本は今日世界中にドイツの同盟國として通つて居る。實際ドイツ人は日本の工業化以來此の島國で大きな役を演じて居るのである。日本お抱へのプロシヤ人指導員は日本のロシアに對する勝利の準備をし、ドイツ人教師は學校を編成し、ドイツ人化學者は日本の自給自足工作に道を示したのだ。

生命線獲得のために何十年となく戦つて居る日本が、同じ様に包圍され押しこめられて、新しい土地を必要として居る國に同情するのは全く當然の事である。日本の英雄的人生觀は第三國(ドイツ)を理解し、又理解せざるを得ない。ロシアに對する日本の宿命的な敵意は、日本をドイツに必然的に近づける。何故ならばドイツは共產主義を恐るべき災禍の温床と見做し、ドイツの自然的發展は東方にありと考へて居るからである。

(406)

ところで日本との同盟はドイツにとつて目的にかなふものであらうか？ 對ロシアの問題の様な個々の問題ではさうであるが、生存と云ふ大問題になると斷然否である。何故ならば、今日日本の工業發展は特に他國と衝突しても、それはまだ一發端であつて、此の發展はどうしても次第に威力を加へ、遂には他國の工業と同様ドイツの工業をも危くせざるを得ないからである。日本は自ら突き破り難い魔術的な圈の中に入つて居る。日本が世界市場を席巻して居るのはその體制が模範的で、その經濟が計畫に基いて一點に集中されて居るからであるが、就中その資金が競争の餘地のない程低廉だからである。稼ぎ高の少い労働者は使ひ方も少く、飢餓に類する農民は何も買ふ事が出来ない。だから日本の國內市場は世界でも最も貧弱なもの一つである。日本は輸出せざるを得ない。そして世界の不況と關稅障壁にも拘はらず、今日實際工業生産品の六十パーセントを輸出する事に成功して居る。これに反してドイツやイギリスは世界的好況時代にさへ、その工業生産の二十五パーセント以上は輸出する事が出来なかつたのである。

(407)

日本は原料を買ふために輸出しなければならぬ。そして毎年約百萬の出産があるのだから、年を追つて益々多量の輸出を必要とし、全世界に商品を供給しなければならぬのだ。而も此の世界には敵が多いから、日本は軍備に依つて、即ち世界最強の海軍と世界一の教育を受けた陸軍に依つてその貿易に打撃力を與へなければならぬ。日本は生きるために輸出し、輸出する事が出るためには軍備を強固にしなけ

ればならない。既に今日豫算の半ば以上に達して居る軍事費を賄ふためには更に工業品を輸出しなければならぬ。何故ならば日本は實際地下の富源を持たないからである。かくて行くところは無限だ……。必然的に益々高まり荒れ狂ふ此の黄色人の怒濤に對して、ヨーロッパ諸國は何が出来てあらう？日本の工業「米本位」に對して、白人の「肉本位」の世界が何をやる事が出来るだらう？

ヨーロッパの工業も、日本の工業の様に合理化され計畫的に活動する事が出来る。日本は遅かれ早かれさうさせるであらう。現に一部の諸國は日本のために、此の緊喫な計畫をとらざるを得なくなつて居る。

併しヨーロッパ諸國には貨金を日本なみにする事は出来ない。日本人の生き方は我々と違ふのだ。彼等は少しも肉を食ひたがらない。ヨーロッパの大衆は貨金水準を半減でもされれば忽ち飢えてしまふであらうが、日本人は久しい間その貨金でも飢えては居ない。ところで白人の貨金をどうにか日本人貨金と同じにするには、その七分の五も減らさなければならぬのである。

ヨーロッパ人の生活水準を黄色人世界のそれに順應させること——文化的罪惡と云ふ事を全然考へなくてさへ——は不可能である。動物を例にとつてみてもこれは證明される。犬に何週間も殆んど食物を與へないでも咬みつきはしない。併し犬が遂に隙をねらつてとつた骨を奪へば血を見ずにはすまない。日本や支那の民衆はいきり立つ様な事もせず永い間一匁の米で満足して居るであらう。併しヨーロッパで

貨金を大幅に引下げれば直ちに内亂が起るに違ひないだらうし、加之それは國內市場を破壊し、世界を混亂に陥し入れるであらう。

それ故に日本の工業發展が危険な形をとる様になると、各國は残された唯一の手段をとる事になつた。即ち、日本品輸入制限、輸入割當制、保護關稅等がこれである。併し日本もかねてその用意はして居たから、輸出を中止したばかりか輸入もしなくなつた。日本の輸入額の増加の速度はその輸出額に比べれば遙かに遅いが、それでも日本は世界有数の原料輸入國である。イギリスが日本の綿織物を閉め出したのに對して、日本は印度棉購入中止を以てこれに應じた。そこで英國側は鳩首協議しなければならぬなり、千九百三十三年十月にはシムラで、同三十四年三月にはロンドンで輸入割當制及び交易が協定された。ランカッシャの紡績工場は閑散を續け、日本は此の商戰に勝つた。

日本の工業攻勢が初まつた時、原料市場は全く夥しく賣れ残りの在庫品で詰つて居た。だから日本が容易に南米にもオーストラリアにも、南アフリカにも北米にも交易相手を發見する事が出来たのは當然である。數年前迄ランカッシャはアメリカ又はアジアの棉花に對する支拂ひを先方からの綿織物注文によつて回収して居た。南米はヨーロッパにゴムを賣り、その代りに機械や既成品を買つた。今日「新興國」は日本に賣るから、従つて日本から買ふ事を餘儀なくされて居る。而も日本品に比して廉價なので、日本向け輸出の金額以上のものを日本から買ふばかりでなく、なほヨーロッパから儲け取つた金をアジ

アからの仕入のために用立てゝ居る。

かゝる現象は結局どうなるか、と云ふ事は今日心ある政治家にも經濟界の有力者にもはつきり判つて居る。支那は何百年このかた白人世界の鬭争の的となり、ヨーロッパ各國に返濟不可能の莫大なクレヂットをつぎこませ、手を變へ品を變へて符され求められた國であるが、此の事實を全的に認めて居る人、此の支那はヨーロッパ各國の全輸出の僅かに二パーセントを輸入して居るに過ぎないが、これに反して日本の輸出の二十四パーセントを買取つて居ると云ふ事を知り、此の事實から結論を導く事の出来る人々、日本の利益を認識し、だん／＼衰弱して死んで行くよりも根本的な手術をしてしまふ方が樂な事をよく知つて居る人々、アジアに於ける白人植民地の放棄を考へ、近き將來に於ける自覺と世界計畫を信じて居る人々、未開拓の市場を日本に任せる事に依つて、白人工業國を救ふ事が出来るだらうと云ふ様な望をかけて居る人々——此の様な樂觀主義者でさへ、それはやはり日本の利となりヨーロッパの不利となると云ふ事を承認せざるを得ないであらう。その理由は他でもない、全く民族的、人口政策的理由からだ。即ち、アジアの市場は年毎に盛大となり、これに反して歐米の市場は白色人種の出産減退と云ふ原因で益々萎靡して行くからである。

千八百八十年頃日本工業の飛躍が初まり、未だ氣後れ氣味の試験期が終つて居なかつた時代に、ヨーロッパの多くの家庭には古くからの傳統がまだよく殘されて居て、人口千人に付き三十人乃至四十人

の出産があつた。日本の工業化の第二期、即ち千八百九十五年から千九百十四年迄の間——日本が支那とロシアに戦勝し、最初の公式植民地を獲得し、支那側から一億六千マール以上の賠償金をとり、人口が千八百九十五年の四千百万から千九百十四年の五千四百万（植民地を入れれば八千八百万）に増加した時期——既に此の時期に急激な出産減退がヨーロッパ諸國の國力を弱めたのである。日本では千人に付き三十四人の出産があるのに、ヨーロッパの平均は依然として十八人に過ぎない。併しこれ等の事實の眞の意義は、將來の人口に對する公的な評價を研究して初めて明らかになるのである。フランス學士院長リツンユ氏に依れば、來るべき十年間に増加すべき世界人口一億九千五百万の中、一億四千万はアジア人であらうと云はれて居る。今日ニューヨークの人口増加の割合は千人に付き十九人に過ぎないが、東京では千人に付き四十四人、大阪では千人に付き五十五人である。それ故に今日人口四百九十七萬を有する東京は、千九百四十四年には恐らく七百十萬を數へる事になるであらうが、これに對してパリーの人口は千九百四十四年に二百九十萬と推定される。日本政府の統計に依れば、千九百四十五年の日本内地人口は七千六百萬、千九百六十四年には一億八百萬になるであらう。千九百五十年頃には、日本は現在の植民地を含めて二億の人口を持つ事になるであらう。ところで東、中、北ヨーロッパの人口はその筋の見積りに依るとこの世紀の後半には停滞するであらうといはれ、一定の地方は既にそれ以前に増加しなくなるだらうといはれて居る。即ちそれに依ればフランスは今世紀中に最大多數の人口約四千萬に達し、

イギリスは千九百五十年頃にその最高數四千六百萬乃至四千七百萬に達するだらうと云ふのである。合衆國に就いては、ワシントンにある國立統計局で豫言して居るが、それに依ると千九百八十年に人口の最大數に達し、その數は一億五千萬にならうと云はれて居る。

さてドイツであるが、若しもナチ革命が徹底的な變革を行はなかつたならば、千九百八十年頃には必らずポーランドより少い人口を持つ事になつたらうと思はれるが、その出産過剰は千九百三十一年には千人に付き四・八人、千九百三十二年には四・一人と減少した後、千九百三十四年には實に千人に付き七・一人に増加させる事が出来たのである。實際イタリアに於ても此の危険は認められたが、死亡に比して出産は人口千人に就き一〇・一と云ふ過剰で、イタリアは既に日本と同じ位の率になつて來た。ところで假令更に多くのヨーロッパ諸國が自覺して、非常時にその領土を維持するためにはより多くの努力こそ必要だと云ふ事を認識しても、それでもなほヨーロッパの狀態は暗黒以上のものであらう。五十年の間に犯されたところのものは、五年位で償はれはしない。ヨーロッパの人口——納税者及び購買者大衆——は減少する。白人工業國の市場は自動的に萎靡し、日本の市場は擴大する。支那は千九百五十年には少くとも六億の人口を有する様になり、アジアは恐らく十億五千萬以上の人間を數へる事になるであらう。ロシアは千九百五十年以後は少くとも二億の人口に達するであらう。ところで此の日本の敵は同時にヨーロッパの敵でもないだらうか？ 若しもロシアが日本とアジアを争ふならば此の鬭争に依つてヨーロッパ

ツバは何等か得るところがあるだらうか？

將來への展望はよろしくない。打開の道はない様に見える。此の日本の問題を如何なる見地から見ても我々白人にとつて多くの危険を藏して居る様に思はれる。耳ざわりのいゝ理論に迷はれたくない者は堂々と聲を高くして叫ばざるを得ない。日本は——故意に、否、恐らくは——想像も及ばぬ暴力の世界戦争へまつじぐらに導くべき道を辿つて居ると。

如何なる政治家も此の點に就いては錯覺を起す様な事はない。彼處でも此處でもこの戦ひに對して熱病的に準備され、既に日本は包圍されて居る。佛ソ同盟、千九百三十二年十一月に於ける佛ソ不可侵協定を皮切りに、千九百三十三年九月二日の伊ソ不可侵協定、同年十一月十八日合衆國のソヴェット承認、それから最後に千九百三十四年九月十八日、日本の滿洲占領三週年記念日に於けるロシアの國際聯盟加入等がそれである。

英國は長い間迷ひ、日本と再び同盟する事はアジアの英領を救ふ唯一の道ではないか否かを繰返し熟考し、産業使節を滿洲國へ、サー・フレデリック・リースロスを東京と南京へ派遣してから、此處に反日的態度を決するに至つた。イギリスは千九百三十四年の夏、例の銀相場異變によつて初められた日支接近を妨げるために何事も企てなかつた。併し同年十二月二十五日合衆國と一種の同盟を結び、シタイは支那に借款を與へた。これがため南京政府は急激に本位變更をする事が出来て支那人は銀流通を放棄し、

かくてアメリカ人投機業者の手と日本の「救援」から解放される事が出来たのである。

日本はこれ等の事情を理解したが、既にその時は完全に包圍されて居た。そして未だ幾分疑惑の念に驅られて居ると、續いて第二の打撃が来た。支那は千九百三十五年十一月三日に事實上銀本位を放棄したのである。一方同年十一月七日、アンカラに於て一つの外交文書が調印されたが、それに依つて千九百三十五年十二月十七日のソ土親善中立條約及び千九百三十一年三月七日のソ土海軍協定の有効期間が十年間延長された。日本では誰も此の外交文書の意義を誤認する者はなかつた。又、千九百四年の日露戦争は、若しロシアが黒海艦隊を東亞に派遣する事が出来、イギリスが當時ダーネルス海峡封鎖をスエズ封鎖と同様に遂行しなかつたならば、恐らく實際とは違ふ結果を見たであらうと云ふ事も日本では誰でも知つて居るのである。

千九百三十四年、ケマル・アタチュルクは日本と海軍協定を結んで軍艦建造を日本に依頼した。これより先、日本の海軍専門家は黒海に一艦隊を持たうと思つて居たが、單位制（海軍條約中の建艦單位制）が與へられてしまつた今日、日本は欺かれた事を知つた。一方トルコは今迄になく親ソ的になつた。又イランでは日本人に代つてソヴェト人が總ての注文をとり、イラクでは千九百三十四年日本が獲得した優位が再び失はれてしまつた。日本にとつて何處の國が同盟國として残つたであらう？

三井はシュナイダー・クロイツォートの代理店であり、三菱はフリツカースの代理店であるから、日本は

依然として兵器クレヂットを得る事が出来る。又此の外に、滿洲國を承認した唯一の國サン・サルバドルとエチオピアが日本に對して門戸を開いて居る。メキシコでは反米的氣分があるから、日本の或る種の事業は支持されて居るが、同時にメキシコの有力な左翼黨は日本の帝國主義と戦つて居る。

以上の様な事情だから日本が「窒息」を云々して「日本の周圍には多くの同盟の網が張りめぐらされた」と云つても決して誇張して居るのではない。そして此の島國にとつて更に危険なものは何であらう。——日本を敗らうとして居るのは世界の外交官ばかりではなく、日本に對して防禦陣を張つて居るのは世界の商人ばかりではない。發見者も技術家も、皆日本に大打撃を與ふべき事物に狂奔没頭して居るのである。

例へば千九百三十四年の初め、世界は異常な昂奮を以て北極洋で行はれた劇に注目した。ソヴェト船チエルユスキンの難破と、シュミット教授及び乗組員百十名の救出——これがその事件であつた。併し此のオットー・トッパルエウイチュ・シュミット教授が、ソヴェト百科全書の指導者で航海學の教授であり、ロシア一の北極研究家で同時にあの謎の様なブリュッヘル將軍（ロシア極東軍司令官）や陸軍大臣ウォロシロフと共に、日本の發展に對するソヴェトの闘争にとつて重要な人物である事を知つて居た者は殆んどなかつた。

千九百三十二年シュミットは砕氷船シベリアコフ號をアルハンゲルスクからウラヂオストク迄移動

させたが、これは一季節に於ける北東への最初の通航である。千九百三十三年及び三十四年、教授はベ
ーリング海の隅々まで探検した。これはそれ迄に彼のした仕事より一層重要であつた。何故ならば、ロ
シアはあらゆるものを地圖に書き入れてゐると云ふわけではないからである。

ロシアはアメリカに承認されても満足しなかつた。外交的結合と共に、戦時のために非常に重要な地理
的結合をも求めて居た。即ち、ロシアは久しい間貨物船用の航路をアラスカとシベリアの間に求めて居る
のである。若しシベリア鐵道が遮断されて、日ソ戦争の戦場がウラル及び西部シベリアの工業中心地から
分離させられる様な場合、合衆國の援助が如何に死命を制する程の重要性を持つて居るか、と云ふ事を
ソヴィエトは知つて居るし、又彈藥兵器をアメリカから得られる事を確信して居る。ところで若しウラデ
オストツクとニコライエフスクが封鎖されたならば、これ等の軍需品は何處で陸揚げする事が出来るで
あらう？　これがために久しい間ベーリング海峽が探検されて居たのである。異常な方法手段を講じて、
レーニングラードからウラデオストツクへの輸送可能性の技術的な個々の問題を検討し、極東からヨー
ロッパロシア及びアラスカからシベリヤへの貨物船航路を確定し、到る所に氣象臺と無電局を建設して
砕氷船用の港を構築したロシア人専門家が三十四人居るが、シュミットはその一人に過ぎないのである。
シュミットの水上の冒険は映畫になり、チエルユスキンの敘事詩は本に書かれた。併し千九百三十
五年七月、ロシア貨物船ラボチュイ號がアルハンゲルスクを發し、悠然とコリマ河、カムチャツカに到

り、其處で二臺の機關車、二臺のアメリカ式大開鑿機及び「根據地」建設に必要なあらゆる材料を却し
た事をヨーロッパでは誰も氣がつかなかつた。人々はシュミットの渡航の話のために一萬二千二百六十斤
の橋渡しをした此の商船の航行の事などには氣がつかなかつたのだ。此の商船はその航行に二ヶ月足ら
ずを費やし、九千斤氷塊と戦つて進まなければならなかつたが、遂にこれだけの航程を結んだのである。
併し日本はロシアの此の業績の意味を理解し、嘗てマガリャアイスが千五百二十年、南米を廻航して
初めてアジアに達した時やつた様に、ロシア人は極地航路に依つて世界の經濟生活を變へるばかりでな
く、これに依つて北方からも亦日本を抑へる事が出来ると云ふ事を素早く見てとつた。又、アラスカ、
シベリア間の航路は、ヨーロッパとアジアを新たに結合したものに等しく、スエズ運河やパナマ運河と
同様の重要性を持つものであると云ふ事も知り、此の新航路確立にあつてロシア飛行士の演じた役
割、彼等が北極地方に馴れて居る事、東京や大阪はウラデオストツクからの爆撃の危険に曝されて居る
程非常に近距離にある事も看過しなかつた。

歐米各國はチエルユスキンの號の乗組員を救助したソヴィエト飛行士の偉業に感激したが、日本の新聞
は此の事に少しも言及しなかつた。シュミット教授の仕事やソヴィエト飛行士の救助作業などは仰々日本
にとつてもあつても同じ事だつたのである。日本の沈黙を見てモスコイの「ブラツダ」紙は次の
様な記事を載せるに至つた。

「日本が受けた感銘は異常に大きく、嘔然として言ふ所を失つた様である。此の救助遠征に参加したのは七人のソヴィエト飛行士であつたが、ソヴィエトは必要な場合には何千人でも参加させる用意を持つて居る。ロシアの航空界はそれが克服する事が出来ない難事は一つもないと云ふ事を世界に説明したのである。」と

此の記事は千九百三十四年四月十八日に出たものであるが、日本の新聞は依然として沈黙を續けて居た。併し四月二十四日に至つて日本政府は空軍兵力の倍加を決定し、ロシアの「機先を制せよ」と云ふ軍首脳部の要求は以前にもまして熾烈になつたのである。

「我々がくづして居れば」と軍當局は言つた。

「ロシアは全ヨーロッパと合衆國も同盟國にしてしまふばかりでなく、多くの交通路を獲得して、その持久力は何時まで續くか判らない程になるであらう。」

そして年二回英國とオランダから、北岬——カラ海——オビ河の道を通つてシベリアのノヴィヂ港迄機械やヨーロッパ製品を運んだ汽船輸送の例を説いた。又日本の軍部は、フランス人の古い計畫、即ちドローベルの計畫——既に千九百十年、極東シベリアとアラスカを鐵道で結び、僅か五十軒のベーリング海峡に架橋しようと云ふ考——を試験するために千九百三十四年七月、十二人のロシア大専門家がベーリング海峡を調査に來たと云ふ事實を解説した。當時此の計畫は、此の様な鐵道線路建設にかゝる莫大

な資本の利子支拂が不可能なために挫折したが、今日では事情が違つて居ると云ふ事を日本は知つて居る。ソヴィエトは毎日石炭列車を六十五本宛クヌネツクから、鋼鐵中心地マグニトゴルスク(クヌネツクから二千五百軒にあり迄動かして居る。ソヴィエトにとつて利益などは問題でない、又若し此のベーリング鐵道が技術的に可能ならばその費用など懼れはしない。ところで技術的困難は克服し難い事はない。ベーリング海峡は何處でも六十米以上の水深のある所はなく、その中央にはディオメデス諸島があるからこれが自然の足場になつて居る。ヨーロッパとアジアの陸地結合の古い夢は、ヨーロッパに氣づかれずに容易に實現され得るし、それに依つて日本はその最も恐ろしい二敵國の間に挟まれる様になるのである。

ロシアの技師が寒帯地變革のために極北の地で活動して居る間に、支那政府の依頼を受けたスツン・ヘーデインは、何千年も分離されて居たアジアの各地を結んで支那に新しい面貌を與ふべき自動車路の下圖を描いて居た。化學者も商人も、地理學者も北極探検家も、皆一樣に日本と世界の間になるべき大戦争の準備をして居るのである。此の二陣營は益々熾然と對立して來る。十年前には全戦線に投降者があつたが、今では黄色人世界が殆んど閉鎖された白人世界に對して向ひ合つて居る。衝突は力の限りやられるであらう。併しその結果として起るべき變化は少いであらう。

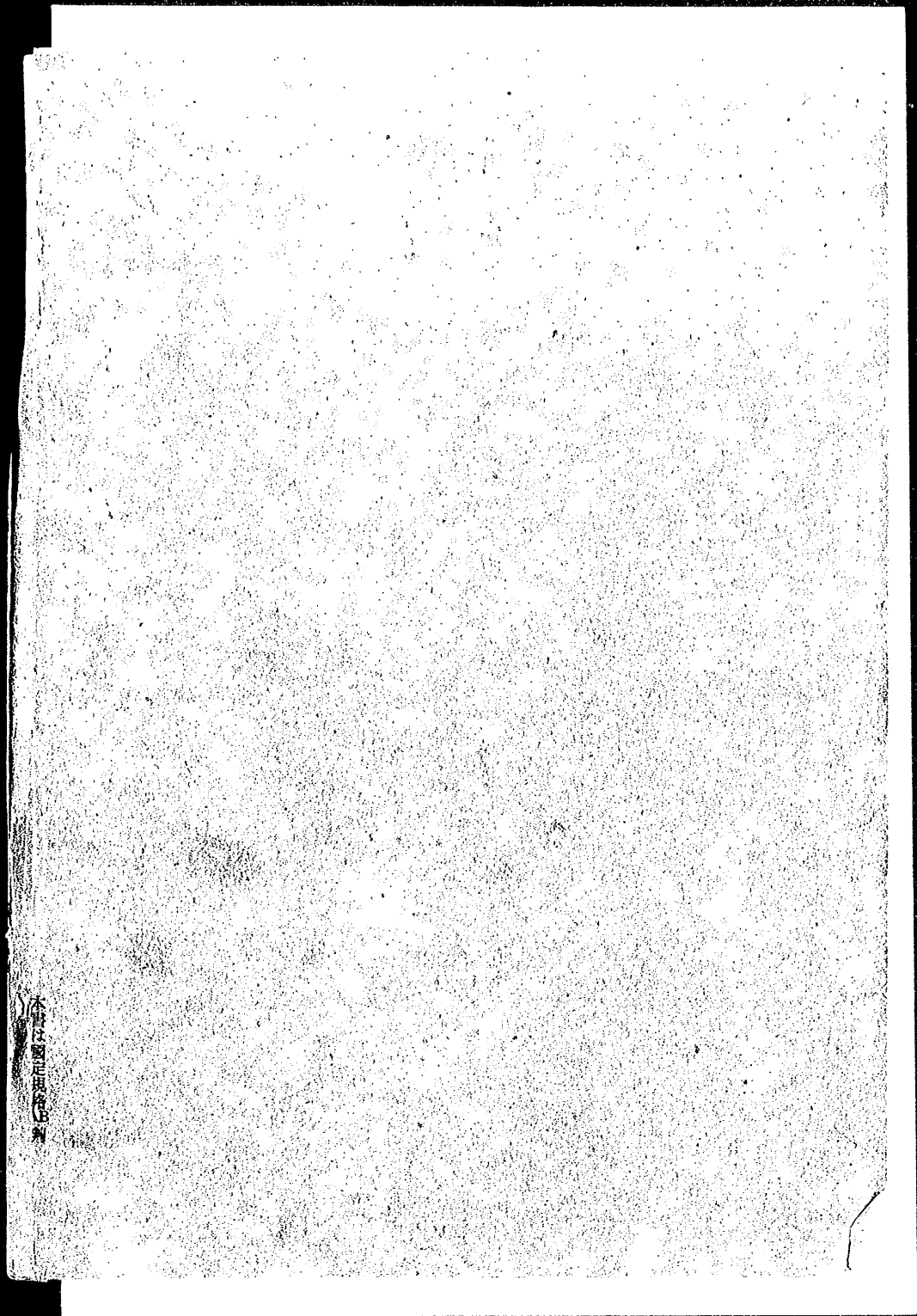
日本は一見強さうに見えてもやはり弱い。ロシア帝國崩壊の際、決定的な役割を演じたのは被壓迫民

日本に来るべき物は何であらう？ 恐らくそれは血と苦難だ。そして此の苦難を通つて、白人世界が
成吉思汗以來體驗して居る恐ろしい震憾が来るであらう。

我々はそれを期せざるを得ない。又我々はそれに對して武装しなくてはならない。就中そのよつて來
る所を識らなければならぬ。何故ならば、陳腐な言葉だが「識るは力なり」であるから。

(完)





本書は國定用紙印刷